

二三、日光東照宮唐門軒支輪(平)

二三、同

(妻)

(昭和十年七月二十四日)

(昭和二年七月十八日)

此二つは「吹寄支輪」の實例である。吹寄せと名のつくものでは吹寄菱格子・吹寄格子・吹寄樺等は鎌倉時代からあるが、支輪——蛇腹支輪——の吹寄は多分桃山にできたのであらう。さうでなければ日光東照宮が最初であらう。これ以前に遺物の有無は私は知らない。格縁を吹寄にしたものは、やはりここいらに遺物はあるが、同じ様なものでも棧唐戸の棧を吹寄にしたのは既に鎌倉から存在した。

元來蛇腹支輪は、少しも構造的ではないので、構造から言へば有つても無くても差支のないものである。二本の水平材があつて、其中の一本がもう一本のより上に前に位置してゐた時、其間から小屋裏が見えて體裁が良くないから、そこへ四角な曲つた棒を並べ、其裏へ板をはり、間から小屋裏が見えない様にしたのである。だから蛇腹支輪の場合に、蛇腹は必ずしも等間隔に並んでゐなくても少しも差支はないのである。だから板ばかりのものもあつたが、ただ板では餘り淋しいから雲や浪を刻みだしたと見るべきである。但し唐様の場合は異つた原因から板支輪を用ひるのである。とにかくこんな風だから、吹寄蛇腹支輪なんかもつと早くできさうなものであるのに、どういふ次第か可なり其出現は遅かつたのである。

二三・二三は大變に立派で美しい。支輪は面取で、便化牡丹の様な唐草を黒漆地に金蒔繪とし、支輪板も黒で、平の狭い間には菊唐草、廣い間には花菖蒲か何か、とにかく室町以降相當に賞用された「あやめ科」植物及び「くわゐ」か「おもだか」か「おもだか科」植物とを一つおきに、側面の狭い間には牡丹唐草、廣い間には「菊」を、胡粉塗として入れてある。彫刻が立派な上に色彩が黒地に白で、大變にはつきりしてゐて、非常に効果的である。奈良時代に軒支輪に繪をかけたが、桃山江戸へきて彫刻となつた。其間は無地であつたらしい。

支輪一覽表

飛鳥時代	……直線(断面は方形)、少しく曲つたもの。
奈良時代	前期……同上。 後期……同上。
平安時代	前期……同上。但し直線式のものには有無不明。 後期……同上。螺鈿を入れたものあり。支輪は漸く直立す。
鎌倉時代	和様……同上。七寶繫支輪・菱支輪の出現。S字形をなせるものも當代に見出さる。 天竺様……支輪を用ひず。
唐様	……板支輪
室町時代	……同上。菱形刳抜支輪(菱形に組むのは手數故一枚の板から刳抜いてつくる。蛇腹支輪と菱支輪との混用。 吹寄支輪とし、支輪板に彫刻を入れたもの。
桃山・江戸時代	……板支輪に雲・浪等を彫刻したもの。 彎曲した斜十字を刻みて竝べ、菱支輪の如く見せたもの。等等。

虹梁 一一六〇

一、法隆寺西院廻廊大虹梁
二、藥師寺東塔内部繫虹梁

(昭和二年一月三十日)
(飛鳥園)

三、東大寺轉害門妻虹梁
四、唐招提寺金堂繫虹梁

(昭和七年六月五日)
(昭和十四年八月三十一日)

「虹梁」は普通「コウリヤウ」と發音し、「ニジバリ」とは言はない様である。上の方へ向つて幾分反つてゐるので、虹の聯想からついた名らしいが、はっきり知らない。反つてゐないのはただ「梁」(ハリ)であり、虹梁とは言はない。ある書物に繫梁の一種で裝飾的に取扱つたものといふ解説があるが、どうかと思ふ。これでは全然反つてゐない平たい梁でも、其側面等に何かほつて裝飾してあつた時、少しばかりまぎららしいと考へる。夫よりは上に反つた梁とでもたし方がより適當ではあるまいか。繫虹梁・大虹梁・二重虹梁・妻虹梁・内室虹梁等、いろいろの名はあるが、多くは其用ひ所によつて異つた名がつけてあるのである。

飛鳥時代

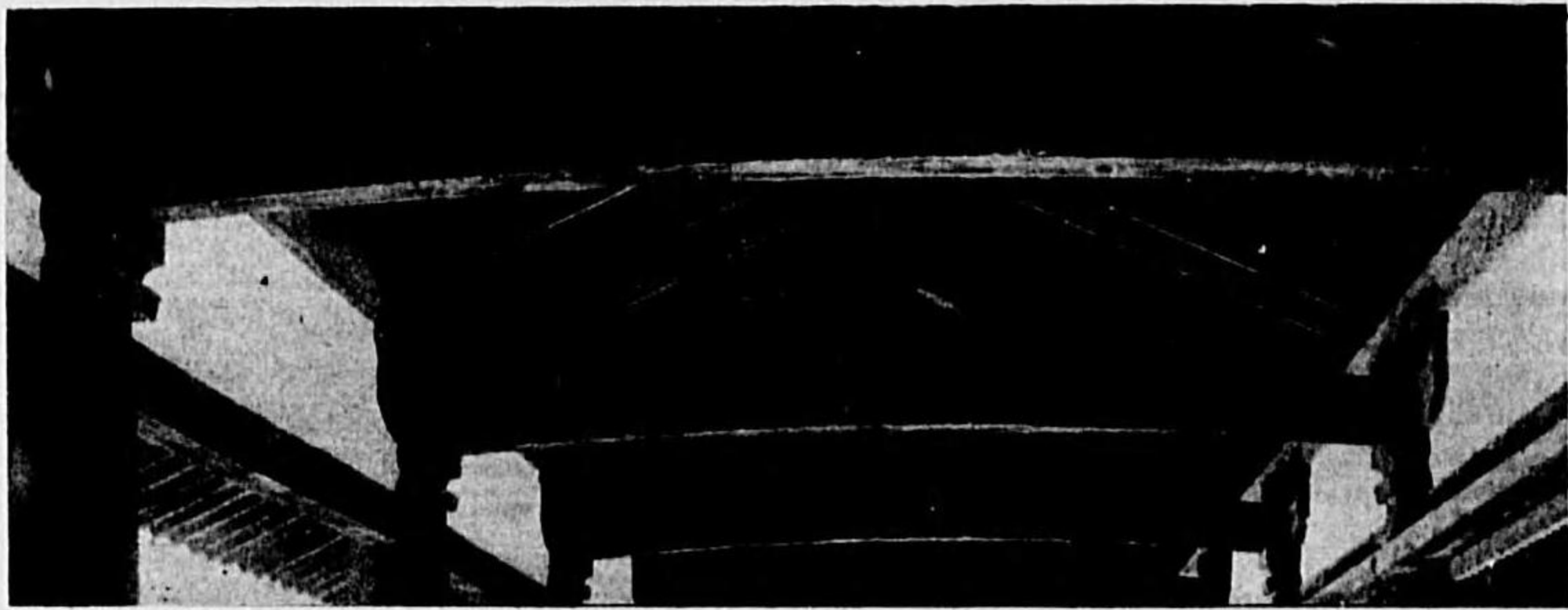
僅に上方へ反つてゐるのみで、兩端よりは中央の部が幾分太い位。其断面は梯形を逆置したる如くで、面には何等の裝飾もない。其兩端は上端を水平に切つてある。

一は飛鳥式虹梁の唯一の遺物で、法隆寺西院廻廊の大部に残つてゐる。

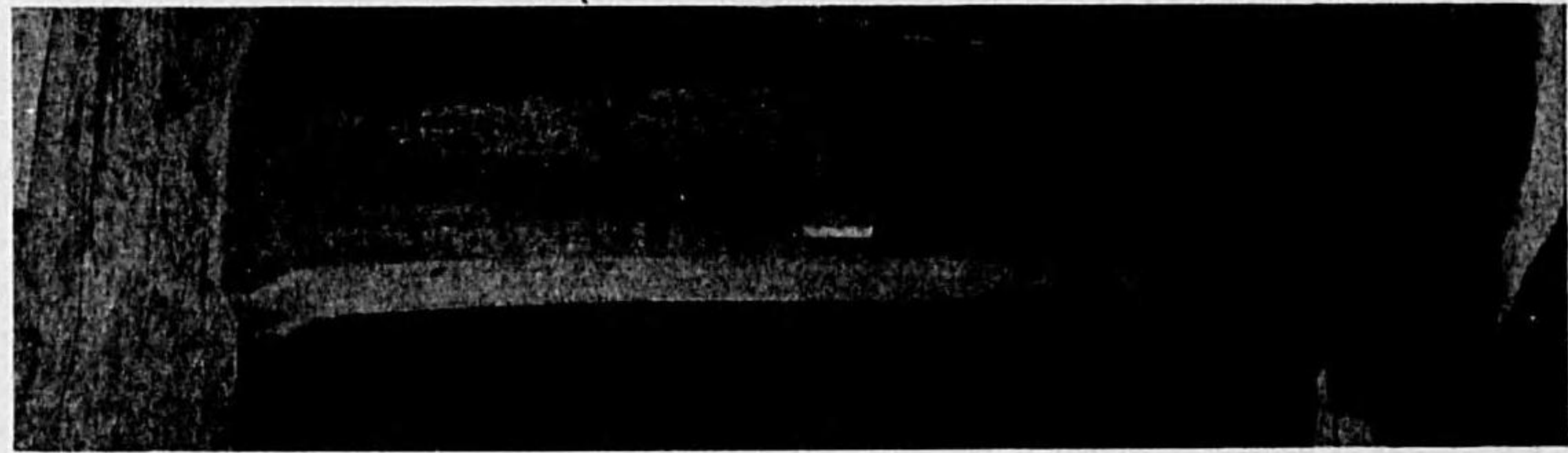
奈良時代

前後期を通じて下端に特に繰り上げた部分をつくり、上端も兩肩の部分——柱・通肘木等に挿入される部分の上端のまるみを帯びてゐるところ、鯖尻(サバジリ)といふ——即「鯖尻」が特に圓く弧形をなしてきた。其兩端の軒下に現はれてゐる部分は上端を水平に切るが、除外例もなくもない。其断面は前代に同じ。又面取虹梁もあつた。

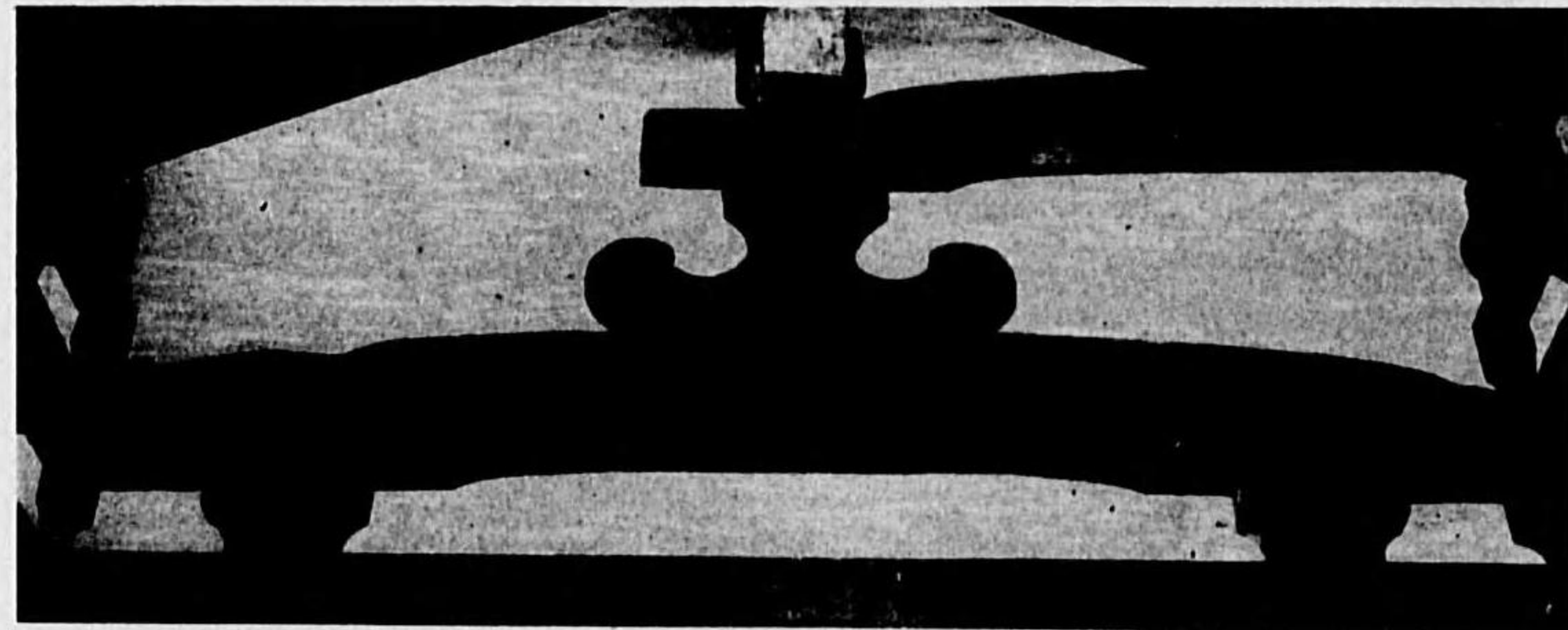
二は前期の唯一の例となすに足るもの。三は奈良後期に賞用された謂はゆる「二重虹梁臺股」の下方と上方の虹梁を見せたものであるが、兩端の木口の上端は水平に切るといふのが、圖の中央臺股上のところで判るであらう。下の虹梁は當初からこうであつたか多少疑問がある。四も後期の絶好例の一である。其形を観察せよ。



一



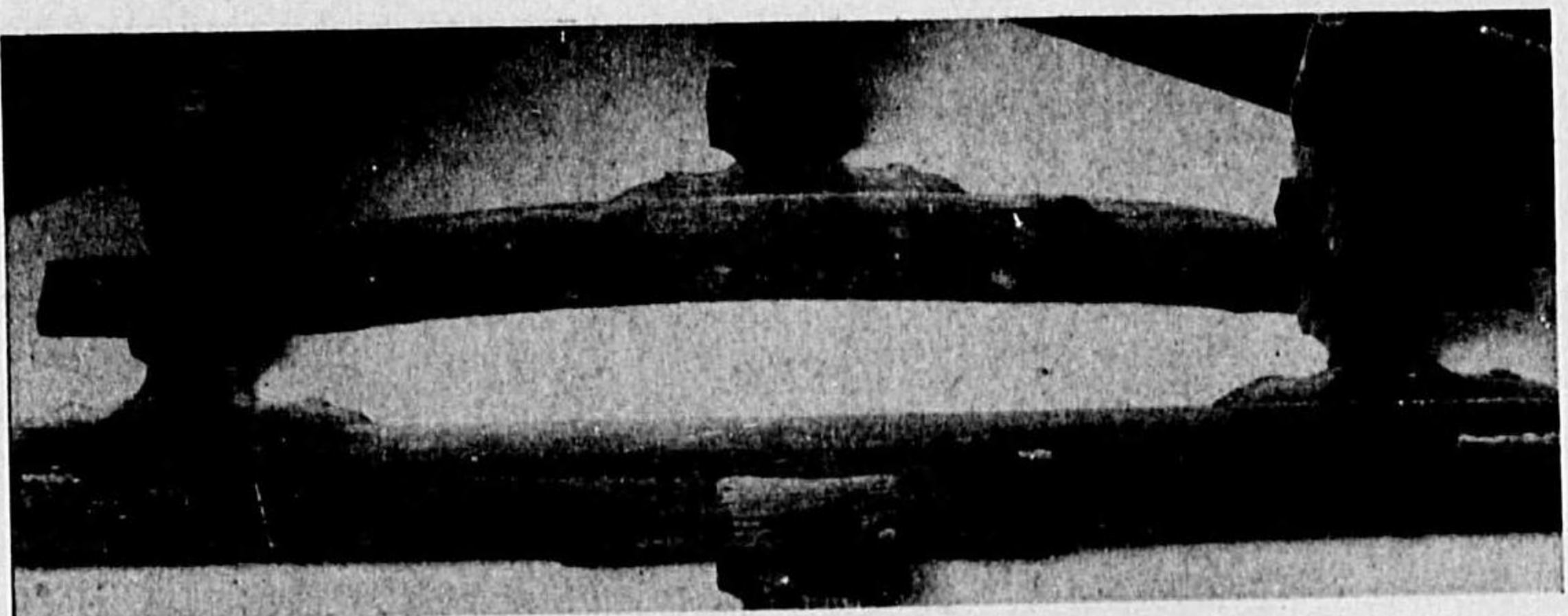
二



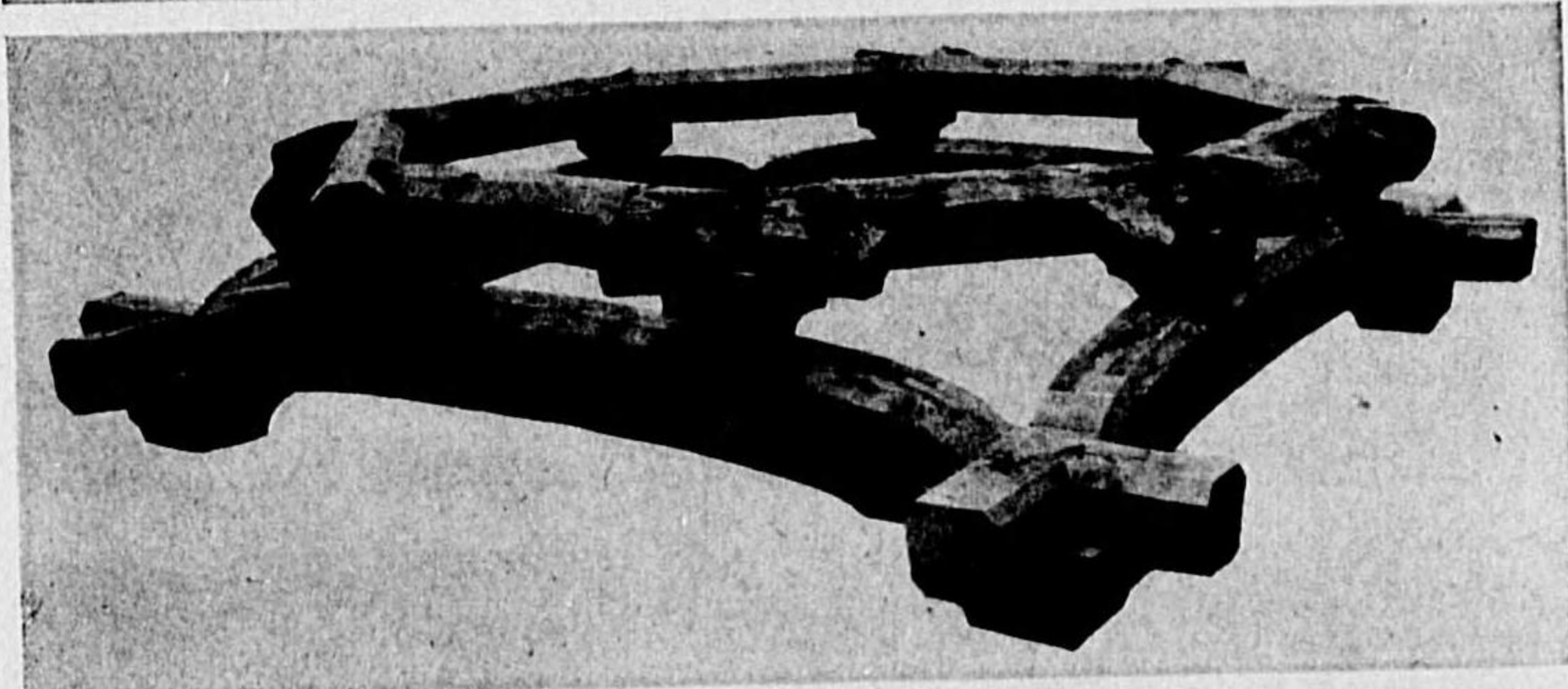
三



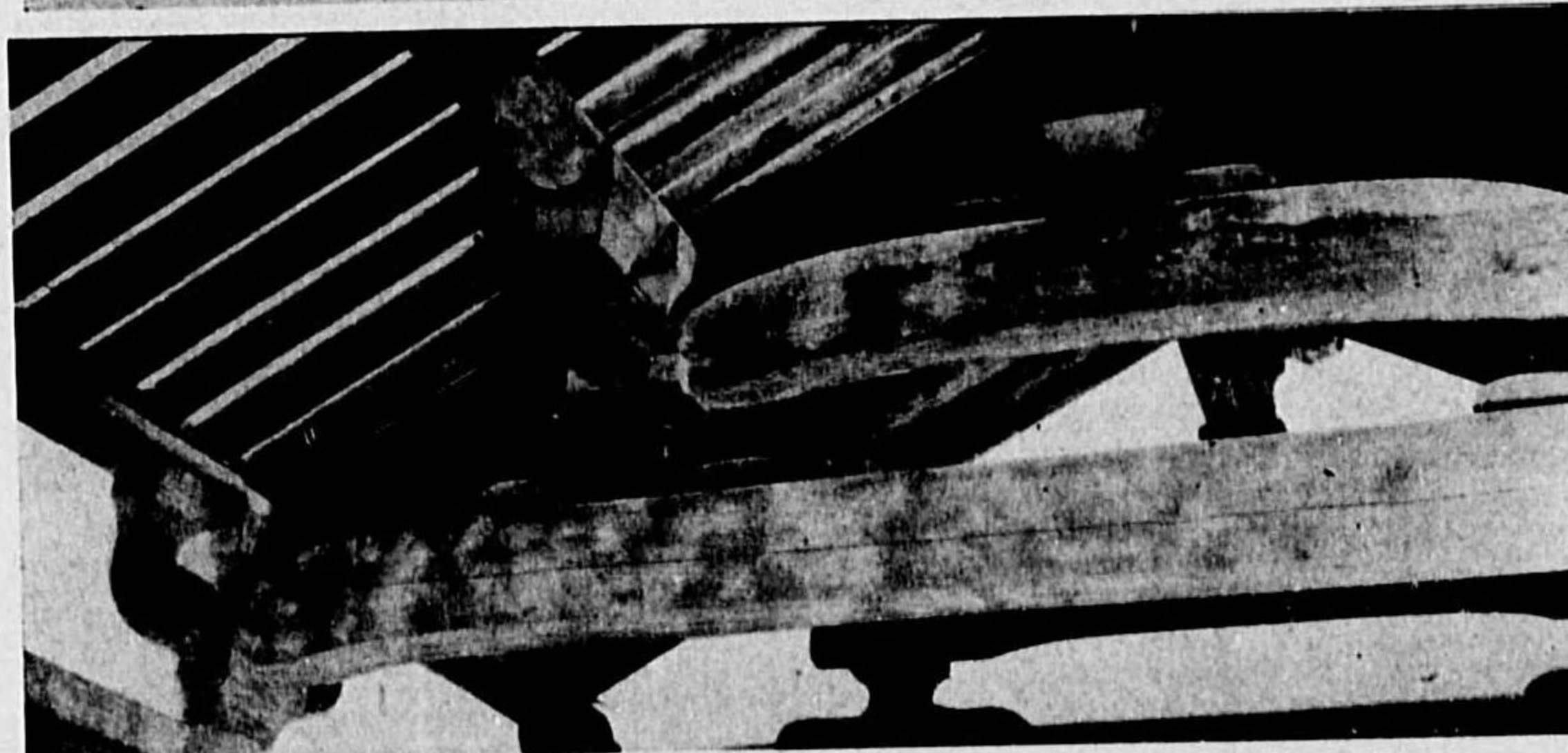
四



五



六



七



八

五、海龍王寺西金堂妻虹梁

(飛鳥園)

六、榮山寺八角圓堂内陣柱上大虹梁

(明治四十四年四月十四日)

七、法隆寺西院經樓上層虹梁

(昭和七年五月七日)

八、法隆寺東院傳法堂内部繫虹梁

(昭和八年五月十二日)

五は奈良時代「二重虹梁葦股」の妻を最もよく現はしてゐる。下の大虹梁は、中央の料で支へられてゐるが、其料上に桁が出てゐないため、下端の繰上げが別別にしてあるのに、上端は一つにしてある。この點は三とも七とも異なつてゐる。上の虹梁は下端の繰上げと上端の起り方、鯖尻の曲線、葦股上の料から外に出てゐる兩端の部分の木口は言ふ迄もないが、上端も水平に切つてあり、つまり此部分が長方形をなしてゐる所、どこ迄もよく奈良後期の約束通りである。

六は今となつては當分再び見る事も出来なければ、寫眞をとる事もできない珍品。これは修理解體中、下で組立てて見たところ。四隅の大料は八角圓堂内軒柱上のもので、其上に大面取大虹梁をのせて正方形の部分をつくり、其大虹梁上に、正八角形をつくる如く巻料をおき、其巻料に正八角形と見違へる様な大面取の桁をあひひきとして含ませ、其角に向つて中心より隅木を架渡したものが、大天蓋の蔭になつてゐて、今では梯子をかけて上つて見なければ下からは見えない。實に巧妙な構造法であるが、ここに此寫眞を掲げた目的は大面取の大虹梁——木口で其斷面も判るが——を観察するためである。私は唯一枚この寫眞をとつただけだから、いつも同じものだが止むを得ない。

七も亦當代化粧屋根裏の構架式を最もよく現はしたものの一、二重虹梁のうち、上のは當初の儘だが、下のは先年修理の際新材で造りかへたから、材料は新しいが形式は元の通りである。序に桁の圓い事に注意せよ。

八は東院傳法堂の繫虹梁。最早解説の必要はあるまい。私は奈良時代の虹梁としてここに七種を圖示したが、此等小さい寫眞でも、其共通せる特徴は、いくら初學者でも捕捉できた筈である。

- 九、室生寺金堂内陣繫虹梁一部
- 一〇、平等院鳳凰堂中堂正面繫虹梁
- 一一、同 尾廊二重虹梁
- 一二、法隆寺西院鐘樓妻虹梁一部
- 一三、三佛寺投入堂繫虹梁一部(鳥取縣東伯郡三徳村大字門前)

平安時代

當代に於いて大虹梁は僅に其兩側面が外に膨んだのもあった。繫虹梁には柱と同様大面取のものが出現した。全體の形としても前代のものと大差はないが、幾分上端に平たい部分ができてきた事と、兩端の例へば大料より外へ出た部分の木口は垂直に切つてあるが、上端は外から内へ向け斜に切る様になつてきた。

九は平安前期の建築として人の知る室生寺金堂内陣繫虹梁の一部分である。この寫眞だけで前代のとだけ異つてゐるかといふ事は、到底判らないが、とにかく反り方が少なくなつたといふ點だけは、圖を比べてみても判るであらう。

一〇は鳳凰堂中堂庇の繫虹梁で、これは大面取、中堂の大虹梁は面なく背高く、兩側面も多分故意にしたのと思ふが、幾分兩方に膨れてゐる。平安後期に於いては繫虹梁には大面をとる事が相當に流行したらしいが、大虹梁とか二重虹梁とかは、面をとると弱く見える虞があるせむか、一一・一二の様面に面をとらないらしかつた。この二例に於いて一一は大分細くてきやしやだから、これで面を取つたらば、愈よ細く見えるだらうし、又一二はこれに比べれば太いが、これで面を取ると全體として調子がとれない。だからやめたのであらう。この形はよく時代を現はしてゐる。

一三は伯耆の三佛寺投入堂の繫虹梁で、實に大きな面がとつてある。名も實も確かに虹梁には違ひないが、大して反つてゐない。柱に長押を取つて、其中心にこの虹梁を納めたので、打たなくともいい四葉を中心を外して打つてある。

(大正十三年五月十八日)

(昭和五年十二月十四日)

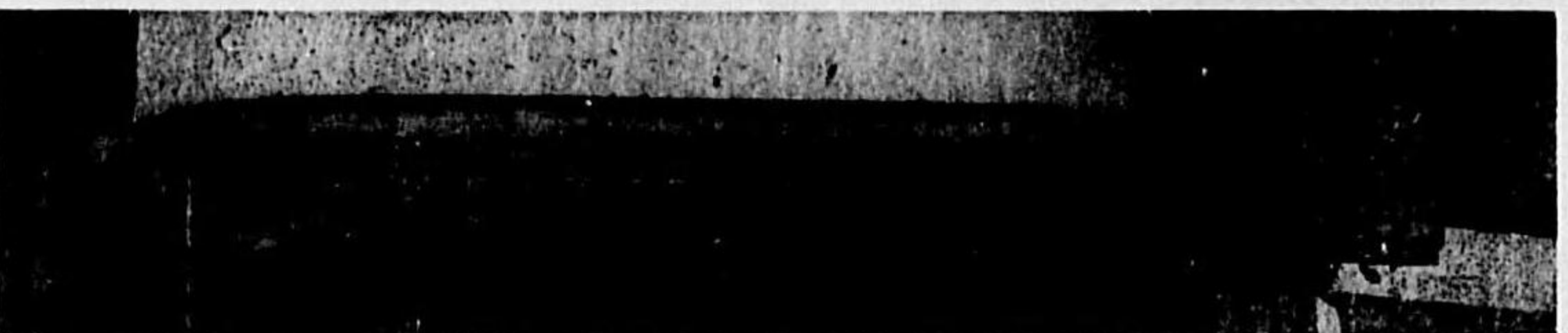
(昭和二年一月三十一日)

(撮影年月日未詳)

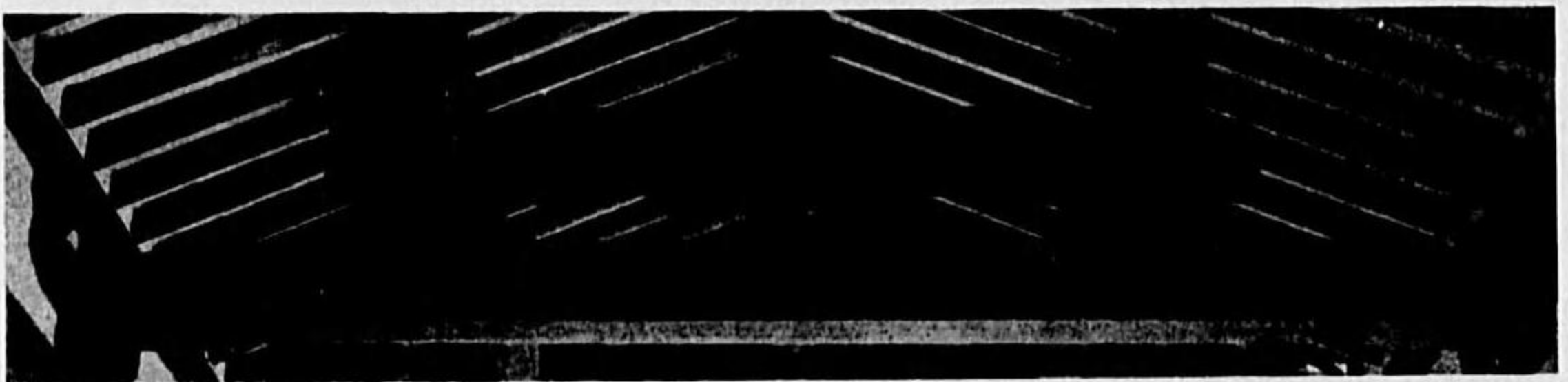
(昭和四年十月四日)



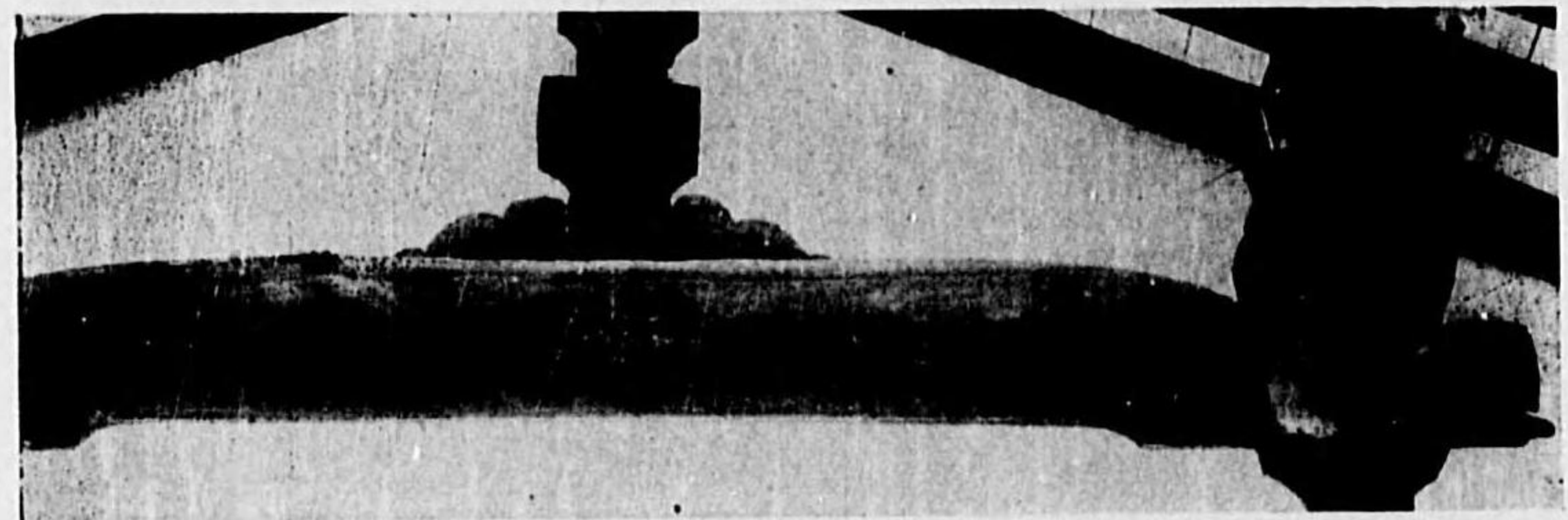
九



一〇



一一



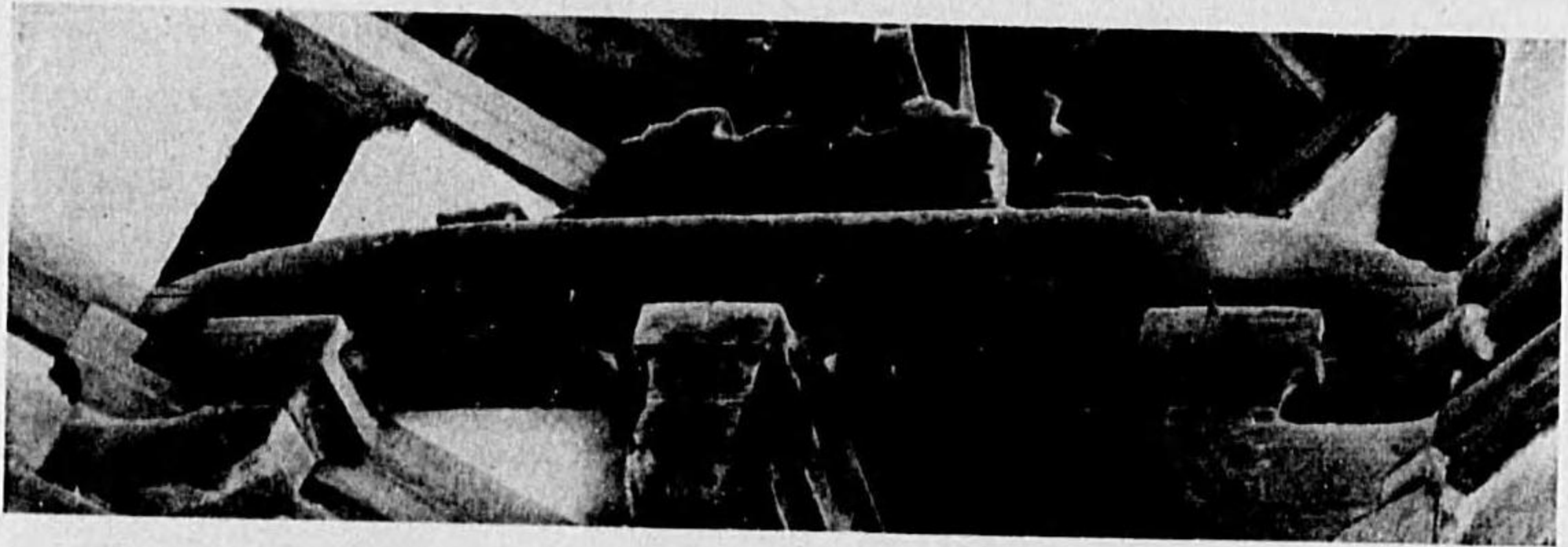
一二



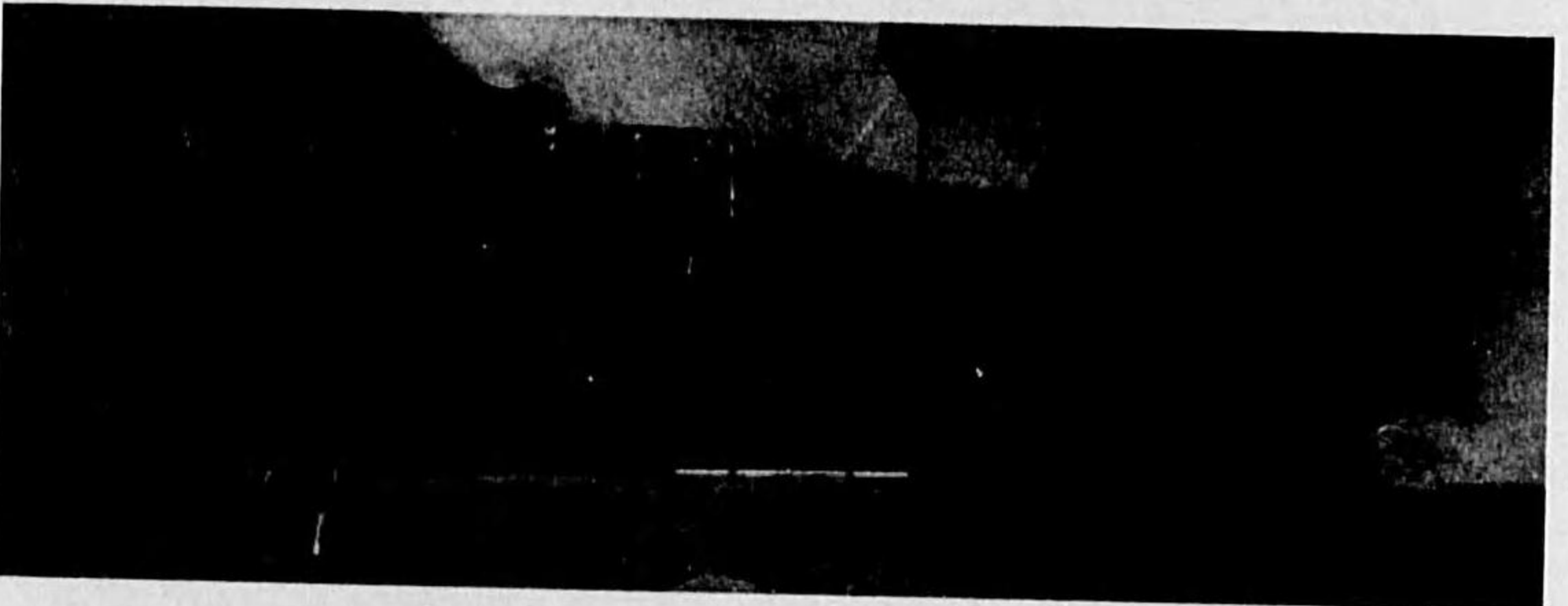
一三



一四



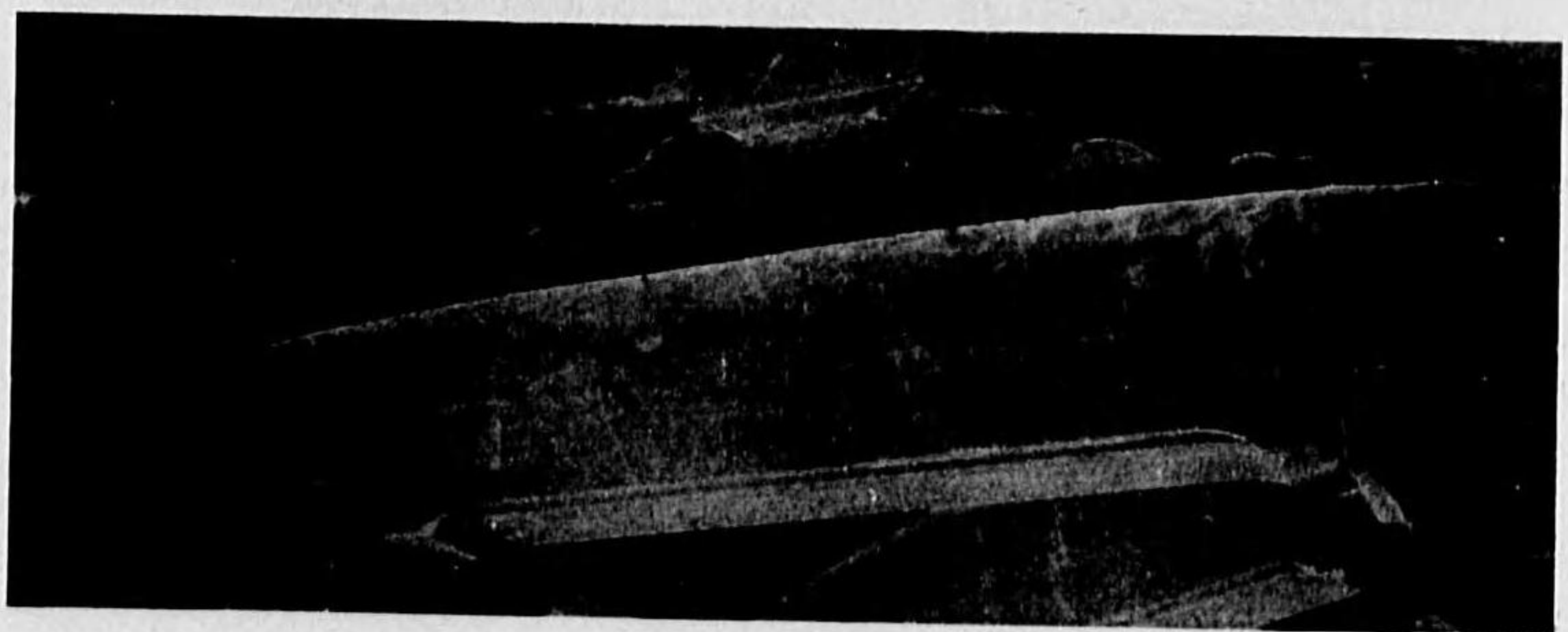
一五



一六



一七



一八

一四、平等院観音堂外陣繫虹梁

一五、松生院本堂外陣火打虹梁(和歌山市片岡町一丁目)

一六、教王護國寺慶賀門妻虹梁一部(京都市)

一七、太山寺本堂外陣繫虹梁(愛媛縣温泉郡和氣村大字太山寺)

一八、石手寺樓門繫虹梁(愛媛縣温泉郡道後湯之町大字石手)

鎌倉時代

新様式二種が新に宋國より移入されたため、在來の式以外に多くの様式ができた。できるだけ簡単に書いてみると

(一)、和 様。前代の繼承。面あるものと面なきものとあり。

(二)、天竺様。断面圓形に近いものと然らざるものとあり。下端に「錫杖彫」。柱等に挿入する所を圓味をつけて細くする。

(三)、唐 様。兩側面の膨み多くなり、「眉」・「袖切」・「錫杖彫」あり。別に繫虹梁の一種に「海老虹梁」と呼ぶ特殊形があった。

(四)、折衷様。和様の虹梁に「眉」・「袖切」・「錫杖彫」をつけたり、木口を天竺様木鼻の様に線形をつけたりする。位のところである。和様・唐様に於いては入隅へ斜に、即ち「火打梁」として虹梁を用ひたりした。

一四は全く前代の引續きで、其面に何の飾りもなく至極簡單なもので、一五も亦同様である。併しこれは入隅へ斜に架渡しであるので、其用法に於いて變つてゐる。こういふのを「火打梁」(ヒウチバリ)といふが、夫が虹梁であるから、つまり「火打虹梁」といへよう。一六も同断だが、此は木口の上端を外から内へ向けて斜に切った所をよく見せるために掲げたのである。以上三例と異なり一七には袖切と眉とがあり、柱から出てゐる端のところは、天竺様木鼻の様なグリグリが刻んである。一八も同様に眉と袖切とがある。この二例は唐様とも折衷様ともいへる。

(昭和九年五月三十一日)

(昭和四年一月 二日)

(昭和八年四月三十日)

(昭和九年三月三十日)

(昭和五年一月 四日)

一九、浄土寺浄土堂内部三重繋虹梁 其一

二〇、同

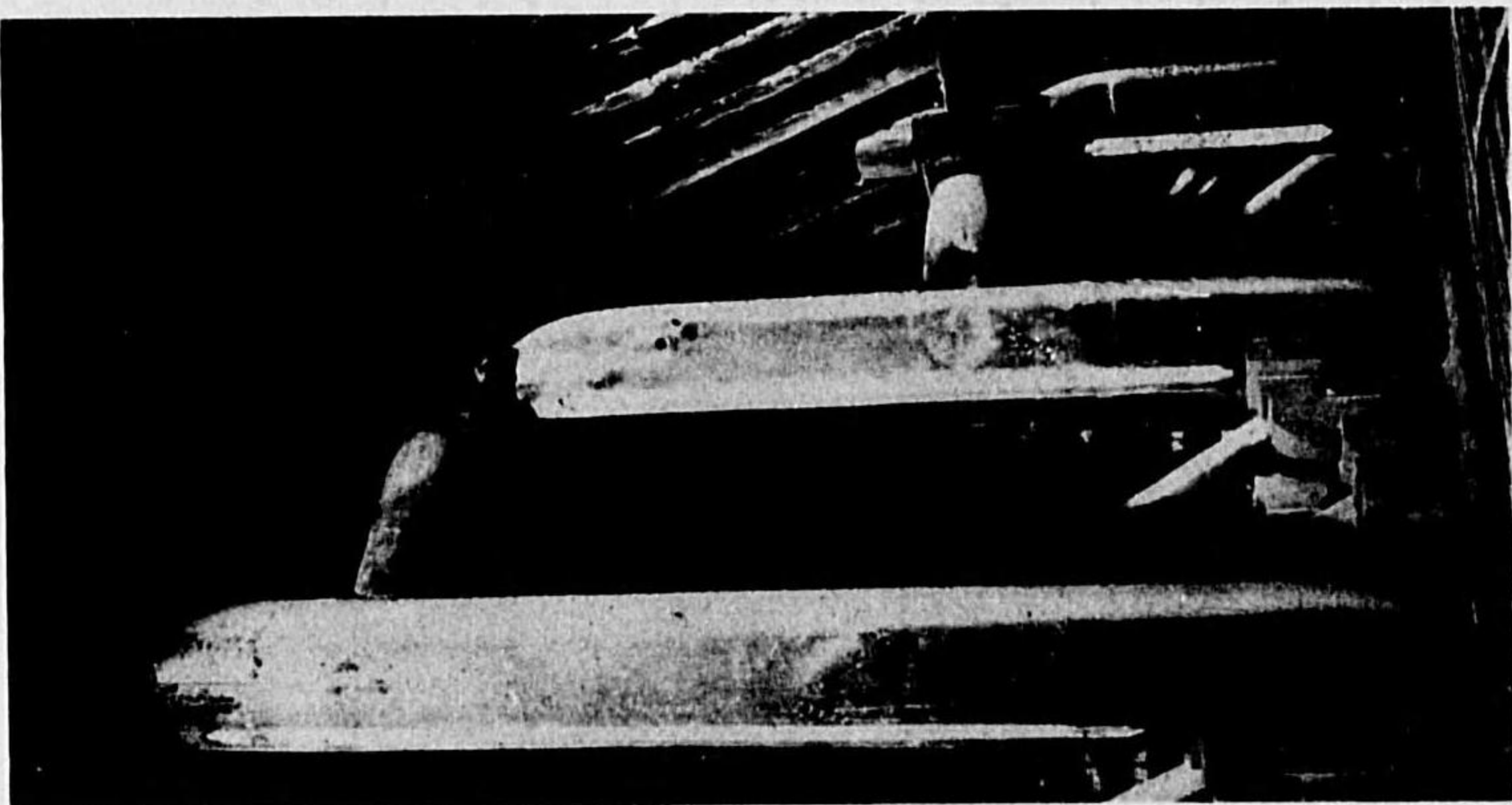
其二

(昭和十年八月二日)
(昭和十年八月二日)

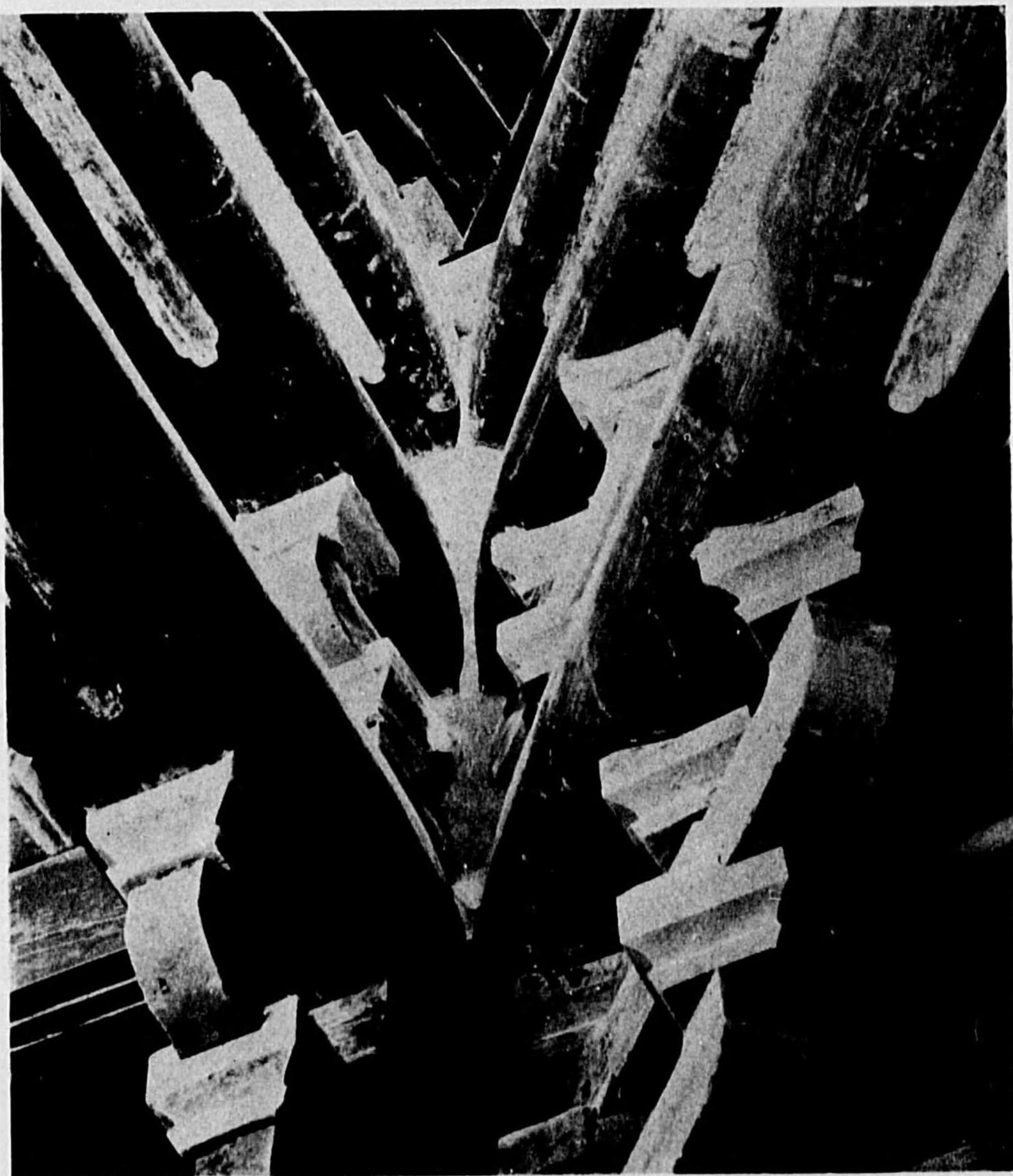
天竺様建築として現存最古で而も最もよく其様式の特徴を發揮してゐるものは、兵庫縣加東郡小野町ではあるが、實は町を距る約三十町の大字浄谷(キヨタニ)にある浄土寺浄土堂である。其内部の繋虹梁が洵に稀なる壯觀を呈してゐるのである。これを以て天竺様圓形虹梁を代表せしめるには充分である。

天竺様には元來天井をはらないから、化粧屋根裏である。さうして殊に此堂に於いては上の方が特徴を十二分に具備してゐるのに、下に一面に金網をはってしまつてあり、従て其莊重雄大の景觀はいつも大に減殺されてゐるが、偶ま何かの都合で其網の一部が外してあるときいたので、早速出かけて行つてとつておいた寫眞が間に合つたのである。

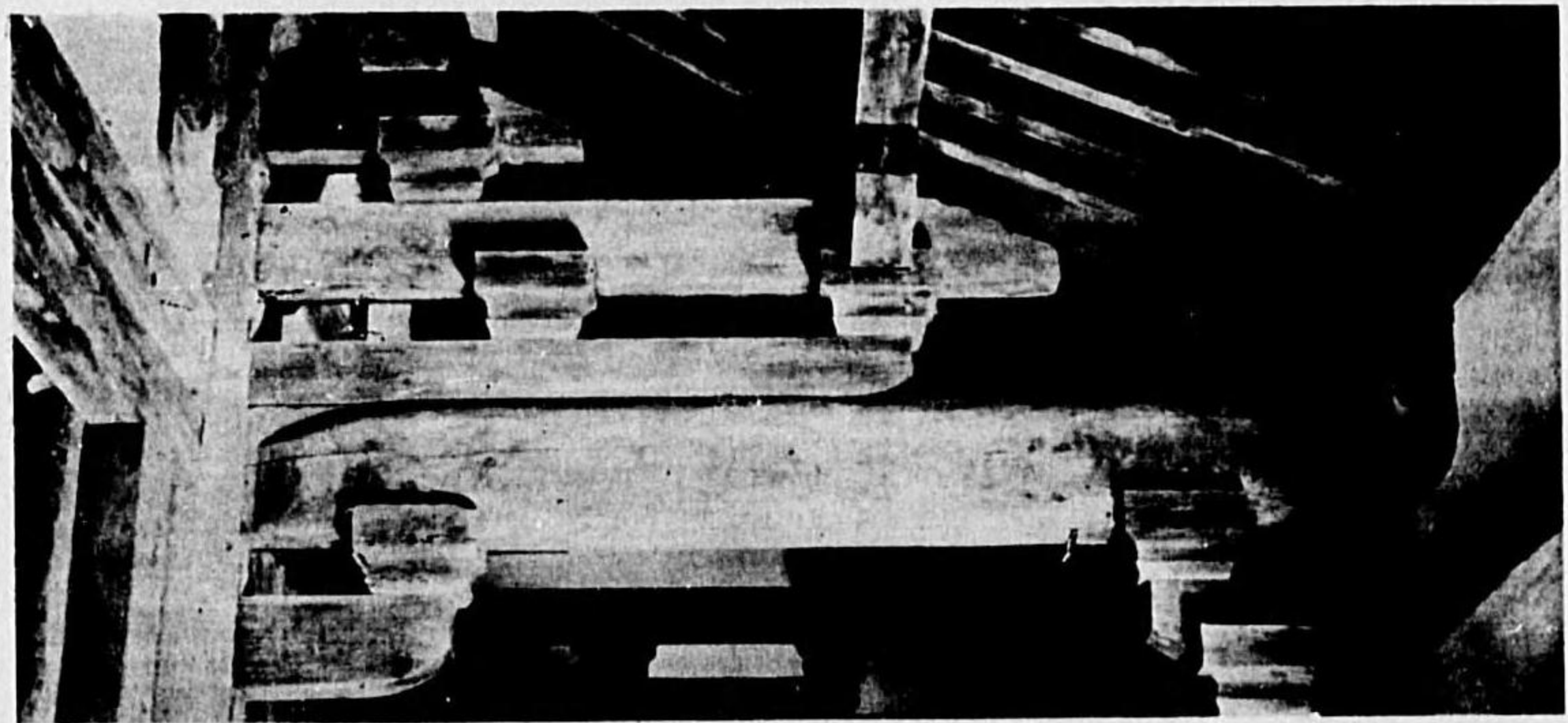
此堂は方三間寶形造で、内陣柱は四本ある。其各の内陣柱から、隅柱と其兩隣の柱へ、つまり三方に三重の太い繋虹梁を架渡してゐる。つまり一本の内陣柱から三方へ三本づつ、合せて九本の太い虹梁が放射形に配置されてゐるのだから、其堂堂たる有様は例ふるにものがない。一九は内陣柱と側柱とを繋いてゐるもので、下の最大最長なる虹梁の上に圓束を立て、柱と此束との間に二重目の虹梁を架け、更に此第二重虹梁上に束を立て、再び柱と此束との間に第三重虹梁を架渡してある。此等の虹梁は總て内陣柱に挿込まれて居り、下の大虹梁は三手先、次の中虹梁は二手先の挿肘木料拱を以て支へてゐるやうに見せ、最上部の小虹梁だけは持送りはしない。ところがこれを隅からみた時は、一層偉觀である。二〇は即夫で、右は隅行で左は平、この間は45°の角度をなしてゐる。この隅行の右に更に45°の角度に左のと同じものが出てゐるのだから、實に大したものである。其虹梁が如何に太く圓に近い斷面を持つてゐるか、其下端が僅かに平たくて、三葉線形の様な原始的錫杖彫がある所、柱に挿込まれる部分が細くなつてゐる所等、何れもよく判るであらう。序に肘木は和様に似、隅行に鬼料を用ひてないのも看過してはいけない。



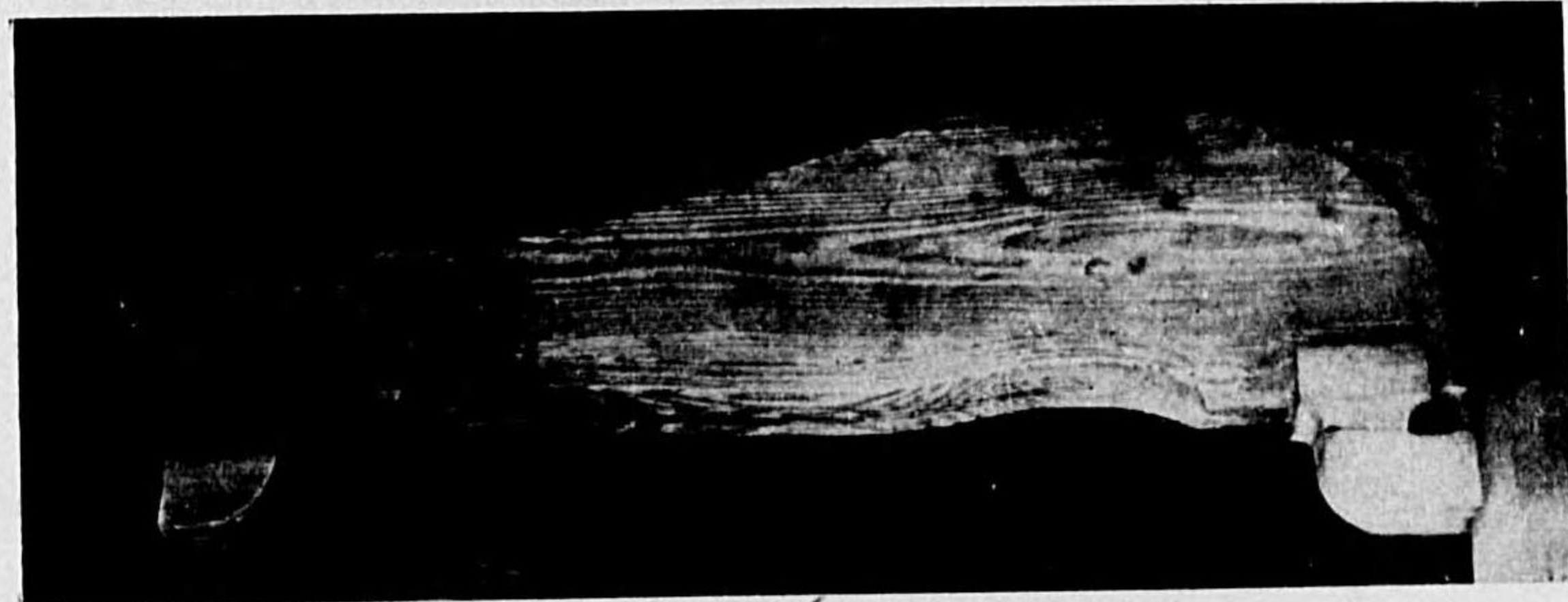
一九



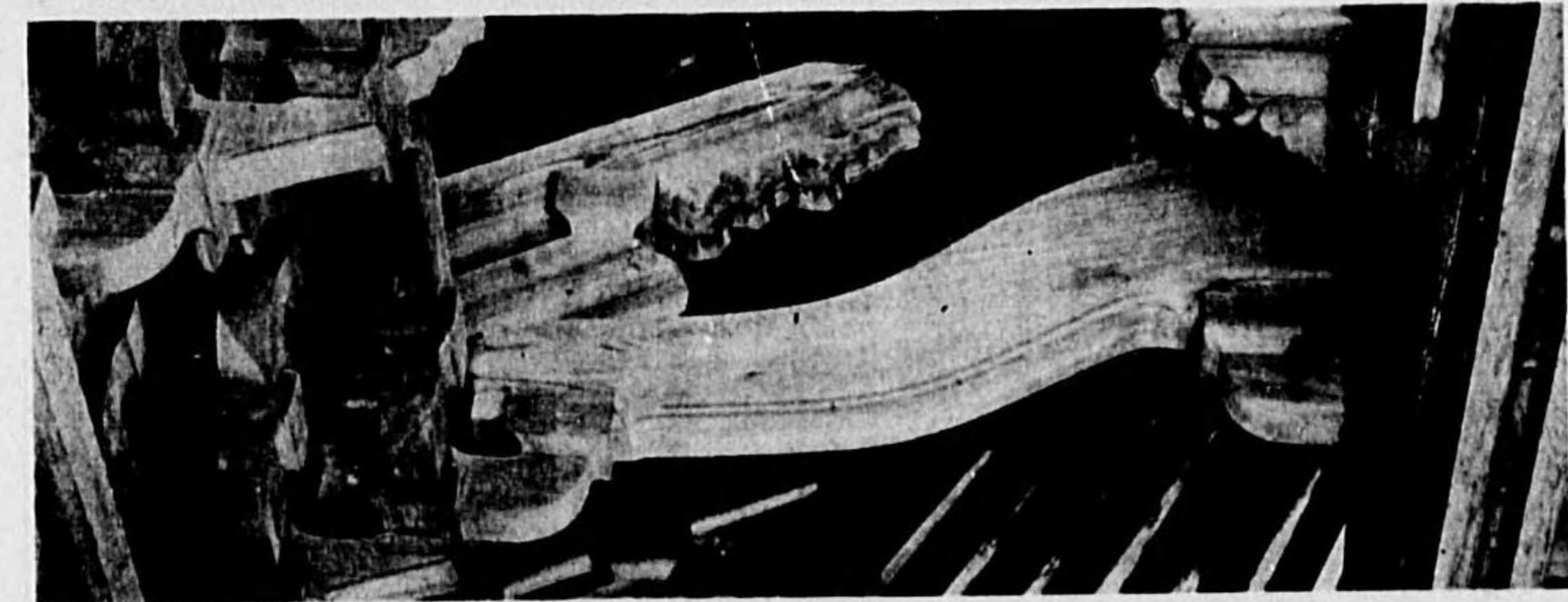
二〇



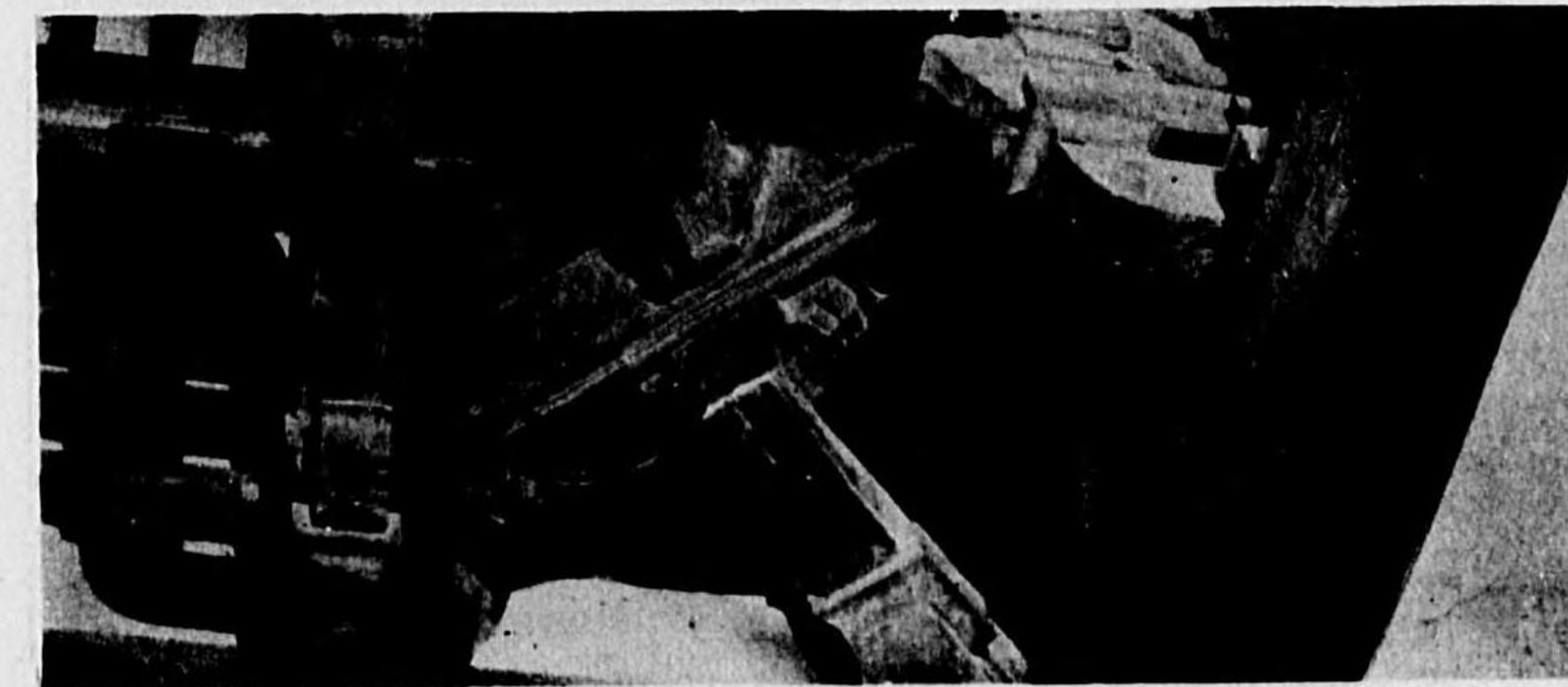
111



112



113



114

二一、醍醐寺經藏外陣繫虹梁

(昭和三年十一月二十四日)

二三、圓覺寺舍利殿外陣繫海老虹梁

(昭和二年八月十四日)

二四、永保寺開山堂禮堂外陣繫海老虹梁

(昭和三年九月十六日)

二五、釋迦堂外陣入隅火打虹梁(和歌山縣海草郡加茂村大字梅田)

(昭和四年一月三日)

二一は天竺様虹梁の他の一例である。醍醐寺經藏は既に先年山火事で焼失して了ひ、最早地上から消滅したのだから、今更如何とも致し難いが、これは断面が長方形で四隅が撫角をなし、下端に大きな浅い三葉線形式の錫杖彫を有するものである。これは實は虹梁の様に見せてゐるので、四角な棒に多少の細工をしたに止るのである。上端兩端に近く鯖尻があるが、下端に繰り上げはない。これでは虹梁といへないかも知れぬが、これは其中へ入れておいてよろしいのである。此建築の内陣の經室上には、此種の好例たり得る大虹梁及び繫虹梁が多く用ひられてゐた。

唐様虹梁

唐様に特有なる「海老虹梁」(エビコウリヤウ)の二例を最初に掲げておく。蝦虹梁ともかく、ある書物に蝦形に彎曲した虹梁といふ定義を與へてゐるが、これは少しどうかと思ふ。蝦の腹部が彎曲してゐる聯想からとした方がよからう。

二二は現存最古の唐様建築と考へられてゐるところの、弘安五年建立の鎌倉圓覺寺舍利殿の夫であるが、其名が不適當と思はれる位曲り方が少ない。二三はずつと末になつてくるが前例に比べると大分曲つてゐる。時代が下る程曲り方が多くなる様に考へられる。桃山・江戸時代になると態とらしい位曲つてゐるものもある位である。勿論寺院建築の細部であるのに、後には神社建築に用ひられる様になつた。海老虹梁は高さに差のあるところを結びつけるのに、差があればある程彎曲の度を多くすれば事が足るので大に賞用されてゐる。

二四は唐様建築に用ひられた唐様式火打虹梁。唐様にしても和様にしても此種のは稀有の例に屬する。

- 二五、相樂神社本殿妻虹梁（京都府相樂郡相樂村大字相樂）
- 二六、鶴林寺本堂内陣繫虹梁（兵庫縣加古郡加古川町大字北在家）
- 二七、安國寺經藏内陣大虹梁（岐阜縣吉城郡國府村大字西門前）
- 二八、明王院本堂外陣二重虹梁（福山市草戸町）

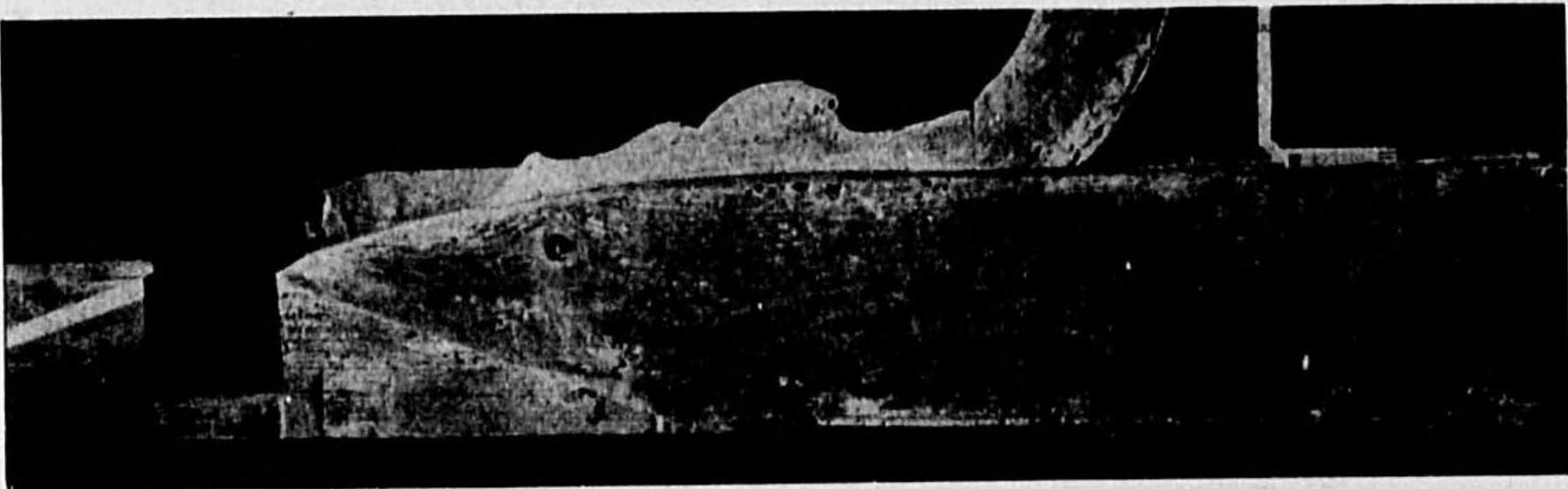
室町時代

當代の虹梁は勿論大面取純和様のものもあつたが、多くは繫虹梁位の小規模のものであつた。相當の大きさのものは殆んど全部といつていい位肩と袖切と錫杖彫とを有するが、時には天竺様系統のものもあり、此等は何れも和様虹梁に比べると、いろいろ裝飾があつて賑かであるから、例へば板唐戸よりは棧唐戸が多く用ひられたと略ぼ同様の理由で、賞用されたものと考へられる。海老虹梁には頗る簡單なものがあつたと同時に、手の込んだ裝飾を施したのも存在した。又稀に其先端に特に木鼻の様な裝飾を刻みだしたりしたのも見出された。錫杖彫も可なり發達をした。

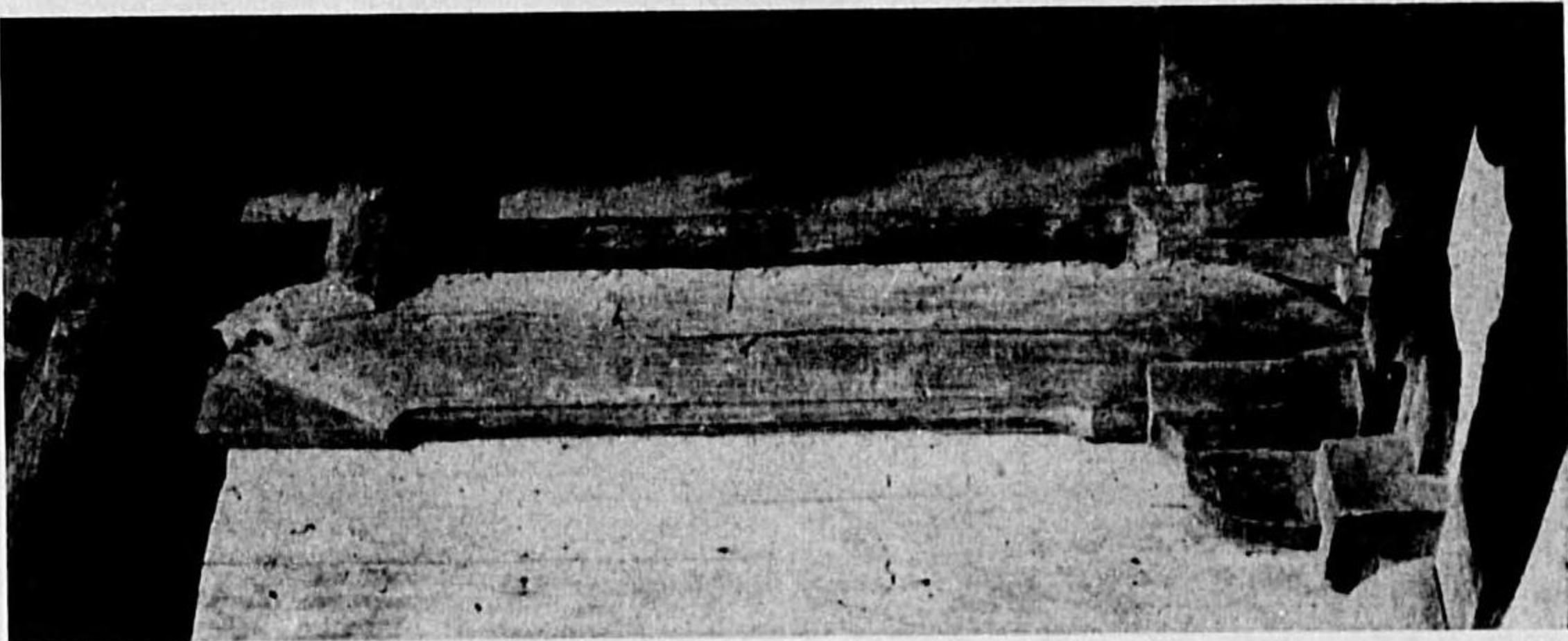
鎌倉・室町時代の袖切は、其境界が一直線をなしてゐるので、柱に挿入されるか又は桁と交叉する部分と下端とで、常に勾股弦即不等邊直角三角形をなしてゐる。さうして虹梁の側面から袖切に移行するところは自然に曲線をなし、桃山以降の多くの例の如く急劇に折れ曲る様な事はないのが普通である。稀に弓肩をとつたのがある。併し大體に於いて弓肩は桃山からとみてよろしい。

二五は相樂神社本殿の妻に用ひてあるもの——こゝいふ位置のを「妻虹梁」といふ——であるが、其形は如何にもよく時代を現はしてゐる。「袖切」のところは勾股弦ができてゐるが、二六も二七さうなつてゐる。桃山になると中中この位のことではすまなくなる。「袖切」といふものは、太い虹梁を幅狭くして柱に挿入したり、料に含ませたりするのに都合がいいので、大に人氣があつたらしい。虹梁下端に壁等がある場合には、錫杖彫はできないし、又しても何にもならないが、二七の様な場合には必ず裝飾として刻むのである。さうして唐様建築の時（主として）には形式的裝飾持送を袖切の下につける。二八は珍らしい例で下の大虹梁は天竺様式と見られ、上の細い小さいのは唐様で、そこへ板臺股をのせたもの。唯一の例である。

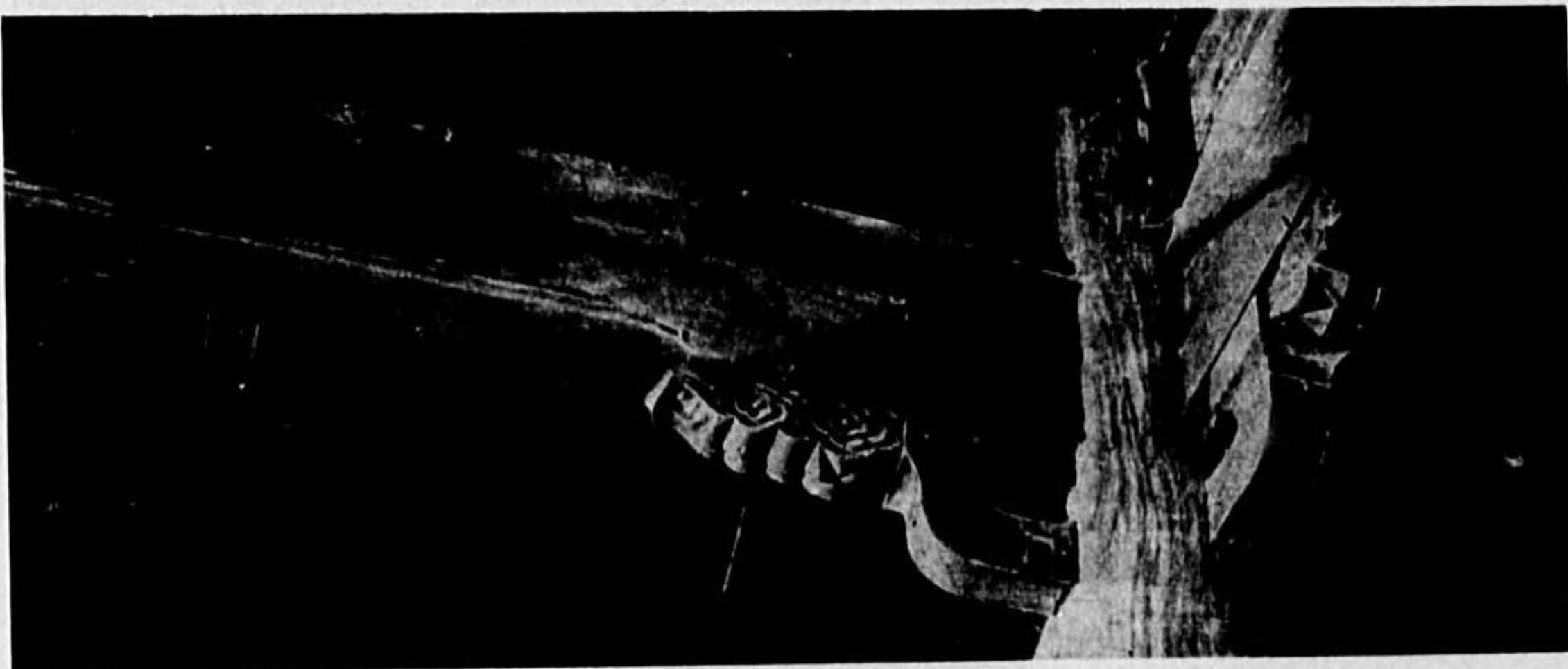
（昭和十年四月二十五日）
（昭和九年十二月二十一日）
（昭和五年八月十二日）
（昭和九年三月二十八日）



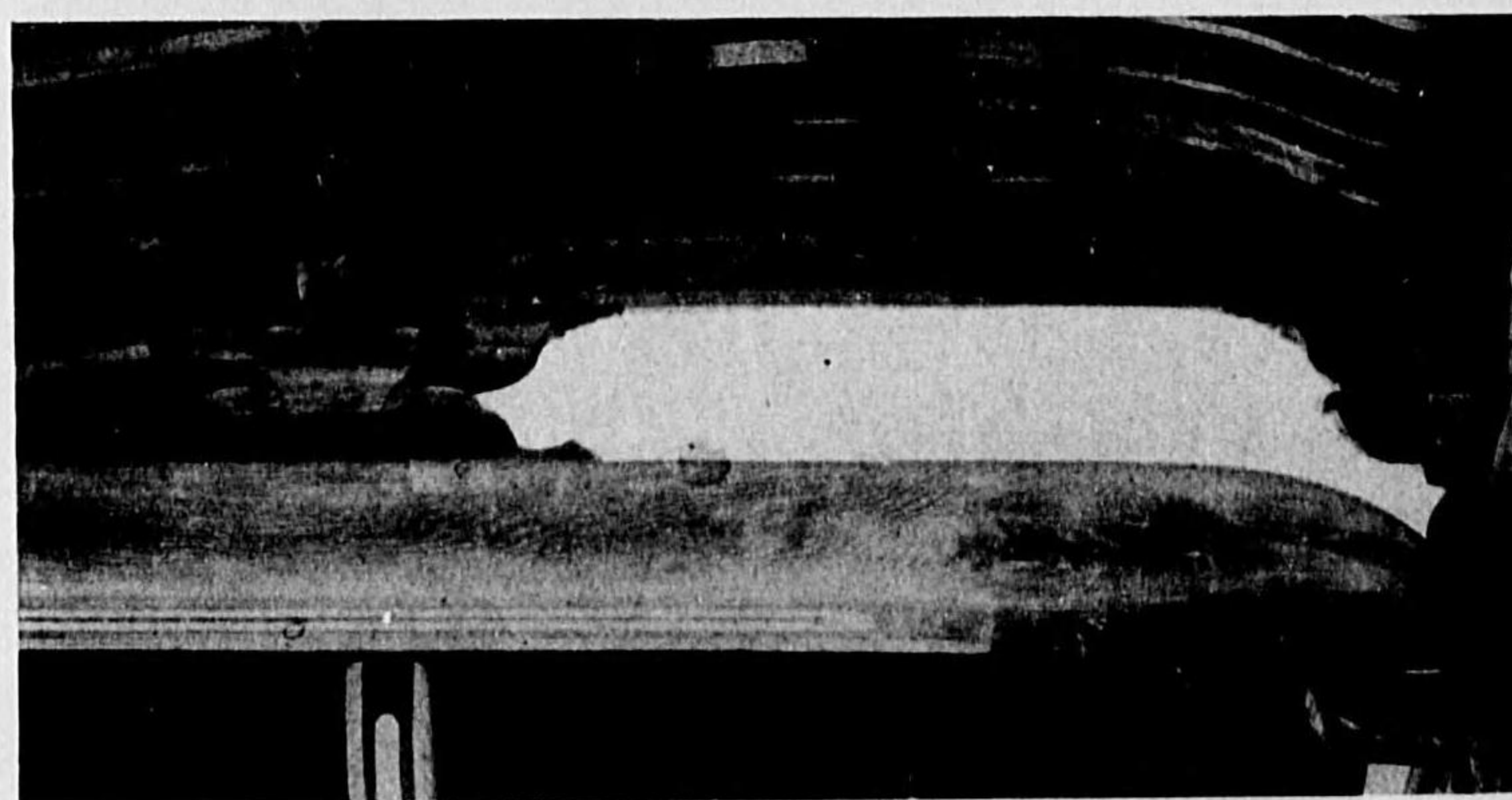
二五



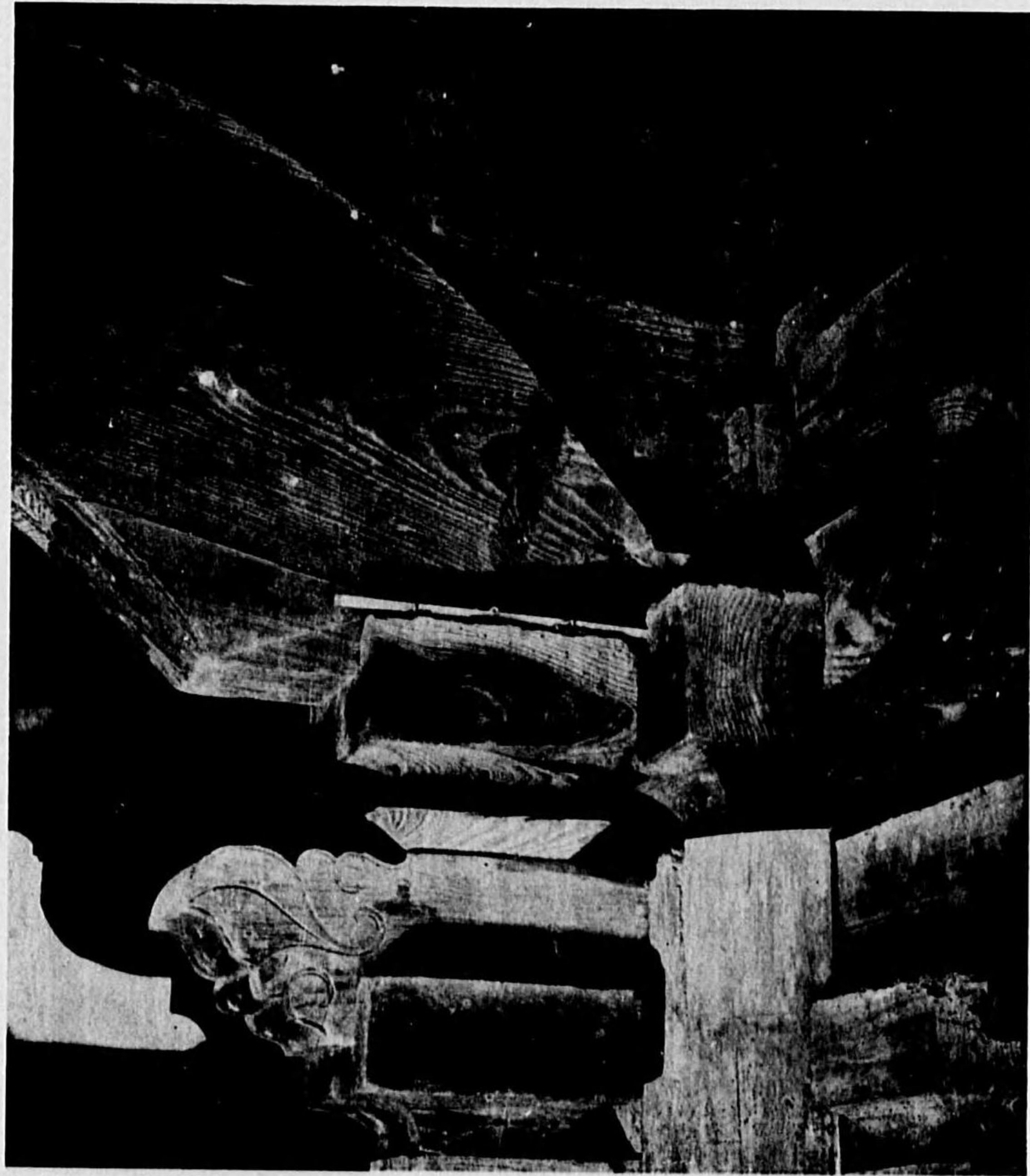
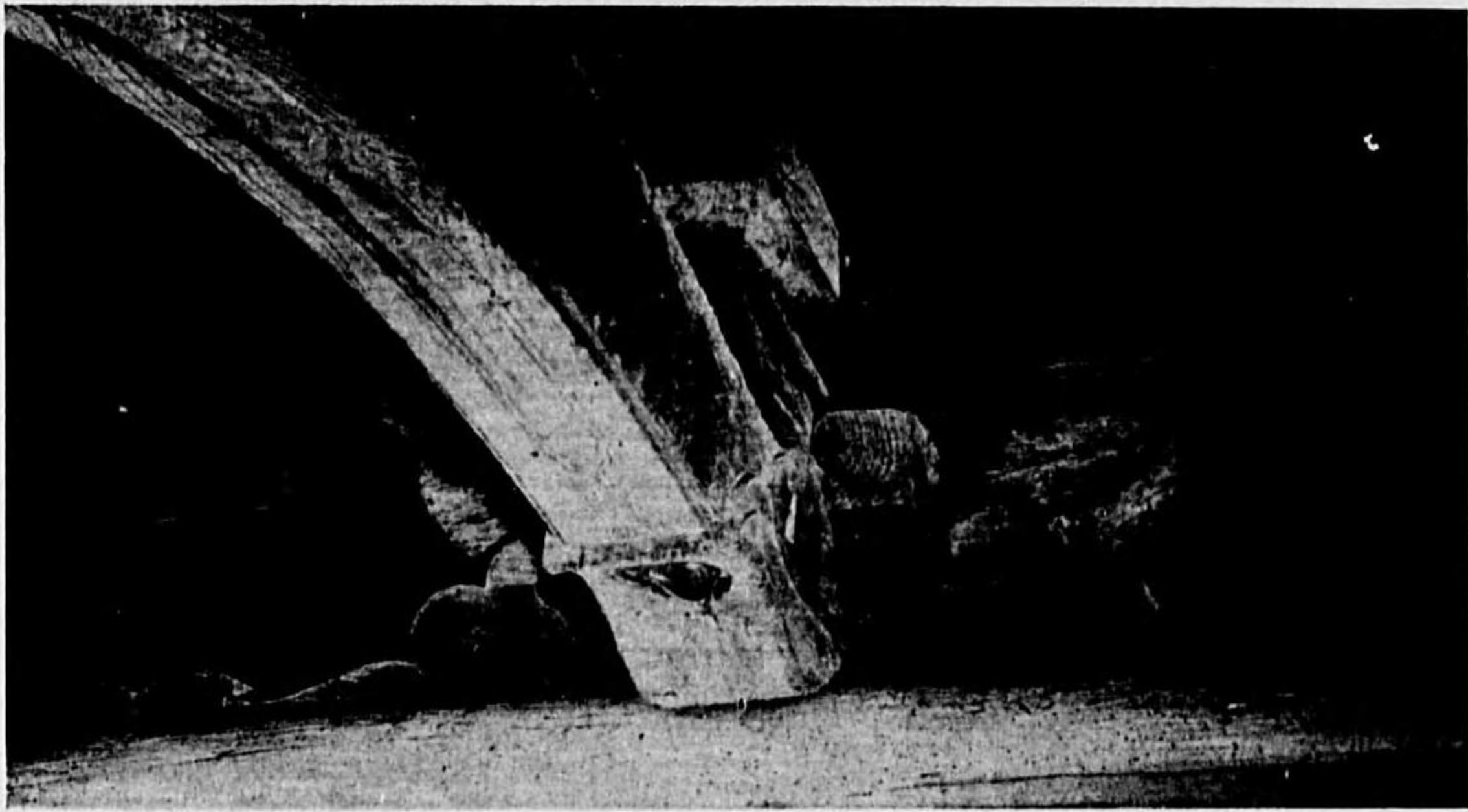
二六



二七



二八



二九、鶴林寺本堂外陣繫虹梁一部 共一

三〇、同

共二

(昭和十四年十一月一日)

(物差は曲尺の約一尺(一呎)・昭和十四年十一月一日)

鶴林寺本堂の内部に於いて、天井廻の構架式で最も注目すべきは外陣である。鎌倉時代に支那(南宋)から輸入された二様式の細部を然るべく取入れて、洵に巧にまとめられてゐる。而も唐様を多く、天竺様は既に様式として獨立を失つてゐたので、僅に其様式特殊の料尻に一種の縁形を有する料と、大虹梁とに佛を止めしめ、つまり和・唐・天の三様式を混淆折衷して造りあげてゐるのである。

此所に示した二圖のうち、二九は外陣西方の繫虹梁——入側柱と西側大虹梁と——の、西側大虹梁上に、多分板葦股とあひ缺きしておさめてあるところを西南方から見えたもので、三〇は東方の繫虹梁と入側柱との關係を見せたのである。上下圖は西と東と異なつてゐるが、つまりこれは一種の彎曲した虹梁で、上圖の元が下圖で、つまり元が太く先の細いもの。さうして先端即ち上圖葦股と交叉してゐるあたりには、こちら向きに木鼻の様な飾りが刻み出してあるが、この虹梁が葦股とあひ缺きになつて、葦股の——此圖でいへば後方即——内側に出てゐるところにも又木鼻の様なものが刻んであることに注意しなければならぬ。だから葦股を中心として側面からみれば、其左右に木鼻の様なものが刻み出してあることになる。さうすると此圖でいふなら葦股から先の方に出てゐるのは、虹梁の鼻として當然だが、こちら向きの方は少しばかり無意味で、なくともよろしいのである。これが桃山になると頭貫に應用され、不思議なものができてくるが(西本願寺國寶鐘樓)、其萌芽は既に應永頃からといへるのである。

下圖に於いて唐様繫虹梁の下端が急劇に肥大してゐるので、材料節約のためか下端にはぎ木がしてあるが、これは西側のも同様の取扱をしてゐる。鯖尻のところは少しく失敗があるが、これは指摘されなければ氣がつかない。和様の柱・料・肘木・天竺様系統の料尻に縁形のある料、及びどちらかといふと天竺様式木鼻等、頗る壯觀である。

三一、鶴林寺本堂外陣入側繫海老虹梁

三二、不動院金堂繫海老虹梁(廣嶋市牛田町)

三三、官幣中社嚴嶋神社五重塔初重外陣繫海老虹梁

(昭和十四年十一月三日)

(昭和十年七月十日)

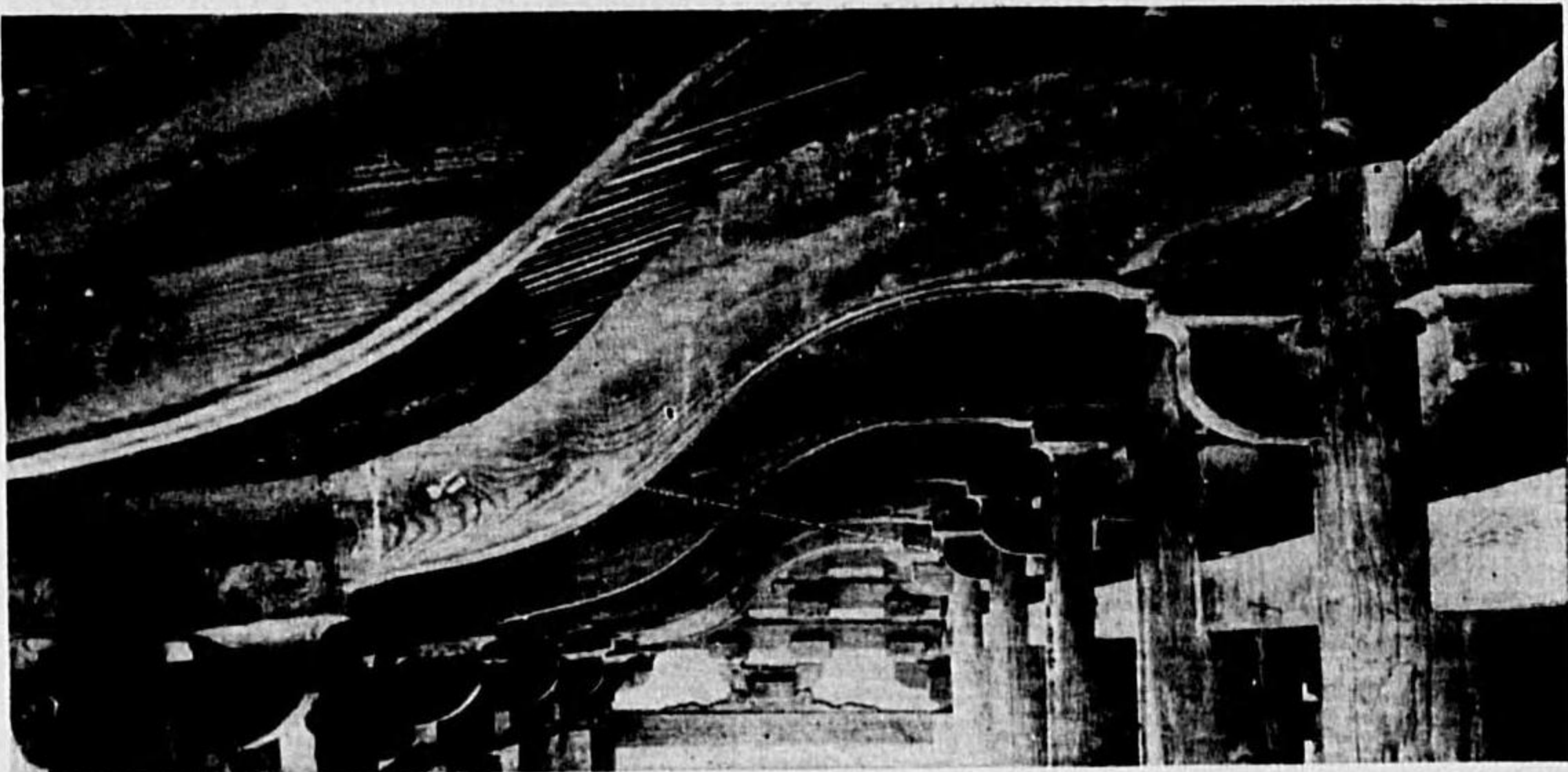
(昭和六年三月二十九日)

此所には三種海老虹梁を示した。鎌倉時代のものにしても(例へば三二・三三)、これ等にしても上端も下端も浪形曲線から成つてゐて、餘り海老に似てもゐない。先づいくらかでも似てゐるといつて言へなくもないのは三三位のところ、右が頭で左が尾として出来ない事もない様である。どうも此等を「海老虹梁」等といふよりは「浪形虹梁」といつた方が適當かも知れない。室町時代の普通の虹梁は鎌倉と大差はないが、海老だと少し變つたところがなくもない。

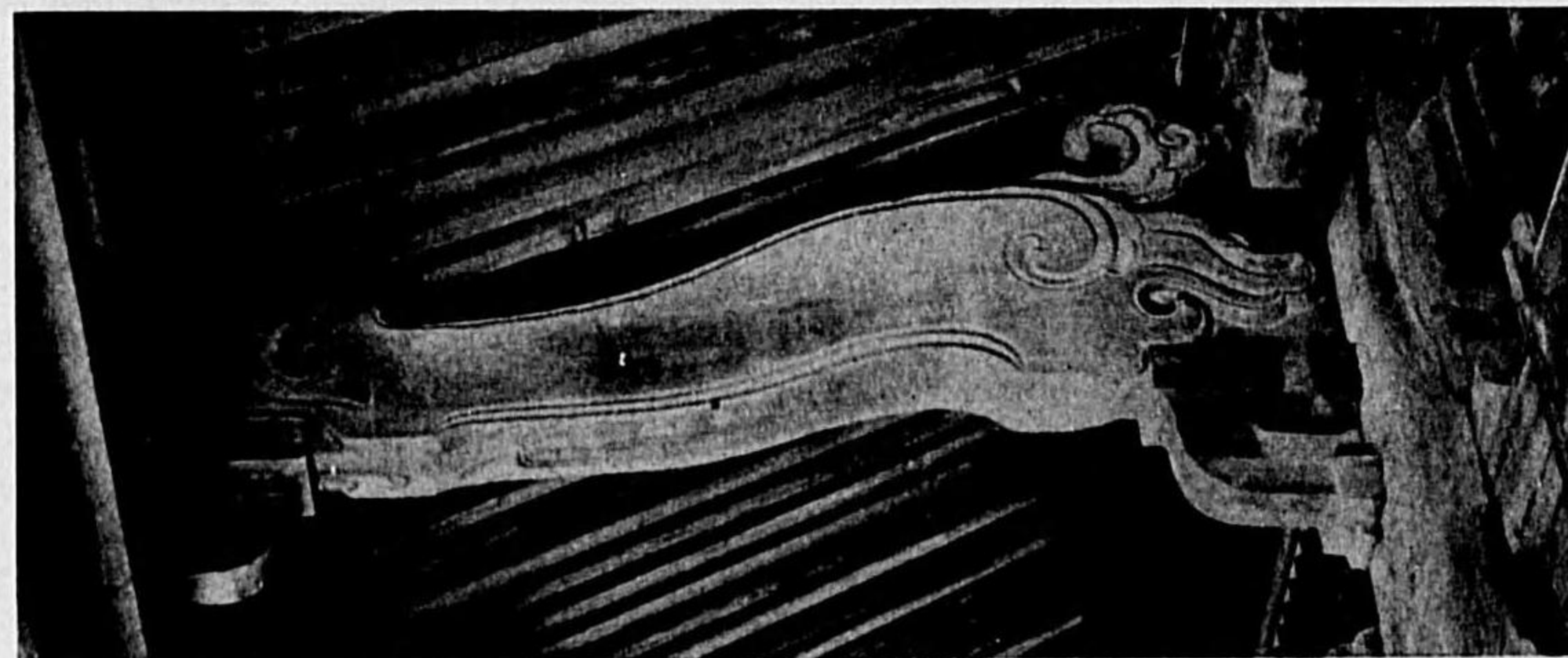
三一は鶴林寺本堂外陣入側ので、この様に行列すると中中壯觀である。眉も袖切も錫杖彫もあるが、入側柱に近く、袖切の上の方、即直角三角形の弦に沿ひて、虹梁の側面のところを少しすきとつてある。其すきとつたあとは、下の方は弦だから一直線で、上の方は弧状をなしてゐる。だから其部分は缺圓状で、平たく言へば「弓」の様な形をしてゐる。つまりこの部分は「弦をはった弓の様だ」といふ様なところから「弓眉」(ユミマユ)と呼んでゐる。弓眉は桃山時代に入つてから一般に行はれたのであるが、この様に室町時代になくもないのである。いつ頃からあるかとの間に對しては、室町からと答へるのが正しいであらう。尙ほこれも材料節約のためか、上端に大きな接木をしてある。

三二は海老虹梁としては随分複雑なもの。右上の裝飾は一本から刻み出したのではなくて、あとからつけたものであるのは記す迄もあるまい。不動院金堂は大きな建築で、従て柱も多かつたが、此種海老虹梁も数多いが、其中の唯一本、西側北側のもこの北側にだけ、入側柱に近い方の圓い窪みのところから牙を刻みだして象化させてゐるのは面白い。

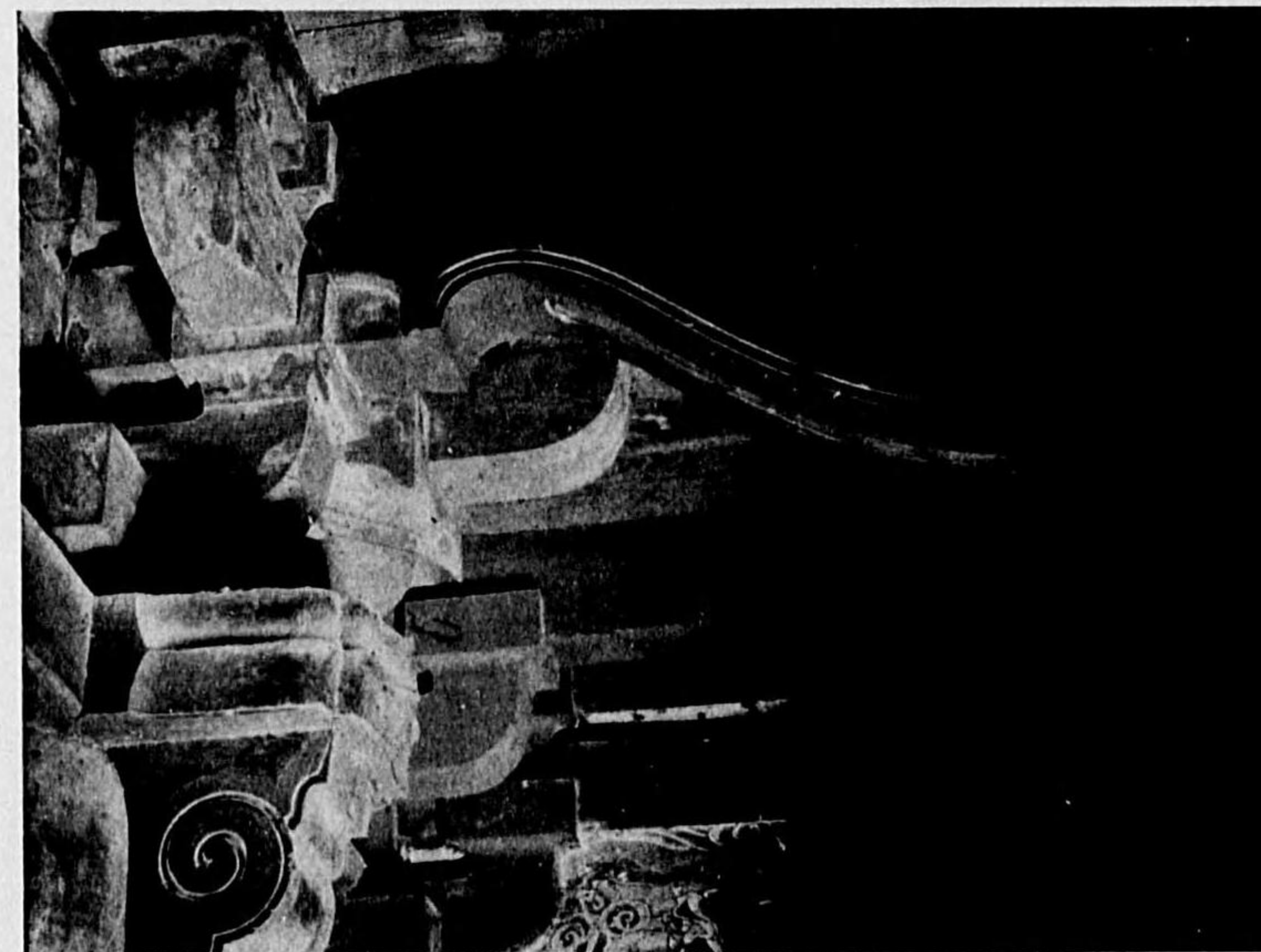
三三は大して飾らず、まことにさっぱりとしたものだが、前例同様眉が二本とつてある。眉二本は既に鎌倉からあるから、當代には勿論珍らしくない。同時代でも前例の様な裝飾の多いのもあつたと同時に、此様な簡素なものも用ひられたのである。以上三種共下端の錫杖彫は前代の繼承で、何れも三葉線形の様なものにしてある。



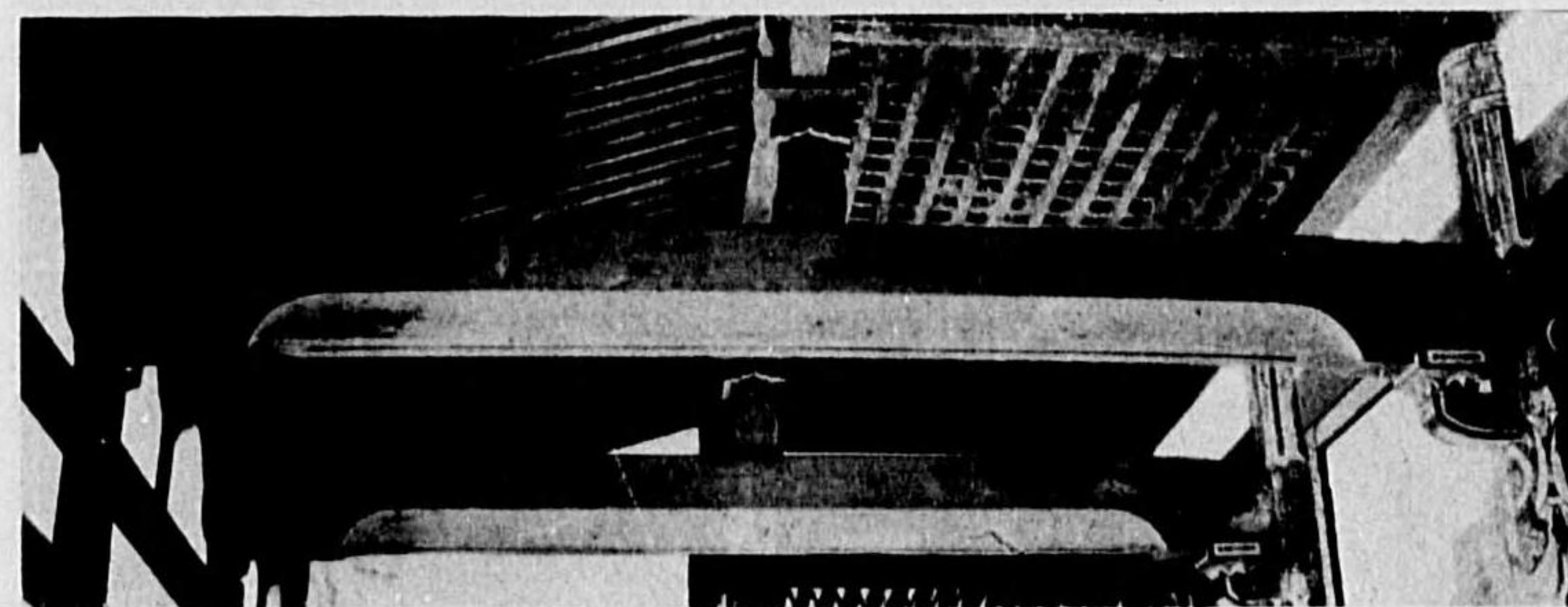
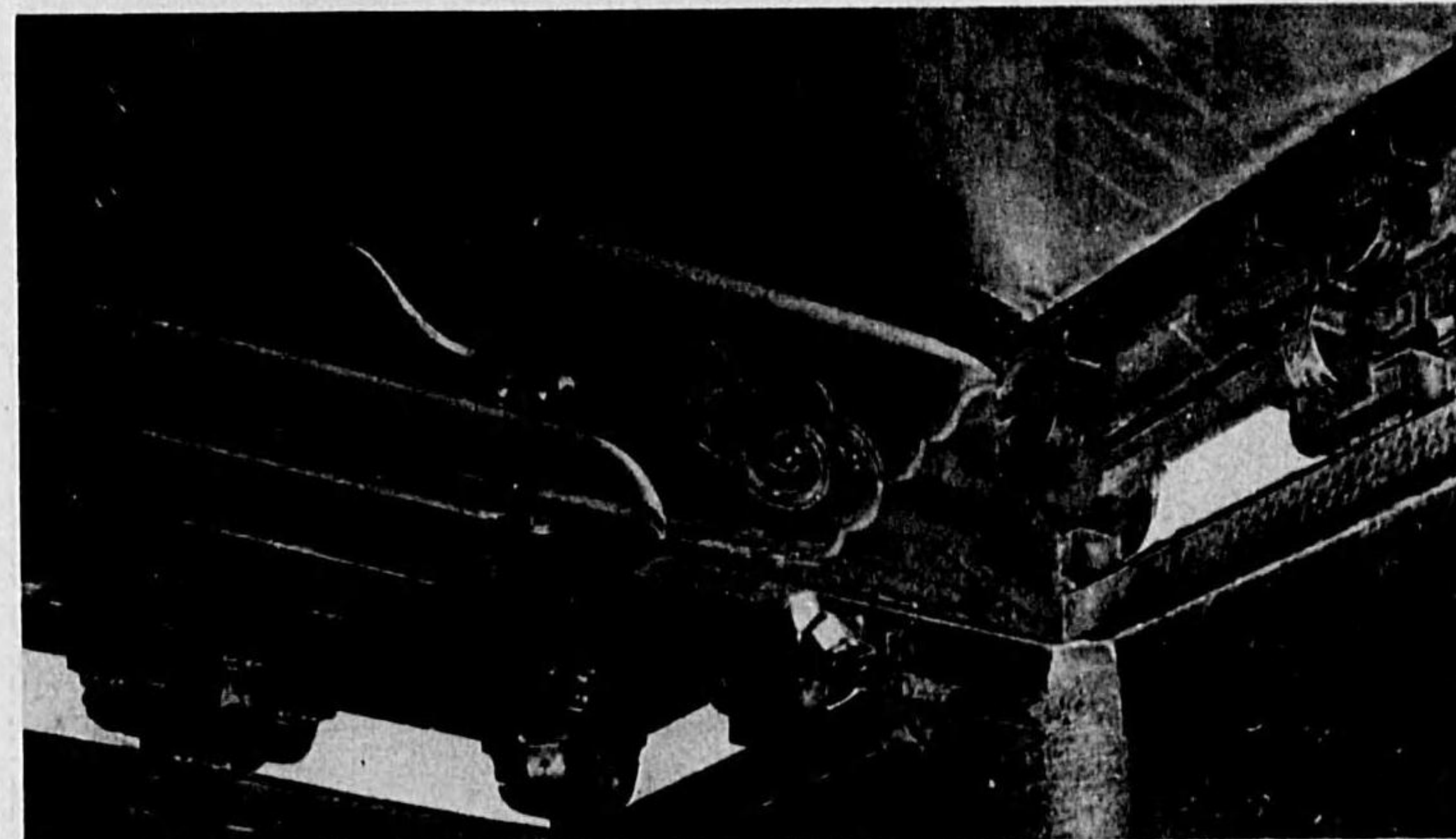
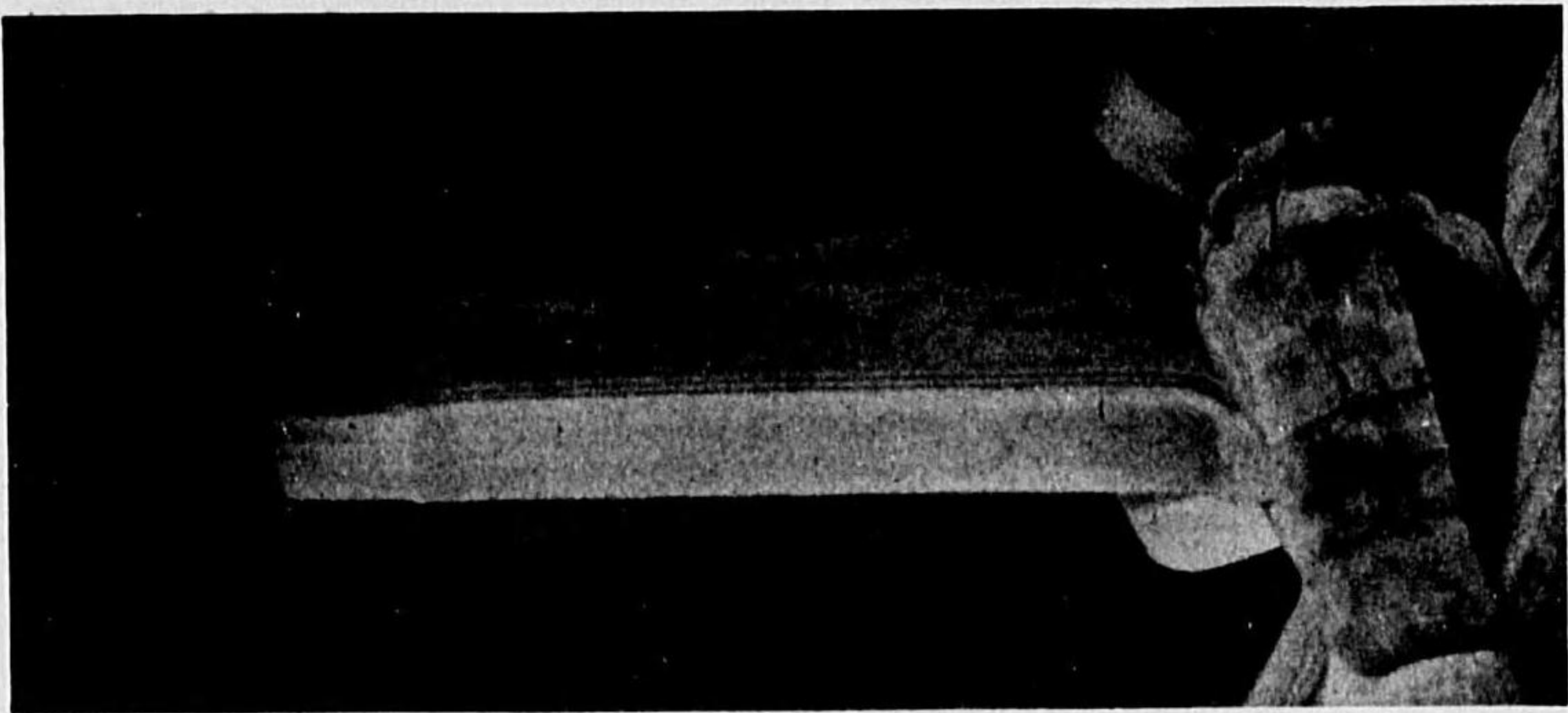
三三



三二



三一



三四、安樂寺八角四重塔初重繫海老虹梁(長野縣北佐久郡別所村大字大門)

(大正十四年八月一日)

三五、瑞巖寺本堂附屬玄關大虹梁(宮城縣宮城郡松嶋町大字松嶋)

(昭和五年七月三十日)

三六、本興寺開山堂大虹梁(尼ヶ崎市開明町三丁目)

(近藤豊氏)

三七、金剛寺本堂外陣繫虹梁(大阪府南河内郡長野町)

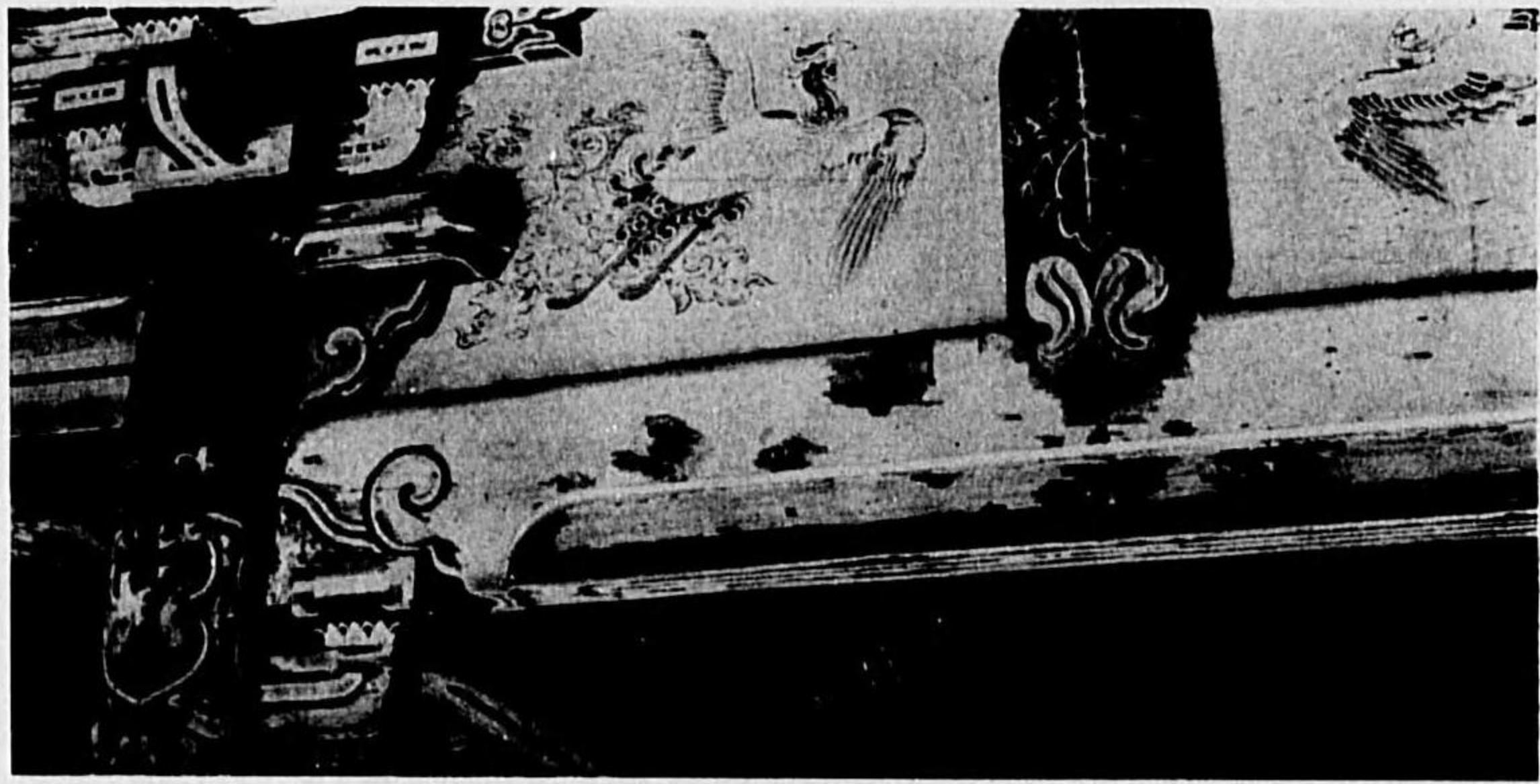
(昭和四年五月二十六日)

安樂寺八角四重塔は、我國に於ける木造八角、而も四重で且つ殆んど純粹の唐様——窓の連子と相輪を除いては——といつてもいい様な、類例のない建築であるが、三四は其初重外陣の繫海老虹梁である。これは丁度前例の様に至極簡單で、且つ眉も二本あり袖切もある。割合に彎曲してゐない事は、圓覺寺舍利殿の如くである。此種の虹梁としては古い形式といへる。

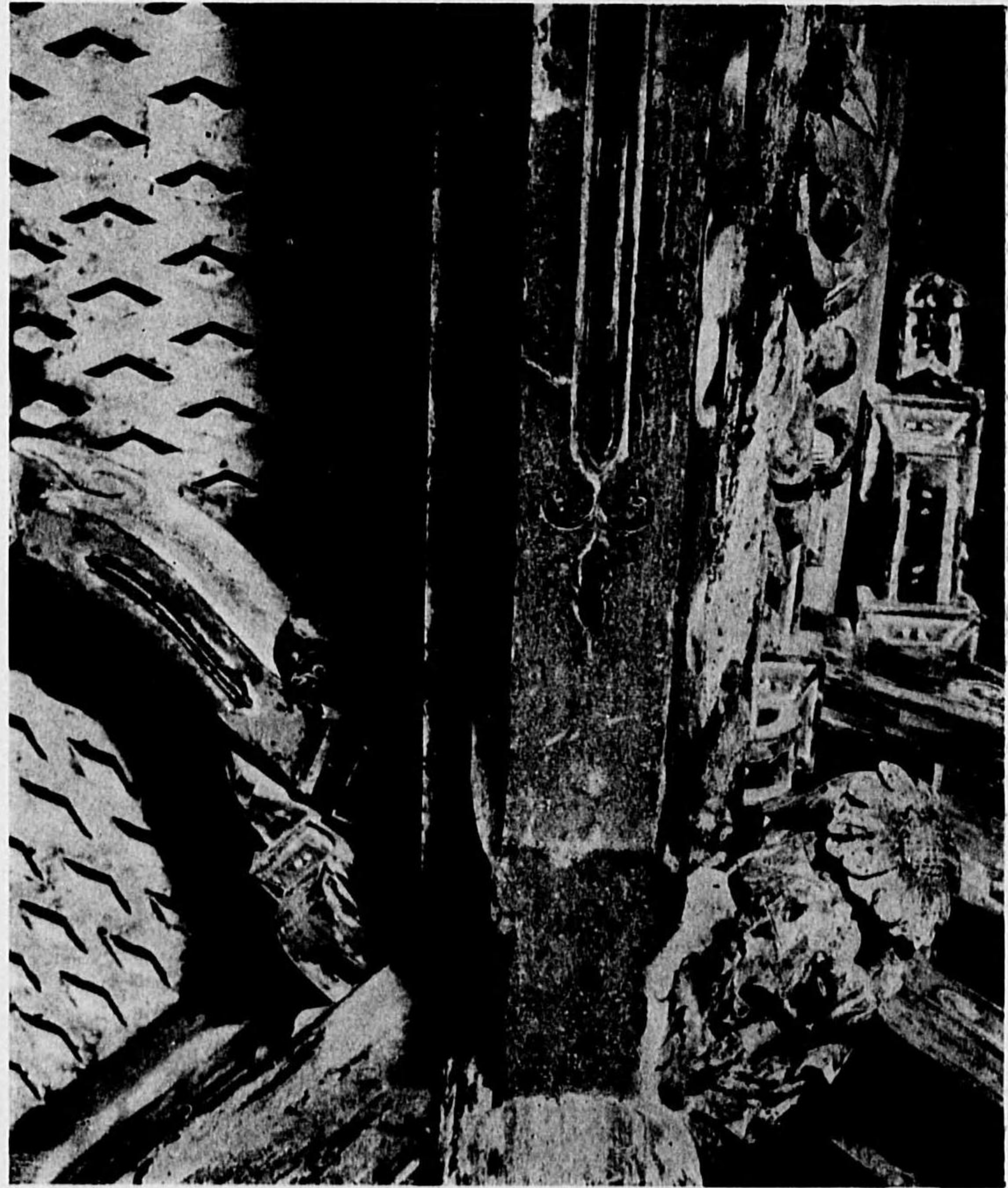
桃山時代

桃山時代になると袖切のところが大に發達し、最早直角三角形をなさず、弦に當る部分が一直線をなさないで、多くは複雑な曲線の集りより成り、そこに「若葉」(ワカバ)と呼ぶ唐草か、又は渦文を刻む様になつてきた。又下端の眉も幅の狭いもの他に、虹梁の高さの半に達する様な大眉をとるのが流行した。尤もこの種の大眉は當代に初まつたのではなく、鎌倉末位からなくもなかつたが、夫はただあつたといふだけで、稀に用ひられたのであつた。虹梁の断面も長方形となり、そこへ大眉をとつたから、可なり拙い形となり、最早昔の様な力のある形ではなくなつてきた(これも鎌倉末位からあるにはあるが)。又全く前例のない異形のものもできた。

三五は松嶋瑞巖寺の玄關から本堂の椽へ昇るところの階段の上に當る邊の大虹梁。高さの半分には至らないが可なりの大眉がとつてあり、袖切のところは甚だ手の込んだ取扱をしてゐる。本堂廻廊の虹梁は、これより尙ほ一層複雑な袖切をもつてゐる。三六のは渦文が雲文化し、夫から出てゐる若葉はあたりと没交渉に發達をしてゐる。三七の大眉は殆んど虹梁高さの半ばに及び、袖切のあたりの手法と共に、この様なのが先づ桃山の代表虹梁である。



三八



三九

三八、高臺寺開山堂禮堂虹梁一部

(昭和八年四月 日)

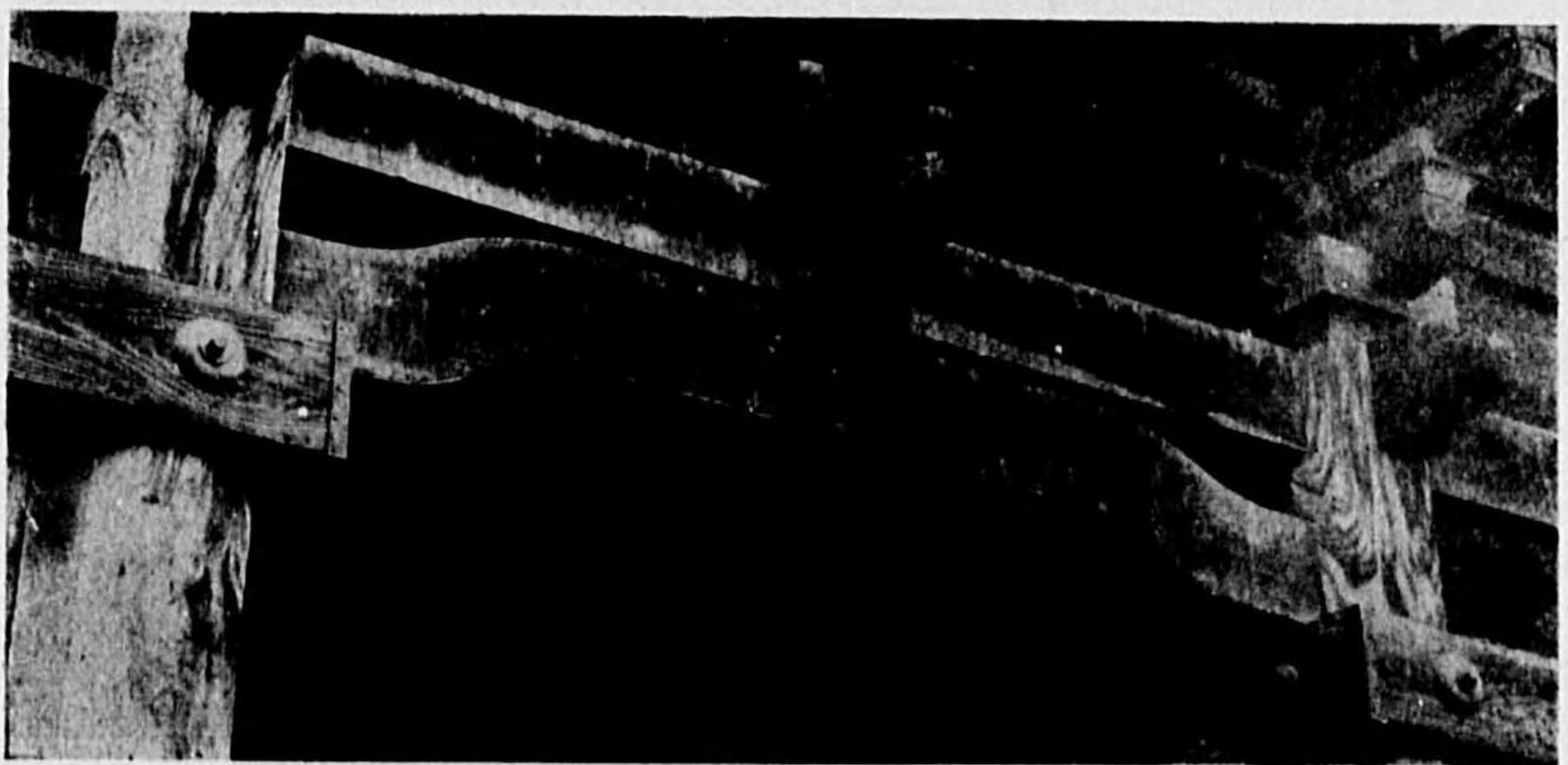
三九、金剛峰寺奥院經藏内輪藏柱間虹梁

(昭和七年六月十日)

高臺寺の開山堂は桃山時代の建築である。さうして三八の虹梁もやはり桃山であるが、もうこの様になつてきては頗る心細いのである。といふのは殆んど眞つすぐな梁と變りがないからである。上端には平たい所ばかりの如く、ただ僅に鯖尻のところにも極く小さい圓味がつけてあるばかり、下端の繰り上げもほんの僅かで、袖切のところも思はしくない。肩は細いのが二重に其上に少し背の高い太い肩がとつてあるから、全體の形としてはどうも感心ができないのである。

三九は輪藏の柱間に架渡した虹梁——小さくても大虹梁であるが——の見上げで、序に内外の柱間の繫虹梁——これは海老虹梁でまるで模型の様に小さい——も下端から側面へかけて見えてゐるし、もう一つ景物として菱天井まで寫つてゐる。大虹梁は袖切のところ、兩側面の大肩の有様と、錫杖彫とが明らかである。

此錫杖彫は鎌倉・室町と追追に少しづつ變化し來り、つまり鎌倉で幅の廣かつた三葉繰り様のものが室町で狭くなり、中央に鎬が出来たのが桃山に入りて先が尖り、兩方へ渦文が出て、更に中央に葉の様なものができたので、稍や錫杖彫といふ名に近づいて來た事が判るであらう。



四〇、大徳寺唐門東妻虹梁一部(京都市)

四一、正傳寺藥醫門虹梁

四二、官幣大社宮崎宮樓門虹梁(福岡縣糟屋郡箱崎町大字箱崎)

(昭和七年四月二十六日)

(物差は曲尺の約五寸(六吋)・昭和六年四月十二日)

(昭和十二年一月二十八日)

四〇は虹梁の袖切のところに獸面を刻み、其開いた口中より若葉を添へた唐草が出てゐる様にしたものである。だから上に巻き上った鼻の前の邊に鯖尻に相當する弧線があり、下端は縁上ることなくして、幅の狭い眉が二本獸の下顎の前の邊で止めてある。圖は東妻内部南側の一部であるが、北側も内も外も、又西妻内外共總てこれと同じである。

此獸は何であるかよく判らないが、少しく便化した猪の如くである。鼻が少し長過ぎて上に巻いてゐるが、猪が先づ最もこれに近いように思はれる。河内金剛寺本堂向拜の木鼻は、やはり桃山と見られ、猪に最もよく似てゐる(木鼻四一)。珍しいもので、とにかく極く珍しい。當時は相當にあつたかも知れないが、現在では恐らく唯一の例であらう。

四一の物差の左のは東と臺股との中間と思はれる不思議な中途半端なもの。其上に化粧棟木を支へてゐるのは、やはり一種の虹梁と見るのが穩當である。板蓋股式虹梁といった様なもの。尤も日光廟には東照宮にも大猷院の建築にも、遙に立派ではあるが、此種のものが用ひてゐるから、當時はこの種のが可なり賞用されたであらうが、今は殆んど見受けない様である。此門のできたのは江戸時代へ入ってからかも知れないが、様式は桃山だから、ここへ入れておいたのである。

四二は不思議な見馴れない形をしてゐるが、下端に小さい「茨」があり、これで若し中央に同じ様に下向きに一つ茨があつたらまるで唐破風から考へついた様に見える。海老虹梁を背中合せに中央でつき合せた如く、又前例を簡略化した如く、一種特有なものといへる。地方色と見えて此邊には他にもある。大して感心のできない型。

四三、輪王寺大猷院靈廟千鳥破風虹梁 其一

四四、同

江戸時代

其二

(昭和八年七月二十五日)

(物差は曲尺の約一尺(一呎)・昭和八年七月二十五日)

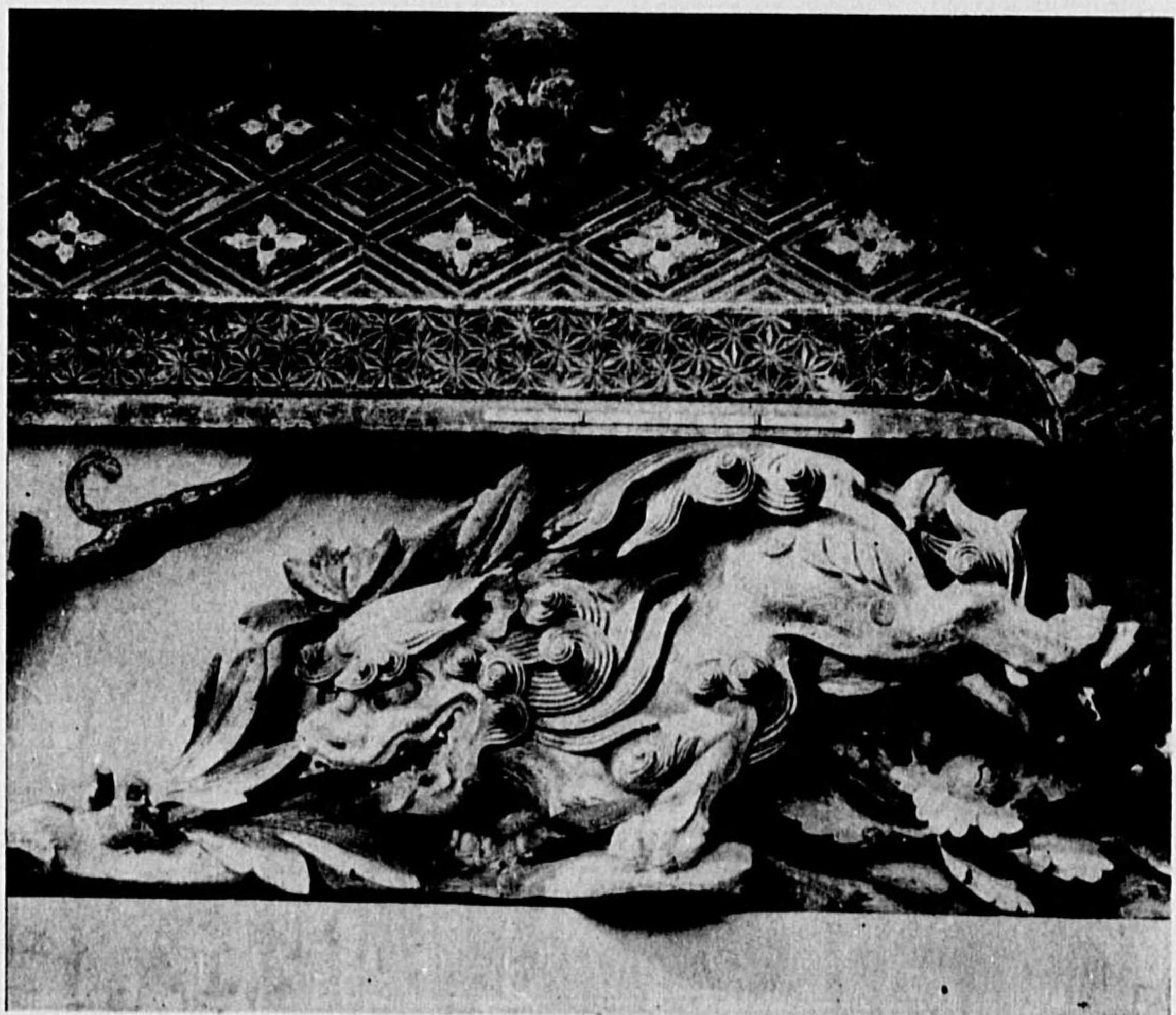
江戸時代の初期に於いては、他の例の通り虹梁も桃山時代と同じものであったのはいふ迄もないが、又場合によつては随分變つたのもあつた。袖切のところ、最初はほんの僅かな渦文又は若葉位をほつたのが、後には大に發達をして、態とらしいほりものをしたり、殊に元祿以後になると、若葉も發達して太くなり型に嵌り、無意味な拙劣極るものになった。繫虹梁なるものは、構造兼裝飾に用ひられたのは改めて述べるに及ばないが、夫が全く構造を無視したものに變つてきたりしたのもできてきた。

四三・四四は餘り近距離すぎて一枚に寫すことが不能であつたので、二枚にしたが下の右下につけばよろしいのである。大猷院靈廟拜殿は入母屋造で、正面に三間の向拜があり、屋上には「千鳥破風」(チドリハフ)があるが、この破風の三角形をした部分——正面を向いてゐるがやはり妻といふ——の取扱は「二重虹梁大瓶束」である。つまり二重虹梁裏股の裏股を大瓶束を、以て置き換へたのである。上圖下方の水平な幾何文様の部分は下の虹梁で、左端に大瓶束が立ち、其上にもう一つ二重目の虹梁を架け渡してある。夫で其右上に立つてゐるのが中央の大瓶束で、結綿の部分を下のと變へてあるが、高い所だし下からは見えない(懸魚三〇)。下圖右方獅子の彫刻の上の眉のところは例の約一尺(一呎)の物差が取付けてあるから、大體の寸尺は判る筈である。

扱て此二重虹梁は、下の細い眉と弓眉とだけが無地、袖切と二重眉には麻の葉、虹梁の面は地を吹寄菱格子とし、其菱の内交互に「花菱」と「重菱」とを入れたもので、洵に手間のかかった大仕事だが、下からでは何がほつてあるのか、餘程視力の強い人でないと判るまい。高い所へ細かい模様を入れても大して効果のない事が判るであらう。



四三



四四



四五

四五、輪王寺大猷院靈廟唐門大虹梁

(昭和二年七月十七日)

此虹梁は美しさと大きさに於いては比較にならぬが、四一の正傳寺門の夫によく似てゐる。

日光廟の建築は、どこ迄も獨創的意匠をだしてゐて、其細部等も先人未發のものが多いが、正傳寺門の虹梁を知らないうでこれを見ると面白い

形を案出したものだと思はれるが、實は既に桃

山時代からあつた形である。又筥崎宮機門の

も共通點がある。この虹梁の下端は、中央に上

向きの尖があり、其左右に下向きの尖ができて

ゐるから、唐破風とは少し異なつてゐるが、こ

れで中央のが下向きの尖であつたら、唐破風の

内に又唐破風がある様に見えるであらう。

虹梁全體はとても美しいもので、下端・眉・側

面等、何れも異つた幾何模様をほり込んであ

り、左右と中央とに飾金具を打ち、どこからど

こ迄裝飾ばかりで大分しつこい。下側に錫杖彫

をつくつて了つた後で、中央の金具を打つた様

だが、この錫杖彫はあらずもがなである。

四六、官幣大社石清水八幡宮幣殿大虹梁

(昭和八年五月十一日)

四七、妙心寺經藏内輪藏繫虹梁

(昭和八年十月二十八日)

四八、最勝院五重塔初重四柱間大虹梁(弘前市)

(昭和四年七月二十九日)

四九、南禪寺三門上層繫虹梁一部

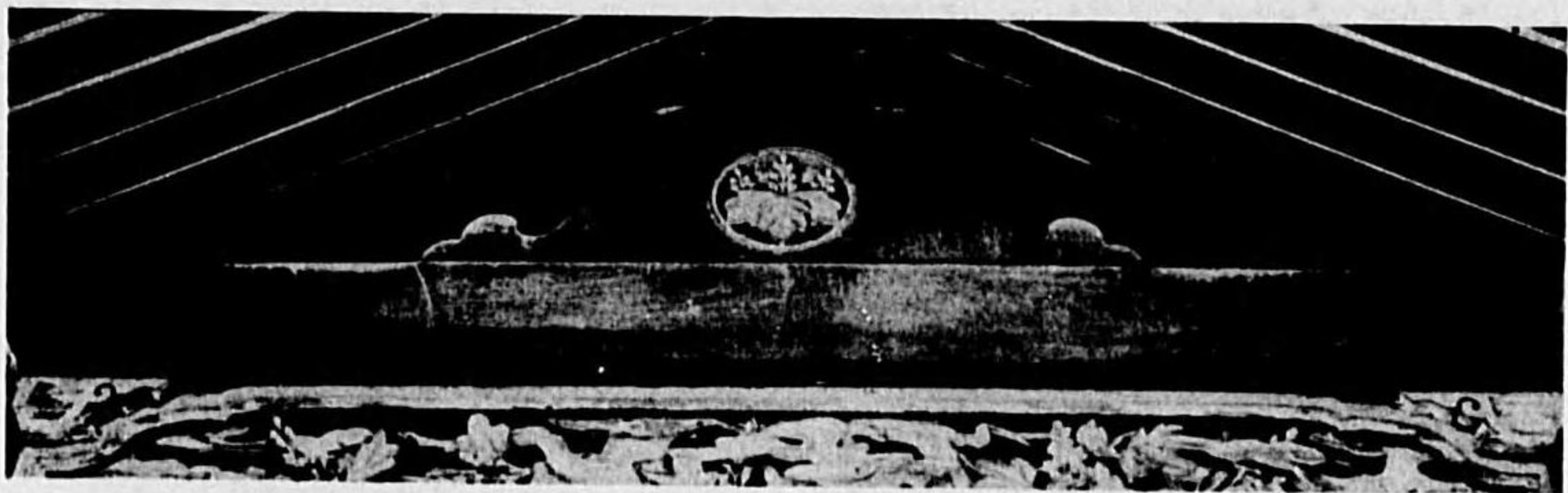
(昭和七年七月十二日)

四六は石清水(イワシミズ)八幡宮幣殿の東端虹梁を主とし、序に臺股を見せたものであるが、さすがに寛永の建築だけあって、この大虹梁はどこからどこまで實によく桃山式を現はしてゐる。殊に袖切のあたり、其渦文の上にそへてある若葉は代表的の手法といつてよろしい。

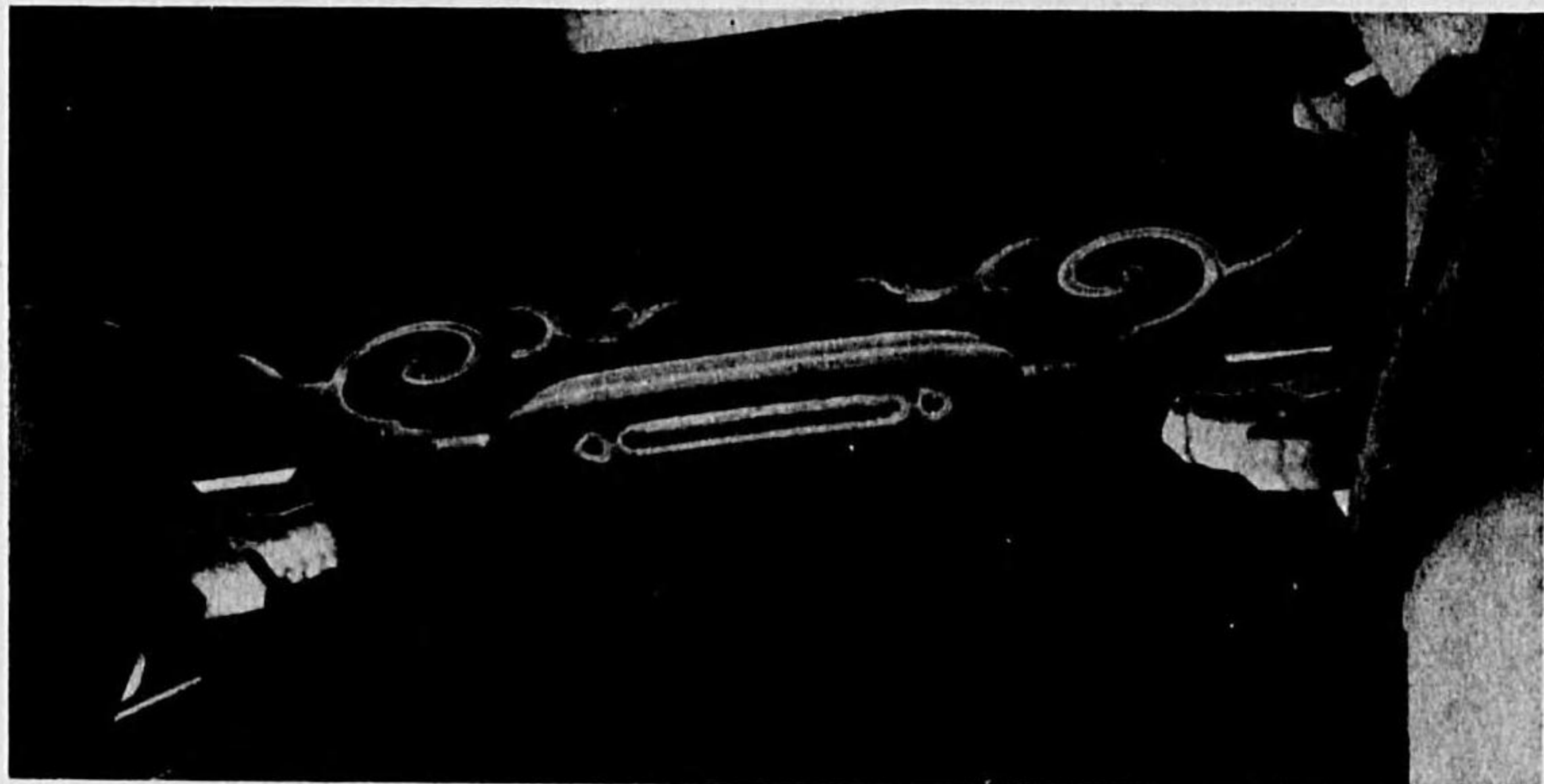
四七はこれに比べると、一見ただけで大分新しいようだといふ感がする筈である。そこへもつて来てこの虹梁を支へてゐる様に見せてゐる料を受けてゐる木鼻の形により、一層其感を深からしむるのであるが、經藏其物には寛文十三年——ほんとうは寛文十三癸丑歲仲夏吉日 住持比丘了廓謹書とかいてある——の棟札があり、輪藏内經卷の奥書にも同じ年號が書いてあり、輪藏も同時とみてよろしい。さうすると前例よりさつと四十年ばかり後れるだけで、其割にはうまくないが、夫は止むを得ないとしておく。

四八はおそろしく遠方迄飛んで行くが、弘前市の最勝院といふ寺にある五重塔は、心柱が初重の天井裏で止まつて居り、初重四柱間に須彌壇を設け、そこを廣くしてあるが、此四柱柱間、正側面の三方に圖の様な虹梁が架渡してある。黒漆塗で、袖切の渦文若葉等は漆箔、木鼻(形はよくないが)又然り、黒と金とで非常に美しい。寛文六年の銘が相輪にあり、塔の落成は同八年といふ。其虹梁の出來榮は同じ寛文でも前例と大差がある。

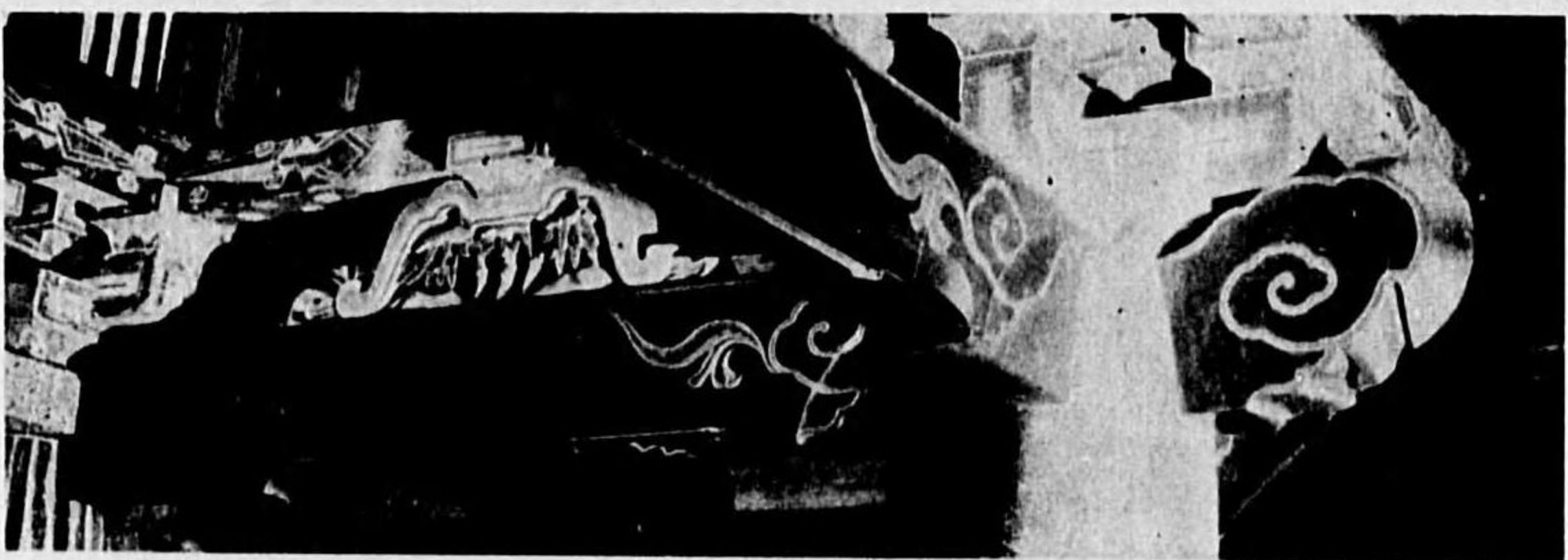
四九はまた京都へ歸つて来て南禪寺三門上層の一例を示す。寛永五年の唐様虹梁で、總て極彩色、柱に挿込まれてゐる邊の金具の様なもの繪である。袖切は直角三角形をなさず、特殊の長方形をなしてゐるが、こんなのは實は鎌倉末からあるので、室町でも相當に用ひられてゐる。序ながら其下の料が天竺様系統である事に注意せよ。



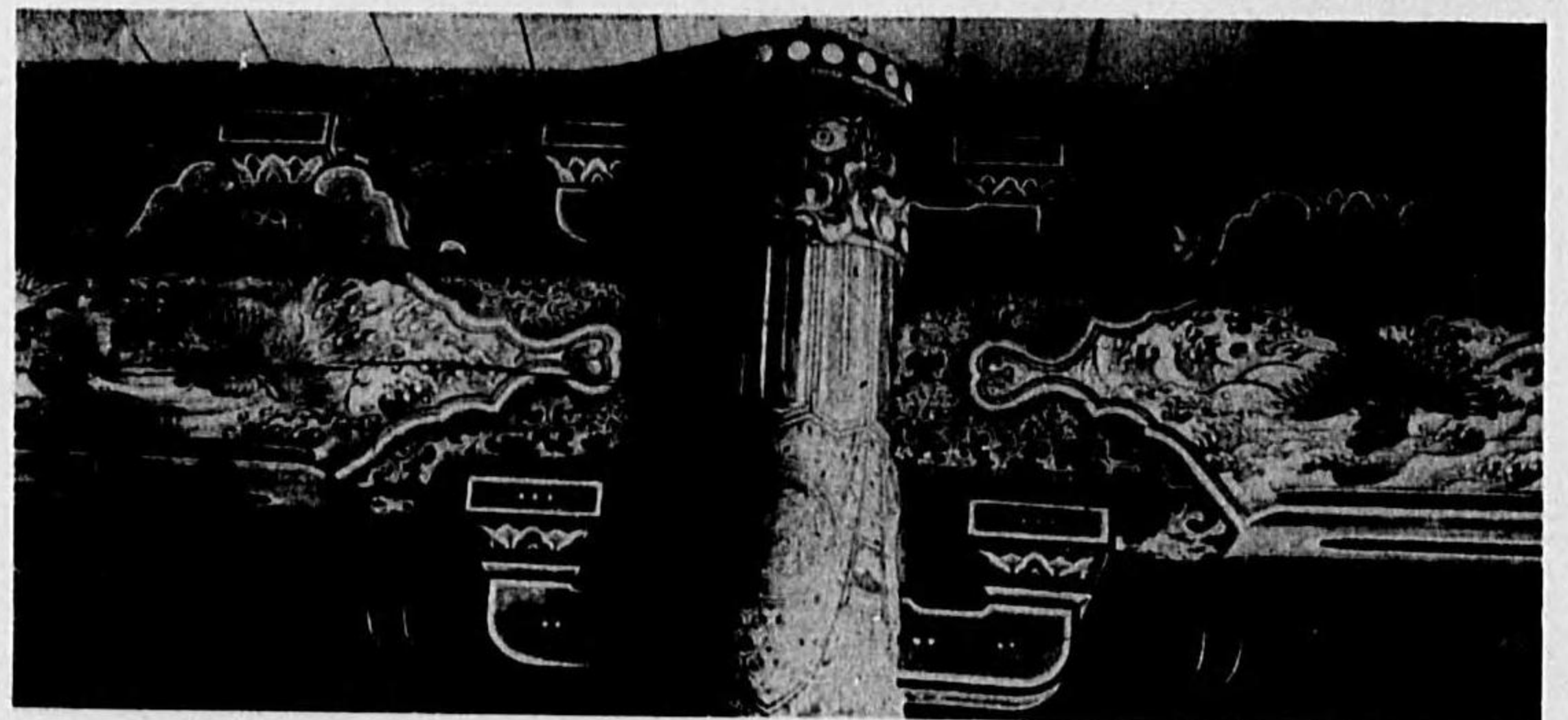
四六



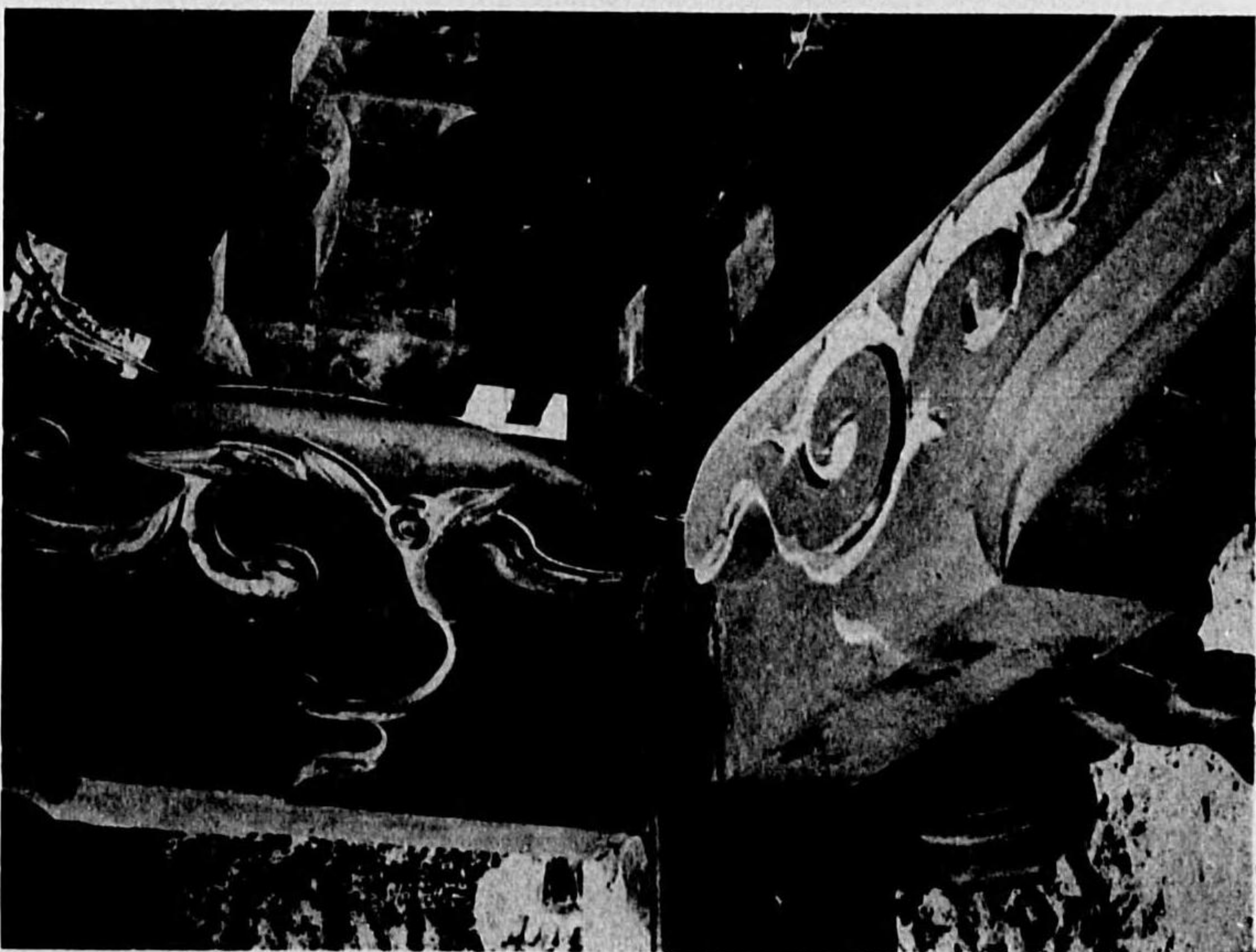
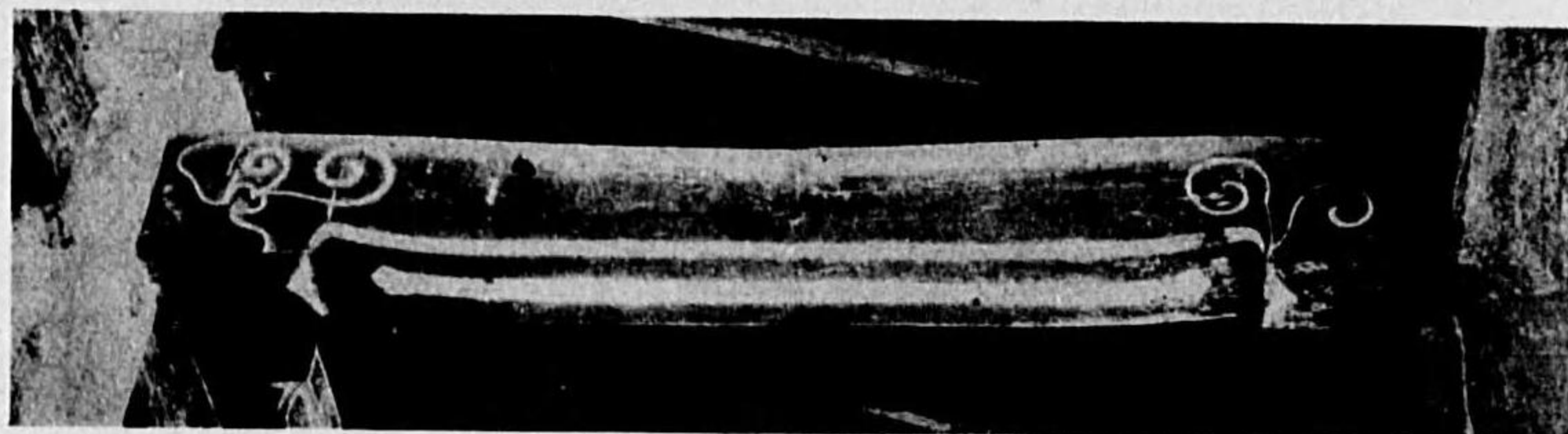
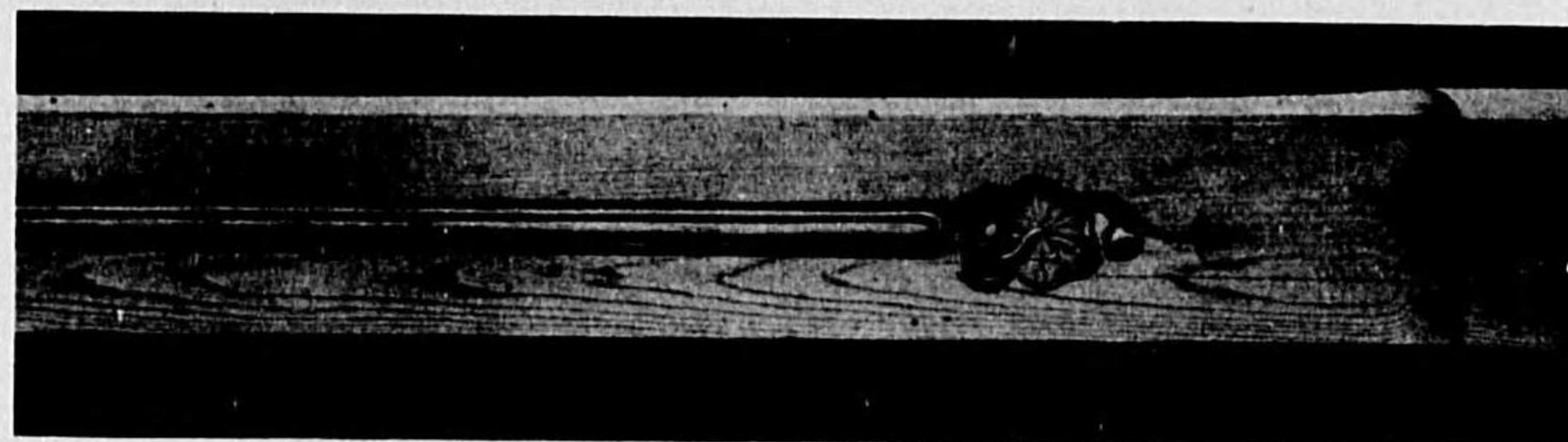
四七



四八



四九



五〇、四天王寺金堂外陳繫虹梁

五一、高野山御影堂向拜虹梁下端一部

五二、慈恩寺本堂椽繫虹梁（山形縣西村山郡醍醐村大字慈恩寺）

五三、釋尊寺觀音堂繫虹梁一部（長野縣北佐久郡川邊村大字大久保）

江戸時代の比較的新しい虹梁のうちへ一つ古いのをに入れて掲げておく。江戸時代といふのは様式からいっただので、調べてみたらば明治のがあるかも知れない。

五〇は文化復興の際、でき上った四天王寺金堂の外陳東南隅の柱から、南方の側柱への繫虹梁であるが、下端の線・大眉・袖切・その部分の繪様・鯖尻の形等、仔細に研究せよ。虹梁の側面が平たく、上下の隅にだけ急に圓味がつけてあるから、桃山式——鎌倉末の唐様式の大してうまくない形——をそっくり受つてゐることが判るであらう。繪様の刻み方が當代特有で輪郭に沿ひては内方へ斜に、渦文のあたりは外側を膨まし、内側を凹ませ、螺頂の球を盛り上らせてある。

五一は下からの見上げで、錫杖彫は簡單で少しも錫杖を聯想せしめないが、其兩端に水と蓮葉と蓮實と蕾とをほつて飾つてゐる。下端の線條文のほりと没交渉にこういふものをほり出したのは室町頃からと思つてゐる。

五二は元和四年最上義俊の再建といふ慈恩寺本堂の椽の繫虹梁で、袖切の形、そこから出てゐる渦文、其反對の方には袖切なく、下端の線上のところから二本の渦巻が出てゐる。全體の形といひ、細部の手法といひ、どうも餘程變つてゐる。この邊の建築を廣く見てゐないから、地方色といへるかどうか判らないが、確かに珍らしい。

五三は、これはまた前例と反對に随分新しい、型に嵌つた平凡極る作品、謂はゆる雛形本そっくり其儘鵜呑みまる寫しの最もだらしのない實例。拙いのを示さないと、うまいのと比較がとれないから出したのである。多く解説をしないで見れば判ると思ふ。序に和様の肘木の上に天笠様系統の料をのせた所をも觀察せよ。

（昭和九年十月二十六日）

（撮影年月日未詳）

（昭和八年八月二日）

（昭和十年五月二十三日）

五四、輪王寺大猷院靈廟拜殿あひの間繫海老虹梁

(昭和二年七月十七日)

五五、日光東照宮五重塔初重外陣繫虹梁

(昭和八年七月二十三日)

五六、福濟寺前堂妻三重虹梁(長崎市)

(昭和十一年八月二十一日)

五七、白山社里宮樓門正面中央間虹梁一部(飯田市上飯田町)

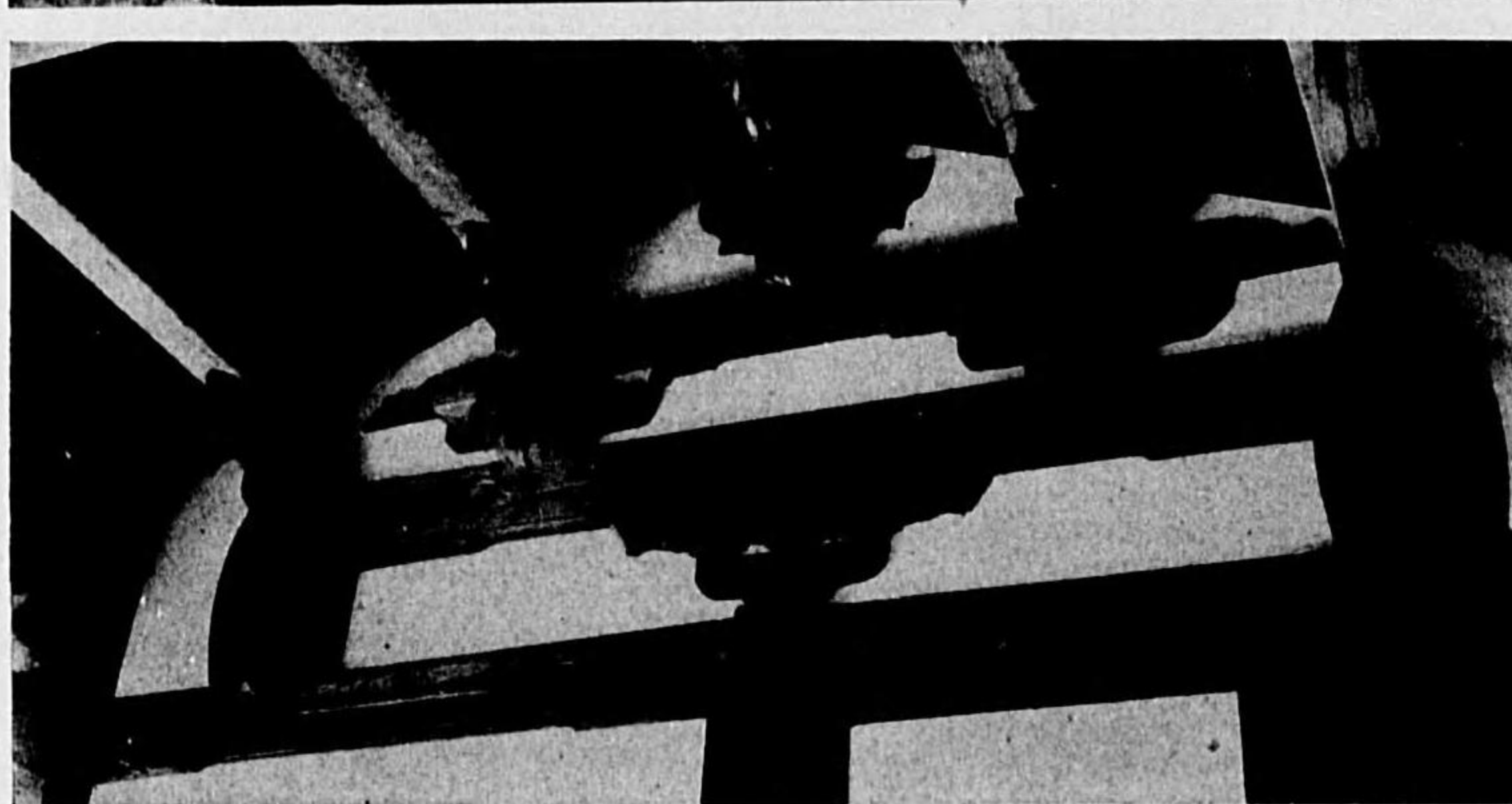
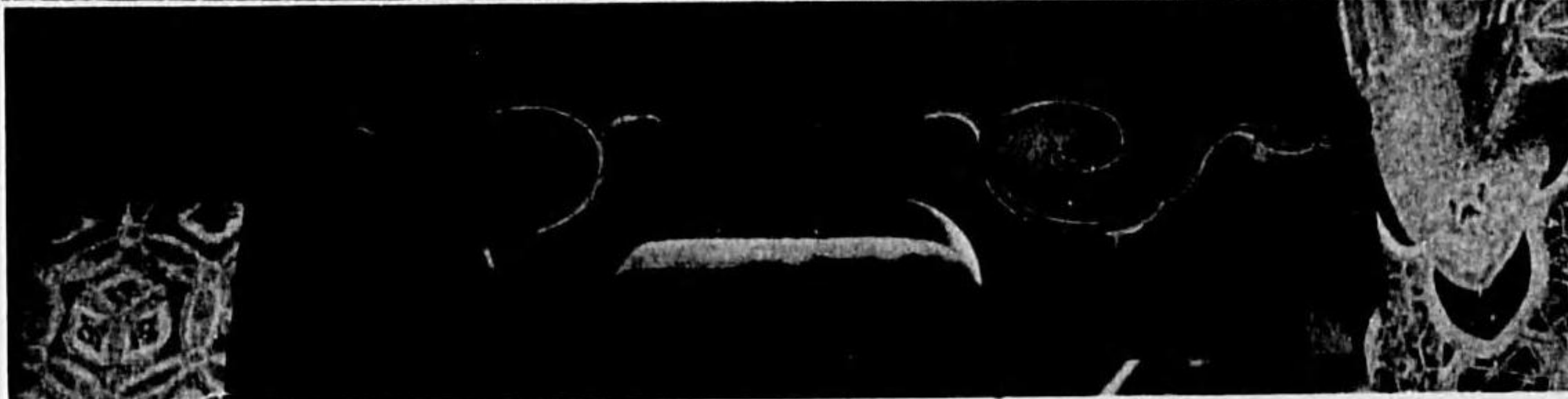
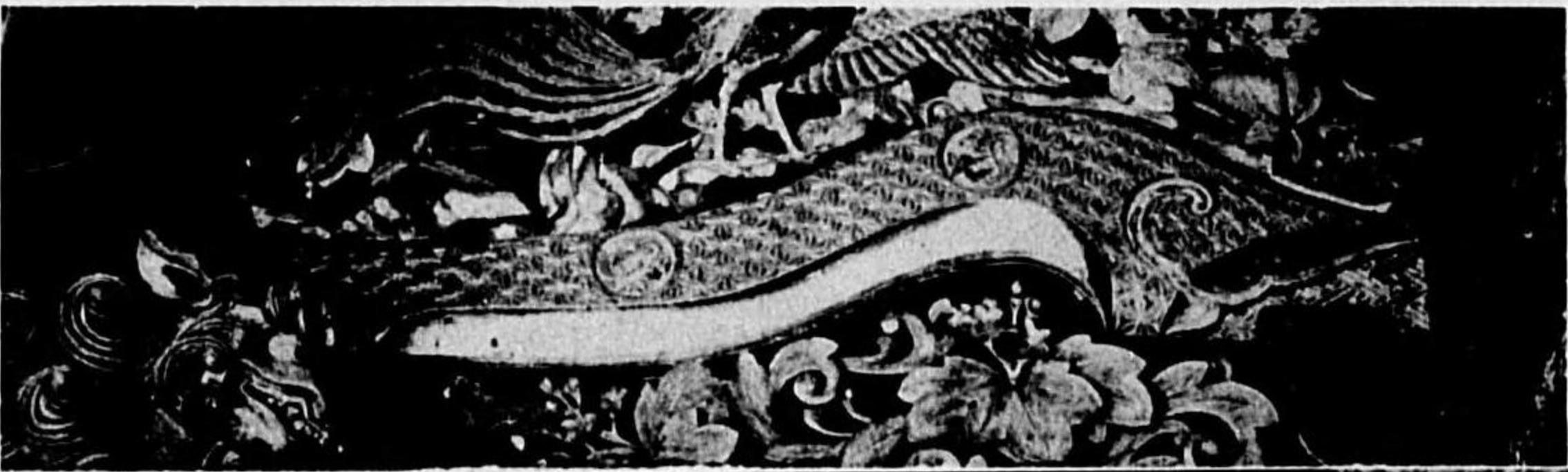
(昭和十年五月十三日)

形は拙いが手が込んで金がかかってゐる點に於いて第一等と思はれる海老虹梁の一例を五四に掲げておく。大猷院靈廟の拜殿の椽を、ぐるりと廻つて後ろ側へ行くと、あひの間との取つきの所に、この様な海老虹梁が用ひてある。形は拙いが裝飾はたつぷりである。見たところ深海の怪魚が餌に食ひついてゐる様な形で、變挺である。もう少し何とか形の方が見られる様にできなかつたものか。併し其裝飾はとても立派で、大きな肩、先づ怪魚の腹のところは無地、弓肩亦然り、袖切には菱形卍崩つなぎ、首から背にかけて麻の葉を一面にほり、其麻の葉の中に圓文が二つ、さうして此圓文は二つ共鳳凰がほつてある。

五五も虹梁としては變り種で、四一↓四五↓五五といふ風に考へられる。薄暗いのではつきり見えないが、鯖尻に當るところに茨ができてゐるからである。何とかもう少し形も考へられさうなもの。江戸末の化政時代としても、これでは聊心細い。

五六は純日本式でない「三重虹梁大瓶束」ともいふべき特殊のもので、其大瓶束や持送りの如き、獨特の形式ではあるが、其虹梁は四本共先づ日本式と見てよろしい。もう少し何とか虹梁を考へたら、もっと非常に面白くなつたであらう。

五七は袖切のところの渦文や若葉が極端に發達——換言すれば墮落——したところの一例で、袖切の曲線兼弓肩は浪(水流)となり、渦文兼若葉は菊化し、水流は此菊に沿ひて虹梁の側面に及び、完全に「菊水」をなしてゐる。「楓樹に水」の例もある。此樓門は文政十一年四月の再建といふ。江戸末の一標本。

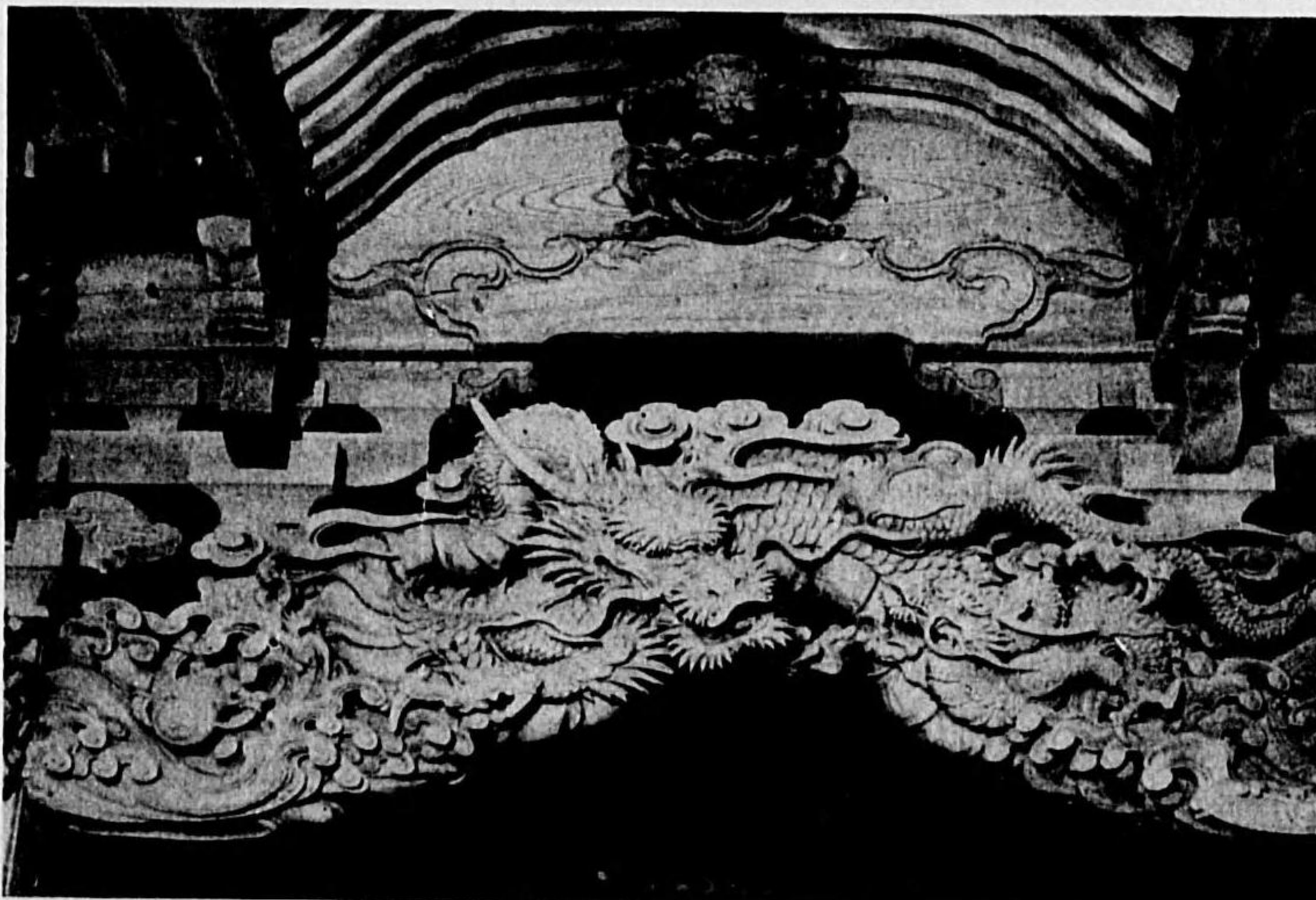
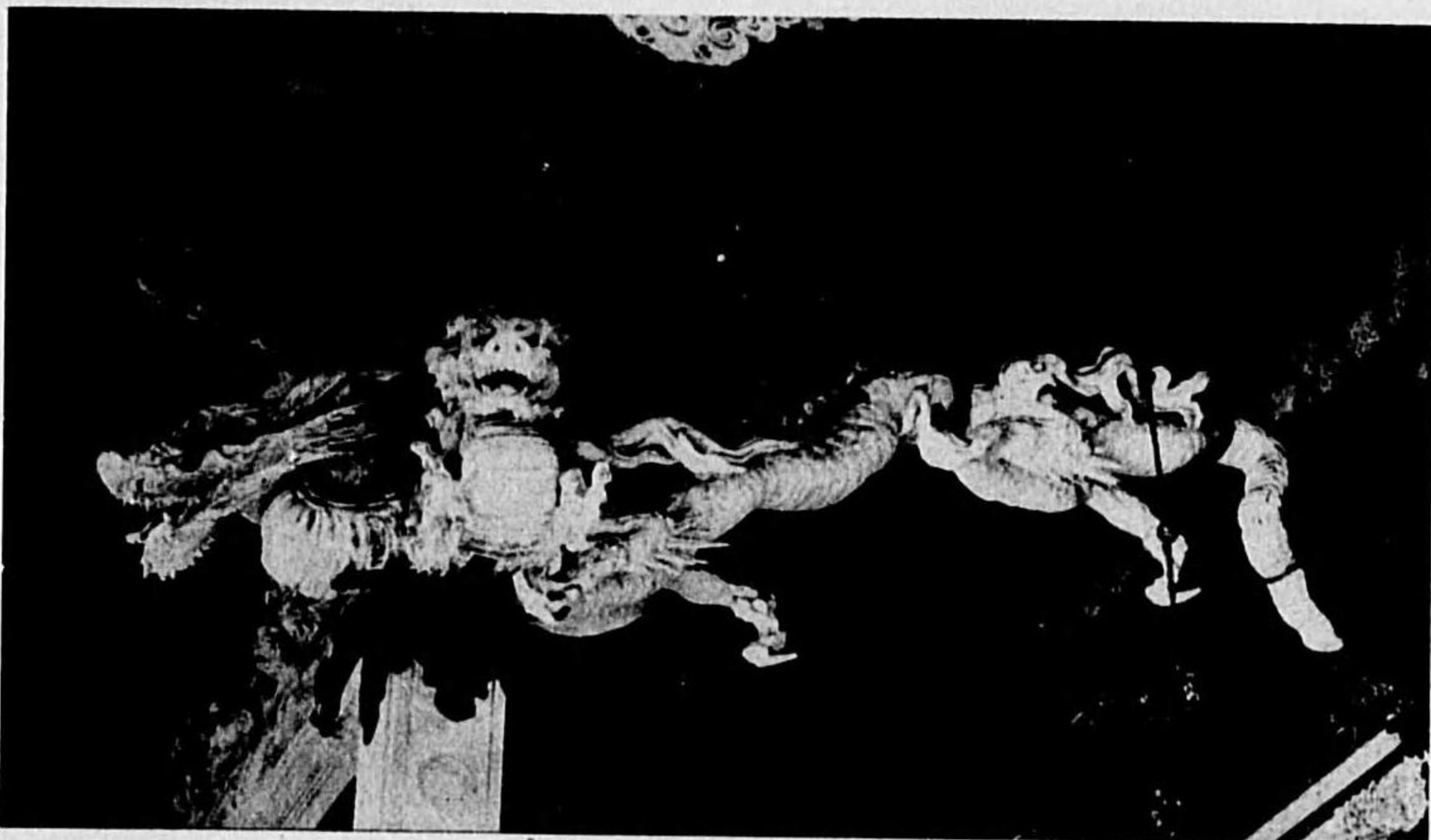


五四

五五

五六

五七



五八、日光東照宮拜殿向拜繫虹梁

五九、高鳥谷(タカズヤ)神社本殿向拜虹梁(長野縣上伊那郡伊那村)

六〇、同 繫虹梁(長野縣上伊那郡伊那村)

最後に龍化した虹梁三種を掲げておく。龍化するのは木鼻と臺股位と考へてゐたところ、虹梁も亦さうである事が判つた。勿論他にもあらうが、信州でよくみた。

五八は向拜と本殿との繫虹梁が龍化したのである。向拜柱から前の方の頭と、後の方の胴體とは、途中でついであるのは言ふ迄もないが、下から見たのではさうは見えない。而も胴體は本殿の料枳間から抜け出したところを見せたつもりが、繫にはならないで、空中にブラ下つた如くにしてある。さうするためにはただでは駄目だから、帯がねで上から吊つてある。夫で此龍は辛ふじて龍たるの資格と威嚴とを保つてゐるのである。氣の毒なことである。夫でも考へたと見えて、「手挾」は雲化さしてある。これで龍が雲を起して天上するつもりにしたのであらうが、雲が龍の頭の上にあるのが少しばかり氣になる。少し胴にもかかつてゐれば尙更よかつたらう。

五九・六〇は共に高鳥谷神社本殿のであるが、私は先年其寫眞を入手しただけで、神社へ參拜をしてゐないから、實物を見てゐない。見ないでの記載は危険が伴うが、大概よからう。正面の方はやはり四一の特大型虹梁を龍化したので、水と雲とが添えてある。其龍は二頭ゐて一は中央に右を向き、又寶珠をもつてゐて、龍たるの資格を完全に備へて居り、他は其直ぐ右の方に左を向いてゐる。前者は口を開き後者は閉ぢてゐるから、これも亦阿吽といふのだらう。側面のは虹梁には違ひないが、この方は海老虹梁が龍化したので、海老としては極端の進化であらう。きく所によると信州諏訪かどこかに和四郎といふ大工がゐて、諸國を修業して歩き、歸國して幾多の社寺建築を残したが、彼の作品には必ず龍の虹梁があつたと。日光や江戸の徳川家廟建築あたりの影響があつたのかも知れない。

(大正十五年七月十七日)

(家藏寫眞複寫)

(家藏寫眞複寫)

虹梁一覽表

飛鳥時代………無裝飾。僅に上方に反つてゐるだけ、直角の断面は逆梯形。	奈良時代 前期………稍や弧状をなし、鯖尻のあたりに圓味を帯びてゐる。断面同上。 後期………鯖尻の圓味著明。四方に面取のものがある。兩端の上は水平。断面同上。全體に極彩色を施した美麗なものもある。	平安時代 前期………前代の繼承。 後期………繫虹梁には下端兩角又は四方に面取のものあり、断面多く形は長方だが大虹梁は然らず。背高く断面に於いては兩側稍や外に膨れた様なものもあつた。又極彩色のものもあつた。	鎌倉時代 和様………同上。化粧に火打梁として虹梁を用ひたものもある。 天竺様………断面圓形に近きもの(下端のみ少し平たい)や長方形の撫角のものがあつた。下端には「錫杖彫」、「袖切」及び「眉」をとる。 唐様………断面は兩側に幾分膨らむ。「錫杖彫」、「袖切」、「眉」。火打梁として用ふる事がある。又「海老虹梁」がある。	室町時代………前代の繼承。錫杖彫の發達。大彎曲をしたものもあつた。	桃山・江戸時代………「袖切」従つて其部の若葉、「眉」の發達。「唐破風形」虹梁の出現。袖切の代りに獏頭を用ひたもの、又全體を龍化したものもできた。
------------------------------------	---	--	--	-----------------------------------	--

束
間料束
蓑束
大瓶束

一、法隆寺西院廻廊束

(飛鳥園)

四 法隆寺講堂外側間料束(修理前)

(昭和八年五月十三日)

二、唐招提寺金堂間料束

(昭和十四年八月二十一日)

五 醍醐寺經藏間料束(焼失)

(昭和五年十二月二十四日)

三、醍醐寺藥師堂間料束

(昭和三年十一月二十四日)

主として裝飾に用ひられてゐる料栱間のもの、及び虹梁上の大瓶束等に就いてのみ記載する。椽束も亦裝飾を兼ねてはゐるが、あれは柱と同じと見られるから、此所には記さない。

飛鳥時代

普通の間料束、即ち四角な棒の上に料をのせたものが、時に料栱間に用ひられた。實例は法隆寺中門下層にある。束は同じく法隆寺金堂内部内陣小壁と西院廻廊とにある。單なる四角な棒で、別に取りたてて記す程の事はない。金堂の方は柱間に一本の割だが、廻廊の方は圖の様に柱間に二本入れてある點に注意せよ(一)。

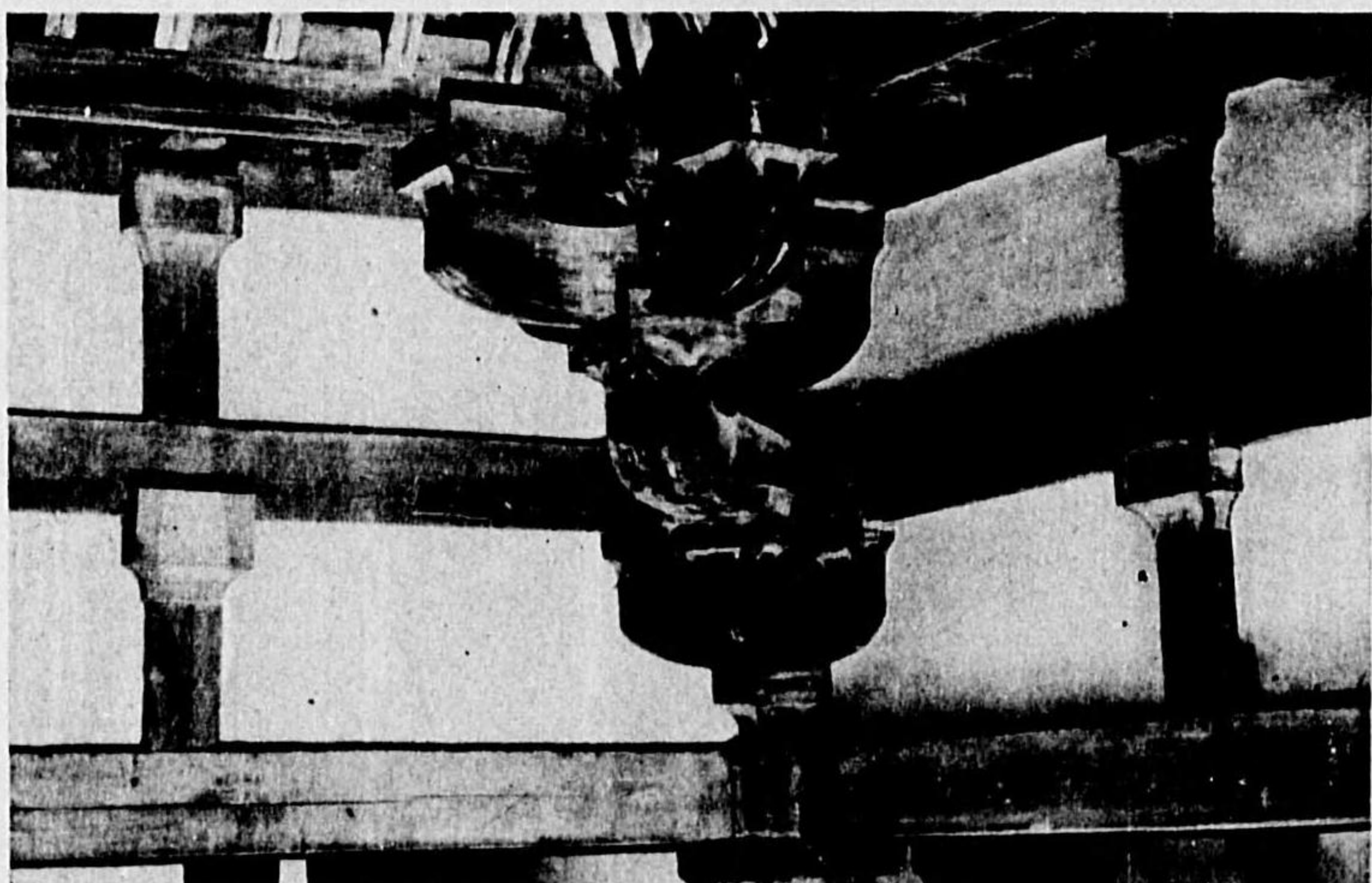
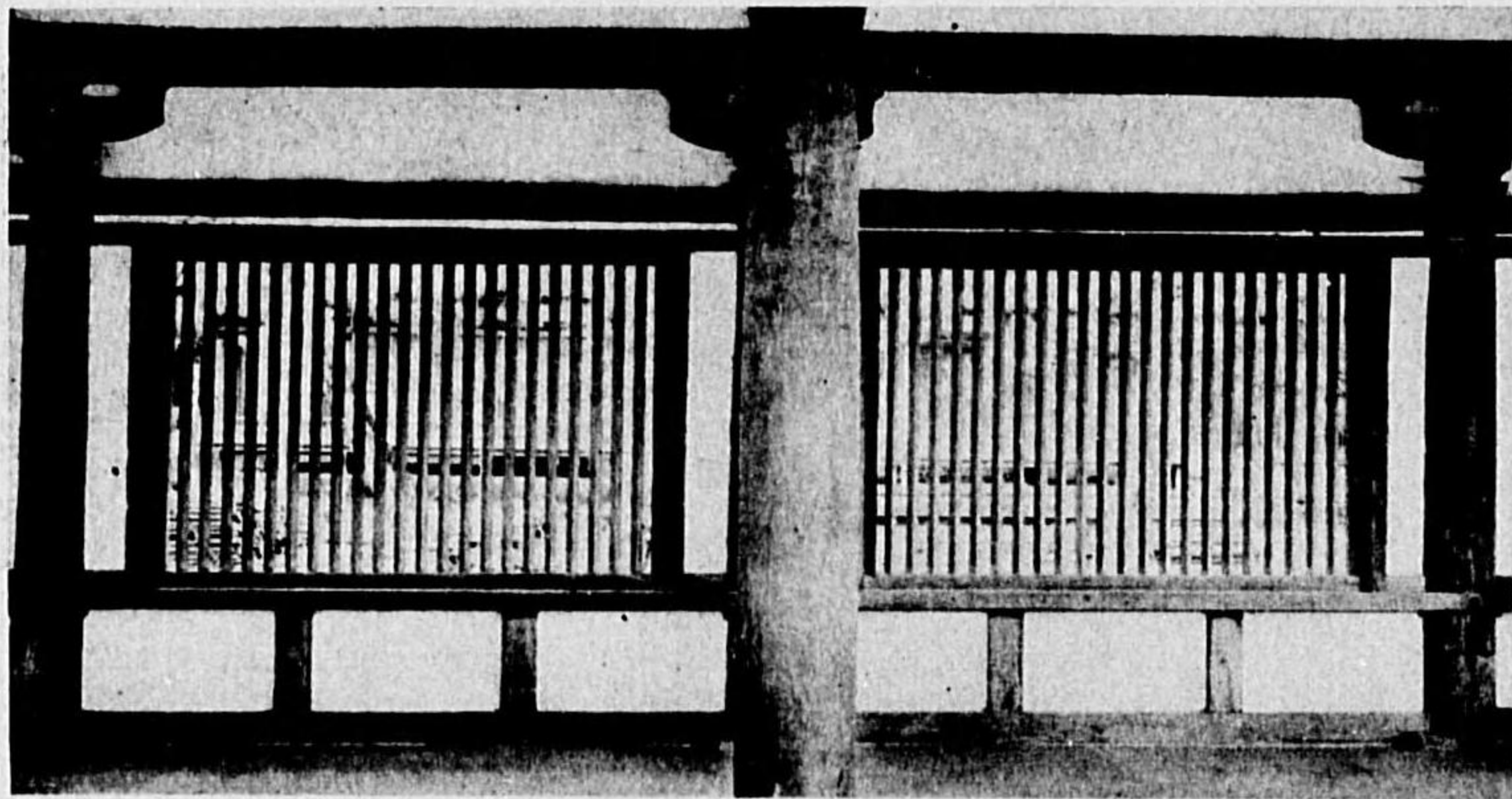
奈良時代

間料束のみで料栱間に一本の割。形式前代に同じく實例も珍らしくない(二)。

平安時代

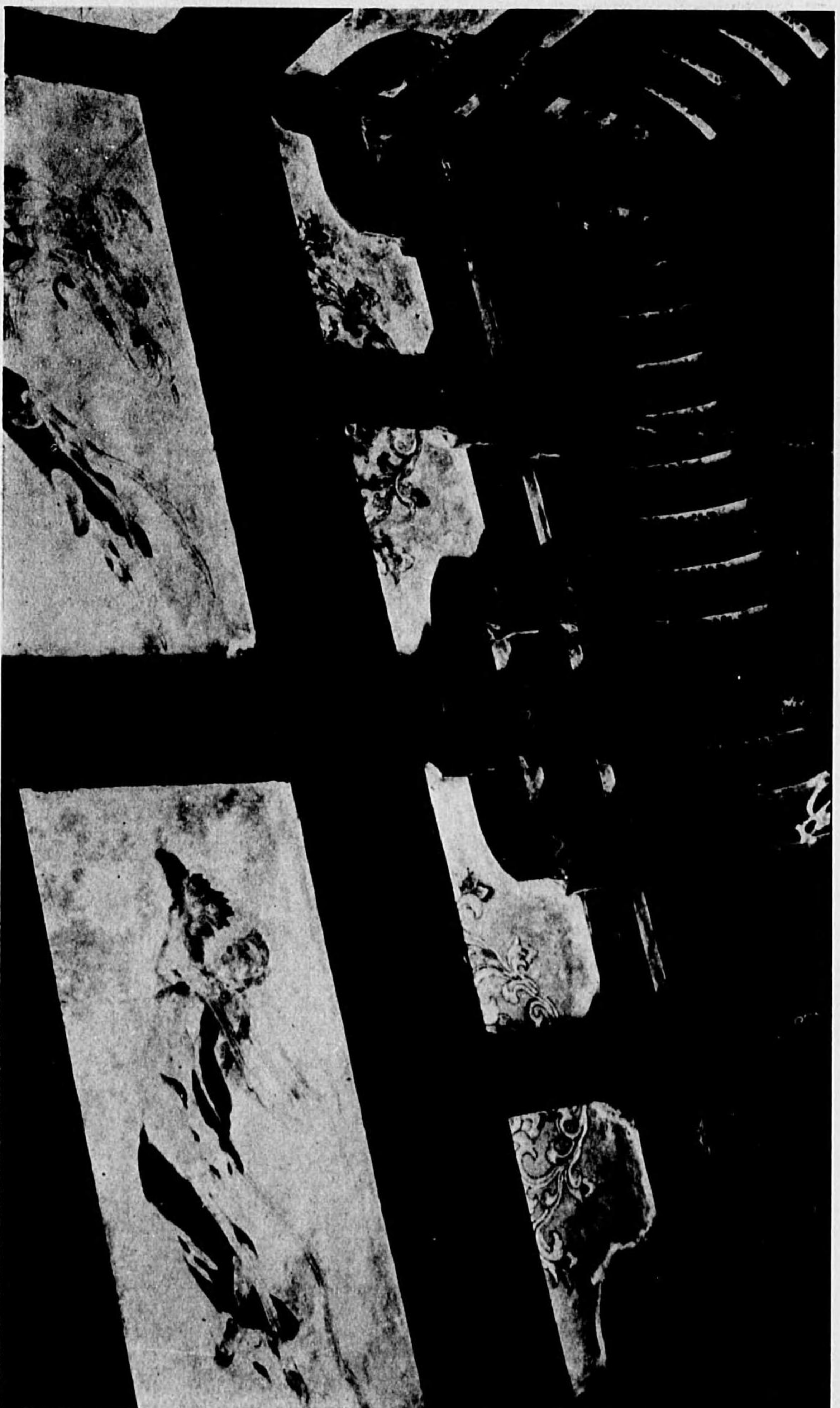
前期の建築たる室生寺金堂にも五重塔にもないから、形式は勿論、有無さへ確證をあげ得ないが、前代にも後期にもあるのだから、あつたと見る方が穩當である。後期の例は三と四とに出しておいた。次頁の六も亦然り。

三は普通の間料束であるが、四は少しく形が異なり、下が開いてゐる。併しよくみると夫は後の例の如く、下の方を初めから廣くしたのではなく、後に兩方に背の高い三角の木を打ちつけて、開いてゐる様に見せたのである。此堂は今既に修理落成してこの木もとつて了ひ、眞直な束にしてあるが、これが當初の形である。間料束の下方を幾分廣くして梯形又は撥形にするのは、鎌倉以降のことで、平安時代には未だその様な手法はなかつた。



四・川

五



六

六、法界寺阿彌陀堂内陣間料東 (飛鳥圖)

法界寺阿彌陀の建築年代は、近頃文獻が見出された結果、平安後期ではなくて、鎌倉時代になつたとか傳聞してゐるが、つい未だはつきりいつか知らないし、たとひ鎌倉にできたとしても、巻料のせいが少し低い位の事であらゆる點に於いて細部は平安式だから、ここには従前通り、様式上平安のものとしておく。

扱て其内陣の間料東は、此寫真に見る様に、東其物に變りはないが、東の兩方に唐草文様(寶相花?)を描いてある事圖の如く、全體としては臺段といつた様な形をしてゐる。これは甚だ面白いで、これより以前の遺物は見出されないのみならず、以後のものでは奈良市興福寺北圓堂内陣の間料東の兩方に、やはりこれに似た様な文様が、もつと美しくかいてあるのは、恐らくこんなところから暗示を得たのかも知れない。夫が望町になつとすつと末になるが八・九に示した様な彫刻になつてくる。繪畫から彫刻に進化したと考へられる。さうして便化進になつたのが、桃山になると若葉となり、その邊で終りを告げてゐる様である。何れにしても餘り類例のない取扱である。

七、東大寺法華堂禮堂内部間料束

(飛鳥園)

(昭和四年十一月二日)

八、油日神社樓門上層正面間料束

九、油日神社樓門上層背面間料束

(昭和四年十一月二日)

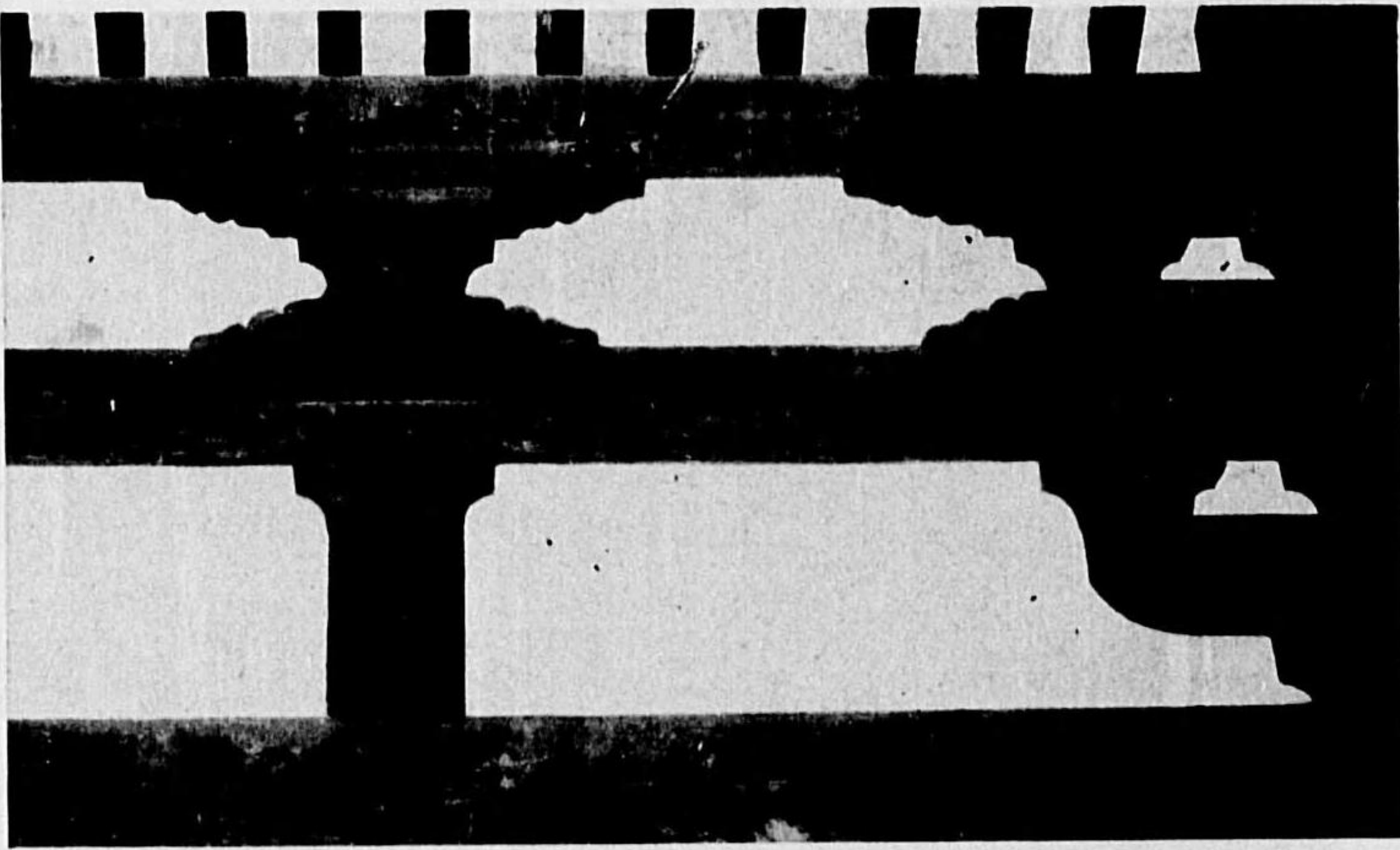
和様建築には前代と同様、四角な棒の間料束が用ひられたが、料の背が低くなったので、外觀は少し異なつて見えなくもない(七)。他に下が少し廣くなつた梯形のもの、及び兩側が内側に膨んだ謂ゆる撥形のものもできてきた。だからつまり三種あつた。尙ほまた束の上のところに飾をつけた「蓑束」と呼ぶものもできてきた。だからつまり四種類あつたのである。其外には稀に飛鳥時代の様に、單に四角な束を裝飾に用ひたのもあつた(室生寺灌頂堂の例)。

天竺様の束は、僅に醍醐寺經藏に一例があつただけで、而もそれは果して天竺様なのか、或は和様のを應用したのか判然しないが、とにかく四角な棒の上に、天竺様の料をのせたものであつた(五)。この大切な唯一の實例も、先年の山火事で焼けて了ひ、元がなくなつたので研究——しても恐らく判るまいが——する事もできなくなつた。

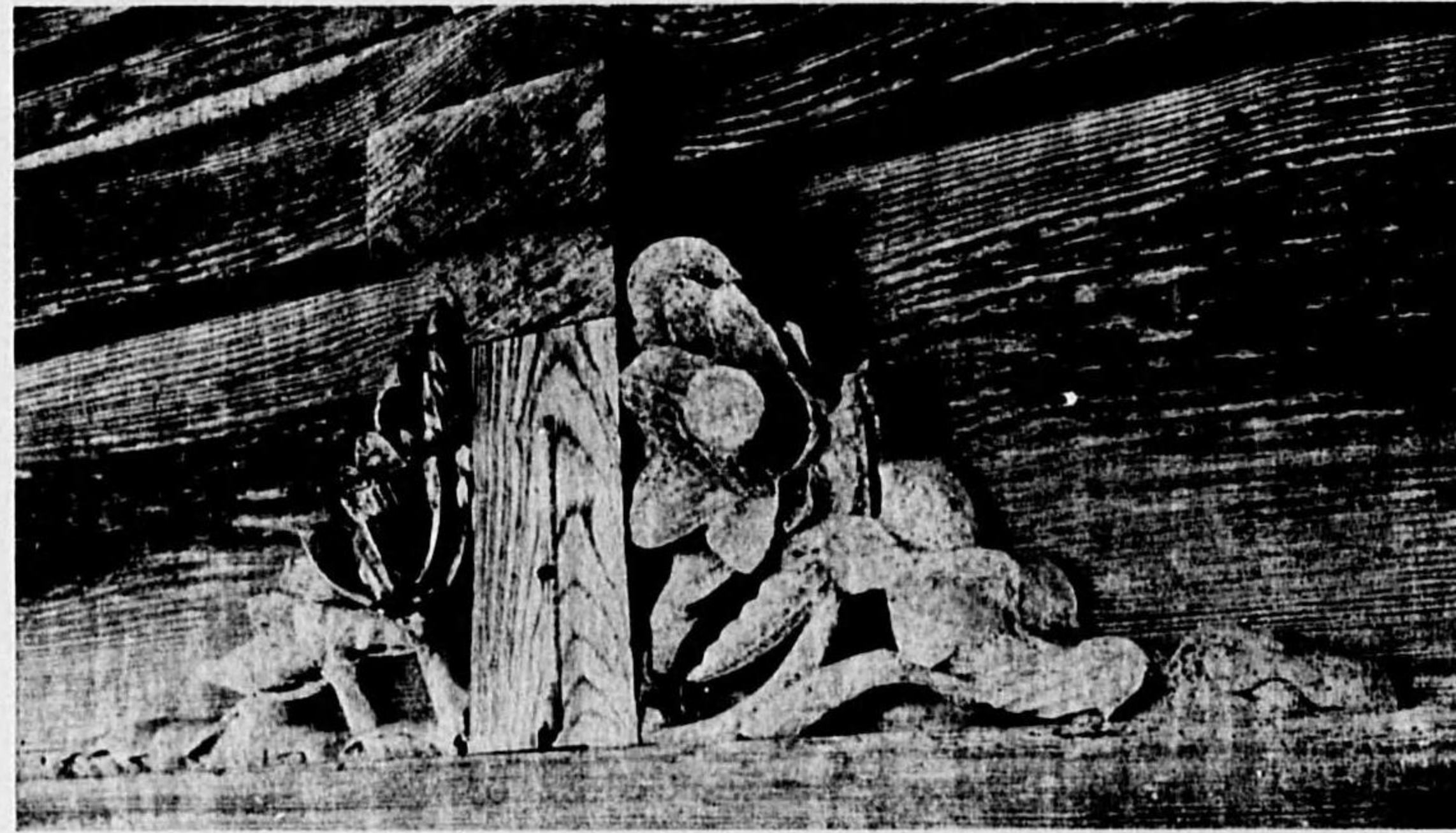
唐様では詰組といつて、柱上と同じ料枘を柱間にも用ふるから、間料束を入れる餘地がない。従て唐様には間料束がない。但し後様式が打破されてからは此限りではない。

室町時代

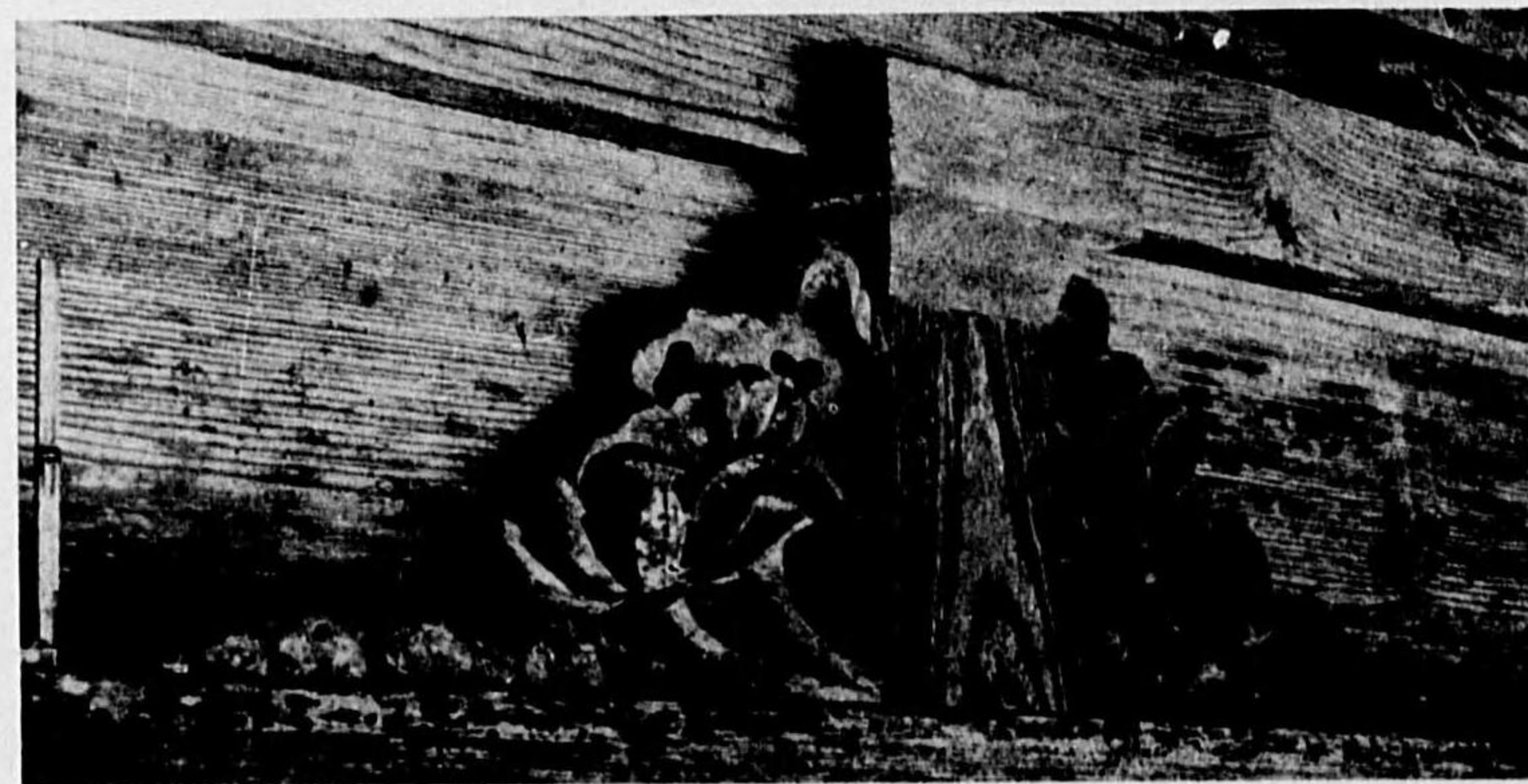
前代にあつた間料束は勿論當代にもあつたが、先づ最初に珍例を掲げておく。滋賀縣甲賀郡油日村油日に油日神社といふがあり、樓門は本殿より少し後れて永祿九年の建造であるが、其上層正背面中の間の間料束は、其兩方に便化した蓮唐草の彫刻をつけてある。蓮ではないかも知れないが、間料束の兩方に唐草の壁畫をかいたのは、既に法界寺阿彌陀堂内陣に實例があつたので、同じ様でもう少し叮嚀且つ複雑化した蓮模様が、奈良市興福寺北圓堂内陣にある。室町の實例としては繪はないようだが、夫が進化して彫刻となつたので、其まま桃山に傳へてゐる。仙臺市所在の藥師堂及び大崎八幡神社に好例があり、後者の背面には二一の様な簡単な唐草をつけたものもある。



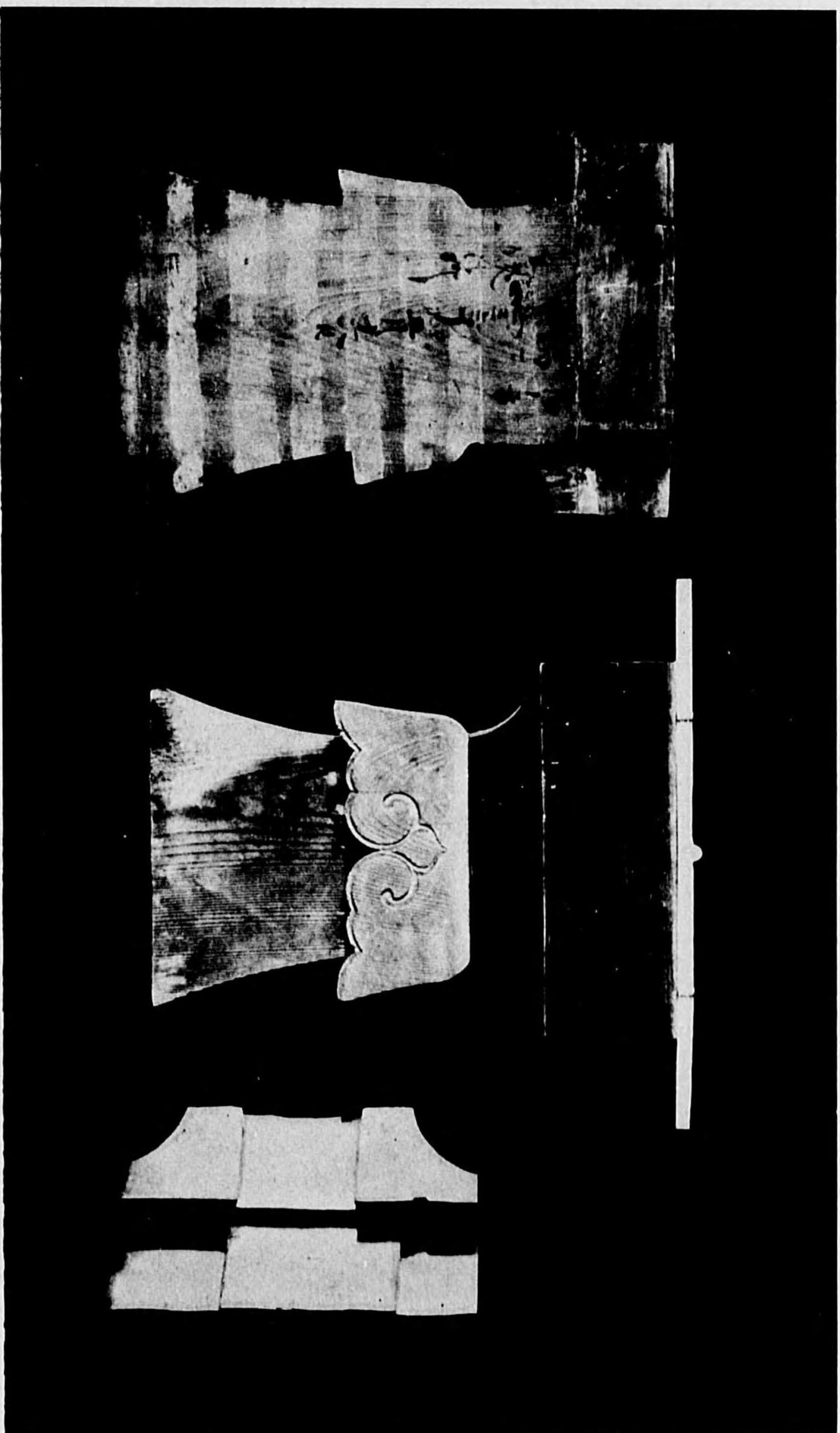
七



八



九



10

10、北室院本堂間科東 其一 (昭和七年三月三十一日)

北室院は法隆寺境内、東院傳法堂の裏、中宮寺正門への道を隔てて北側に南面して建つ。此建築は純和様で料
 栱間は何れも撥形の龔東であるが、背面を除いて何れも
 珍らしい意匠がしてあること、次頁の六圖に示すが如く
 である。背面のここに掲げた様に、裏のせいか甚だ簡
 単であるけれども、其うち中の間と西の間とは裏面に墨
 書がある。曰く

小ノ方

西マ

明應三年甲五月十二日

實儀法師

と。中の間はただ字配が少し異なるだけで、「西マ」
 の代りに「中ノマ」とあるのと、年月日と名が三行に書い
 てあるだけの差である。人名は上から二つ目の字がはっ
 きりしないが、どうも「儀」としかよめないから、多分實
 儀であらう。右端の圖で明らかに通じ、此東上の半料を
 東にとりつけるためにも、其上の部分も、すべてアリに
 してあるから、一度嵌め込んだらぬけてとれる心配はな
 い。つまり周到の注意を以て仕事がしてある。中圖科上
 に平たくおいてあるのは曲尺の約二尺二呎の物差。

一一 北室院本堂間科束 共二 (昭和十五年十一月一日)
 一二 同 共三 (昭和十五年十一月一日)
 一三 同 共四 (昭和十五年十一月一日)
 一四 北室院本堂間科束 共五 (昭和十五年十一月一日)
 一五 同 共六 (昭和十五年十一月一日)
 一六 同 共七 (昭和十五年十一月一日)

初めから順序をたてて寫せばよかつたが、實は左様な考へもなく大概似たものを並べたつもりで、扱て出来てみたらこの様になつてしまつた。中右と下右と入れかへればよかつたと、あとから思つたけれども、今更止むを得ないから、これでごまかしておく。

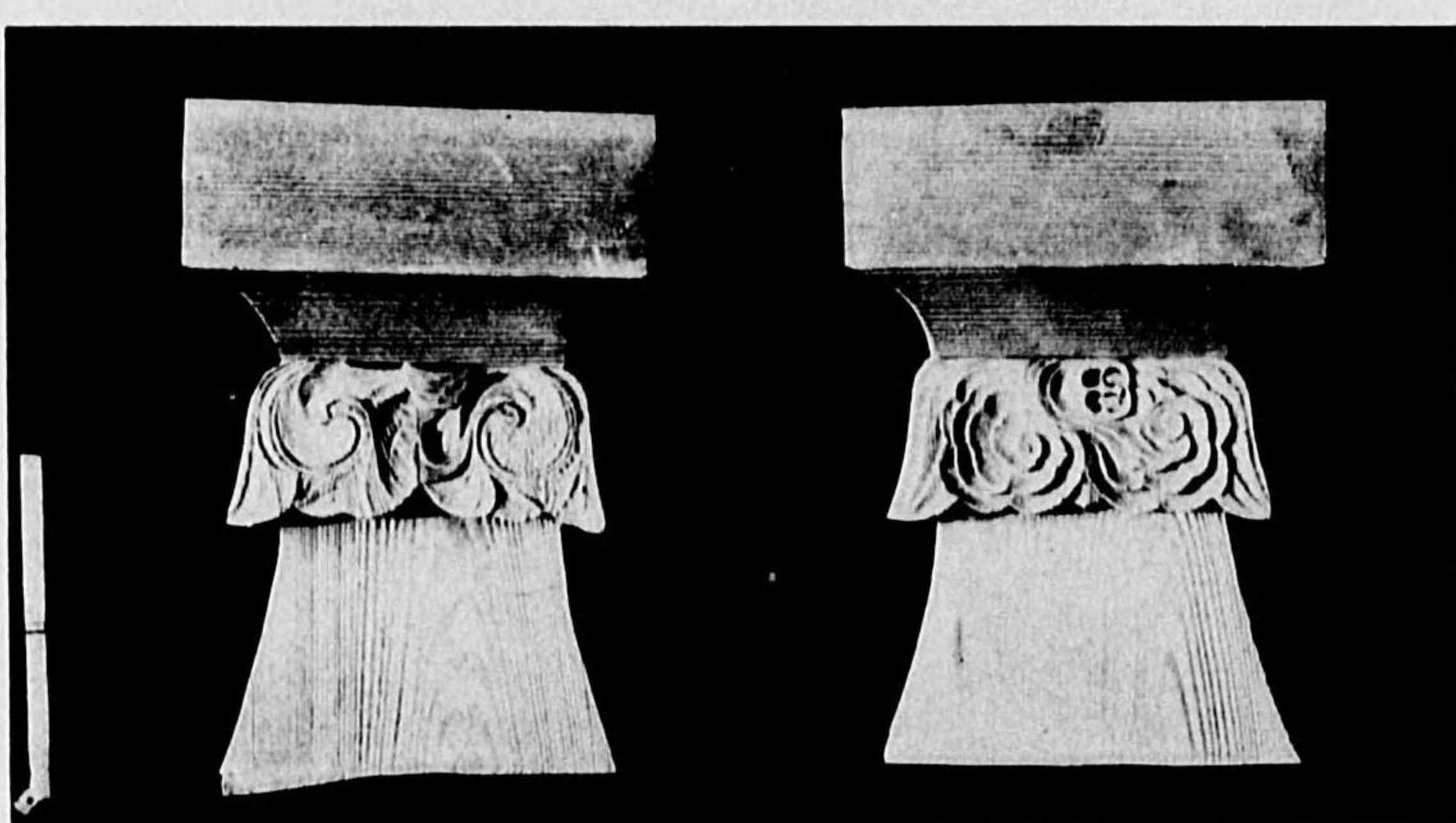
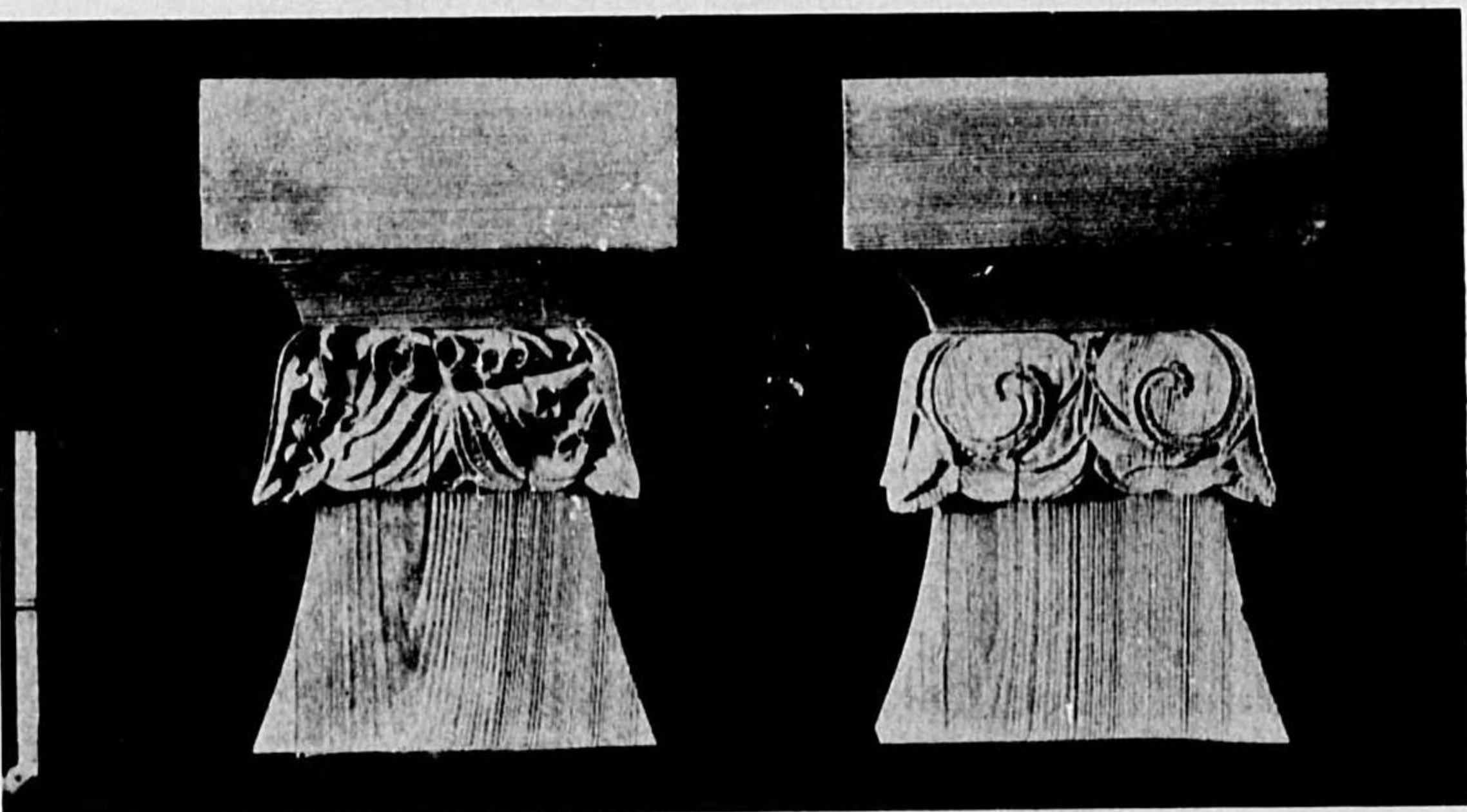
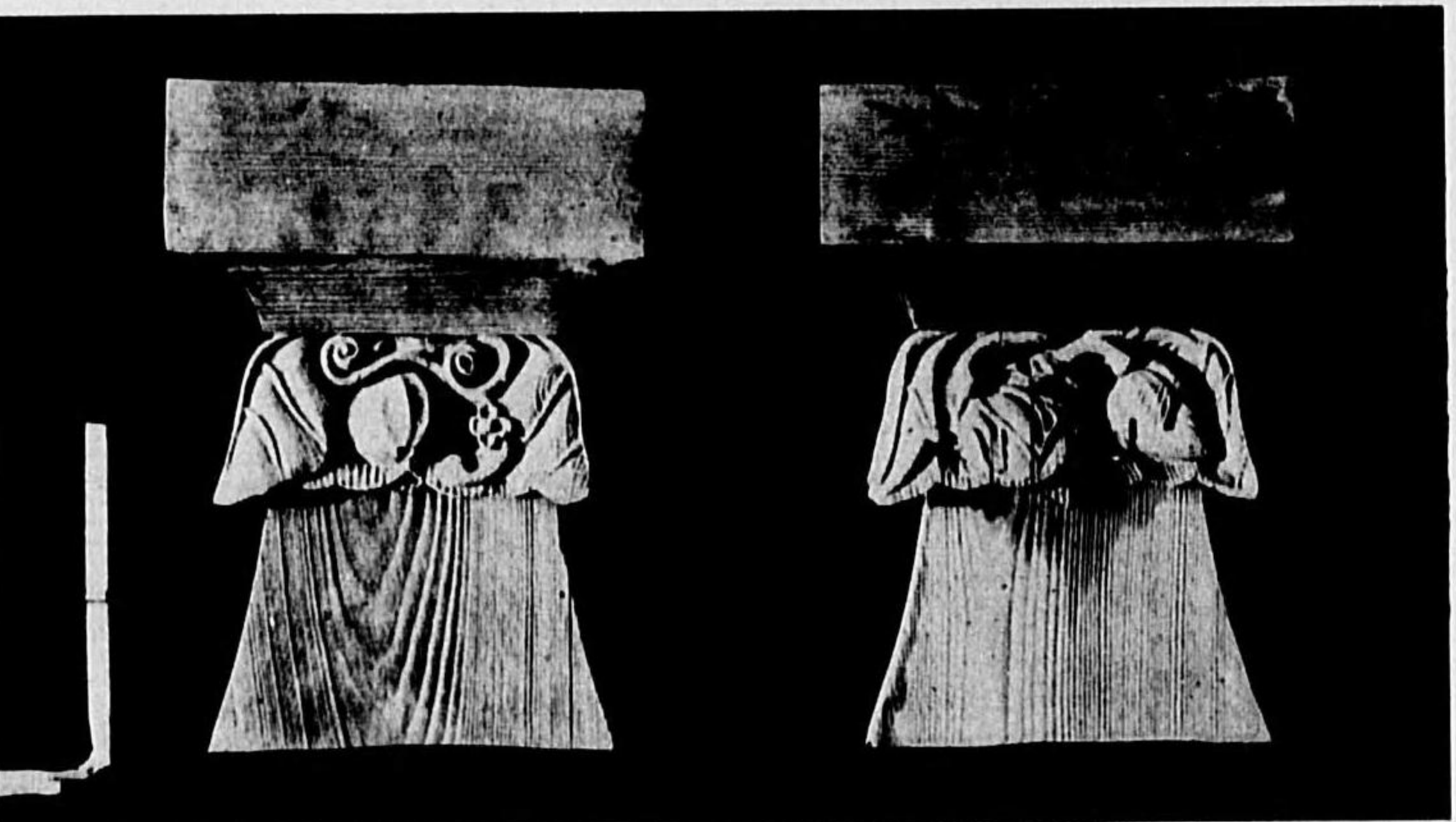
一一は瓜の花と實と葉と蔓、つまり瓜唐草である。グズベリの様な、近頃流行の電燈の笠型をつくりの瓜を中心飾とし、イオニア式柱頭の様に、但しひっくり返つた渦文を呈した蔓を其左右に配し、左右の肩に葉をかぶせ、左右相稱にしてただ僅に右方に四瓣の花と蔓の一部分を刻してゐる所、中中うまくできてゐる。室町時代の瓜としては、山口市八阪神社本殿臺股内のと共に貴重な實例である。此は正面向つて右端のもの。

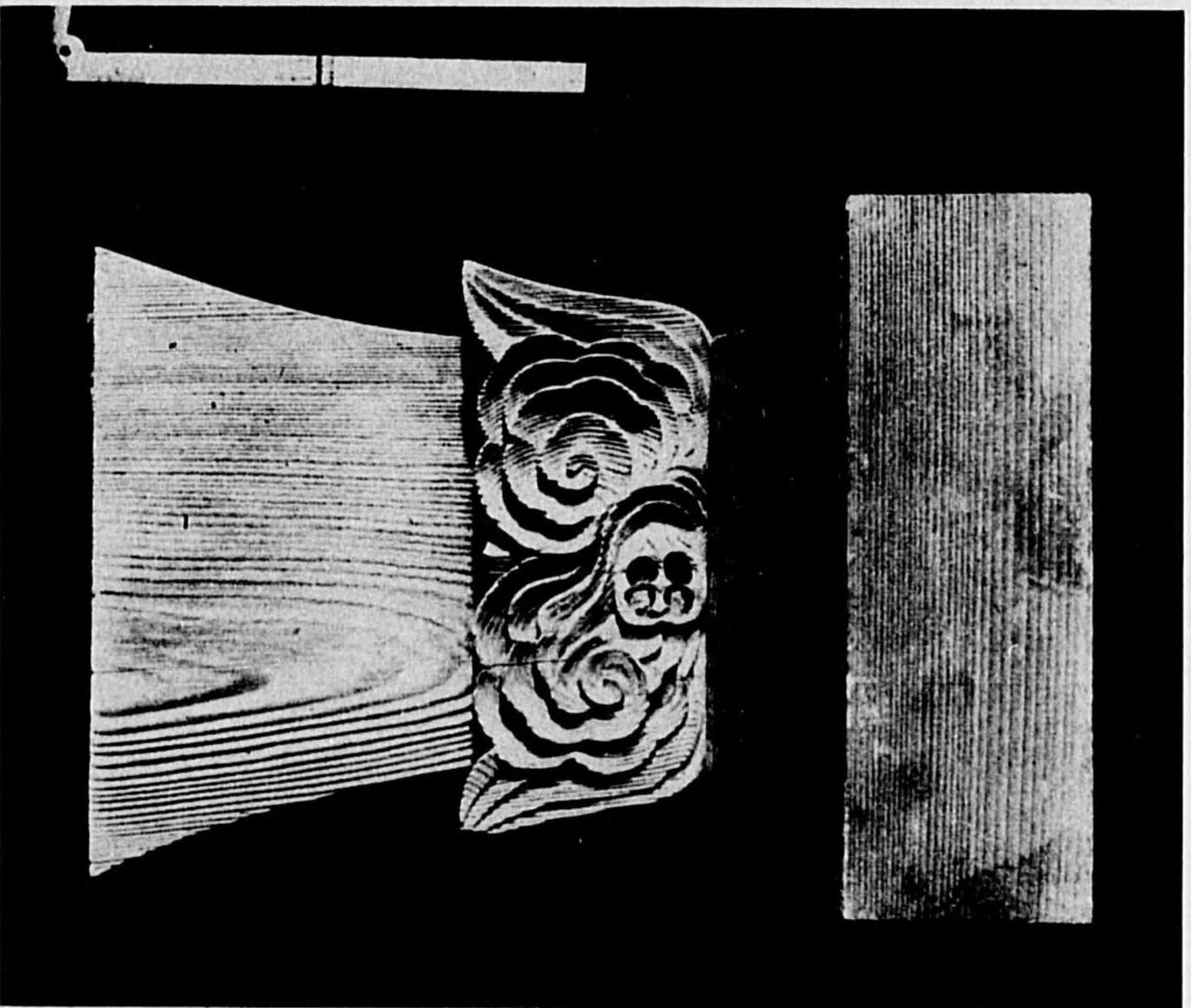
一二は蓮、中心線の右に蕾左に葉、左右両肩には可然葉をかけてある。これで形だけはとれてゐるが、少しばかり窮した様子がなくもない。蕾も葉も莖が曲つて下を向いて萎れてゐる様に見えてゐるのは大して感心できない。もう少し上向きにして纏らなかつたものか。正面中央のもの。

一三は笹龍膽の普通の形(例へば三三三)を少し込み入らせて中心飾とし、左右両肩に葉と花とを配したもので、笹龍膽其物は當代には珍らしくはないが、意匠としては變つてゐる。正面左端のもの。

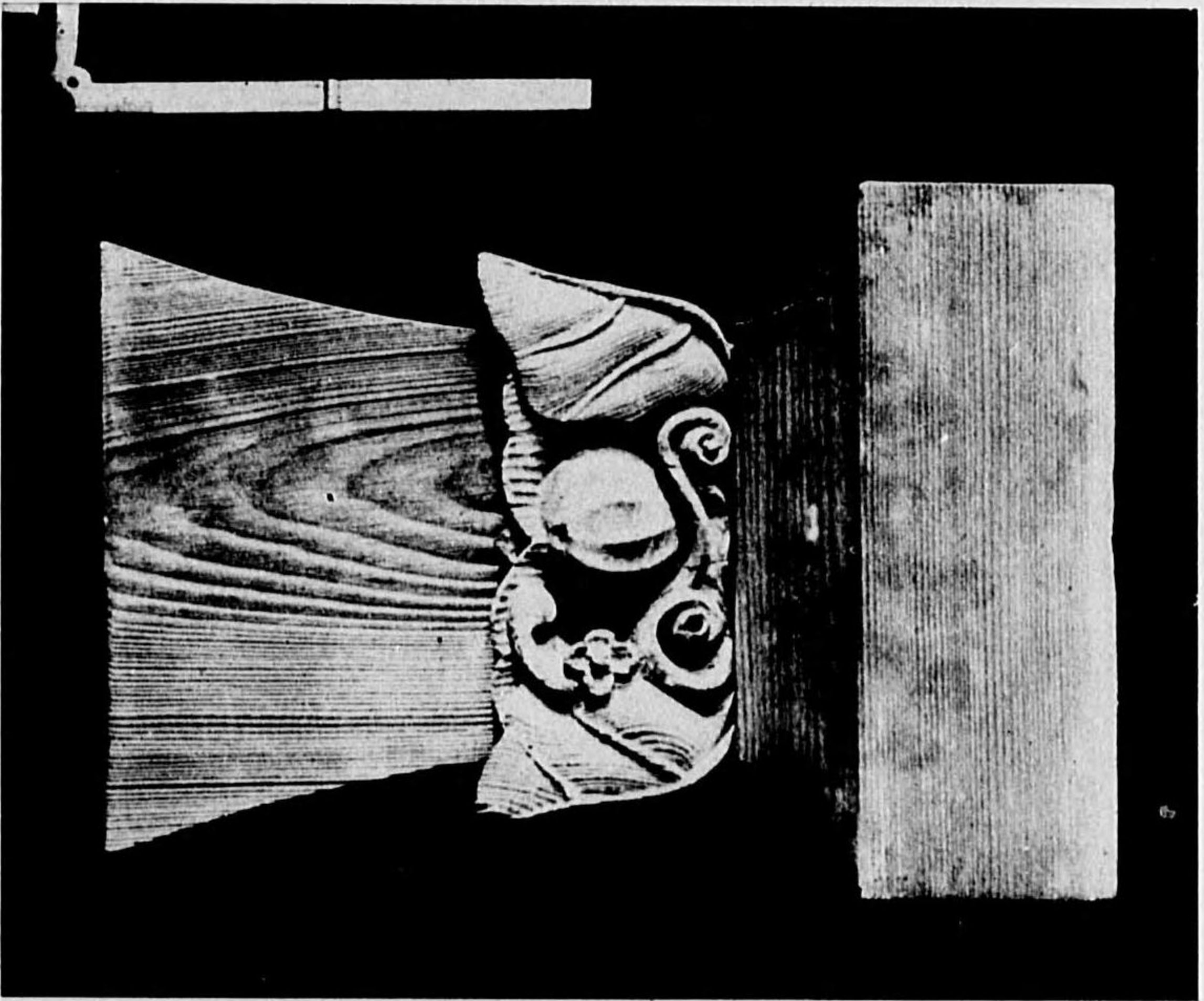
以上三つは何れも正面のもの。正面だから最も意匠をこらして美しく飾つたのであらう。

一四一六は側面のもので、そのうち初めの二つ、中右と下左とは葉を便化したもの。即ち若葉を少しく意匠して配置したのである。中心線の兩方の渦文が眼立つ。これこそイオニア式柱頭の左右渦文と同工異曲といへるだらう。併しこんな時代にはこの意匠はさう稀ではない。これを雲におきかへたのが右下の一六、葉を雲にしたのは珍らしい様だが、雲臺股は既に室町時代にあるのだからか、こゝろいふ所に雲が用ひてあつても敢て不思議ではない。面白いのは中心飾に三鈷杵の一方だけが現はしてある事で、これは或は其昔弘法大師が支那から投げたのは高野山の松の枝に引つかかるため、雲中を飛んでゐるところかも知れない(手挾一五)。此は向つて右即ち東側南より第一の間のもの(圓城寺樓門臺股内にも雲に金剛杵がある)。





一八



一七

一七は一を、一八は一六を夫夫大きくした
 もの。此二つは特に珍らしいと思つたからで
 ある。瓜は渡來植物。國史に見えた初めは古
 事記で、萬葉にも瓜の歌があるとの事である
 が、建築彫刻に現れたのは室町が最初で
 ある。瓜の花は五瓣の筈なのに、四瓣にして
 あるのは認識不足であらうが、古人はそんな
 ことはどうでもいいと見え、桃の花も平氣で
 一瓣節約してあるのもある(木鼻一六)位だけ
 ら問題にしないでよからう。
 三鉢の方は雲を巧みに取扱つて左右相稱を
 破り、且つ其一方の爪だけを雲から出して中
 心飾にしたところは、彫刻家の手腕の平凡で
 ないことを示してゐるが、ただ爪の先が向ひ
 あひ過ぎて、しゃもじの様な輪郭になつたの
 は、少しばかり氣に入らない。
 間料東や襄東の下が開いて、梯形又は撥形
 になりだしたのは鎌倉からであるが、室町に
 なると、これ等は夫として形がよくない。兩圖
 及び前頁圖全部左方に立てる物差は曲尺の約
 五寸(六吋)。

一九、官幣中社嚴社神社多寶塔初重内部装束

(昭和七年三月三十一日)

二〇、金戒光明寺阿彌陀堂内陣東側間科束

(昭和十四年九月十八日)

二一、大崎八幡神社本殿背面

(昭和八年七月二十九日)

更にもう一つ室町時代の例を掲げておくが、一九の装束が夫である。

東の上の方に蓮花を下げたのである。左程大きな塔ではないから、従て東の位置も左程高くはなく、眼に近くてはつきり見えるのに、どういふものか割合に粗末な刻み方がしており、まるで半人前の職人の仕事の様で、なぜこの様にぞんざいにしたのか。桃山ならありがちと思ふが、室町には不思議である。

桃山時代

金戒光明寺は京都市左京區黒谷町にある。本名をいふより「くる谷」と

いつた方がよく通用してゐる。此寺にある最古の堂がこの阿彌陀堂で、

慶長十年の建立ださうな。方三間覆形造本瓦葺。内陣のつき富りだけが

極彩色。あとは全部素木のまゝにしてある。二〇は内陣向つて左の間科

束で、其形は桃山として正に適當である。

面白いのは天井廻縁下の水平材に圓形の内に梵字をかいてゐる事で、

中尊の阿彌陀如来の上にも、向つて右方の夫にも梵字がある。これ等の

梵字は阿彌陀三尊を現はしてゐるので、圖のは右脇侍即ち勢至菩薩の種

子(サク)である。間科束の上に種子をかいた例は今の所これ以外に知ら

ない。

二一は仙臺市八幡町鎮座、大崎八幡神社本殿に用ひられてゐるもの

で、装束の左右に、大して面白と思はれない唐草をつけてゐる。併し

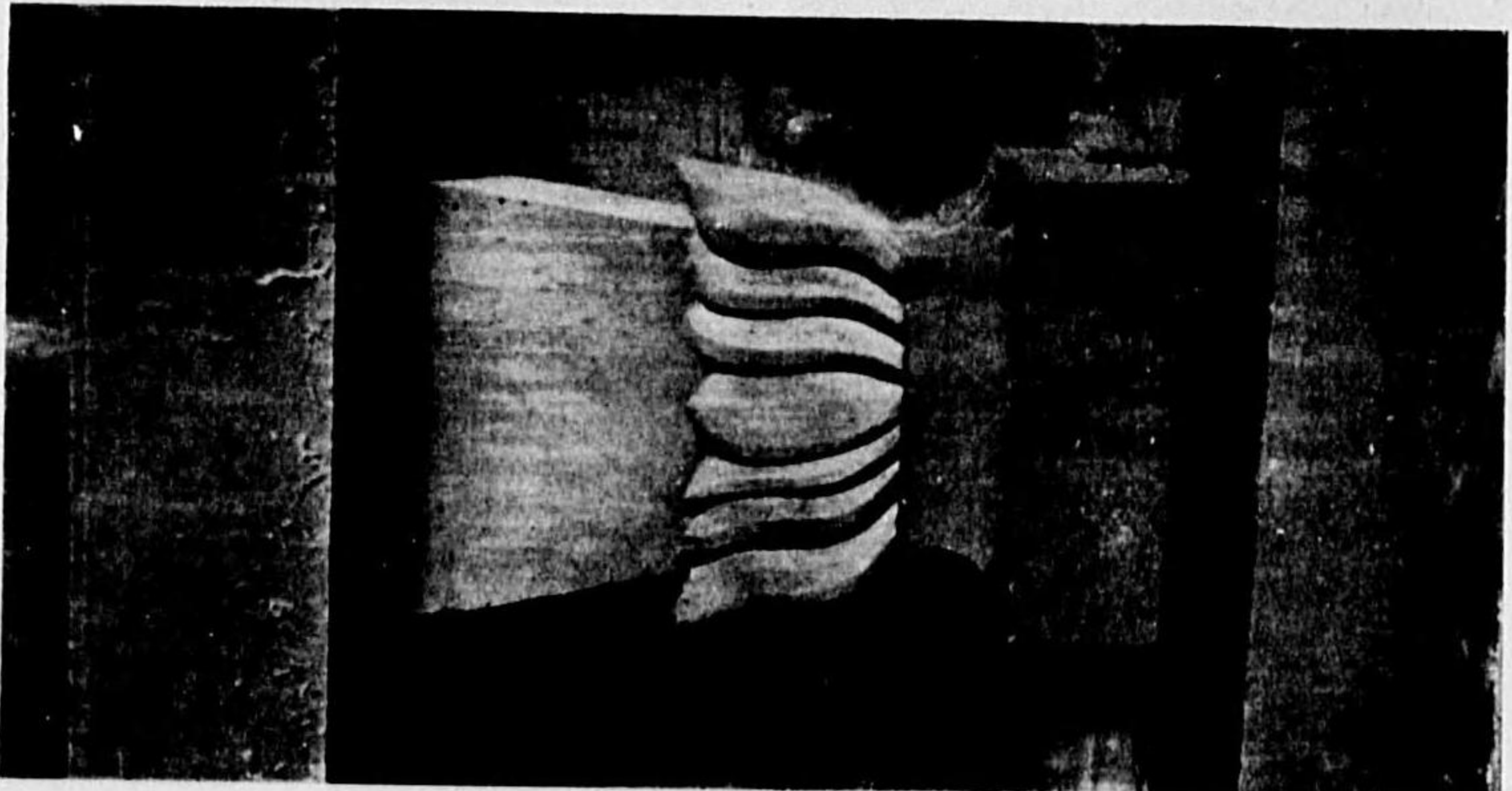
これは如何にもよく桃山を現はしてゐるといふだけで、美的價值も少な

いし、又あつてもなくても、大して影響はない。けれども間科束なり装

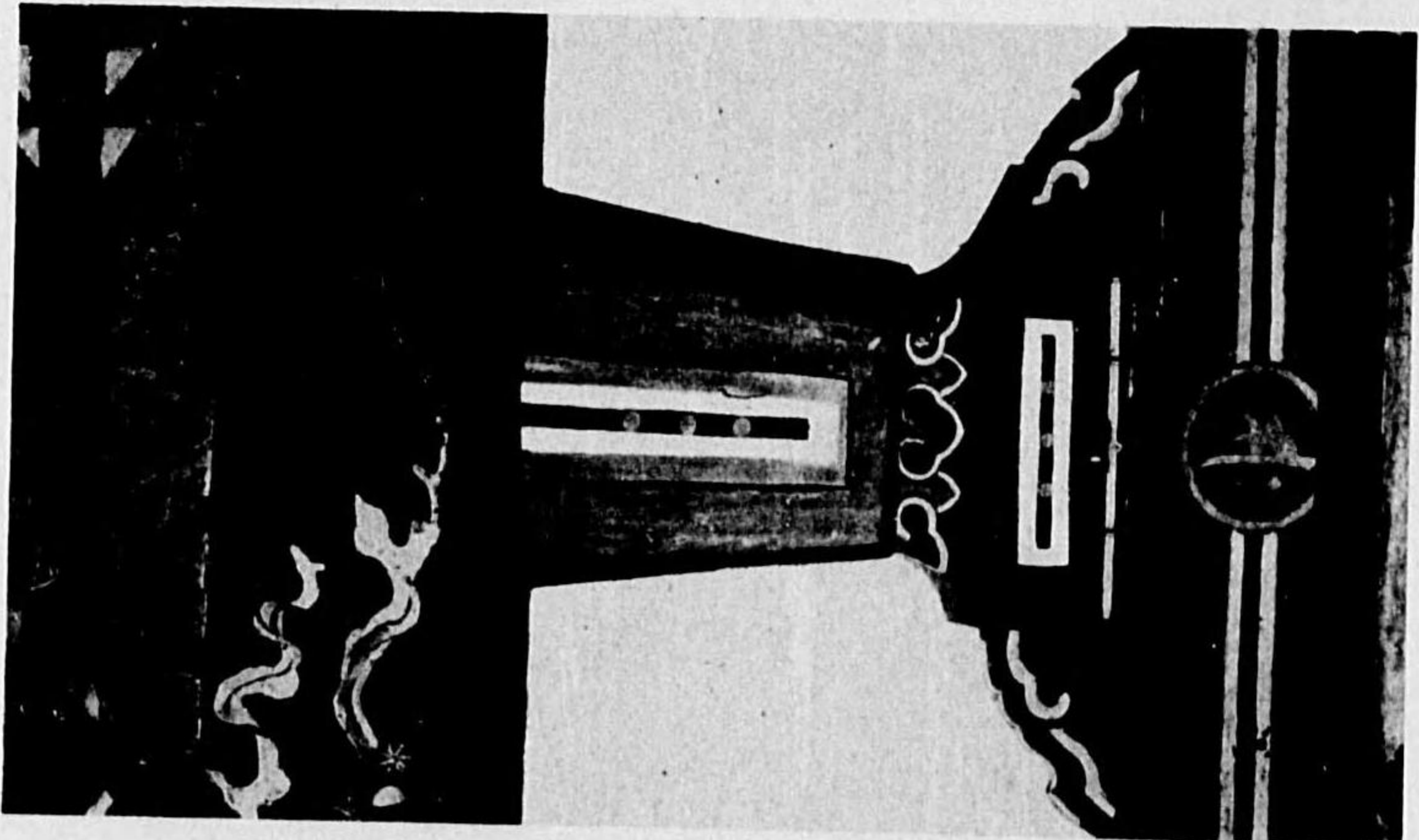
束なりの兩方を、何か彫刻を以て飾ることは、既に油日神社樓門の夫に

於いてみた所であり(八・九)、且つ此神社石の間及び同市薬師堂内部間

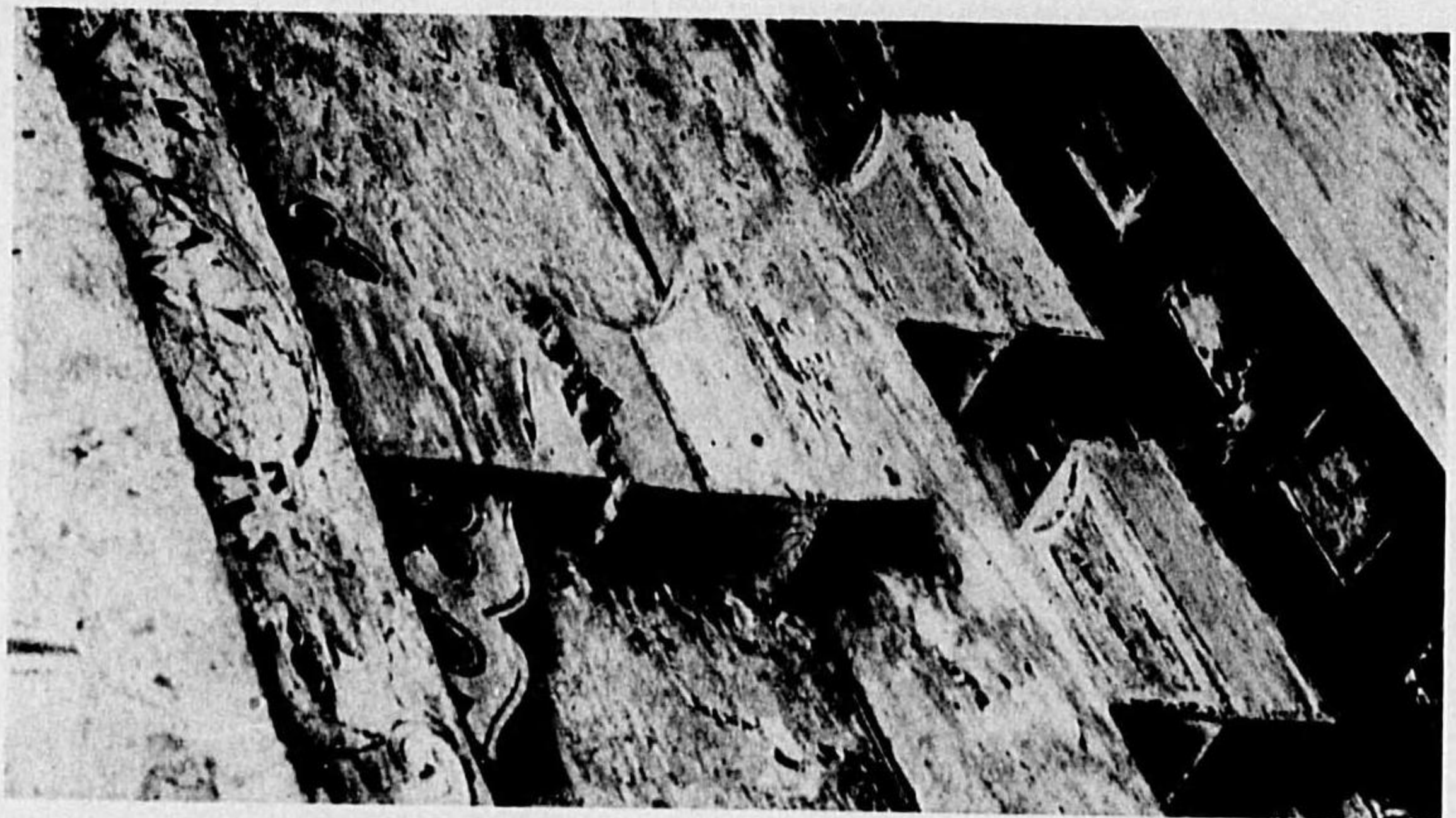
科束の兩方に若葉をつけてゐるの等からみて、此彫刻は頗る興味がある。



一九



二〇



二一



三

三三、兵庫縣加東郡小野町大字淨谷

八幡神社拜殿部分

(飛鳥園)

八幡神社と呼ぶ神社で國寶を有するもの十二

社に及んでゐるので、止むを得ず混雜を避ける

ため所在地を冠しておいた。この拜殿は桁行七

間梁間三間四注造本瓦葺の割拜殿であるが、内

部は化粧屋根裏で、一種の二重虹梁大瓶束にな

つてゐる。この圖に見る如く正面から背面に並

んでゐる四本の柱上に大虹梁を架渡し、柱の上

に當る所に其大虹梁上に柱と同じ太さの大瓶束

をたて、二重目の虹梁をのせ、其中央に形式の

少し異なつた大瓶束をたて、其上の大料及び舟

肘木で化粧棟木を支へてゐるのである。

瓶子に似てゐるから大瓶束といふ名が起つた

らうのに、この分は一種とも大して似てゐな

い、殊に柱上に當る分は結締の部分が鯉魚の如

く、或は花頭窓を逆にした如く、東其物は殆ど

圓形形で、これでは全然瓶子とは無關係である

が、やはり名稱は大瓶束としておくより仕方が

ない。要するに異例である。和様の科栴、大瓶

束上の大料肘木、花肘木、木鼻三種等、何れも

注目に値す。

此拜殿を天窓塚だと書いてゐる書物がある

が、そんな事は斷じてない。

三、寶塔寺四脚門大瓶束 (昭和十三年五月十日・近藤豊氏)

二四、東福寺三門上層内部大瓶束 共一 (昭和八年四月十三日)

二五、同 共二 (昭和八年四月十三日)

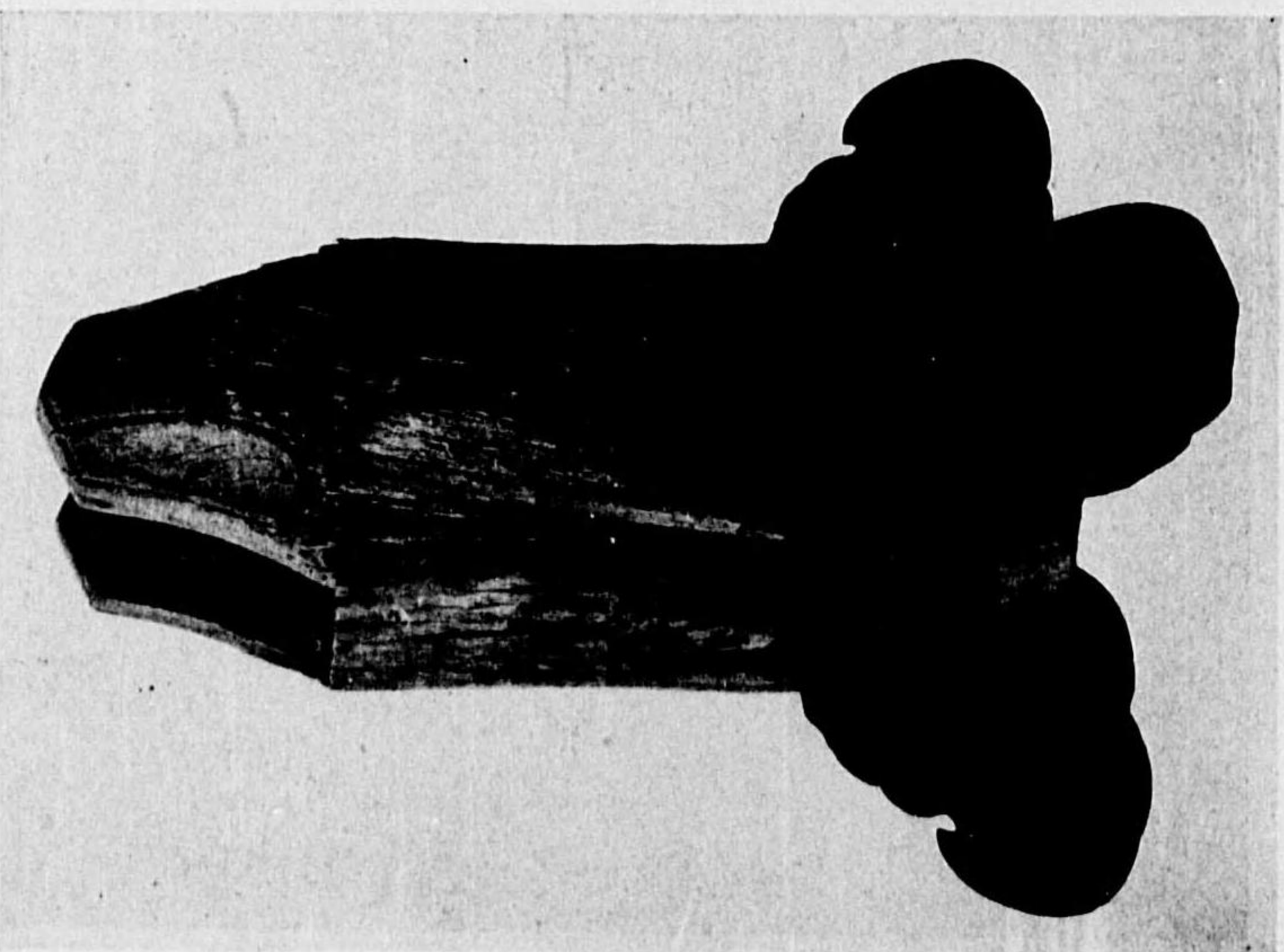
昭和十三年の頃は、丁度寶塔寺——深草にある。京都市伏見區深草町寶塔寺山。京阪電車深草下車徒歩——が修理中で、國寶の多寶塔も四脚

門も解体してあつたから、この様な好都合の寫眞がとれたのである。これも亦圓錐形で結縮の部分に僅かな彫刻があるだけ、いはば普通の形で大して珍らしいものではないが、左右と前方とに、上部に於いて木鼻を

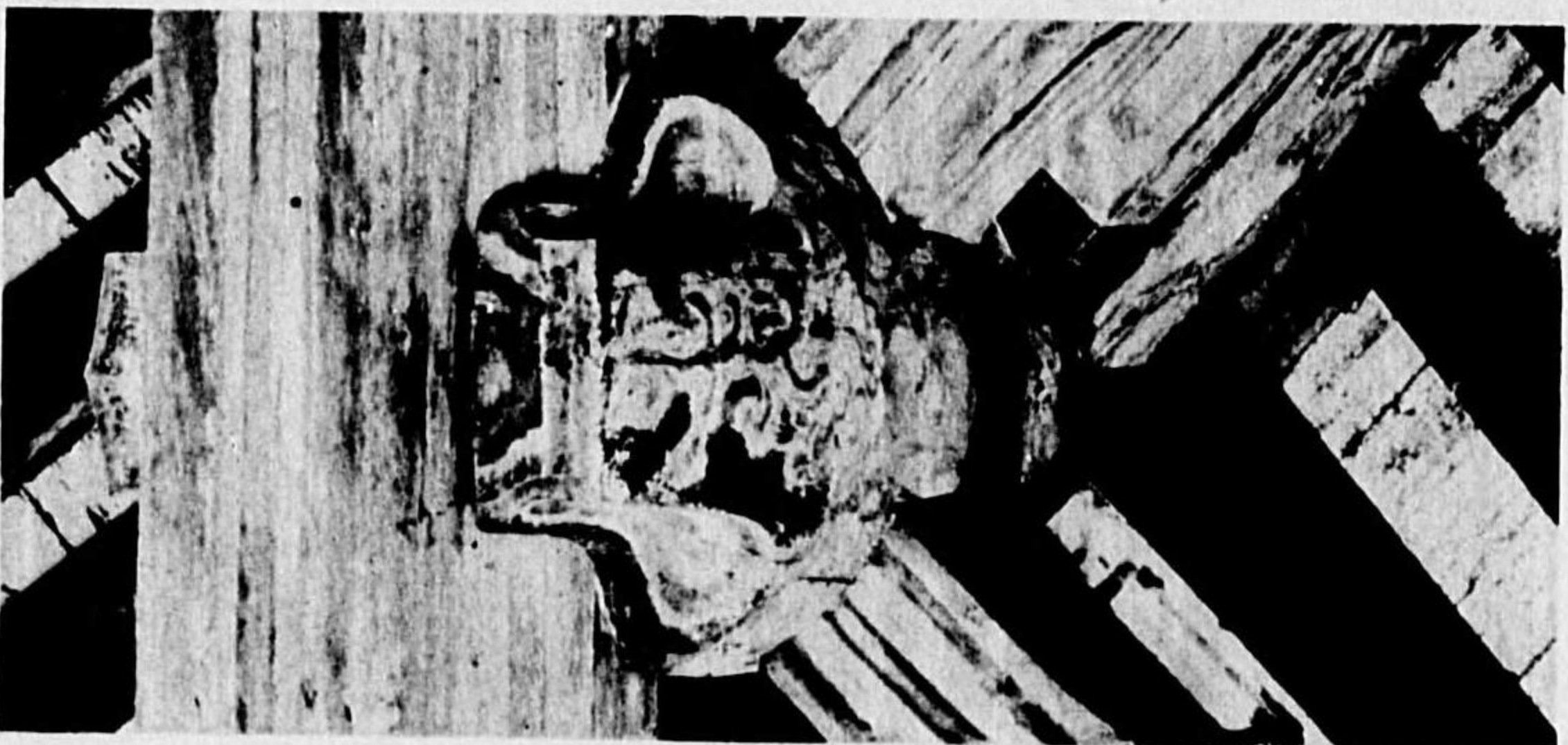
だしてあるところを見せるのが主な目的で圖を掲げたのである。これと同じ手法は鎌倉時代からあり、大和の空生寺權頂堂の等は其好例で甚だ面白ものであるが、修理中足場へ上つてとつた寫眞は、どうもうまく行かなかつたので、此を以て代用したのである。時代が降つてゐるので、木鼻等は大分形が拙くなり、何れの方角からみても感心ができないけれども、時代の特徴はよく現はれてゐる(二三)。

改めて述べる迄もあるまいが、唐様建築は彩色をしないのが本來である。即謂はゆる禪宗建築は何れも素色である筈だが、後になると他宗の建築の影響を受けてか、やはり彩色をする様になつた。京都市東山區本町所在の東福寺三門は應永年間の修理といふ事になつてゐるが、一般に其頃の再建と認められてゐる。その上層内部には美しい彩色が残つてゐる。さうして唐様建築に極彩色をした現存最古の遺物とされてゐる。

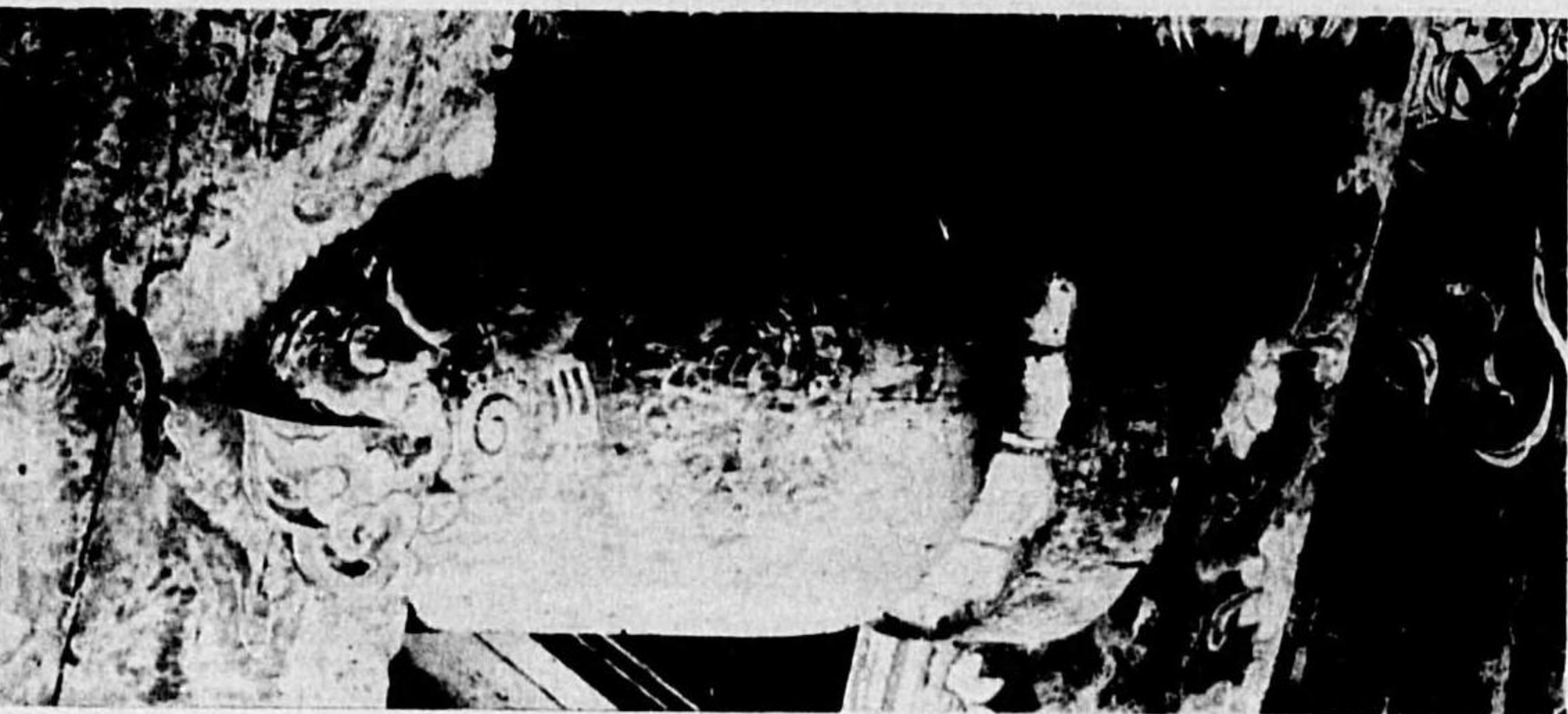
上層内部は先づ前後に大虹梁を架渡し、其上中央に二五の如き大瓶束をたて、其上に割合に細い二重梁をのせ、此二重梁の上に前者の左右に二四の様なのをたてて、内外陣を巧に分けてゐる。後者は隅行の分を示してあるから、其上の方から出てゐる肘木が、梁の方向と何れも45°をなしてゐる。此が梁に跨つてゐるところ、即ち結縮の下端の向ひ側の分も見えてゐるから、其様子が判然するであらう。此等の大瓶束は、何れも其上のつてゐる料が圓形である。乗つてゐる如く見えてはゐるが、實は上端を料の様に残したもので、束と一木から成つてゐるので、別に刻んでのせたものではない。此種の大瓶束は名古屋市の本遠寺釋迦堂内部にもある。



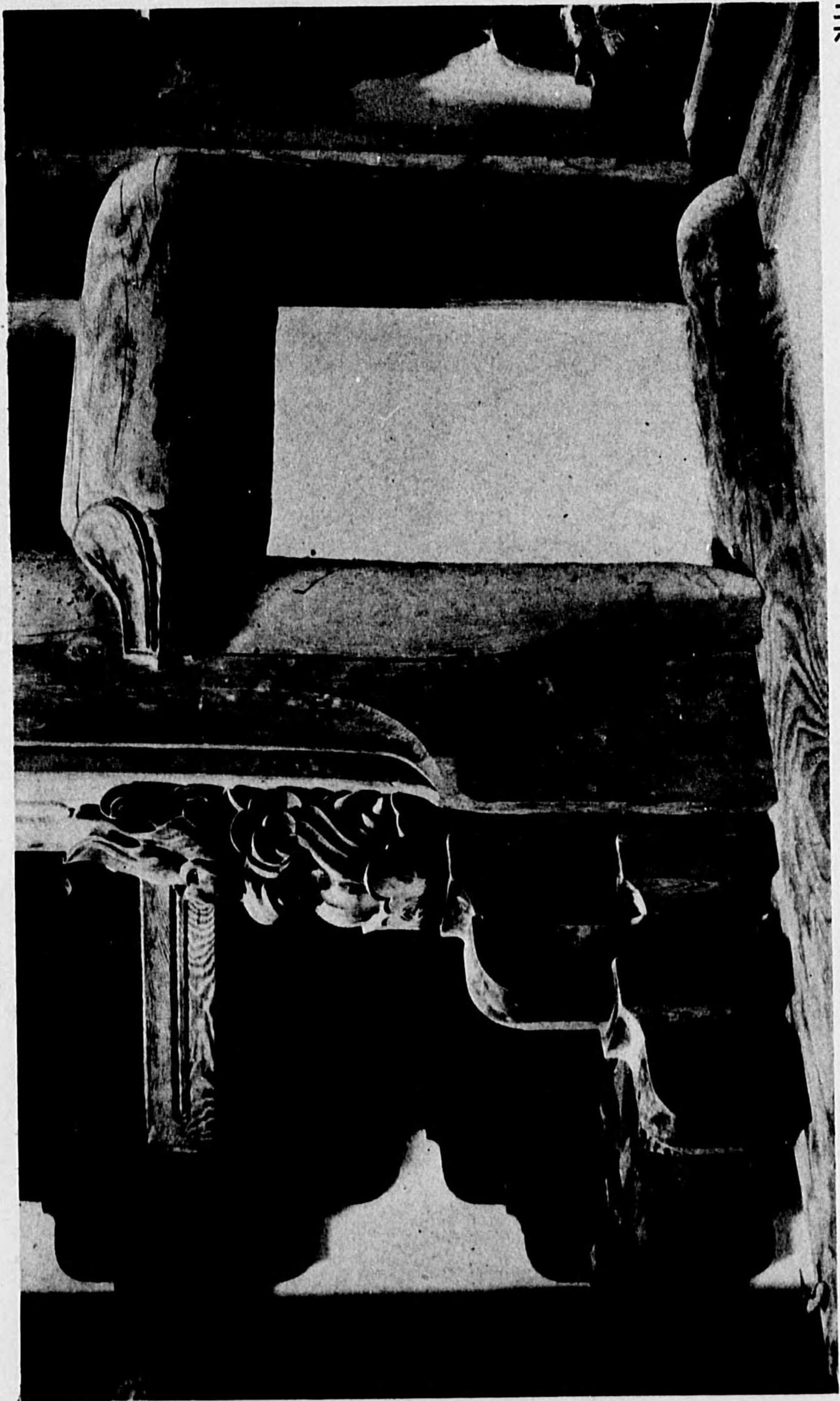
三三



二四



二五



二六 酬恩庵本堂内部大虹梁上大瓶束

(昭和七年十月二日)

京都府綴喜郡田邊町大字薪にある酬恩庵は、丁度京都市左京區にある眞正極樂寺を眞如堂、金戒光明寺を黒谷といふ方が早判りがする様に、「薪の「休寺」といつた方が遙に有名である。奈良電の新田邊下車、徒歩二十分位で達する。其本堂は方三間單層入母屋造檜皮葺、永正三年の建立と傳へ、京都大阪奈良あたりから最も便利で近く、且つ唐様建築の佛殿としては古い方であるから、見學には最も便利である。ただ推定復原と思はれるところが多いのは、少しばかり惜しい様な氣がしなくもない。併し何といつても京都府下には有數な室町時代の代表的唐様建築であるのに、ある書物に「永正三年の建立」だけ片づけ、他に何等の解説もしてないのは大分にひどすぎる。

内部は普通で、夫こそ公式通りのもの、圖の右方に一部見えてゐるのは來迎柱で、唐様挿肘木の持送を裝飾とした大虹梁上の大瓶束により、内陣の鏡天井を貼つた部分を支へてゐるのであるが、其大瓶束の結綿のところを見ると、この種のものが如何に室町時代に多いかといふ事が判るであらう。

大瓶束だけなら、もつと小さく其部分だけ見せればすむのだが、序に唐様建築内部取扱の一部分を圖示して、此種の束がどの様なところにどの様に用ひられてゐるかといふ事と、夫から大虹梁の「眉」が大に發達し、且袖切に「弓眉」が既に當代に於いて出來てゐる證據に大きくだしておいたのである。

二七、開善寺三門下層大瓶束

(家藏寫真複寫)

二八、相樂神社本殿笈形付大瓶束

(物差は曲尺の約一尺(一呎)・昭和十年四月二十五日)

二九、同

部分

「開善寺は長野縣下伊那郡龍丘村大字川上路にあり……建武二年信州の武將小笠原貞宗の創建する所にして……」
瑠璃閣と稱す。城内百餘の諸堂宇は明應以後天正年間に至る四回の火災の爲に悉く焼失したるも、唯この一字のみ残存す……
(以上『長野縣史蹟名稱天然記』とあるが、此上層は元祿八年松樹が屋上に倒れたため破潰、修理の見達ないので取除いたさうで、
念物調査報告』第五輯による) 今下層のみを存してゐる。尙ほ傳説によると上層が倒潰した時、羅漢像を天龍川に流したさうだが、上層は果してあつたのが潰れたのか、或は下層のみできて、上層に及ばず未完のままにあつたのか、充分調査してみないと判然しない。

二七は繫虹梁上の大瓶束の一端の形式のものとして差支ない。結綿の下部の上向きに二つ下向きに一つ茨をもつた曲線は、當時の飾金具なる四葉・六葉・扉上部の藻座・八雙金物の先端等、花頭窓上部・懸魚の下部乃至格狭間の上等の曲線と殆んど同じ意味を持つてゐる。だから一つが判れば自然他が判ってくる理窟である。

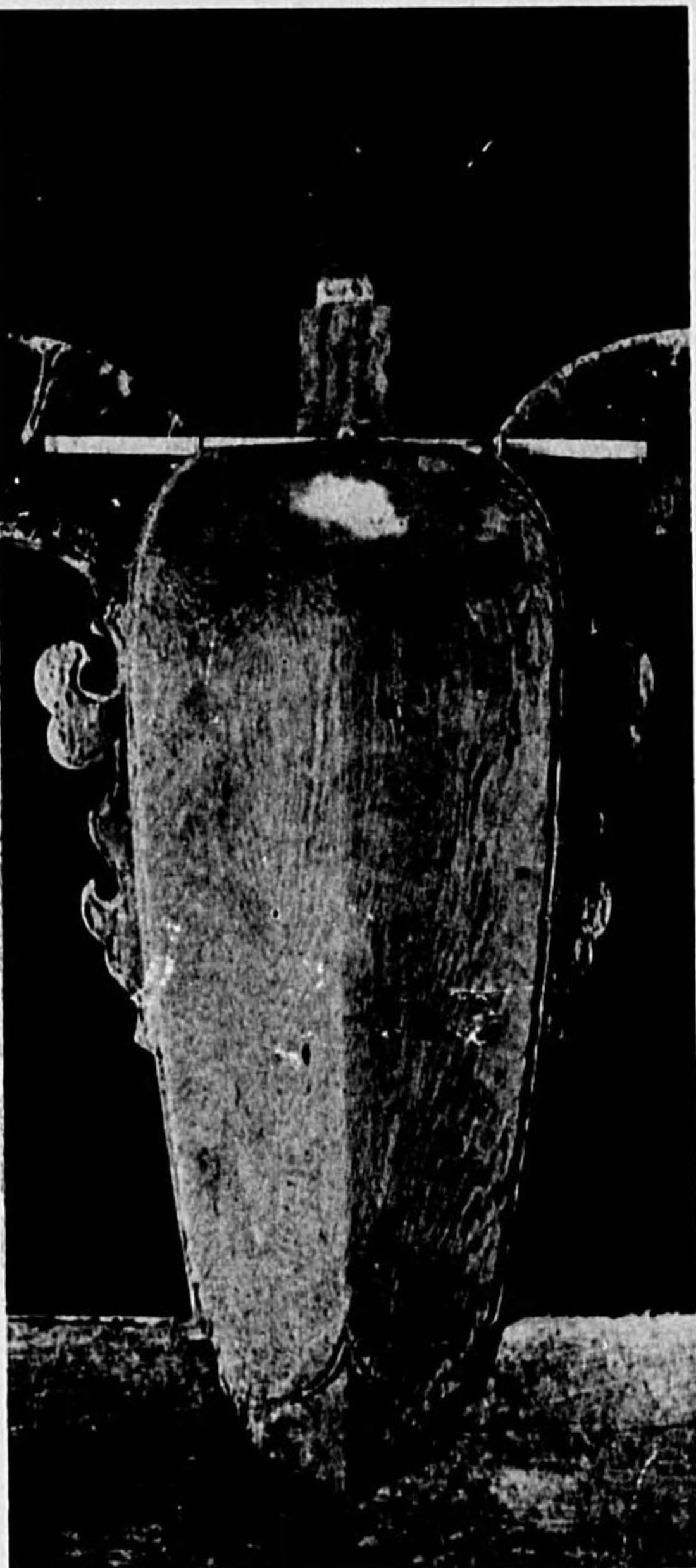
京都府相樂郡相樂村大字相樂に相樂神社といふのがある。奈良電山田川停留場から東約五町。三間社流造の小さい社がある。細部がよく時代の特徴を現はしてゐるので、此書物では花肘木・蓐股欄間のうちの實例にも引用したが、ここには笈形付大瓶束をだしておく。二八は其兩妻に用ひてゐる大瓶束の全形で、二九は大料以上を取去つて、大瓶束だけを大きく見せておいたものである。

笈形(オヒガタ)といふのは、大瓶束の兩方につけてある蓐股を中央で縦に二分した様なもの名である。こんな形の蓐股ができた鎌倉以前にこんな考へがでる筈はないし、又大瓶束が用ひられない以前にある筈もない。實は私は鎌倉時代の實例を知らないが、或は室町位からこの様なものを時につけたのではないかとも思つてゐる。此場合大瓶束の兩方に、笈形のおさまりとしてつけてある唐草は、鎌倉・室町時代の格狭間内部の飾(格狭間二五―三三)又は蓐股兩脚内の飾(蓐股三八)等と同性質である事に注意せよ。尙ほ笈形は後に非常に發達をした(四二・四四・四九・五四・五六)。

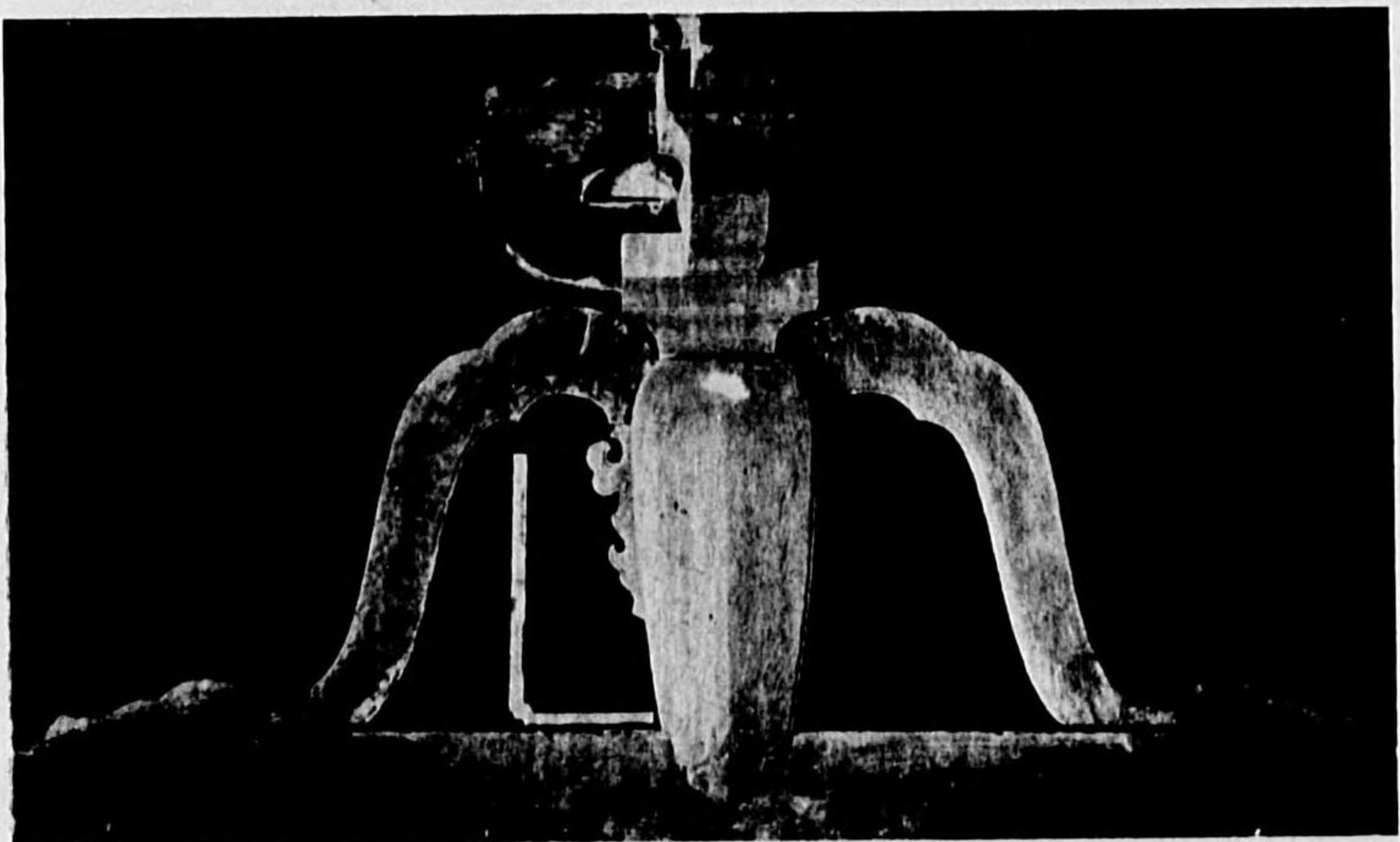
二七

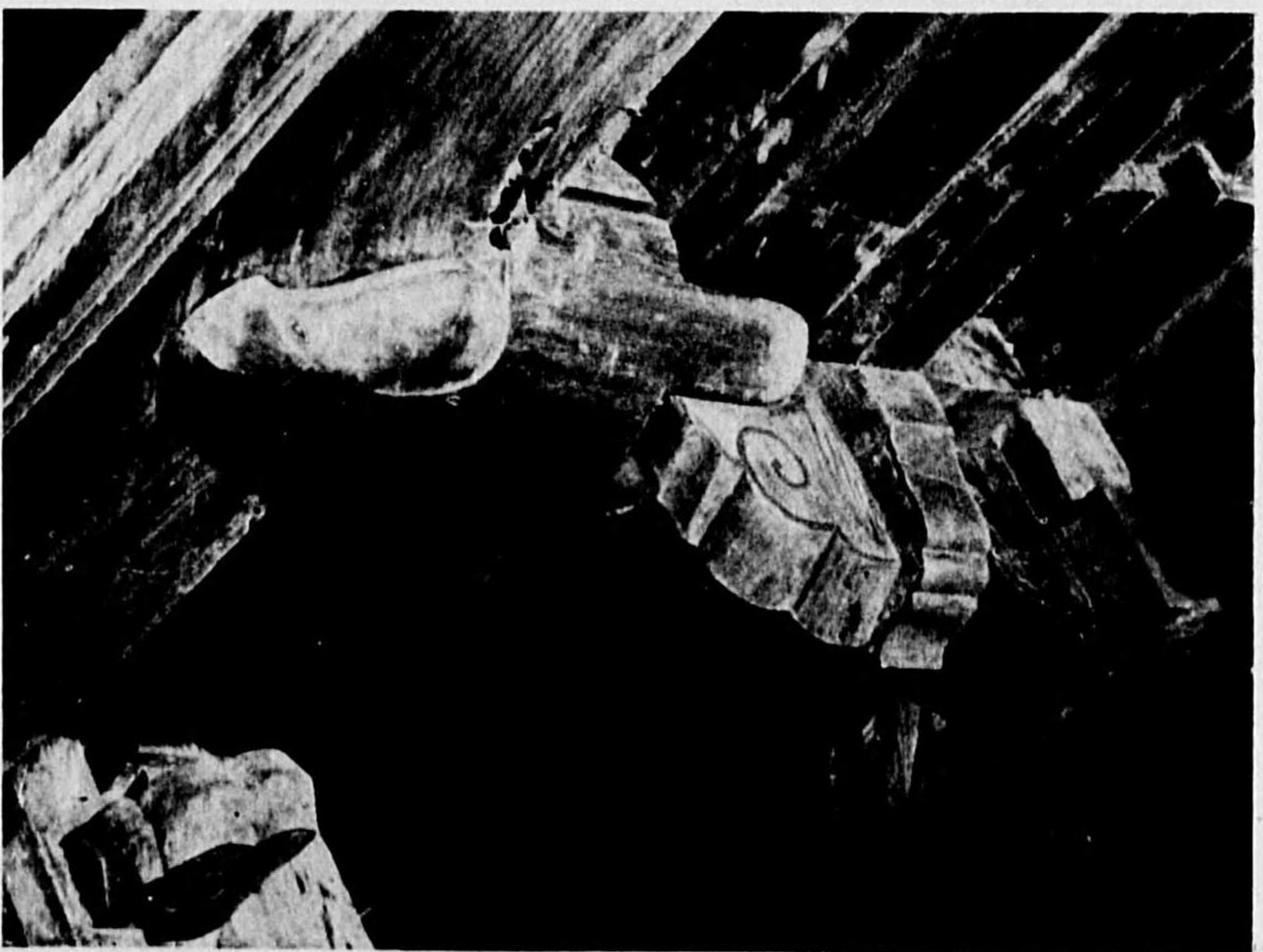


二九

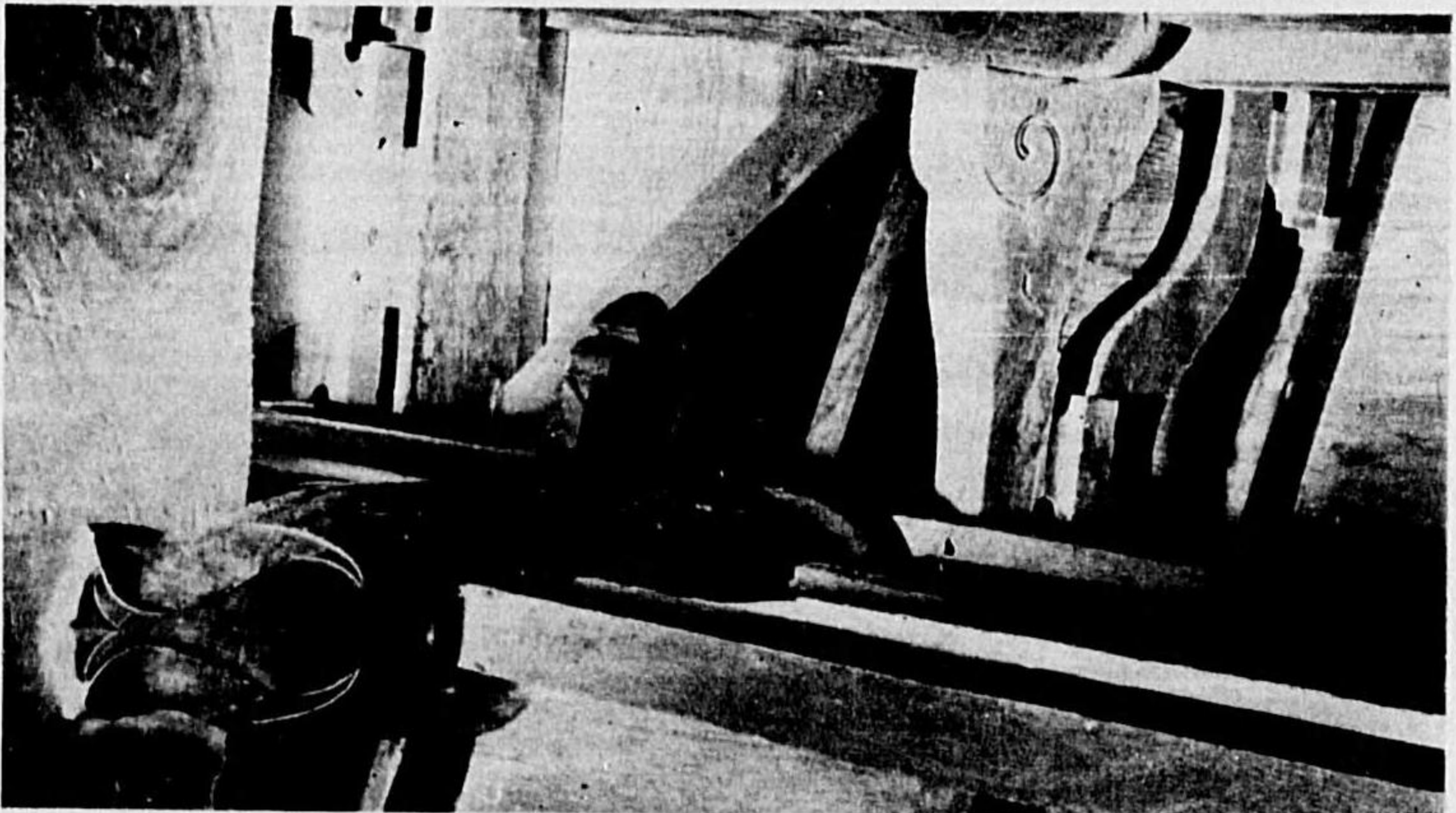


二八





三〇



三一



三二

三〇、圓融寺本堂内部大虹梁上大瓶束 (昭和九年八月五日)

三一、東禪寺藥師堂背面繫虹梁上大瓶束 其一 (昭和十二年八月三日)

三二、同 其二 (昭和十二年八月三日)

圓融寺は東京都荏原區碑谷町字碑文谷(ヒモンヤ)にある。弘安六年の創建といふ。目蒲電車西小山停留場下車徒歩十二三町で達する。

正面に棧瓦葺の向拜をつけたりして、外觀著しく拙くなつたが、内部は唐様佛殿の形式をよく現はしてゐる。大虹梁上の大瓶束は圖の如く、結綿のあたりに少しく變つたところがある。即ち多くの例では兩

方の削いだところが内方に凹んでゐるのに、これは反對に外に膨れて

ゐる。だからその所が變つて見えるのである。この堂の建立は明らか

かに判明せず、大凡吉野時代前後であらうとか、鎌倉末か室町初位

であらうとか、さういつた様な説がある様である。圖の組合はせの都合

で多少の前後はあるがこへ入れておいた(三〇)。

東禪寺は今治市字藏敷にあつて木の下薬師といつてゐる。今治(イ

マハリ)の驛からでも港からでも歩いて十町位で知れたもの。伊豫國

司乎致宿彌益躬の草創とあり、現在の建物は文明三年河野通昭の再建

といふ。慶長十六年、寛永二年等の修理の後、昭和十年の大修理を經

て今日に及んでゐる。

堂は方三間入母屋造本瓦葺。修理の結果面目を一新したが、正面は

殆んどすべて新しくなり、どこ迄昔の形式が保たれてゐるかと思はれ

る様になつてしまつた。小さな建築ではあるが、實に意匠が働いてゐ

て、先づ内部で前後に架渡した大虹梁の上に、形は決してよくはない

が、板臺段を四個並べておいたところ、特殊の繫虹梁、來迎柱と後方

との繫虹梁上方の、短かい其形式の全く類例を異にせる小さい繫虹梁

等、どこ迄も變つた細部をもち、殊に須彌壇及び其上の厨子は獨創的

意匠より成つてゐる。

其後方の繫虹梁上の大瓶束は三二・三三に正側面を示した通り、こ

れも亦結綿の部分に特徴がある。恰も前例の如く兩方の普通削いであ

る部分が膨れてゐるが、其形はハサミムシの銚子か、又はクワガタム

シの大腮そっくりの形をしてゐるところが面白い。何からこの様な形

を考へつたものか、この様な形をした彫刻をした結綿も殆んど他で

みた事がない。

三三、大爪神社本殿八幡神社妻飾大瓶束 (家藏寫眞複製)

三四、不動院金堂内部大瓶束(北側内外陳境) (昭和十年四月五日)

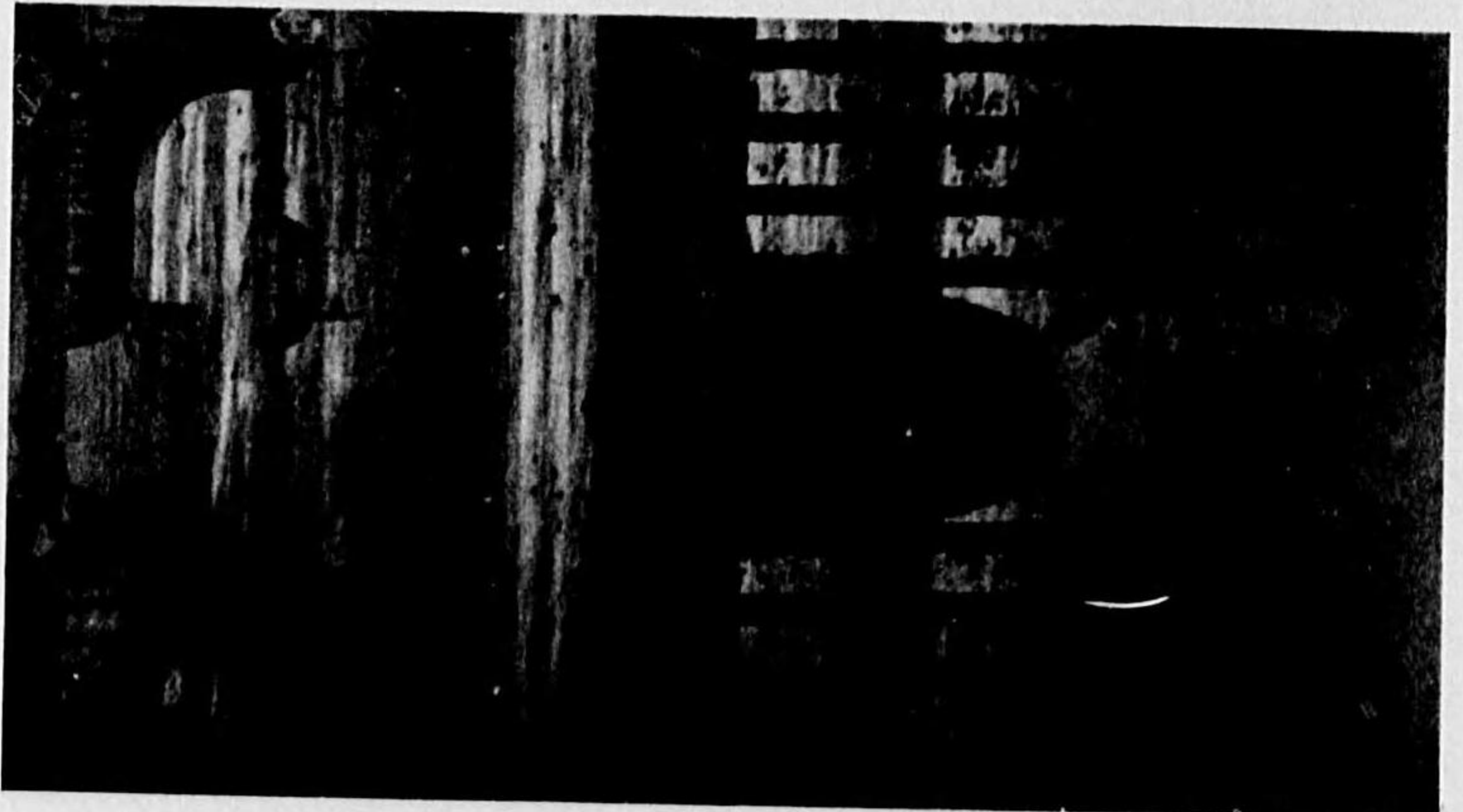
三五、園城寺經藏内部大瓶束 (昭和二年七月十五日)

・大爪神社は長野縣下伊那郡富草村大字古城にある。オホツマジンジャといふより古城八幡(コジヨウカハチマジン)といつた方がよく通じ
る。私が大正十三年八月見學した時はたしかに右の様にきいたが、
昭和五年國寶に指定された時は、ただ八幡社本殿として登録されて
ゐる。而も私の調べた時は二棟の内、一は八幡神社で本殿、一は諏
訪神社で攝社との事であつたが、夫が二棟各一間社流造としてある
から、夫に従ふべきであらうが、混雜するといけないから、特にこ
こではこの様にして置く。

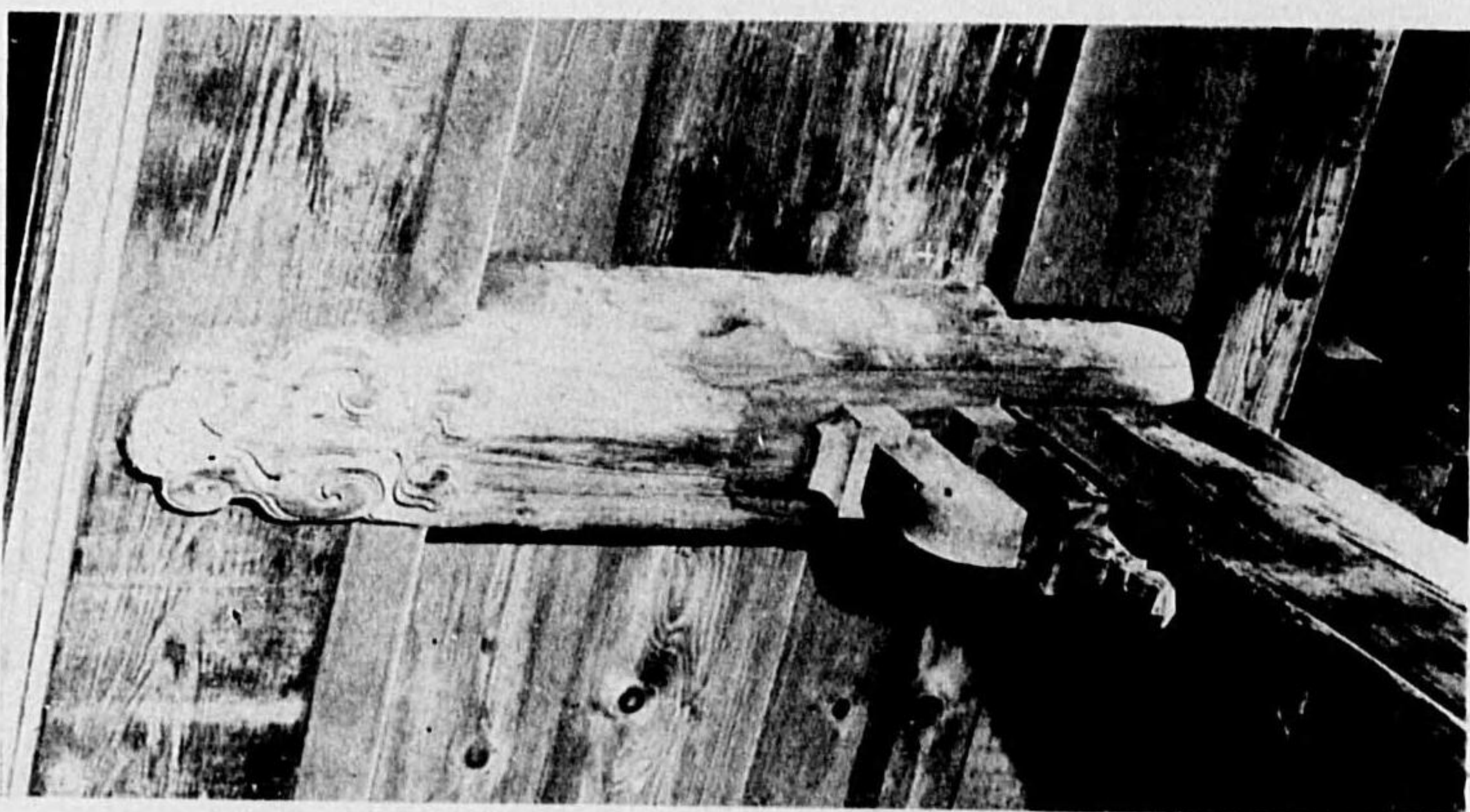
此社殿ができた時は判然しない様だが、いろいろの點から室町時
代といふ事は確かとみられる。三三は二棟あるうちの本殿の方の妻
飾の一部で、虹梁上の大瓶束の形は決して完好とは言へないが、非
常に撫肩であるため、下の方が反つて幅が廣くなり、餘程特殊の形
になつてゐる。其上にこれは大瓶束には關係のない事だが、狐格子
の横棧は、手間をかけて態態地板から刻みだしてある。これも亦大
變珍らしいことである。

不動院は廣嶋市牛田町にある。併し驛からは可なり遠い、といふ
のはつい近頃まで市外であつたからである。寺傳文祿の役に朝鮮か
ら移建したものとといふが、とるに足らぬ説である。或は周防の國か
ら移建したといふが、この方なら朝鮮説よりはよろしい。内部の虹
梁上大瓶束には數種あるが、三四は其一例で、このは總じて結綿
が割合に長くて大きい。

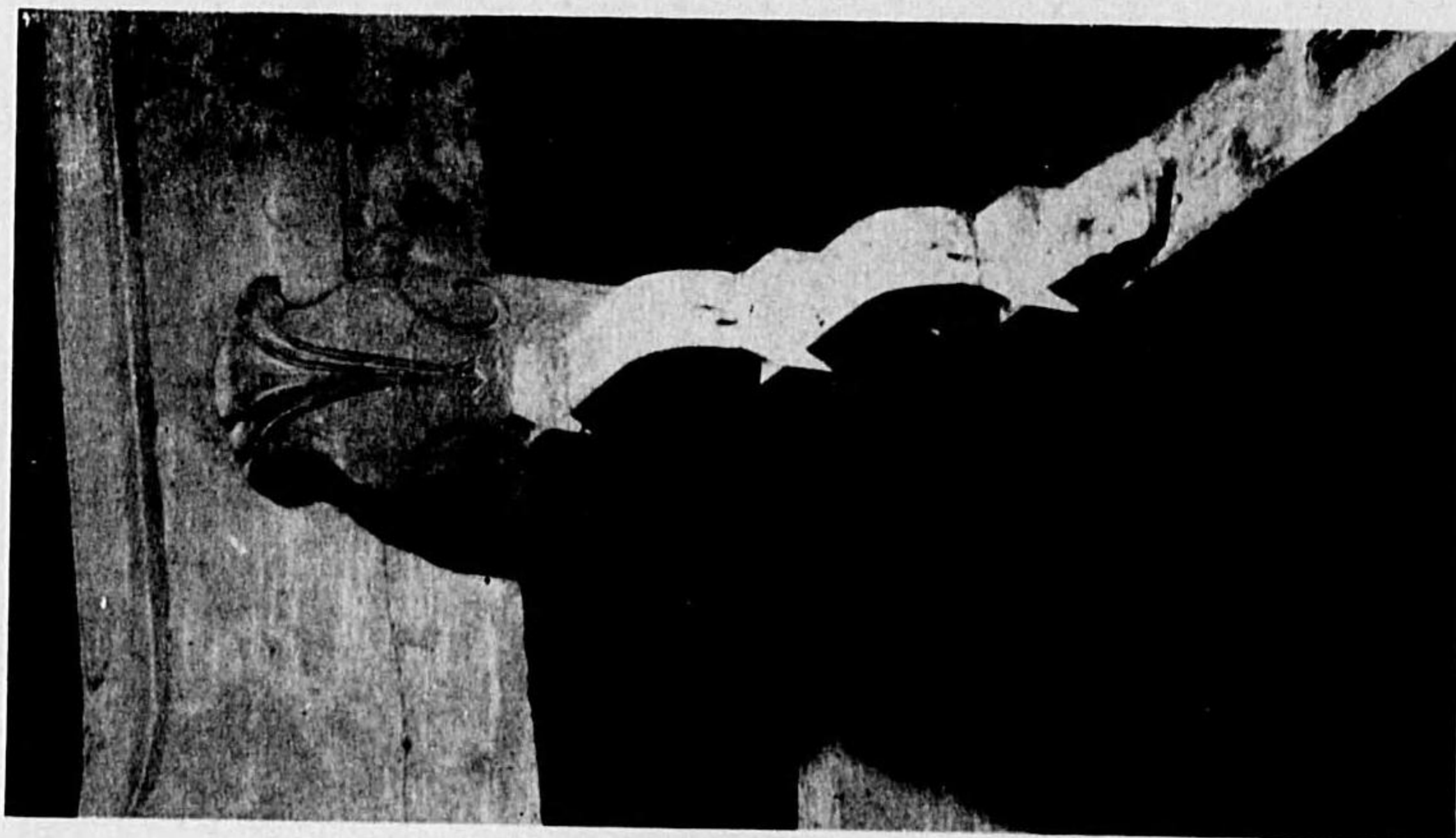
扱て最後に三五であるが、これは近江大津の普通三井寺として知
られてゐる園城寺經藏の夫。經藏は一般に慶長七年毛利輝元の建立
といふ事になつてゐるが、これは慶長七年に周防から移建したの
で、其誤傳である。様式からいふと正に室町時代と思はれるので、
この大瓶束をみても決して慶長とはとれぬものである。前例もこれ
も、何だか薄っぺらな感じのする大瓶束である。



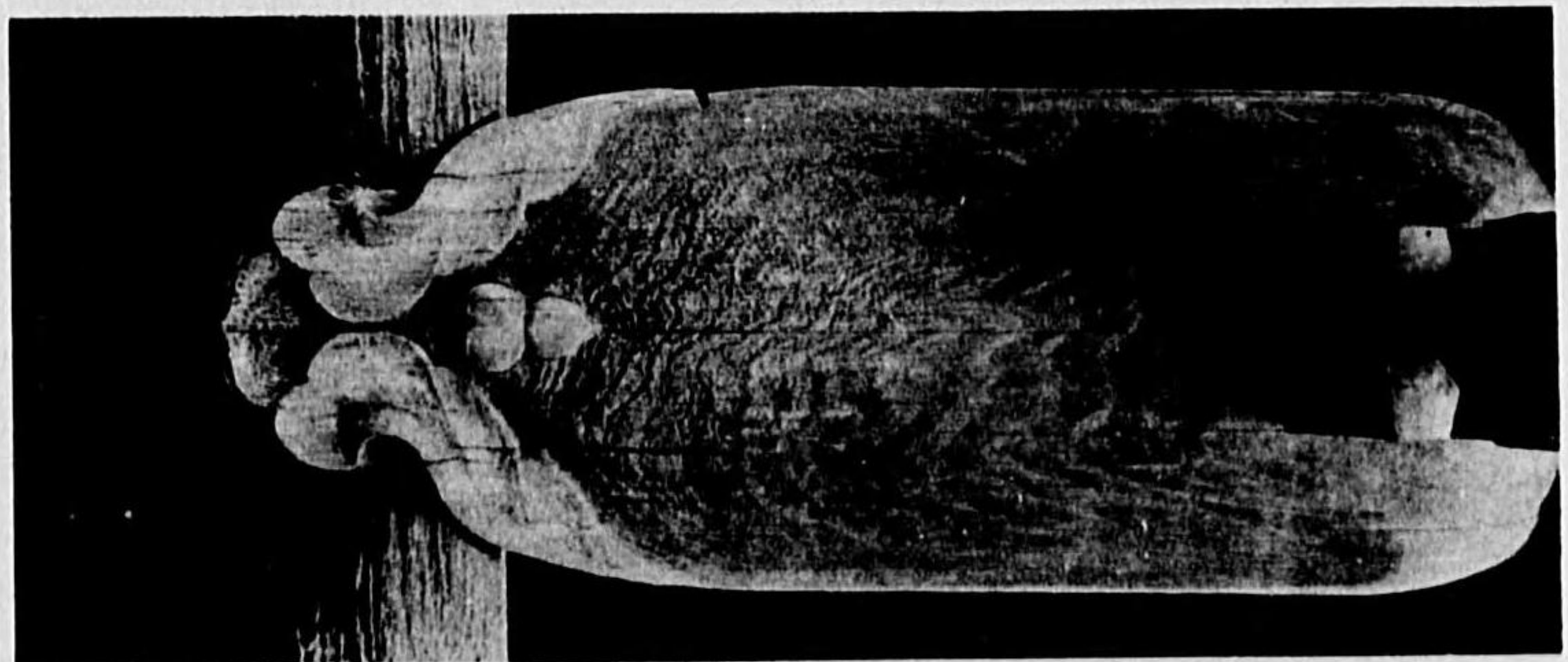
三三



三四



三五



三六



三七



三八

- 三六、金剛寺鐘樓妻大瓶東
〔昭和十四年七月二日〕
- 三七、高臺寺閉山堂大瓶東
〔昭和八年四月二日〕
- 三八、大徳寺唐門東妻大瓶東
〔昭和七年四月五日〕

大阪府南河内郡天野村天野山に有名な金剛寺といふ寺がある。此寺には國寶建築が七棟あるが、桁行三間梁間二間入母屋造本瓦葺腰付の鐘樓も亦其一で、時代は鎌倉であるが、少なくとも桃山時代に相當の修理が入つてゐる様である。三六の大瓶東も亦其一例で、様式上桃山と思はれる。

其形が唐様の柱の如くであるのは證據にならないかも知れぬが、結縮のところが葉化し始めた。即ち左右から若葉を向ひ合はせてゐるところは、これは鎌倉とは考へられない。近江大津の園城寺金堂附屬閼伽井屋正面の夫も、結縮が葉化してゐるの等は傍證にできると思ふ。其間どころへ大分飄箆に近くなつた猪目をつけてゐるところは、結縮全體を鰐魚の聯想から、斯様に取扱つたと思へなくもない。面白い考へで新機軸はたしかに出てゐる。

三七は京都市所在の、此も頗る有名な高臺寺閉山堂の大瓶東で、胴には大きく立派な鰐魚の「太閤桐」がつけてある。桐は大概五三か五七の様に心得てゐるのに、これは九五にしてある。此桐は新しい一錢銅貨についてゐるのと同じ様な形をしてゐる。つまりあの銅貨は桃山時代の太閤桐だから大に形がよろしいが、夫に比べると昔の明治時代の銅貨や新しい孔あきの十錢白銅の桐は甚だ拙い形をしてゐる。桃山時代には此種の桐は柱に裝飾として、或は又破風板に菊と交互に打つけて、同じく裝飾に實用せられた。

三八も亦、京都のみならず、其名遠近にひびいてゐる大徳寺の唐門で、一般には聚樂第の遺構といはれてゐるが、又異説もある。とにかく桃山時代代表的四脚門のである。其兩妻の虹梁も随分變つてはゐるが、大瓶東も亦其結縮のところが動物化して、猿頭にしてある。大した感心もできない様であるが、珍しい事は確かに珍らしい。江戸時代になると鬼にしたのがあるが(五四・五五)、夫等は多分この影響であらう。但し此獲は表だけ、裏はさうしてない。

- 三九 蓮花玉院南門中の間東側中央大瓶東南面 北面
- 四〇 同 北面
- 四一 同 西側中央大瓶東南面
- 四二 同 北面

(以上四圖共昭和九年六月三日)

蓮花玉院といふと、どこだかまどつくくかも知れないが、普通名稱は三十三間堂のある寺、これなら京都名所の一だから、知らぬ人はないであらう。

其南門に用ひてある大瓶東は、殆んど總て結綿が表裏——といつても何れが表で何れが裏か知らな

いが——で異なつてゐる。ここには僅に其二例を

示しただけだが、他は類推すべきである。

葦股や木鼻が表裏で異なつた彫刻をしてゐるの

はもつと古い時代からあり、私の知つてゐるので

は、前者は吉野時代、後者は室町時代に實例があ

る。夫等に比べると大瓶東のはおくれ、漸く桃山

時代になつてからの様である。尤も前者と雖も桃

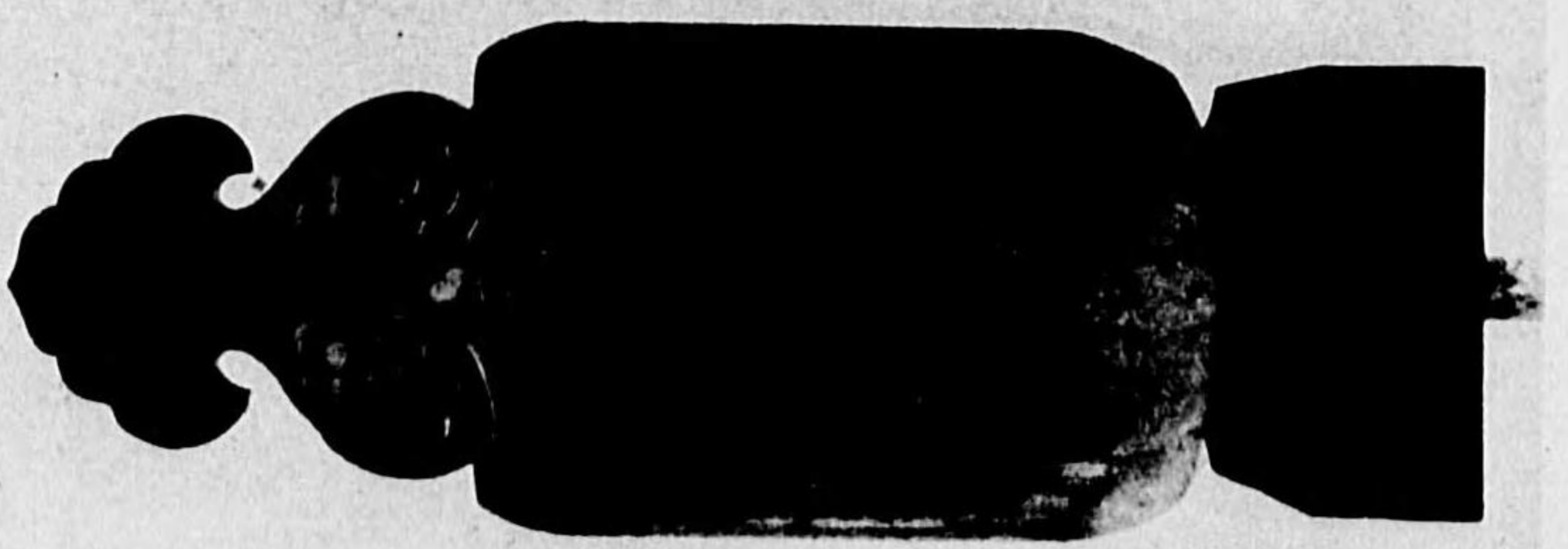
山位から盛になつてきたのであるから、大瓶東に

も古くあつたかも知れないが、例ひあつたにして

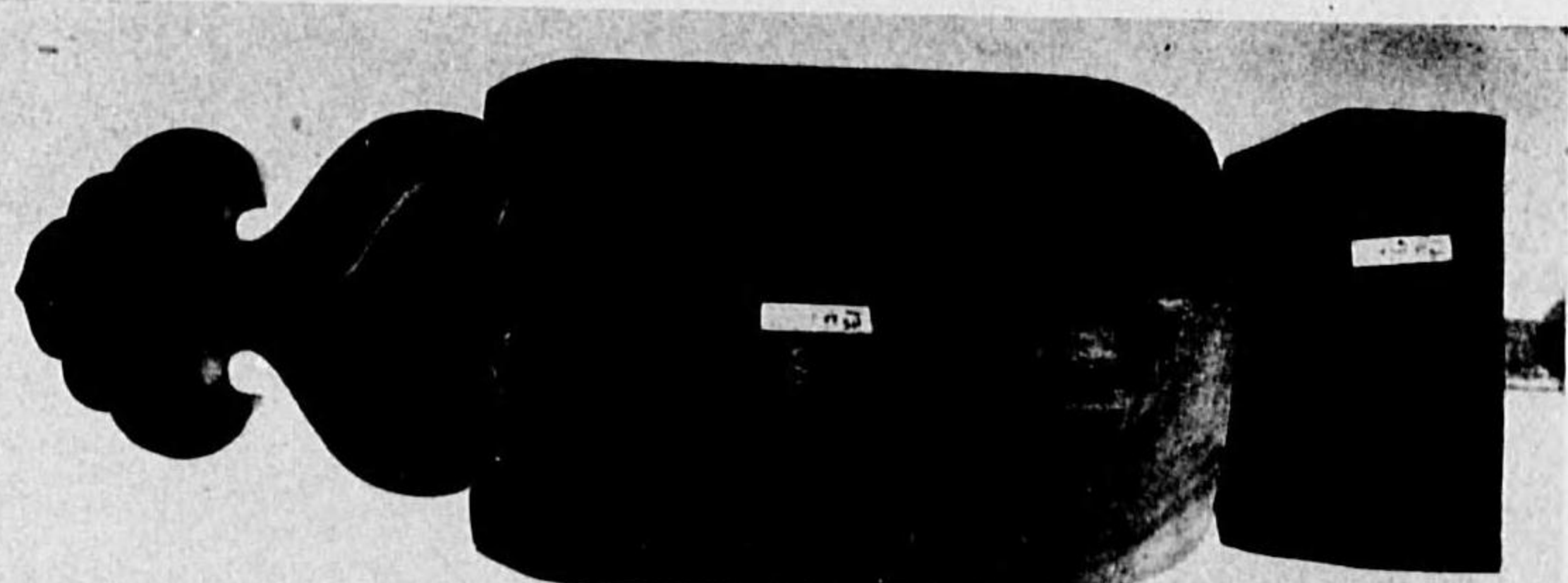
も極く僅かと思はれる。何れにしても桃山になつ

てから結綿は發達したといへばいへるが、別のも

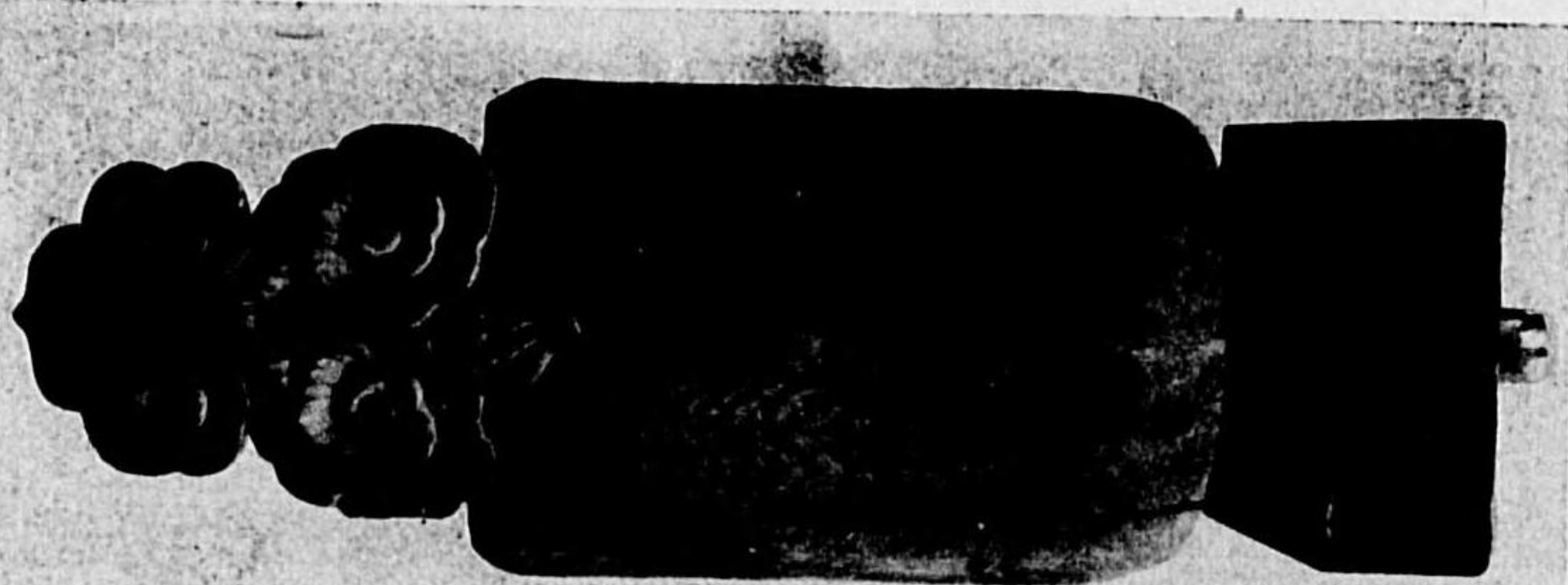
のを持つて行つてつけた様になつて了つた。



三九



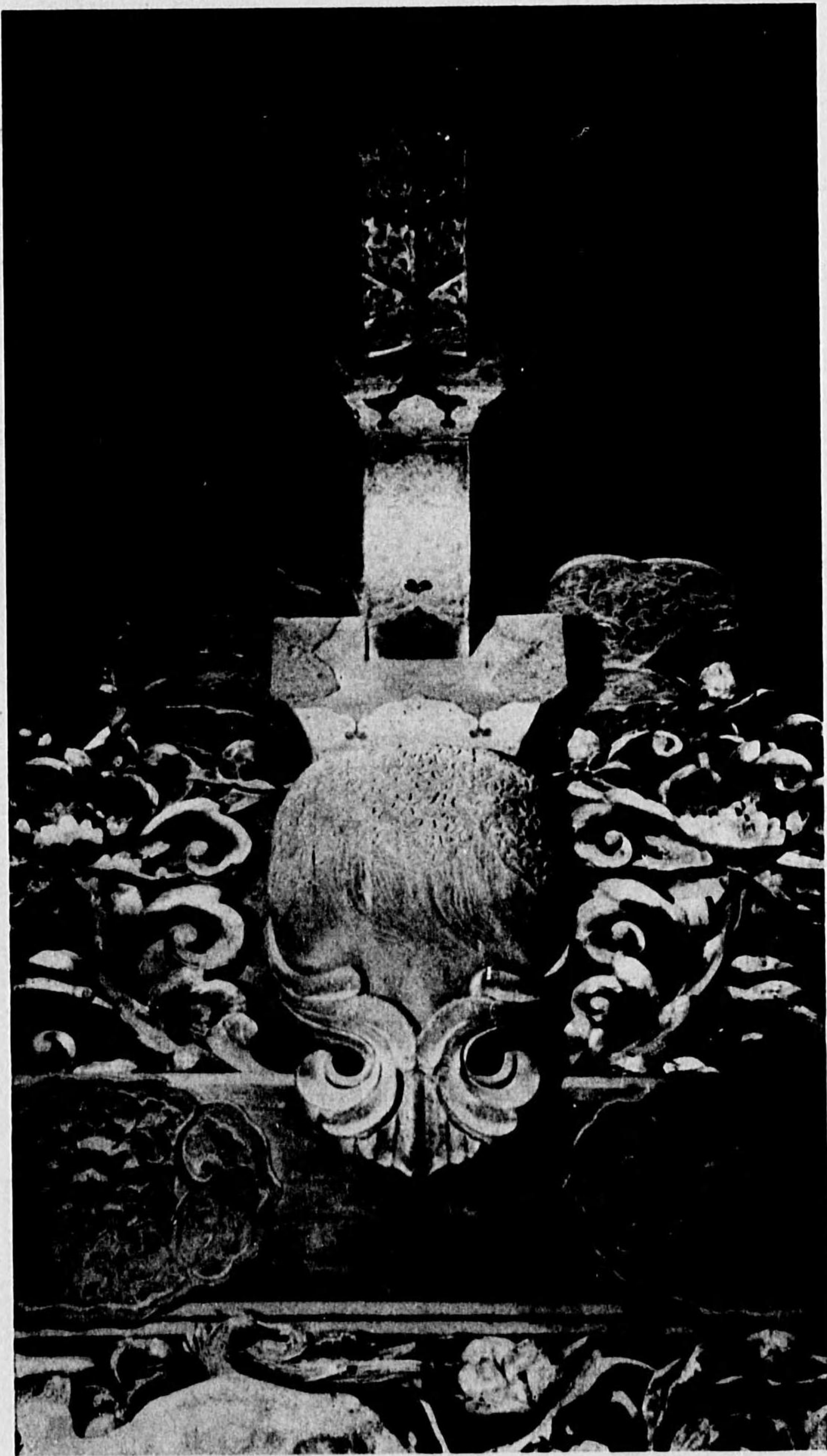
四〇



四一



四二



四三、恩賜元離宮二條城二之丸御殿唐門妻大瓶束

二之丸御殿は、二條城が慶長八年創建されたとき、徳川家康が聚樂第の建物を移したとも、又は寛永三年 後水尾天皇の行幸を仰いだ時、擴張に際し伏見城から移建したともいふ。此二之丸御殿には正面南向きに唐門があり、其唐門を入ると桃山時代の大書院造がある。

(昭和十六年十一月十四日)

唐門は大きな唐破風を前後にもった切妻造の四脚門で、隨所彫刻を充填し、極彩色を用ひ、又飾金具を盛に使用し、洵に善美を盡した堂堂たる建築である。冠木上には龍虎の彫刻を入れてあるが、龍には雲水を、虎には竹と梅とを添えてある。此等は何れも前代から相當に用ひられたものであるが、このうち虎の背景に用ひてある竹と梅とに松が添えてないところに注意するを要す。夫から牡丹彫刻があちこちに入つてゐる。妻のは圖に見る通り牡丹だけが、冠木上のは牡丹に揚羽蝶が飛翔してゐるところが彫つてある。揚羽ばかりではなく、蝶は餘り牡丹の花には來ないさうだ、がこの取合はせは鎌倉末位から臺股内の彫刻に賞用せられたので、尾道市淨土寺多寶塔の臺股を初め、あちこちに相當に實例がある。紅白大輪の牡丹の花に、クロアゲハは、誰人の注意も惹かずにはおかない。事實來ても來なくても、牡丹に配するのは當然である。ハナバチ等では始まらないのはいふまでもあるまい。

扱てまた室町時代頃からそろそろあちこちへ飾金具を打つて裝飾する様になりだしたが、桃山では一層劇しくなり、時にはうるさい程金銅の飾金具を打ち、極彩色のところへ金色燦爛たる金具で、とても美しいのである。今この唐門妻を一例とすると、圖でみる様に妻飾の虹梁大瓶束・木鼻・科栱・實肘木等は木の現はれてゐる部分より金具を打つてある面積の方が多い。そこで大瓶束のみを考へてみると、この場合さすがに第一流の建築家によりて計畫されたものと見え、其形も非常によろしい其葉化した結綿の形も取扱も申分はなく、全體としては雷懸魚の而も完好なる標本の如く、又其肩の所の透彫の飾金具の唐草も形も洵によくできてゐる。強ていへば束上の科の兩方へ出てゐる木鼻が、桃山式ではあるが龜の子が口を開いた様で、大して感心ができないだけの事で、當代稀觀の傑作である。

四四、醍醐寺五大堂内部繫虹梁上大瓶束

四五、妙心寺勅使門西妻笈形付大瓶束

四六、飯道神社本殿向拜笈形付大瓶束

(昭和三年十一月二十三日)

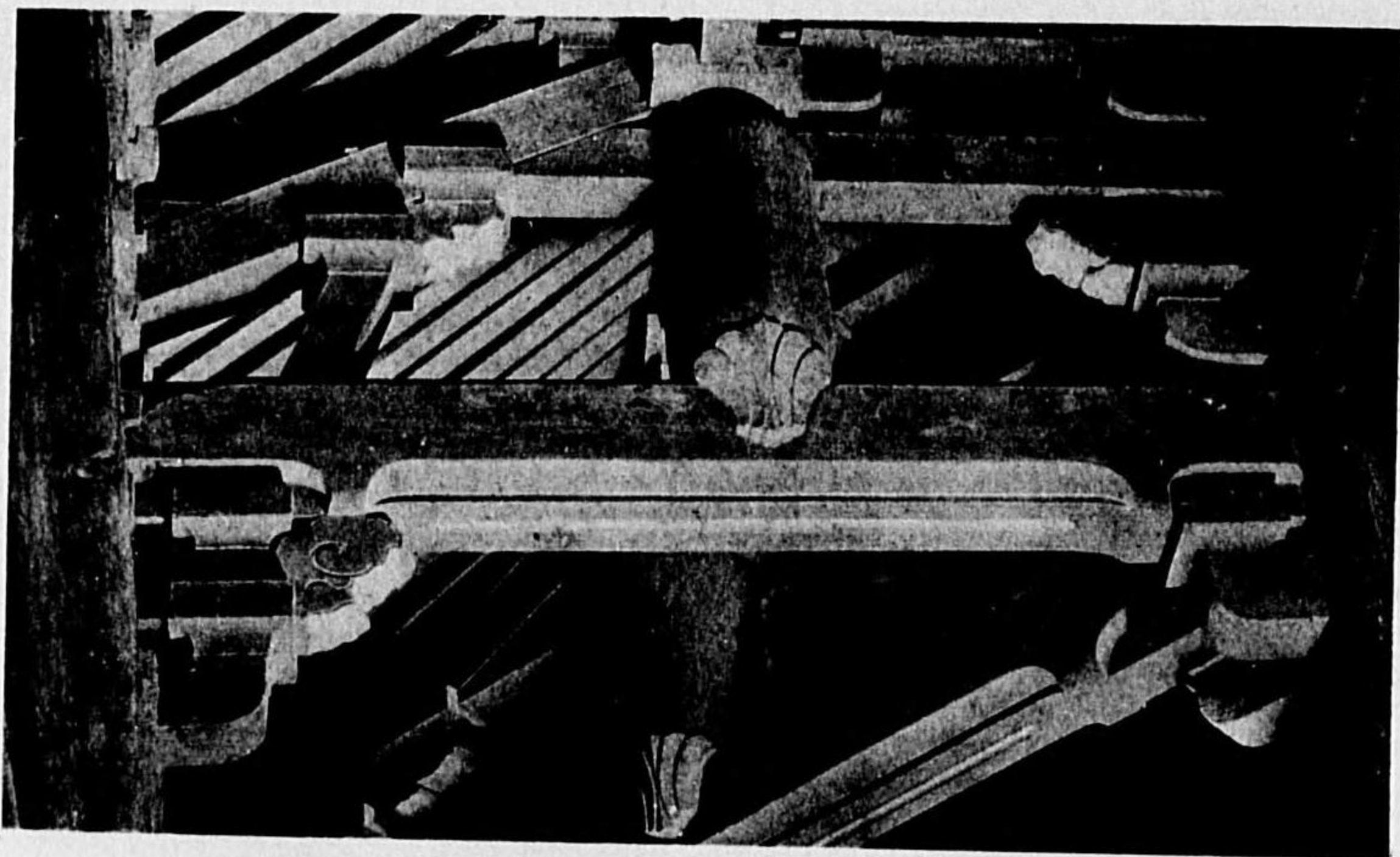
(昭和六年五月三日)

(昭和十年四月二十一日)

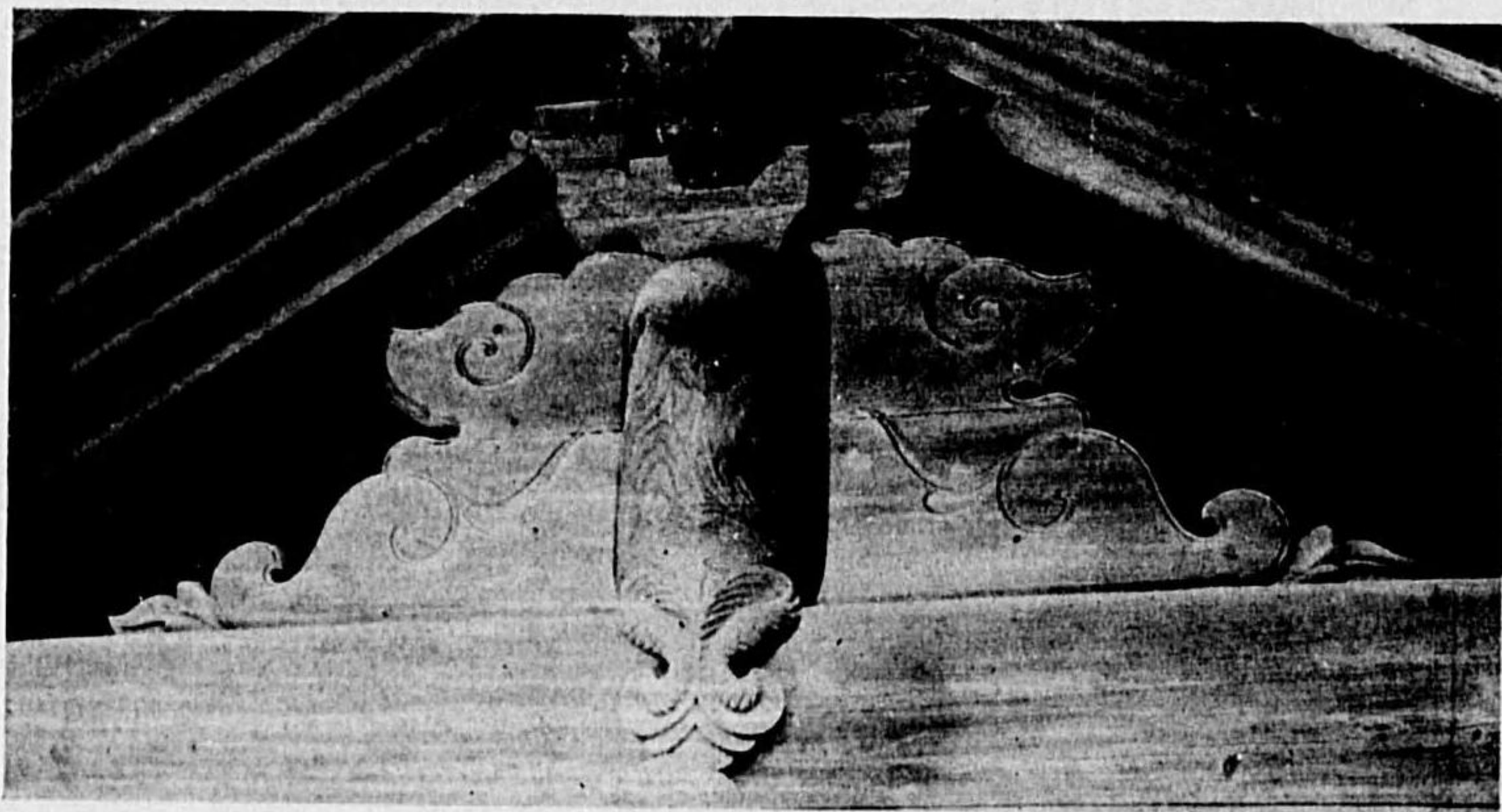
五大堂は上醍醐にあつた桃山時代の珍しい唐様建築であつたが、先年山火事の際あぶない所で助かつたのに、遂に昭和七年四月三日堂前にあつた護摩壇で、参詣人の焚いた護摩の火が檜皮葺の屋根に飛び、瞬時にして烏有に歸したさうだ。焼けてから一度も登山したことはないが、既に寺に關係のある工匠の手で再建され、昭和十五年五月に落慶供養の式があつたといふ。今どの様なものが出来てゐるか未だ見ないから知らない。従て何もかけないが、焼失以前の建築の一部は四四に示した通りで、これは主として大瓶束を見せるつもりである。木鼻や料栂の木口、繫虹梁の眉、大瓶束の結綿は黄土、其他の木部は丹塗にしてあつた。扨てこの結綿であるが、束の下部が虹梁に跨つてゐる部分に、若干の裝飾をしたのだといふ所はまるでなく、まるで關係のない別のものを、持つて行つてつけた様になつてしまつた。時代が降るに従ひ、漸くこの様に變化して了ふのだから困つたものである。

京都市の北隅、右京區花園町に臨濟宗の名刹妙心寺がある。其勅使門は慶長十五年の建立だが、切妻造の四脚門であり、此門に板葺股の様な笈形をもつた大瓶束が使つてある(四五)。前に圖示した大徳寺唐門の大瓶束もさうであつたが、これも亦上の方に裝飾に裂をかけた様な彫がしてある。間料束のこの様なのを葺束といふ例に倣ふと、こんなのを「葺大瓶束」とでも呼ばなければなるまい。さうして此場合は、其兩方には板葺股を縦に二等分してつけた様な、重苦しい笈形がつけてあり、其面の渦や若葉等、純然たる桃山時代を現はしてゐる。笈形としては珍例に屬する。結綿は懸魚形をなしてゐる。

飯道神社は滋賀縣甲賀郡雲井村大字宮町ではあるが、少しばかり山を登らなければならぬ、そこに方三間入母屋造、千鳥破風付、向拜には軒唐風付の賑かな建築として建つてゐる。長享年間再建といふも、大部分は桃山である。其軒唐破風の虹梁上大瓶束は四六の如き特殊の結綿を持つてゐる上に、笈形は牡丹の透彫に發達をしてゐる。輪郭は上圖と同じだが、かうすると全く別種の趣がある。



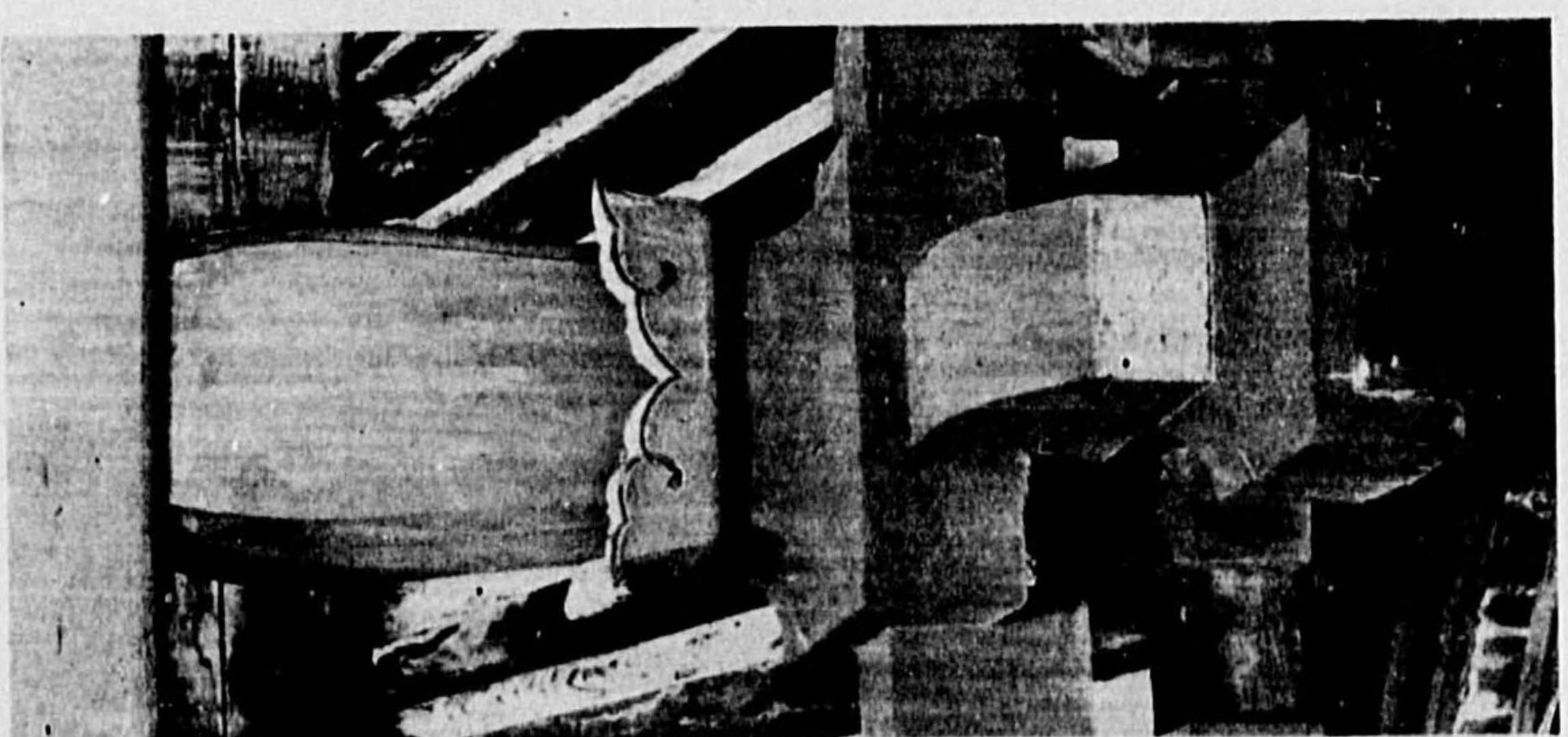
四四



四五



四六



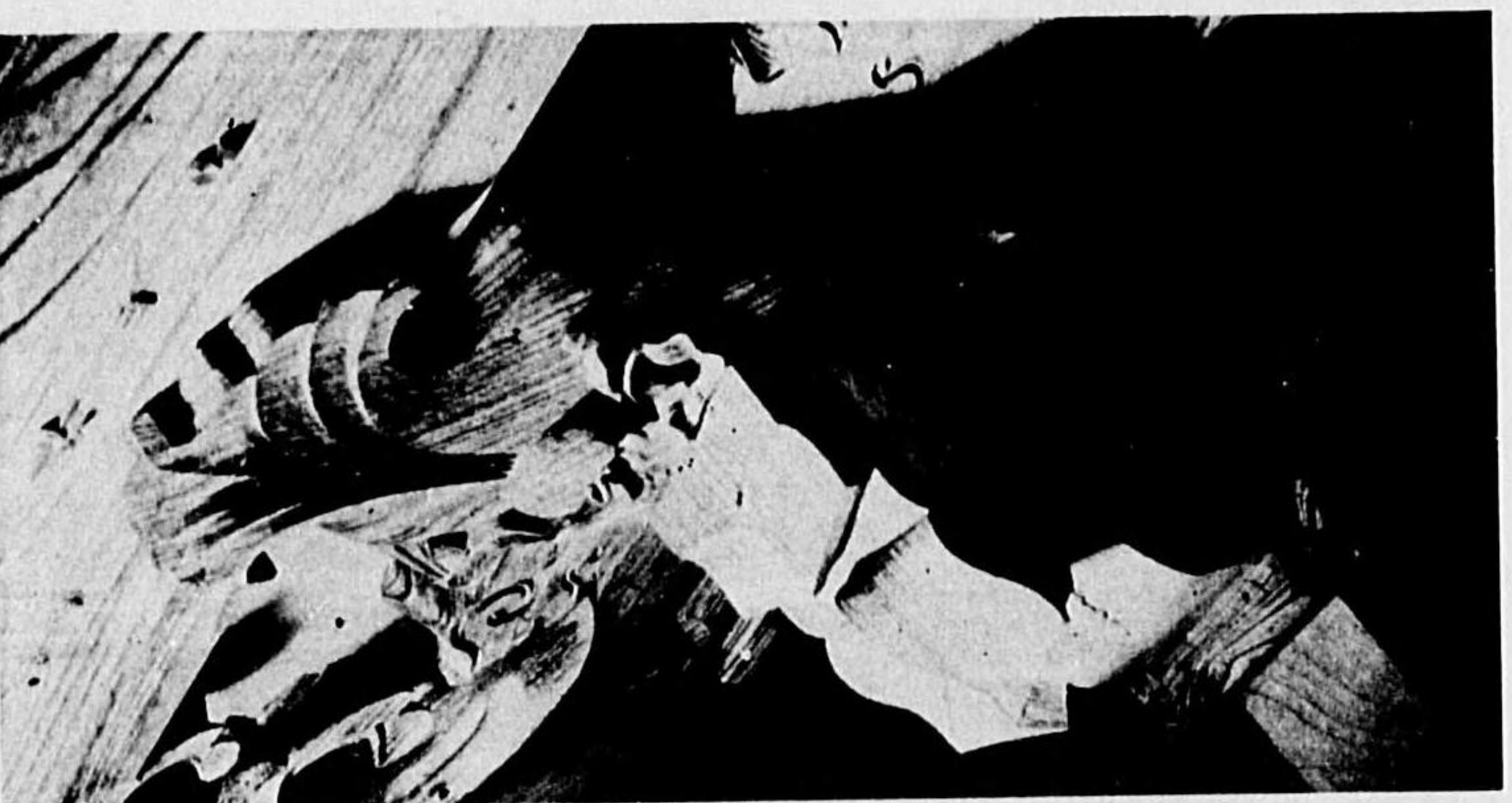
四七



四八



四九



五〇

四七、金剛寺本堂内陣裏東

(昭和十四年九月二十八日)

四八、同 妻大瓶東

(昭和十四年九月二十八日)

四九、五社神社拜殿妻大瓶東

(昭和五年三月十八日)

五〇、瑞巖寺女關

(昭和十一年八月一日)

天野山金剛寺本堂は鎌倉時代といふ事になつてゐる様で、ある書物には「構造形式は彼程優秀なものではない」(鎌倉の地)とある。併しこれは何かの誤りで、鎌倉時代のところもあるが、大部分は桃山時代の修補に成り、寧ろ鎌倉の所は少ない位である。

四七は外陣虹梁上に用ひてある裏東であるが、大瓶東となるべきものが成りそくなつたもの如く、洵に不思議な形をしてゐる。不退寺本堂内陣大虹梁上の、其外に下部がこぼれず、従て結綿を缺ける大瓶東の少し墮落した様なもの。ここでは大瓶東の中に入れておく。桃山時代。

四八は同じく本堂妻のもので、東下部に根巻きの様なものがあり、結綿は牡丹——菴・葉・花を併へた——化してつた。これに於いては東の終りが虹梁の外にでるので、そこを何とかうまく取扱ふために考察した最初の考へは全くなくなり、別のものを持つて行つてつたにして三九—四二の様な生やさしいものではなく、下から上を向けて鉢植の牡丹をぬいて根をきり去り、取つけたもの如く、随分ひどい取扱で、最初結綿なるものができた時の意味は全く忘れられてつたのである。

四九は五社神社ので、前例同様下から上を向けて、平行業脈の草花を取りつけたもの、結綿としては美しいが、無意味なることは前同断。此神社は大阪府三嶋郡高槻町にある。

五〇は有名な松嶋瑞巖寺本堂女關の正面に向つてゐる入母屋破風の飾なる大瓶東であるが、ま正面からでは三花縣魚が邪魔になつてどうしても寫眞がとれず、止むを得ずこの様な横からので間に合せておいたのである。結綿は諸懸魚そっくりである事に注意せよ。これなら前二例の様な無意味なことはないのみならず、形もよろしい。夫から最も珍しいのは上部、即下から一點に集合した曲線のとめに金襴を陽刻してあることである。下からは菖蒲の花様に見えたので、金襴とは思へなかつた。

五一、金戒光明寺鐘樓東妻大瓶束

五二、崇福寺媽姐堂門大瓶束

五三、大猷院廟拜殿軒唐破風大瓶束

金戒光明寺(コンカイコウミョウジ)といふのは黒谷の事である。この鐘樓は今新築中の本堂に向つて左手に、此寺で現在最古の阿彌陀堂に相對してゐる。元和八年頃の建立といふ。元和だから桃山式の大瓶束が用ひてゐるのは當然だが、其左右、柱と虹梁とで出来てゐる直角三角形の部分を充たしてゐる牡丹唐草をどうみるか。

五一に於いて、大瓶束が桃山式なる事は別に記さないでも、最早明瞭であらう。所で其兩方の牡丹は、よく観ると束の兩肩のところから出てゐるから、左右に伸び過てはゐるが、これは笈形の發達したものと考へた方がいい様である。笈形が桃山時代に牡丹唐草になつた例は飯道神社の夫に示したが、更に京都では西本願寺飛雲閣船入の間、大唐破風下の夫の様に、随分思ひ切つて發達したのもある。だからこれ位になつたとて、別に珍しい事はないが、場所の關係上横に長いのが大に目立つのである。

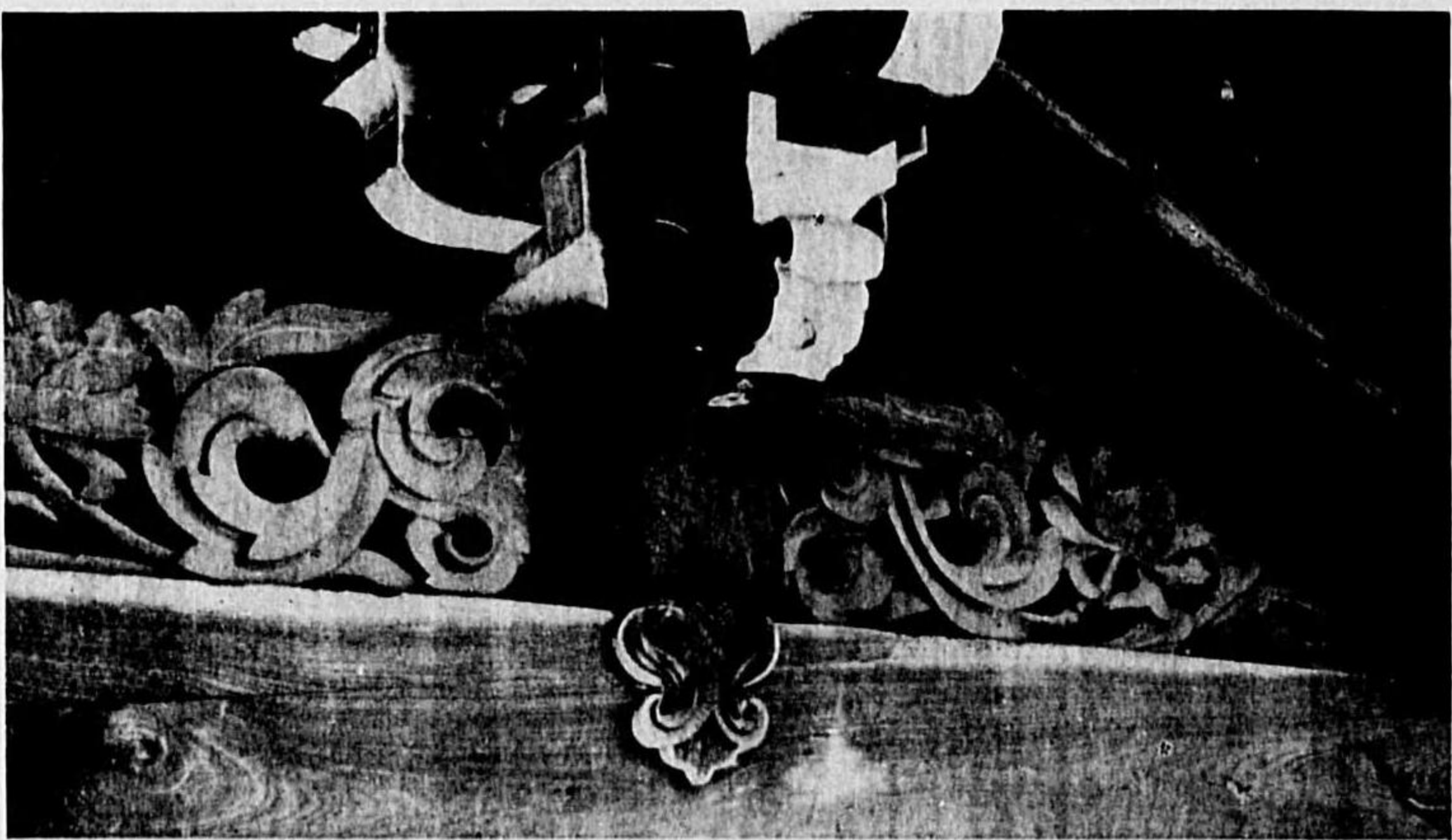
五二のは束が短い割に、甚だ要領を得ない曲線の輪郭をもつてゐる木鼻が、大きく無遠慮に前後左右に突出し、其結綿は大根か茶を植えた様で、兩端のは葉の裏が見え、中央のは表を見せるため、凹んでゐるからどうも拙い。崇福寺は長崎市にある謂はゆる「唐寺」で、福濟寺と共に明(ミン)式建築として有名である。媽姐(メツ)堂といふのは、海神をまつた堂で航海の安全を祈願したといふ。江戸時代のものだから、勿論大したことはないが、大瓶束のうちには、斯様なものもあるといふ例に圖示したのである。

五三は日光大猷院廟の拜殿正面軒唐破風の大瓶束で、其結綿も随分妙な形をしてゐるし、どうも感心できない。束其物は前の方に餘り大きな木鼻を出してゐるため、唯さへ短い束はこのせいで愈よ短く見え、木鼻の下端と結綿との間がおそろしく窮屈となり、束は全く木鼻に負けて了ひ、あつてもなきが如き有様になつてゐる。これは何とかもう少し形を考へたらばよかつたらうにと思はれる。虹梁は花狭間つなぎの様な幾何模様を彫つたから、立派にはなつたが虹梁としては面白くなり、又束の兩脇は桐に瑞鳥(鳳凰)の彫刻を以て充填してある。

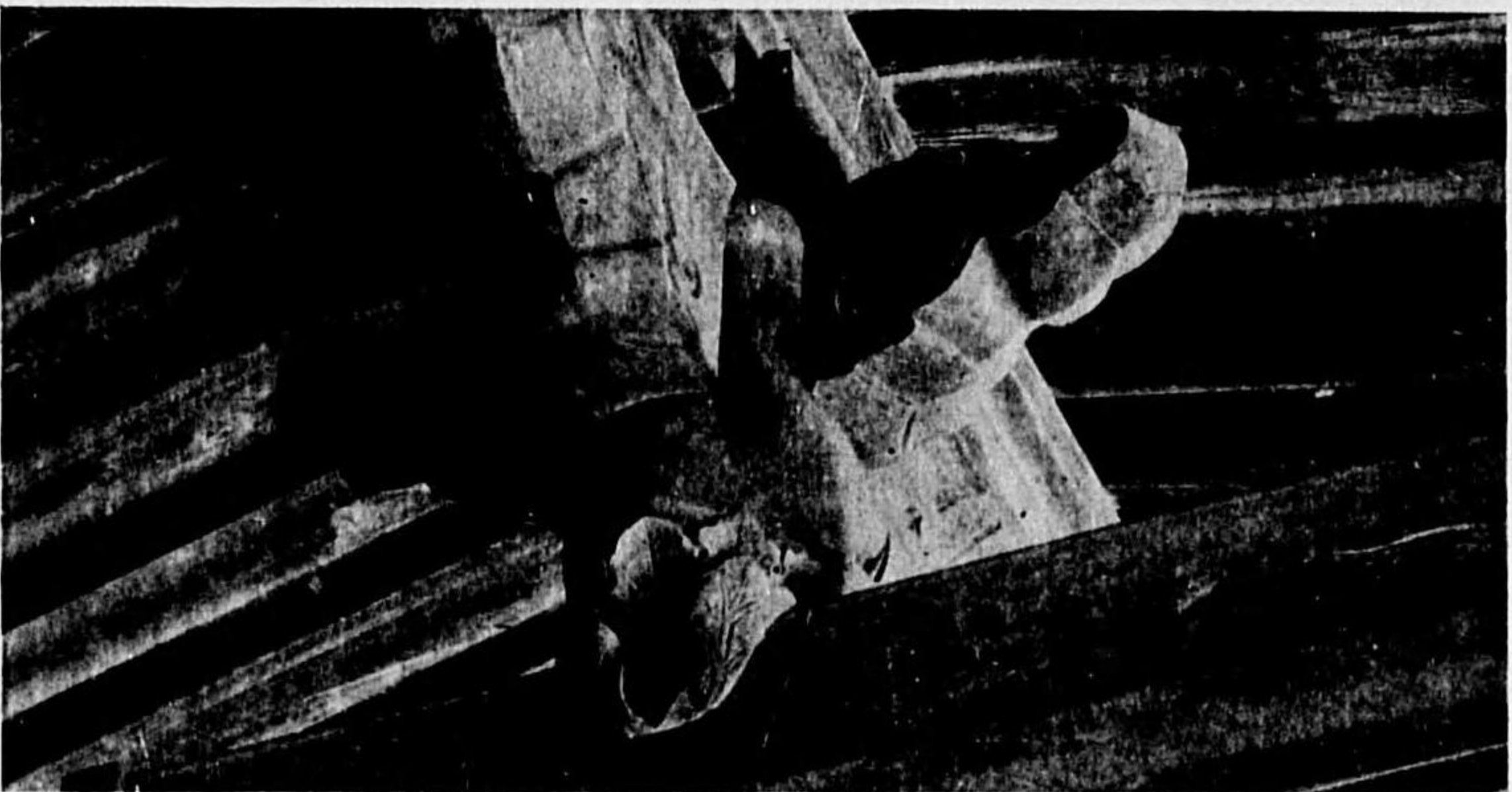
(昭和十四年二月二十二日)

(昭和三年三月三十七日)

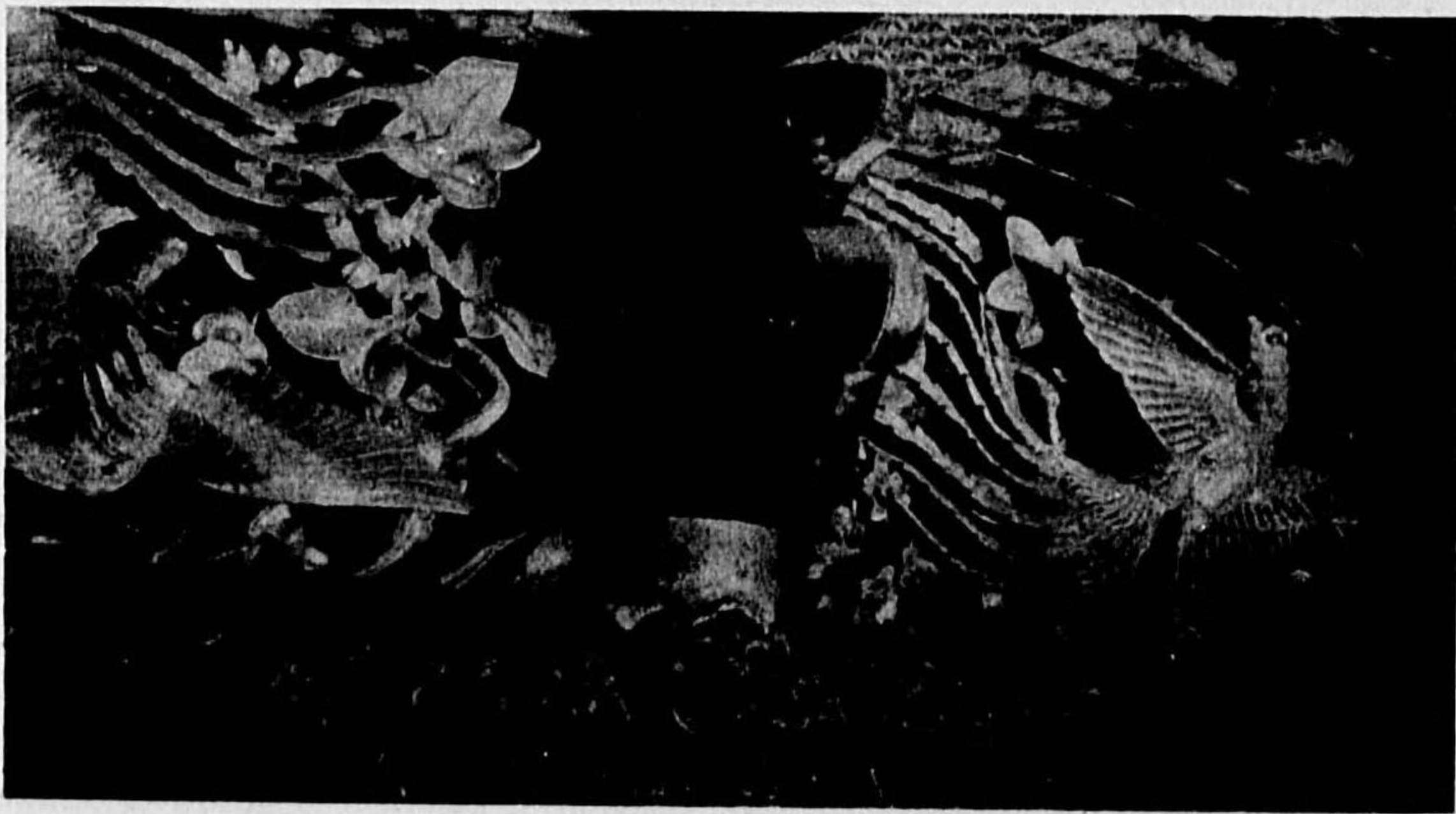
(昭和八年七月二十五日)



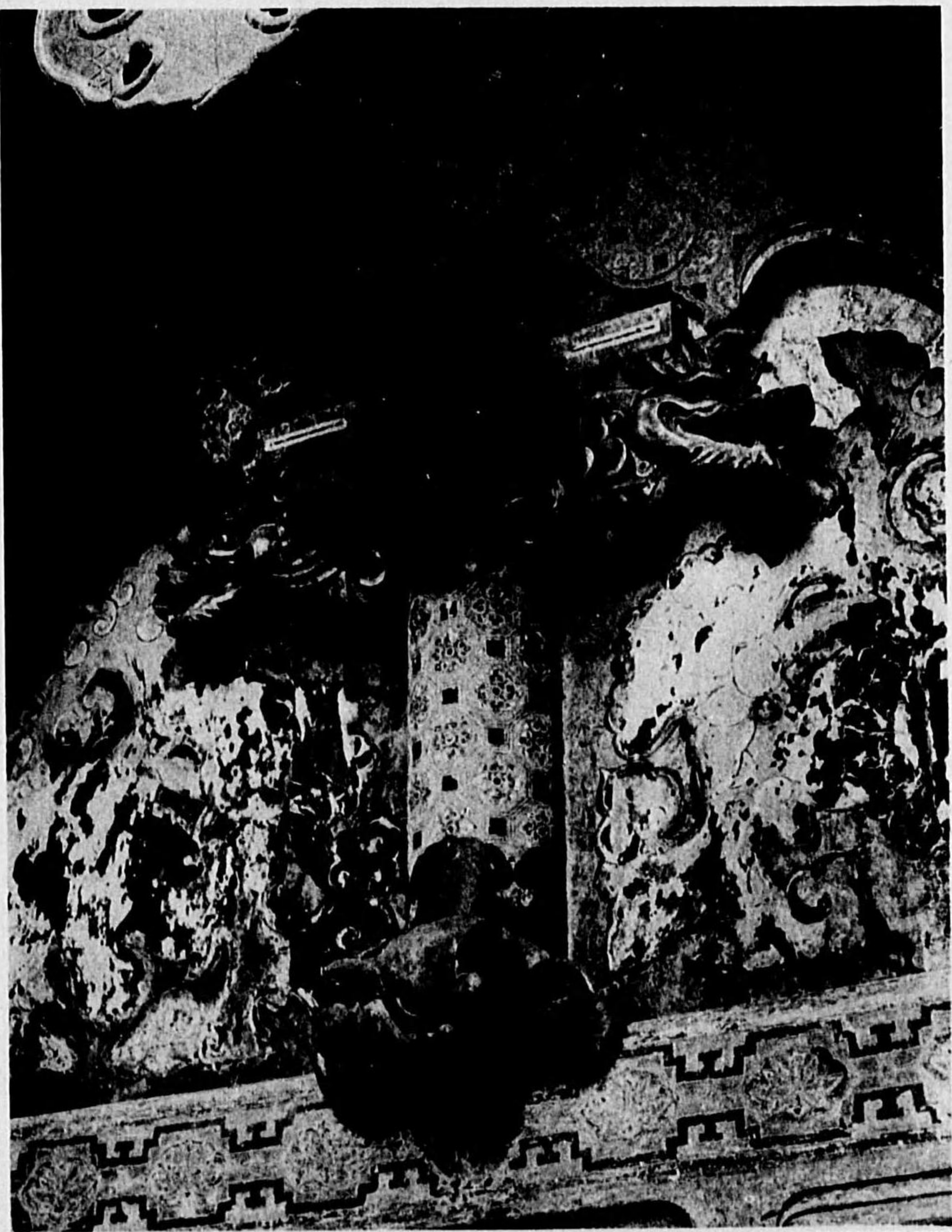
五一



五二



五三



五四、日光東照宮上神庫北妻大瓶束

(昭和八年七月二十五日)

五五、信濃善光寺本堂正面軒唐破風笈形付大瓶束

(家藏寫眞複寫)

日光東照宮上神庫といふのは、陽明門前の石段の下、經藏と相對して建つてゐる。切妻造で南妻には大きな半肉象が向ひ合はせにつけてあるが、北妻には象はなく、且つ石段上の高地から妻の部分がよく見える。五四はそこらとつたもので、ここでは大瓶束が半圓櫓の如く、或はこれでは大瓶束といふ名がつけられないかも知れない。其下の虹梁も實は虹梁ではなく、ただ下の方を肩形に削り、さう見せただけである。夫で先づこれを大瓶束と假定して、結綿に當る所は下向きに鬼の首をつけたのである。もうこの様になると、新機軸である事は確かだが、墮落大瓶束の好標本位にしか思はれない。

此に比べると、五五は結綿の鬼が虹梁の上端に喰ひついてゐるのだから面白い。鬼が俳句の宗匠の様な帽子を冠つてゐる様に見え、そこへもつて來て雲臺股の様な笈形を兩方につけてゐるところは、鬼が雲中から首だけだしてゐる様で、上圖より餘程愛嬌があつてよろしい。

*

*

*

*

*

*

既に大徳寺唐門の大瓶束の結綿が動物化して獾となつてゐるのの解説に記した通り(三八)、江戸時代に入りて(或は桃山から)獾が鬼となり、この様なものができたと考へられる。未だ探したら他にも實例があるかも知れないが、今の所私はこの二例しか知らない。大猷院本殿内部にも、善光寺式の角の生へた鬼が虹梁にかみついてゐるが、夫は大瓶束の結綿ではない様だから實例にはなりかねる。

五六、善光寺大勸進向拜虹梁上笈形付大瓶束

(大正十四年七月二十七日)

五七、室生寺表門(藥齋門)笈形付大瓶束

(昭和五年四月二十七日)

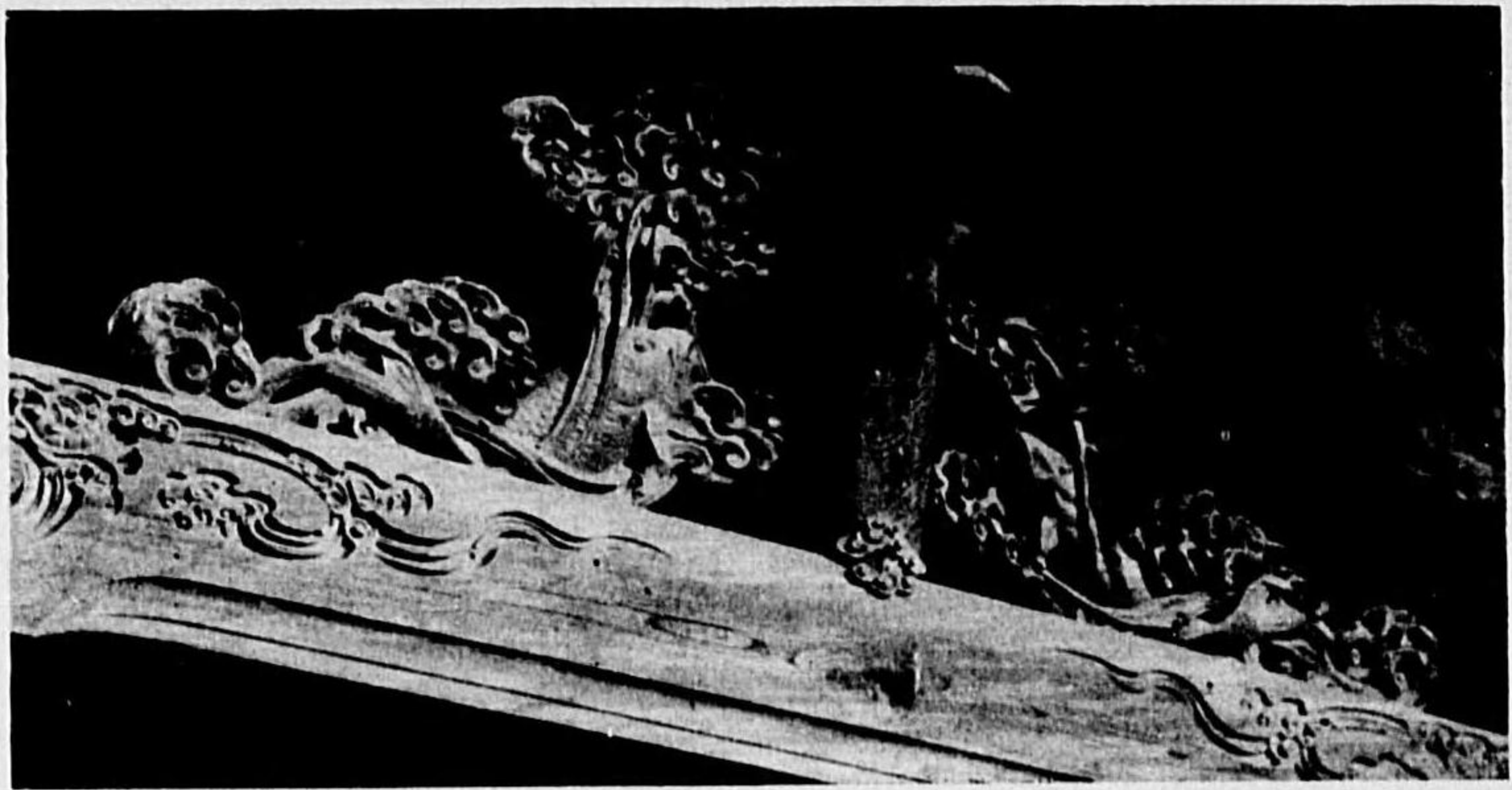
五八、金戒光明寺三門西妻笈形付大瓶束

(木下助三郎氏)

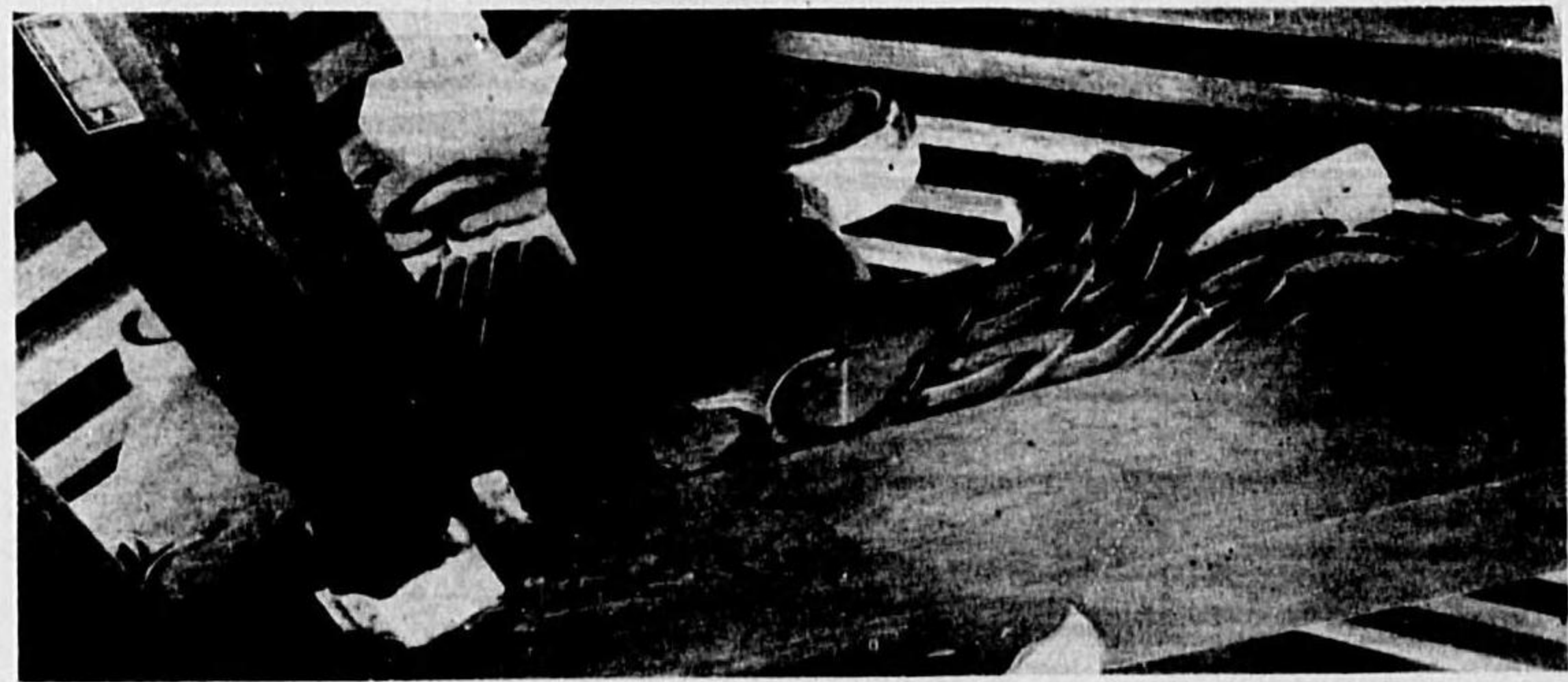
私は信濃善光寺中大勸進に於いて世にも不思議な笈形付大瓶束を見たので、早速寫眞にとつておいたのが、圖らずも滿十八年後に初めて役にたつた事は喜ばしい。五六は即夫で、大瓶束の結綿は謂はゆる「結綿」となり、浪臺股式笈形は、前例の様に單に浪だけでなく、「鯉の瀧登り」に進化したのである。虹梁の袖切の部分にある渦文又は若葉は、ここでは液體化して水流となつてゐる。見様によつては大瓶束の上のあたりから、瀧が落ちて流れ流れて溪流となり、大きな鯉が勇敢に其瀧を登つて行くところを彫刻し、着想の妙と技術の優秀とを天下に誇示し、同時に建築物に水及び水中の動物を刻して火伏せの呪禁としたので、正に一石三鳥を狙つたのかも知れない。

五七・五八は實によく似たもので、共に江戸時代の典型的笈形付大瓶束である。建築が京都の町——尤も此門のできた萬延元年頃は、あたりは田か畠位であつたらうが——の中にあらうと、大和の交通不便な山の中にあらうと、どうしてかく迄似てゐるかといふと、それは大工の六韜三略虎の巻なる雛形本にこの様な手本が出してあり、夫をまねして造るから、換言すれば元が同じだから、できたものが同じなのが當然である。以上三つ江戸式の拙い例。

要するに笈形は臺股に出發し、臺股に終つてゐる。臺股は支那にも朝鮮にもあるが、我國に於いて最も發達進歩をした。そして夫を縦に二分して大瓶束の兩方につけ、天下一品の裝飾束を案出したと見られるのである。



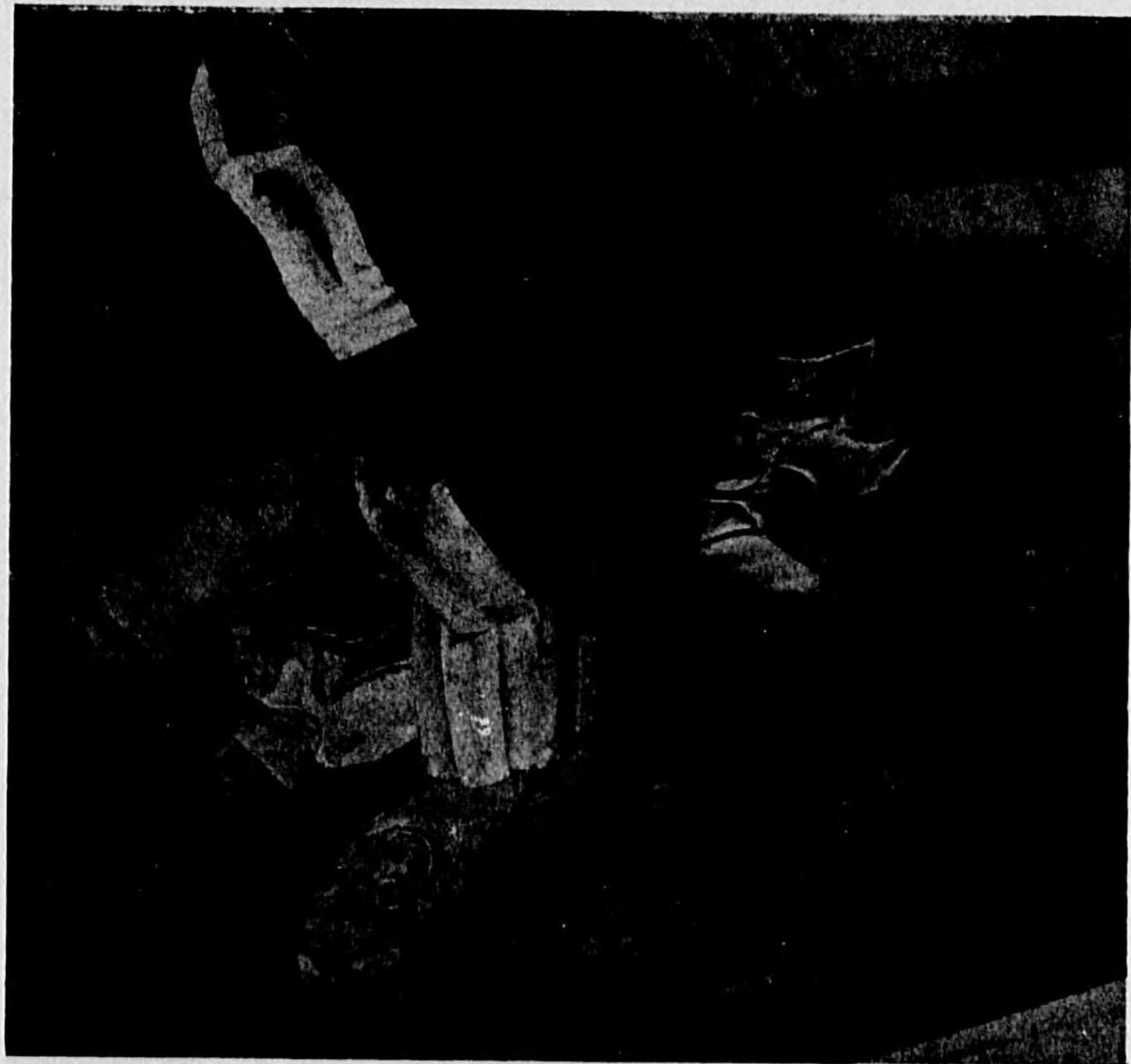
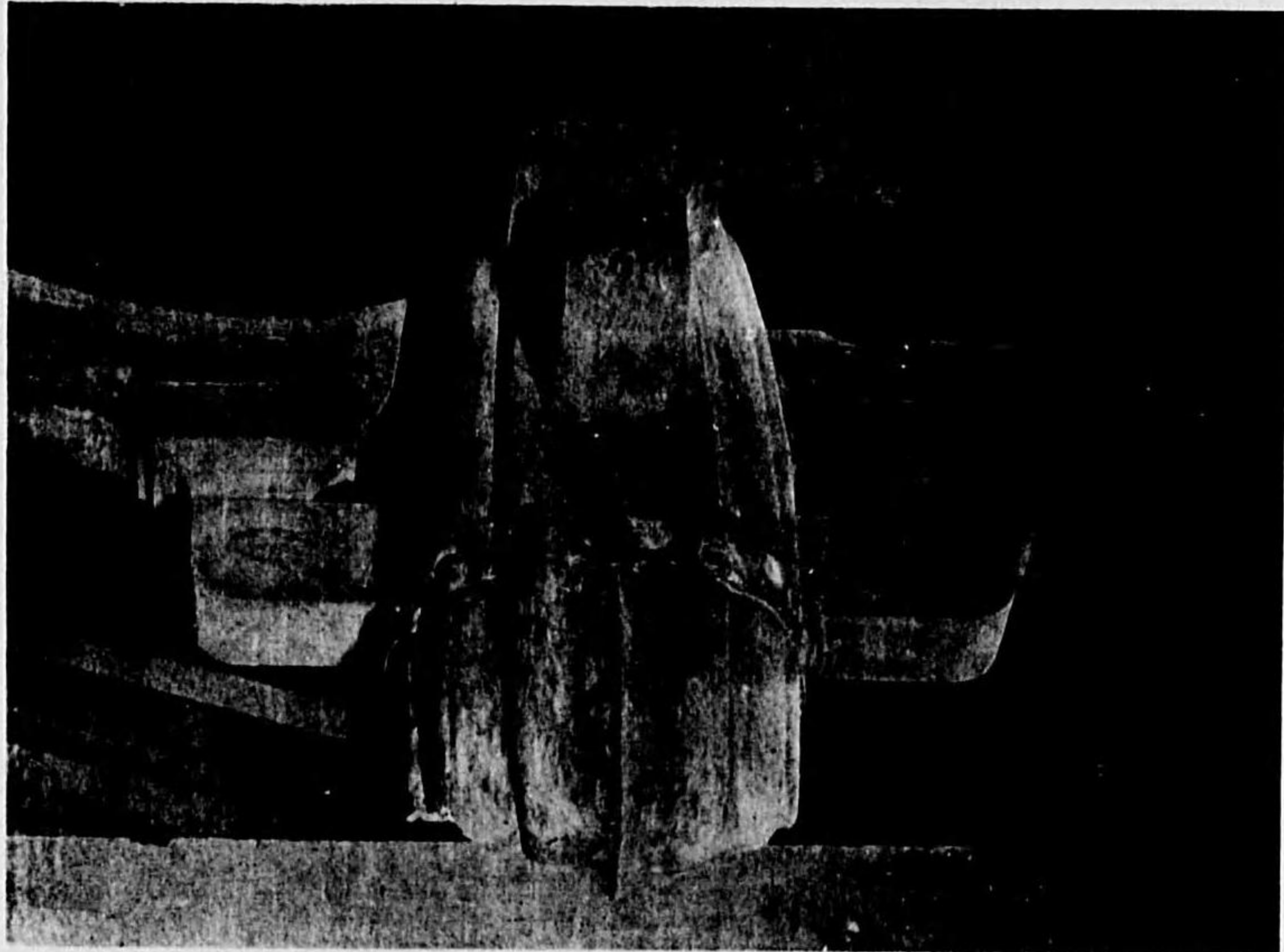
五六



五七



五八



五九、福濟寺本堂内部大瓶束

六〇、同 前堂廻廊大瓶束

(昭和三年三月二十八日)

(昭和十一年八月二十一日)

長崎市には現今支那式の建築をもった寺、あの邊で「唐寺」といつてゐるのに有名な四ヶ寺ある。崇福・聖福・興福・福濟の諸寺で、聖福寺を除いた他の三ヶ寺には國寶建築がある。何れも支那式だから随分趣は我國の寺とは異なつてゐて、總て宇治の黄檗山萬福寺の末寺になつてゐる。その各寺の建築が支那式である事は、到底萬福寺の比ではない。

此所に圖示したのは福濟寺本堂及び前堂廻廊の一種異様の束である。殊に後者は臺の上に乗つてゐるから一層變つて見える。此等は未だ形がいい方で、前堂の三重虹梁の上に立つてゐる五本の束のうち、最下の分はもつと下が開き、もつと面白い形をしてゐる。此等は何れも大瓶束といふ名で呼んでいいかどうか知らないが、大體形がさうなつてゐるので、便宜このうちに分類しておいた。日本を標準にしていふと支那變種とでもいつたらよからう。

東
間料東
養東
大瓶東

一覽表

飛鳥時代………	長方形無裝飾。間料東。
奈良時代	前期………同。 後期………同。
平安時代	前期………間料東。 後期………同。
鎌倉時代	和様……… 同。下方少しく兩方に開いたもの、又は開いて内方に反り撥形となったものがあった。間料東の兩方に唐草をかいたもの、又料尻の下即東上方に裝飾を刻みだした「養東」(ミノヅカ)と呼ぶものができた。稀に普通の束を裝飾に用ひた。 天竺様……… 長方形の間料東が一種あったが、これは天竺様か或は和様が混入したのか不明。虹梁上には「圓束」を用ひた。 唐様……… 料拱は詰組故間料束はなし。虹梁上には「大瓶束」。
室町時代………	養東の養は大に發達し、其部にいろいろのものを刻んだりした。間料束の兩方に彫刻をつけたり、大瓶束に「笈形」をつけたりした。
桃山・江戸時代………	間料束の兩方に彫刻あるものは前代の繼承。大瓶束の結締が鬼形化・植物化・動物化したもの、其兩面彫刻を異にしたものがあった。又飾金具を打ったもの、繪を描いたもの等もあり、笈形は發達し過ぎて墮落した。養東と大瓶束と折衷したものや特殊形式の大瓶束があった。

墓 股

一八九

一、東大寺轉害門臺股

(昭和六年十一月十六日)

二、唐招提寺講堂臺股

(飛鳥園)

三、法隆寺傳法堂臺股

(昭和十四年八月二十四日)

四、法隆寺東大門臺股

(昭和八年五月十二日)

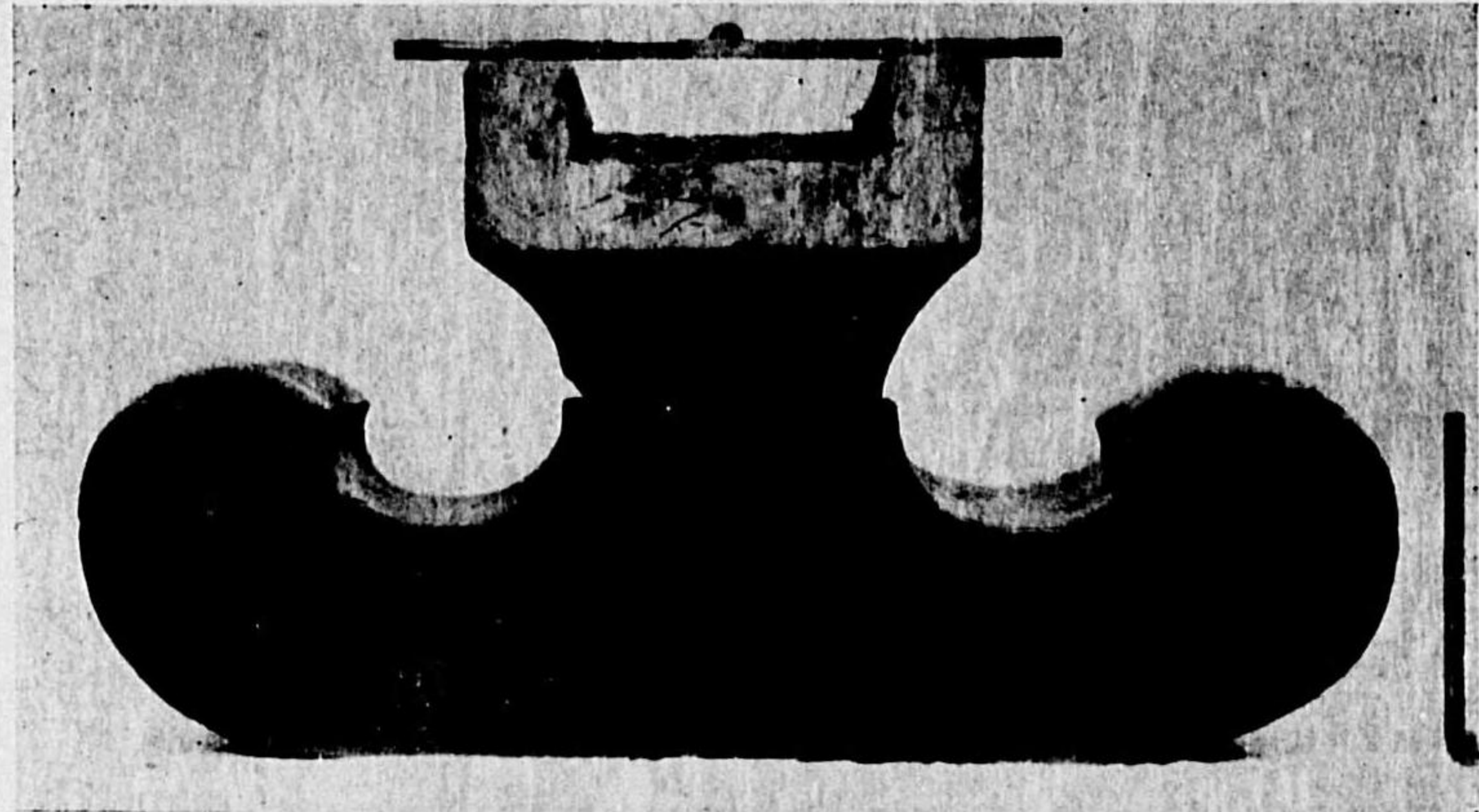
飛鳥時代

飛鳥時代に臺股の有無は未詳である。法隆寺金堂及び中門勾欄地覆下腰組間のは、臺股とみるよりは割束と考へた方がよろしい。割束を内方に反らせればあれができるし、また臺股が料拱間に用ひられた實例は、遺物によると平安後期以後の事である。旁今日臺股と呼ばれてゐる建築彫刻は、奈良時代以降とした方がいい様である。

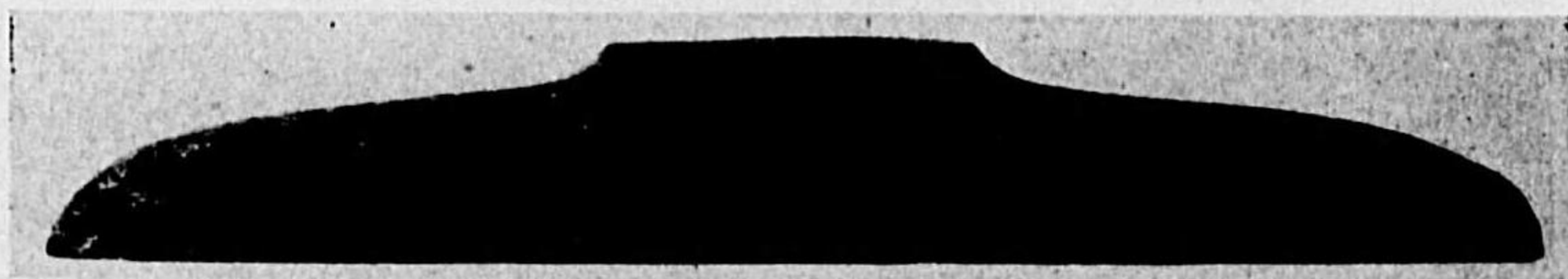
奈良時代

臺股といふ名稱はいつ頃から起つたものか知らないが、恐らくさう古いことではあるまい。といふのは割抜いた臺股の輪郭が、恰も蛙が兩脚をひろげた様だといふところからでたらしい、だから此種の臺股が初めて現はれた平安後期以降の命名と思はれる。果して然らば奈良時代の等は全部謂はゆる「板臺股」で、而も高さより厚さの方が多いのだから、其様な名は絶対に當らないが、他に適當な名稱がないから此に従つておく。

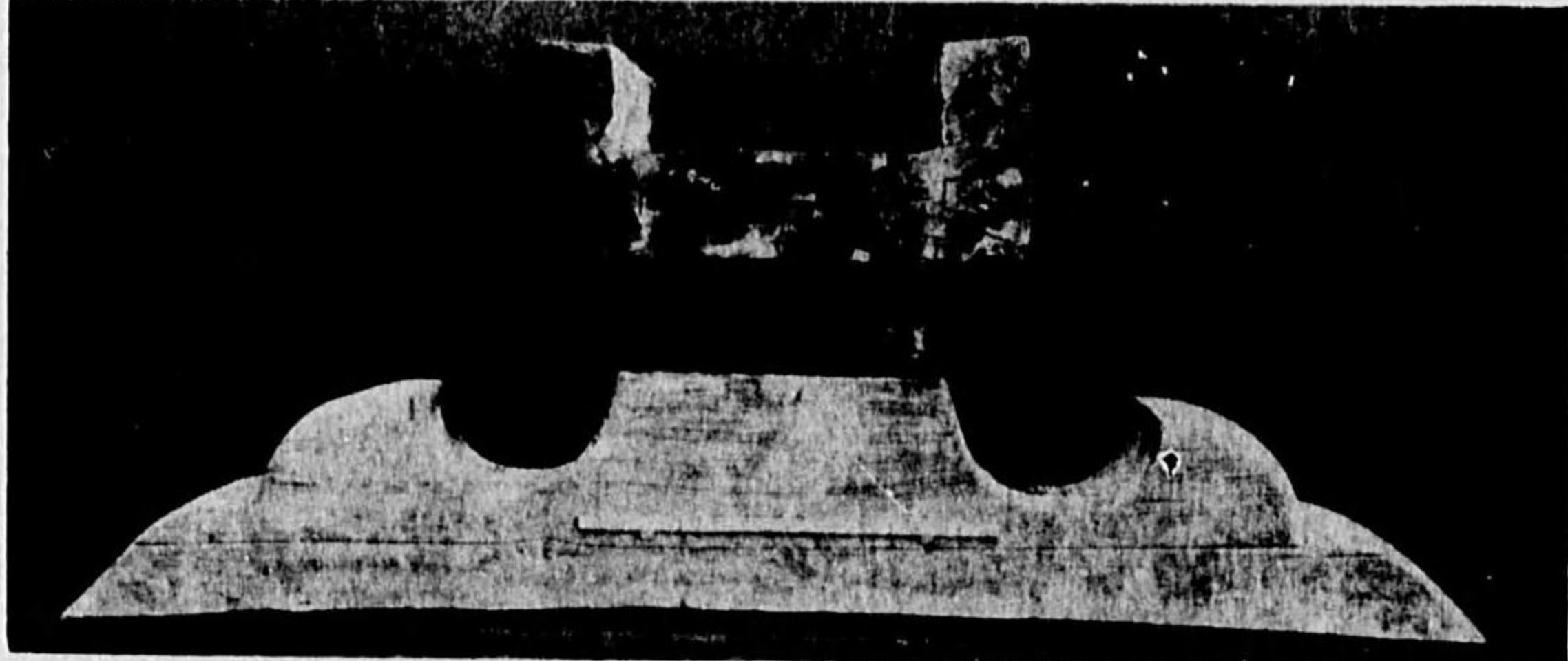
此所に圖示した四個の奈良時代臺股の内、二は少しく形を異にしてゐるが、残りの一・三・四は、少し考へてみると皆一つ形からできる、即一から他へ容易に變化し得る事が判るであらう。例へば一の兩端の外側曲線の中頃から下方へかけて簡單な附屬木片がつけば三になり、又は二の上の角から外側に向つて削り取れば直に四になる。又三の下の向きの茨から下を内方に向けて曲線形に削るか、或は四の上の角から内方へ向けて同じ方法をとれば、直に夫れが一になり得る。又二は特に簡單で異形の様には思はれるが、三或は四の料尻のところから兩端に向けて、緩い浪形曲線を引けばできる。一は少し工合がよくないが、同じ方法で出来ない事もない。斯様に研究してみると、此四つは一見全然異つてゐるが、よく観ると皆同じになる。だから奈良臺股は大體同性質と思つてよろしい。上の料の木口が總て臺股と直角に置かれてある事、即ち「木口料」に注意せよ。物差は一の右の分曲尺の一尺、三・四は曲尺の約一尺(一呎)。



一



二

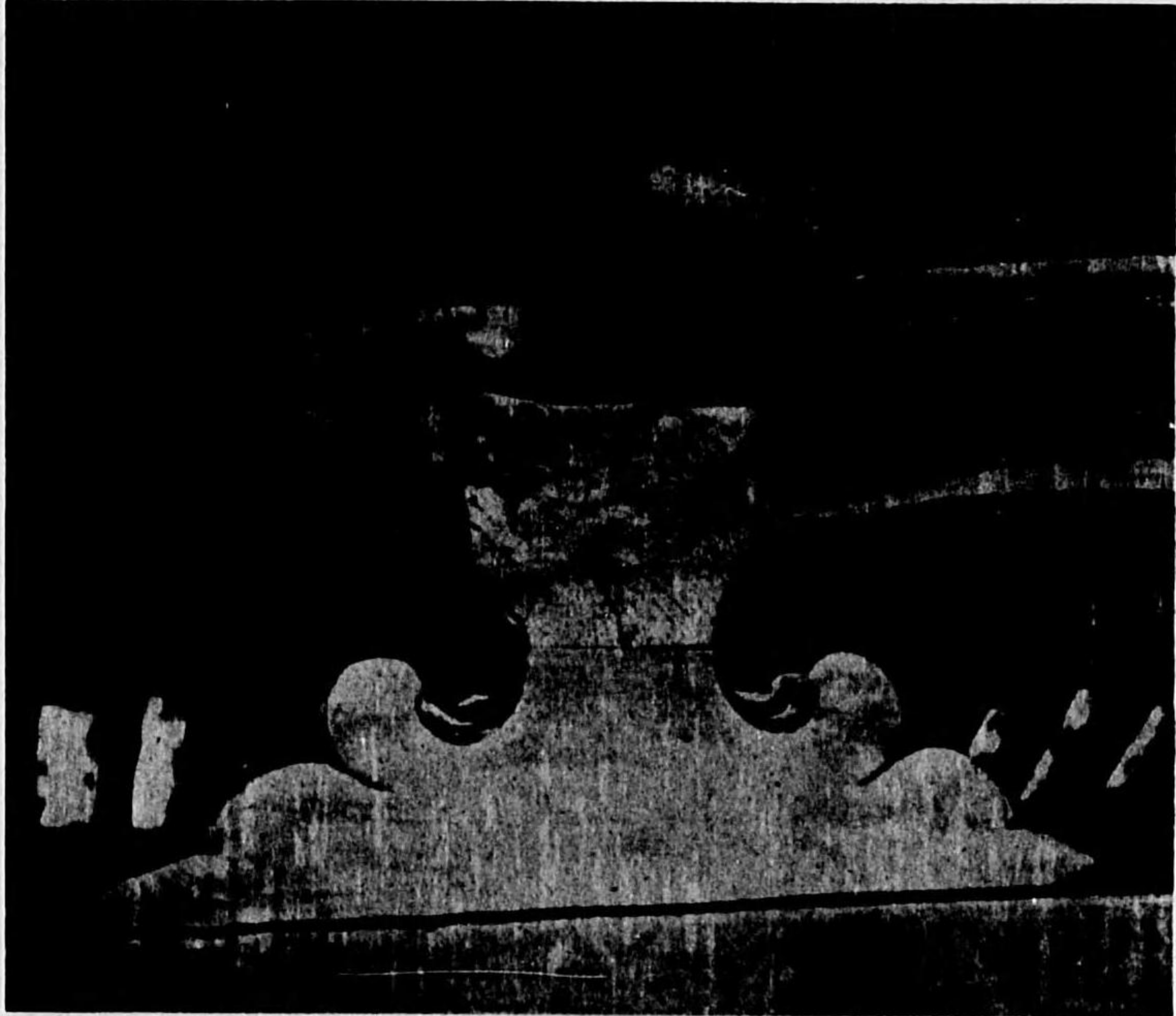


三

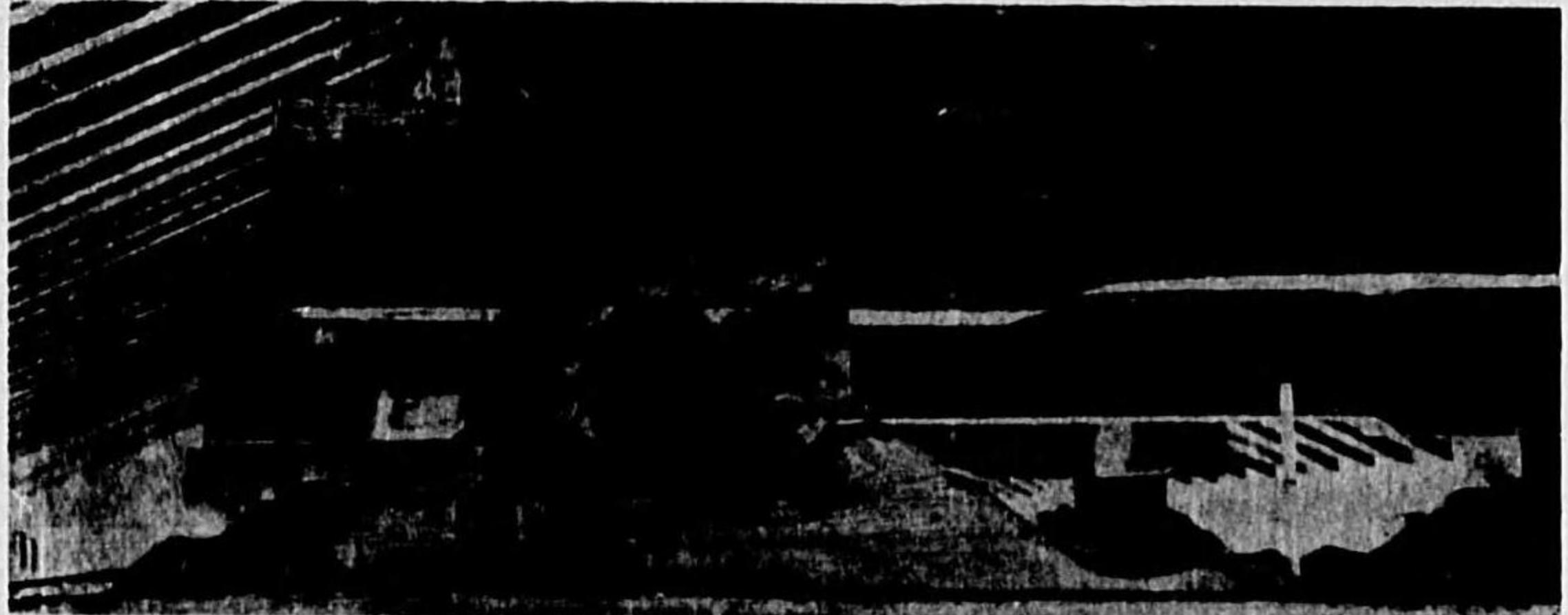


四

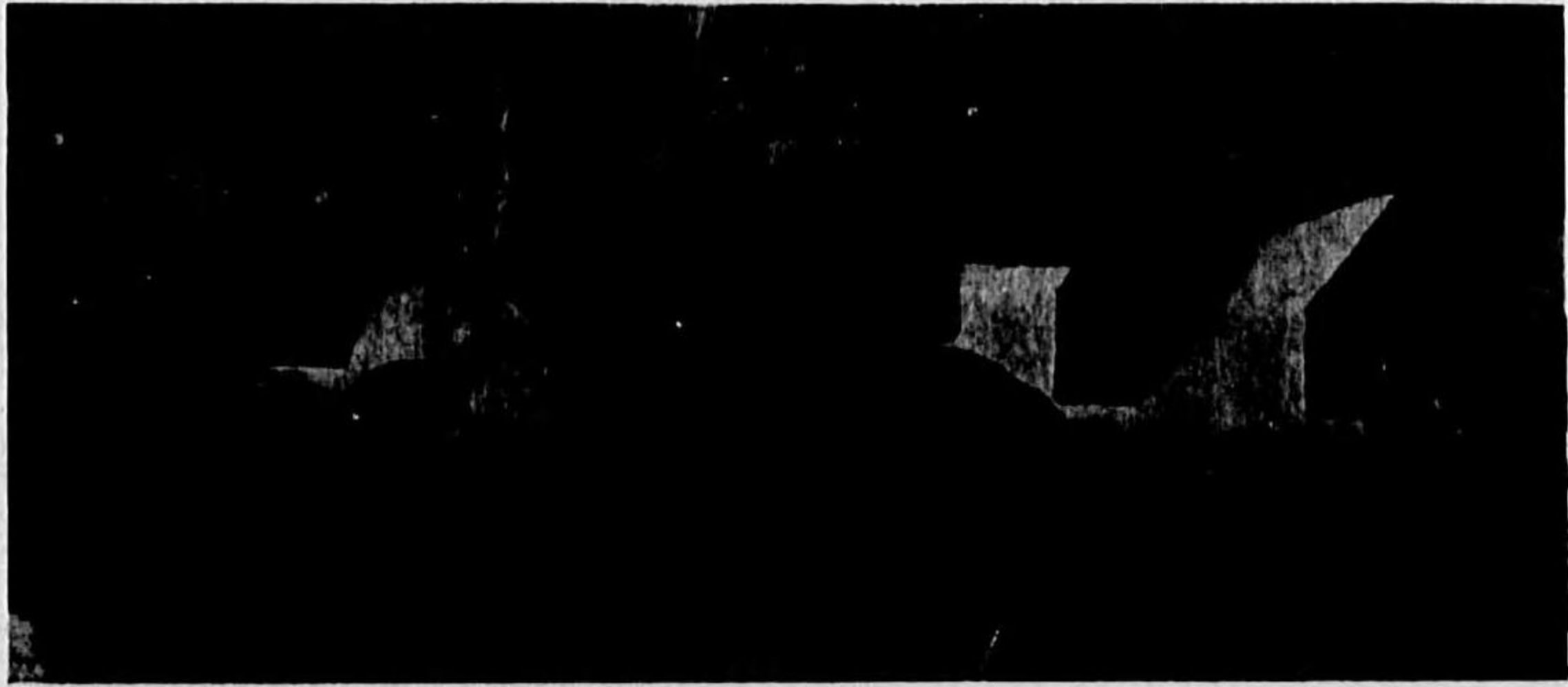
五



六



七



五、當麻寺曼荼羅堂内陣虹梁上蓋股

六・七、鳳凰堂中堂翼廊上層虹梁上蓋股二種

當麻寺は古くは中將姫の傳説で、近來は例の曼荼羅の研究で頗る有名になった。私共は奈良時代の三重塔二基を有する點だけでも、大變に珍らしいと思つてゐるが、この曼荼羅堂は鎌倉時代といふことになつてゐたのに、先年藤原氏が研究した結果内陣の天井——といつても化粧屋根裏だが——のあたりは、奈良時代のところが残つてゐるといふ結論に到達した。二重虹梁蓋股、其形式、木口料、圓形の斷面を有する桁等、さう考へてよろしいと思ふ。

五の蓋股は随分背が高いが、夫でも全高の中央から水平に切斷したとすれば、上の方は一と同じになるし、下から1/3位のところで同様に水平に切れば三ができる。だからこれも亦同性質と見てよろしい。此等の例により（尙ほ他に海龍王寺西金堂や唐招提寺金堂乃至東大寺法花堂等のを參酌して）次の様な事がいへよう。

當代の蓋股は多くは厚さより背の方が低く、料尻下左右の卷込は少なく、總て同性質の曲線より成り、上に木口料を用ふ。

平安時代

前期は遺物なく、従つて形式は未詳であるが、鳳凰堂に残つてゐる後期の例に就いて考察してみる。又そのころ割抜——といつても實は二木片を合せたものであるが——蓋股が出来たので、そこで初めて「板蓋股」と「割抜蓋股」と二種を生じ、其上に後者は裝飾として料拱間に用ひられる様になつたのである。ここには「板蓋股」のみを取扱ひ、「割抜蓋股」は後に述べる。

六・七を前五例と比べると此等は何れも夫等が洗練されたものだといふ事が判るであらう。料尻下左右の卷込は著しく小さくなり、脚の先即ち兩端に簡單な線形ができた位のことである。又隅行虹梁の上にも、鬼料を應用して用ひてある點に注意すべきである。同堂中堂大虹梁上のは背が高くなり、漸く板蓋股なる名稱に相應しくなつてきた事が知れる。

（藤原義一氏）

（昭和五年十二月十四日）

八、蓮臺寺藏纂股 共一
九、同 共二

(兩圖共物差は曲尺の約一尺二呎)・昭和十七年八月二十五日

滋賀縣栗田郡治道村大字下銅に蓮臺寺といふ寺がある、草津

線と東海道線との分岐點草津驛下車、左へ右へ左へ、又は新國

道へ出て左へ、小一里歩くと達する。此寺に門の遺材といふ纂

股・大料・卷料・肘木・金剛柵等の残りが保存されてゐる。卷

料と大料とは相當に古く、肘木は唐様だから一段落ちる様であ

る。金剛柵は見る事を忘れたから記載ができないが、纂股は非

常に興味があつたので、捨てるのが惜しく、ここに四圖を挿入

して一通りの解説を試みておく。

板纂股ではあるが、私がざつと測つたのでは長四尺一寸、高

六寸五分、幅四寸二分、中央の下の方に埋木があり、少しまづ

いが全體としては洵に面白く且つ珍しいものである。唯惻然

しないのは下圖九に見えてゐる様に(次頁下圖参照)、上端の中

央料置の四隅に於てある穴で、元はどうなつてゐたか、残念

ながら私には未だはつきり判らない。此點に就いては次頁の解

説の参照を乞ふ次第である。

其立面即八の全形でみる通り、兩肩から尖、夫から脚端へか

けての曲線は平安後期と見られる。而もさう見るのが最も穩當

だと信じてゐるが、脚端は鎌倉へ入つてからの形らしい。つま

り平安末では、未だ脚端はこんなに發達はしてゐなかつたと思

ふのである。思ふだけではあやしいが、實は多くの他の例から

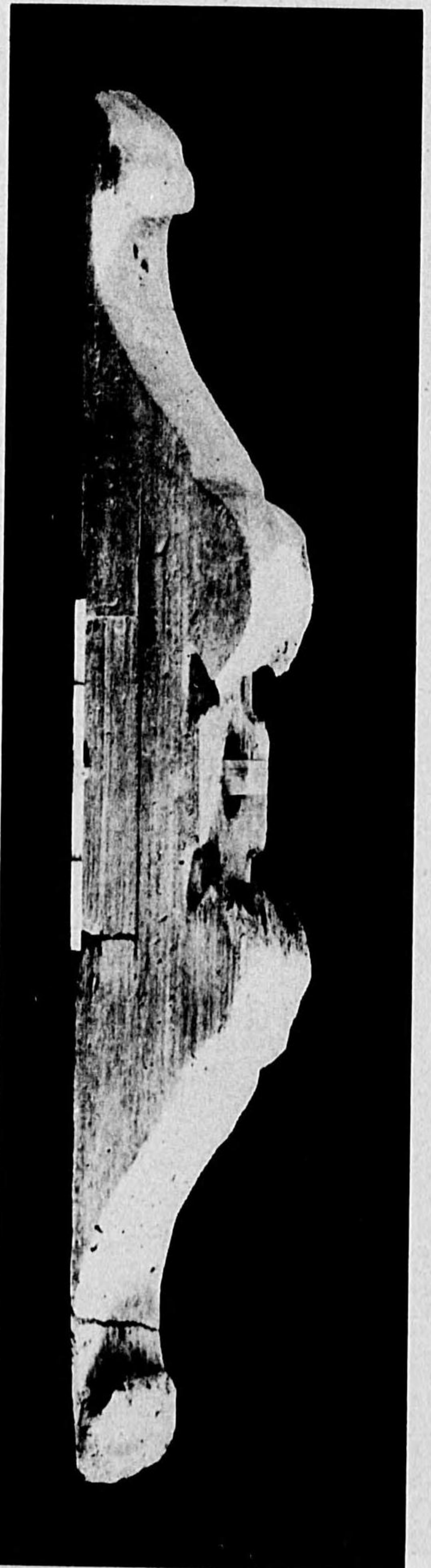
左様に確信してゐるのである。仍てこの纂股は平安から鎌倉へ

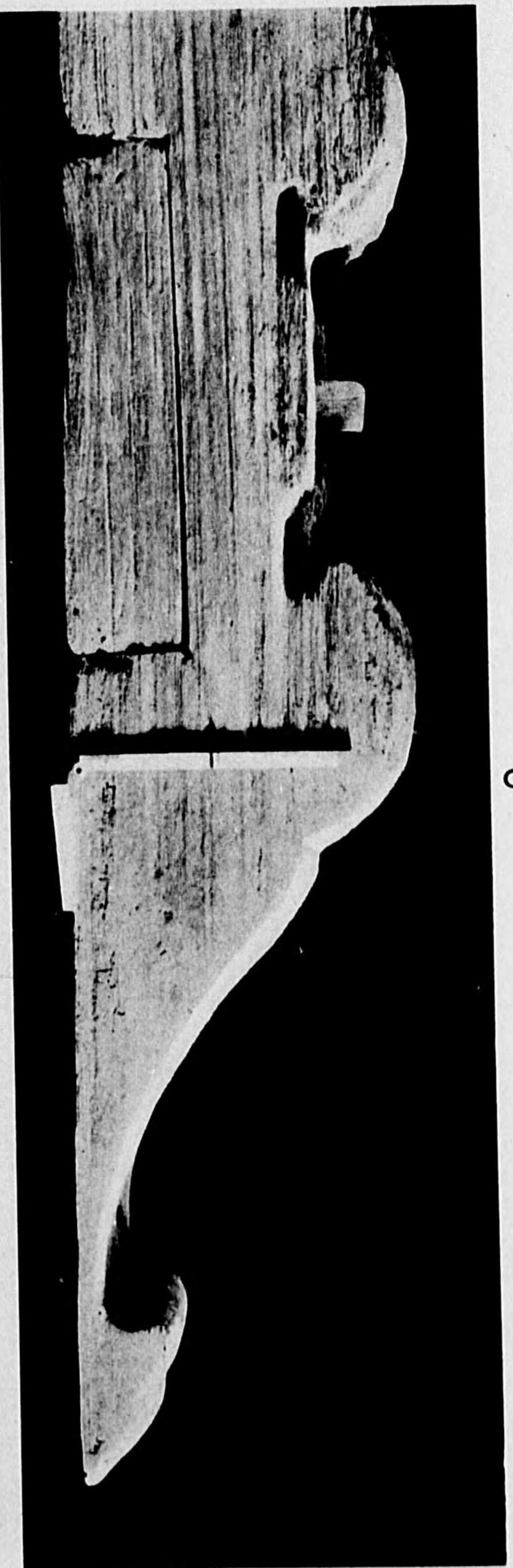
の移り變りの貴重なる一例となすに足ると考へられる。

八



九





10



11

10、蓮臺寺藏卷股部分

11、同 科受詳細

(昭和十七年八月二十五日)

(上圖物差は曲尺の約五寸(六呎)、下圖のは曲尺の約一尺(二呎))

何といつても珍らしい卷股であるから、其形が圖だけで充分理解ができる様に、**A**を裏返して一部分を大きく**10**に出しておいた。つまり前の左半分が、この圖の右の方である、これで見ると「科受」の左右の卷込は恰も鳳凰堂翼廊及び尾廊の夫の如く、肩から脚端へかけての曲線も亦、夫に酷似してゐる**六・七**参照)、併し脚端はあれ等と比べると一層洗練され發達してゐるから、前記の通り平安から鎌倉へ移り變りの形式としてい

思つたのである。

所が或はもう少し研究してみないといけない點がある様である。といふのは**11**の様に見上から見た時、「科受」の中央に於ける細長い穴は、上の料との連絡をとるための太柄穴であるが、其四隅の細長い穴は何のために於けるのであるのか、私にはどうも判然しない、そこで正面でみるとこれ等の穴のあたりが多少腐蝕した爲に、卷込が大きくなつた様に見えるのではないだらうか。

其上に料受中央の細長い太柄穴を改造して方形の新しいものを入れ、其太柄が丁度當嵌る巻料、大略平安と認められる巻料は、この卷股の上に乗せれば、立派な平安末の板巻股が出来上る事は確かだが、料尻は前後に大分にこぼれ、爲めに當初のマイラの料は失はれたので他のもので補つたと認められるのである。だからさうした完全な形と見えるのは、實は寄せ集めである。

結論としてはこうなるらしい。つまりこの四隅の穴は當初からあつたか或は後におけたか。當初からなら勿論、あとからとしても、何の爲にあつたか。此等の穴がなかつたのだと、兩肩の卷込、料尻に近いあたりは完全な圖ができてゐたか、或は鳳凰堂の様であつたか。その邊を充分研究しなければ — しても判らないかも知れないが — 容易に決することはできないであらう。だが併し、全體から見て、四隅の穴は判らないから姑く措き、やはり平安から鎌倉への移り變りの形式だと思つてゐる。

一一、東福寺月下門妻臺股

一二、教王護國寺灌頂堂北門臺股

一三、唐招提寺舍利殿禮堂臺股

一四、官幣中社嚴嶋神社攝社客神社拜殿正面臺股

(昭和十二年十月二日)

(物差は曲尺の約一尺(一呎)・昭和八年十一月二十五日)

(昭和十四年八月十一日)

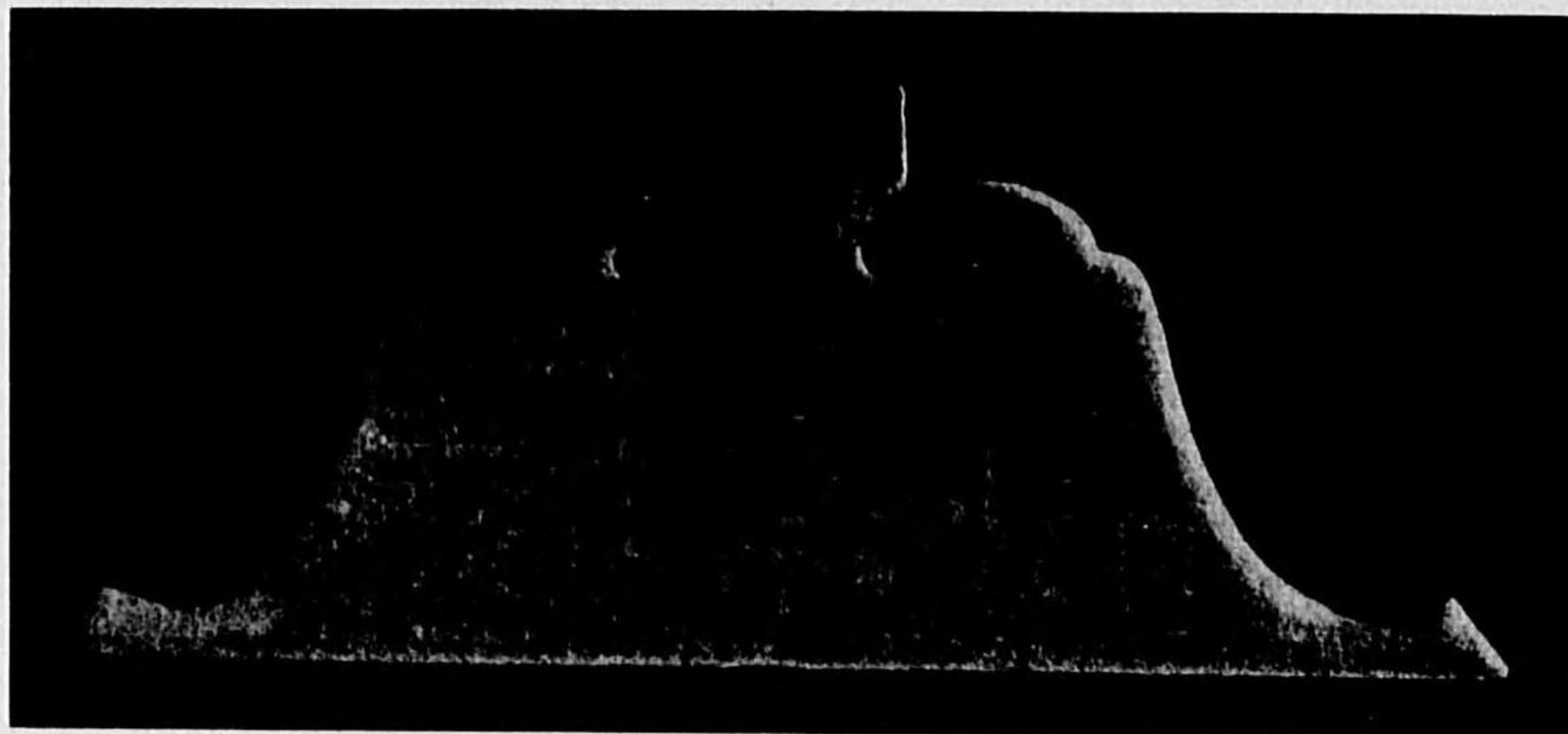
(昭和九年十月十八日)

鎌倉時代

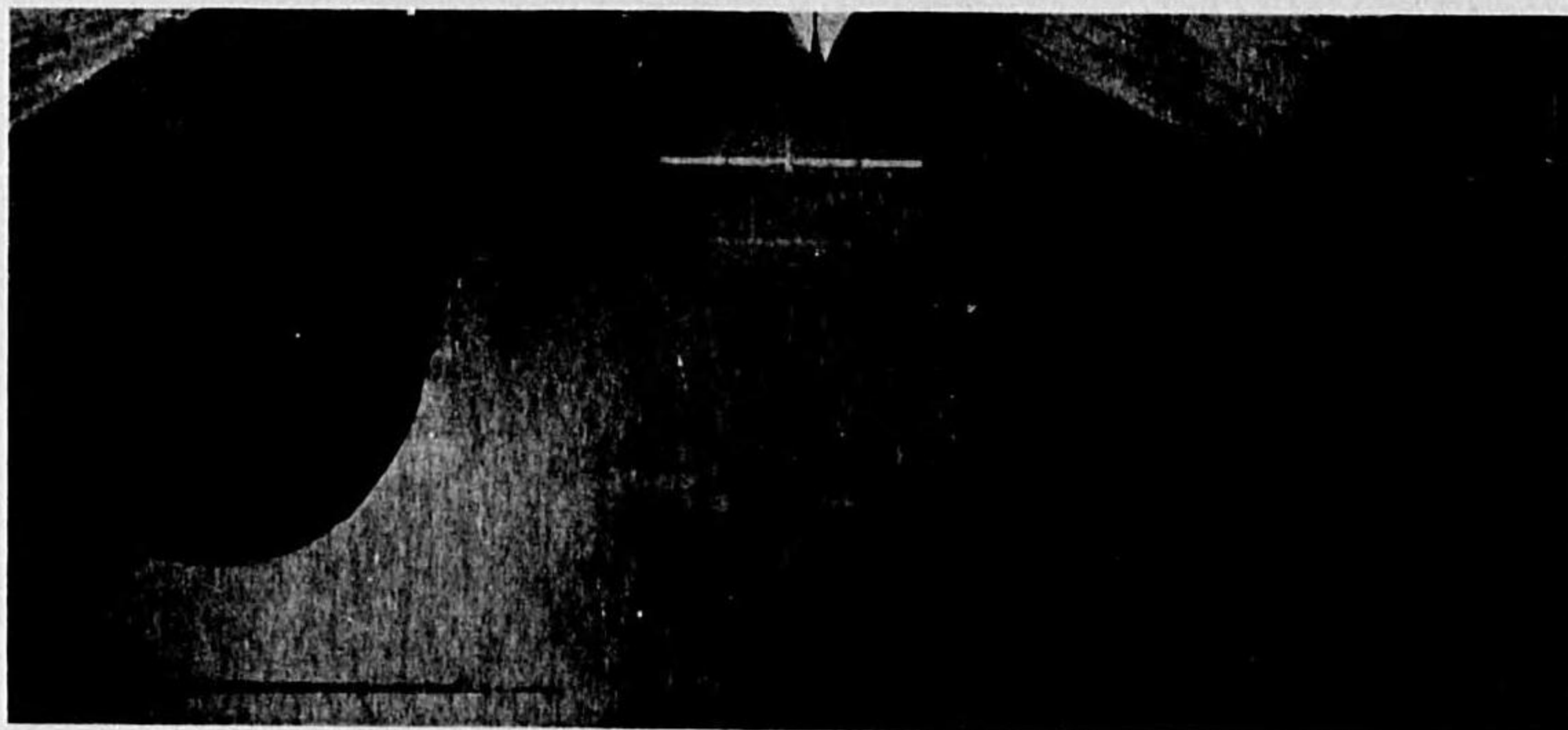
一一―一五は何れも鎌倉時代のものであるが、先づ以て此等と前掲の圖とを比較する時は、奈良時代では大きく、平安時代になって大分に小さくなってきた料尻直下の兩方の卷込が、當代になってから完全にタマになった事に氣がつくであらう。このタマは時に「猪目」(キノメ)。心臟形のことになったり、或は他の形になったりするが、とにかく口があいてゐる様な事はなく、完全なある形となり、又脚端も亦多少裝飾的になったものもある。併し常にさうとばかり限らないで、一六の様な特殊なものや、又一七の様に卷込は大きく、奈良時代のと殆んど區別のない様なものもあつたが、此に就いては後に述べる事にする。

此等のうち一二・一三・一四・一八は同種類と見られる。即料尻の兩方には完全な「目」ができた事と、兩脚端がほんの簡單な茨状をなしてゐる事とで、六・七の直系なる事は一見明らかである。一五と一九とも亦同じものだが、前者の料下の猪目は後者では曲玉状をなしてゐるだけの差で、脚端は奈良時代の夫、例へば三に鎌倉の夫、又は一二―一四等のをつけた様である。だから此等は前前代及び前代から至極容易に轉化する可能性を持つてゐるのである、さうすると全く除外例としなければならぬさうなのは、一六と一七とであらう。

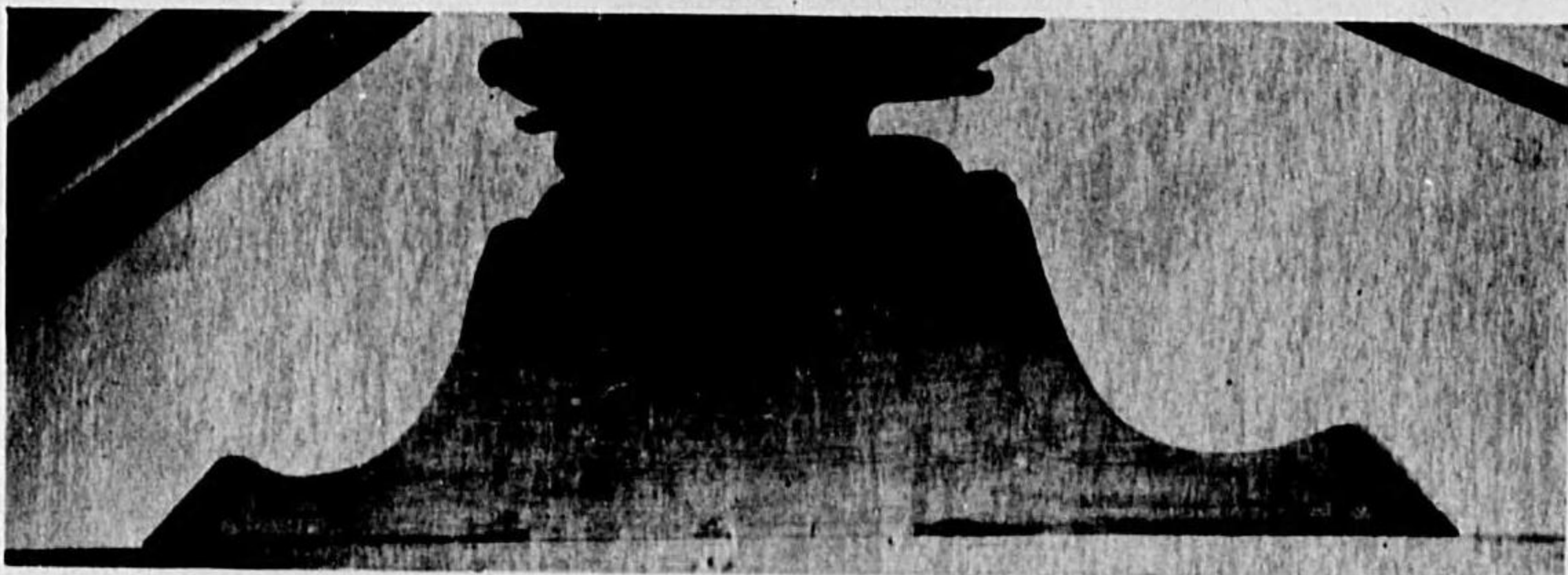
先づ一六を考へてみるに、此は全く型式の異なつたもので、どういふ所からできたか見當をつけにくいがかかる形は平安時代佛像臺座の裝飾文様にもあるし(法界寺阿彌堂本尊臺座)、當代格狭間内の裝飾(格狭間二一―三〇)にも賞用され、(次頁へ)



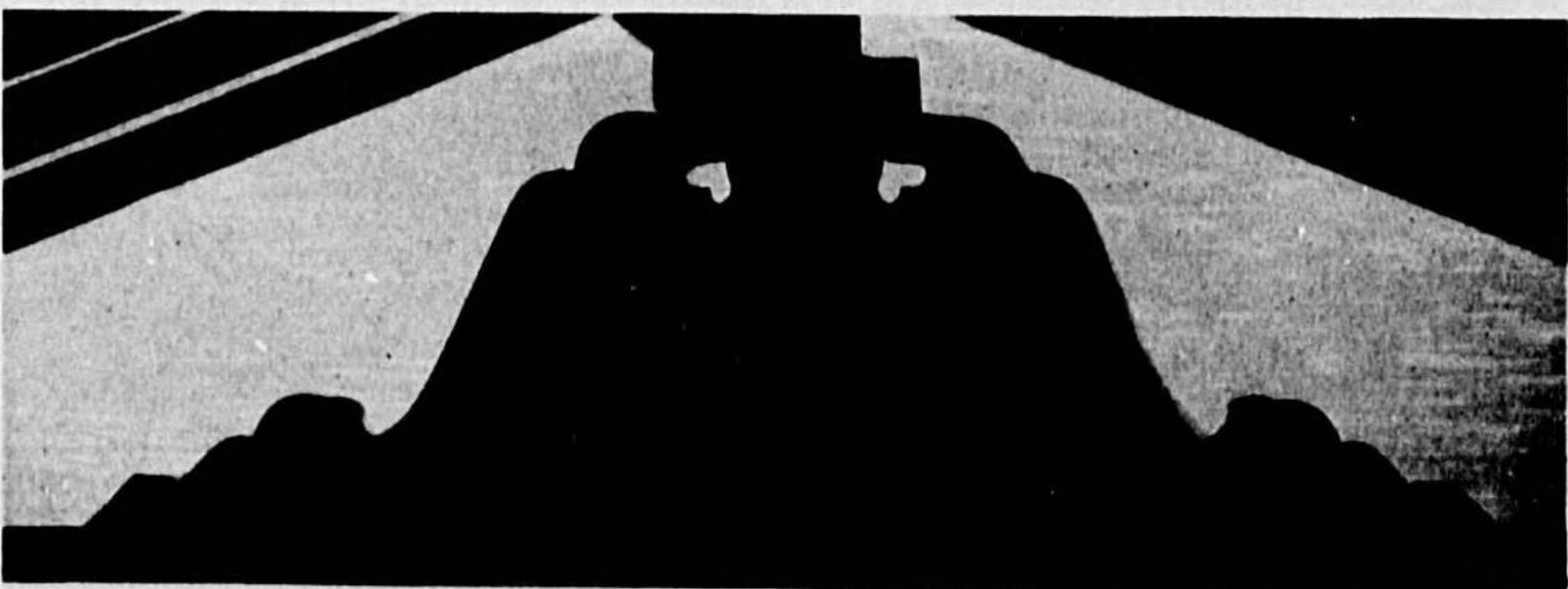
一一



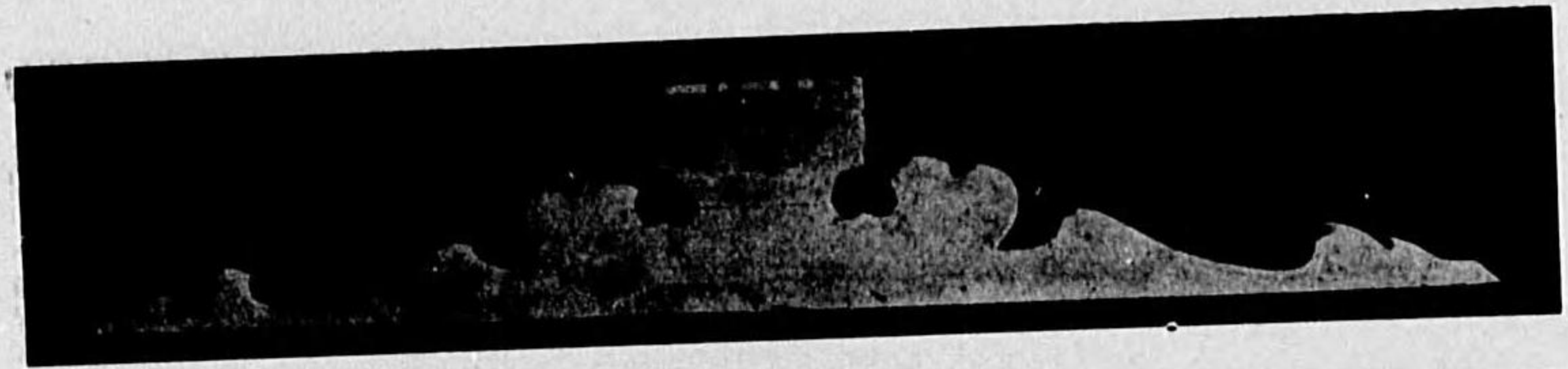
一二



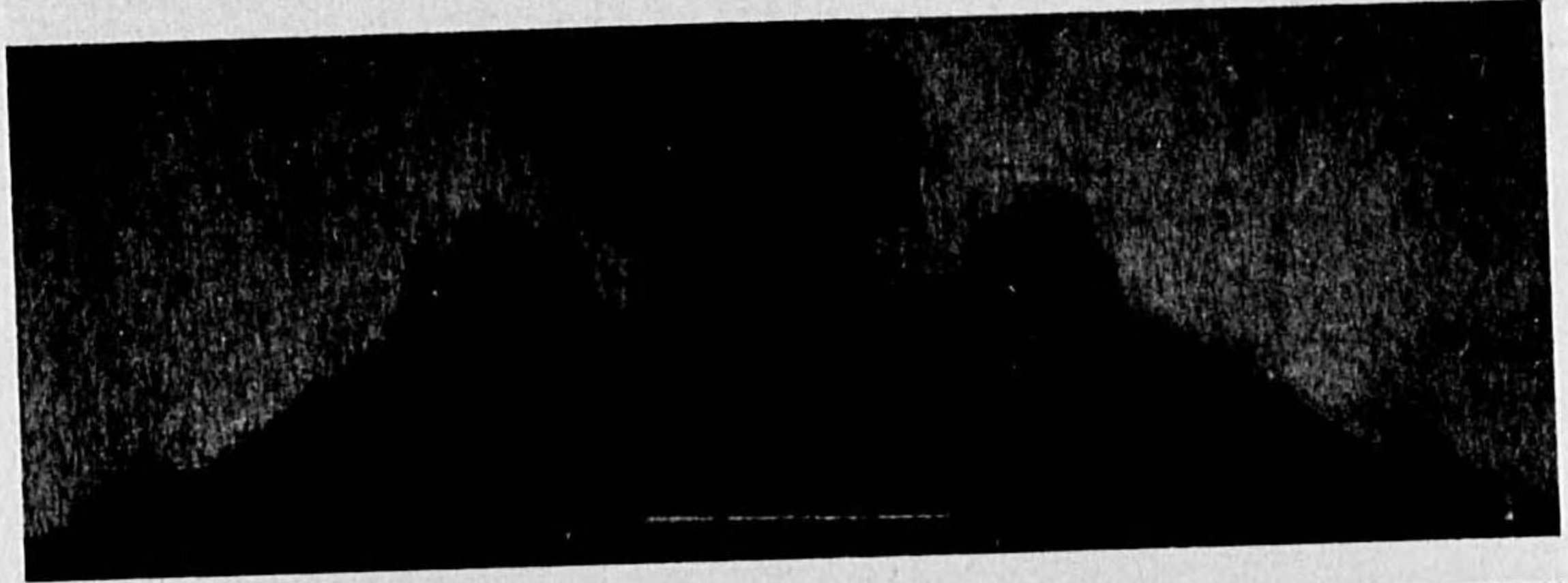
一三



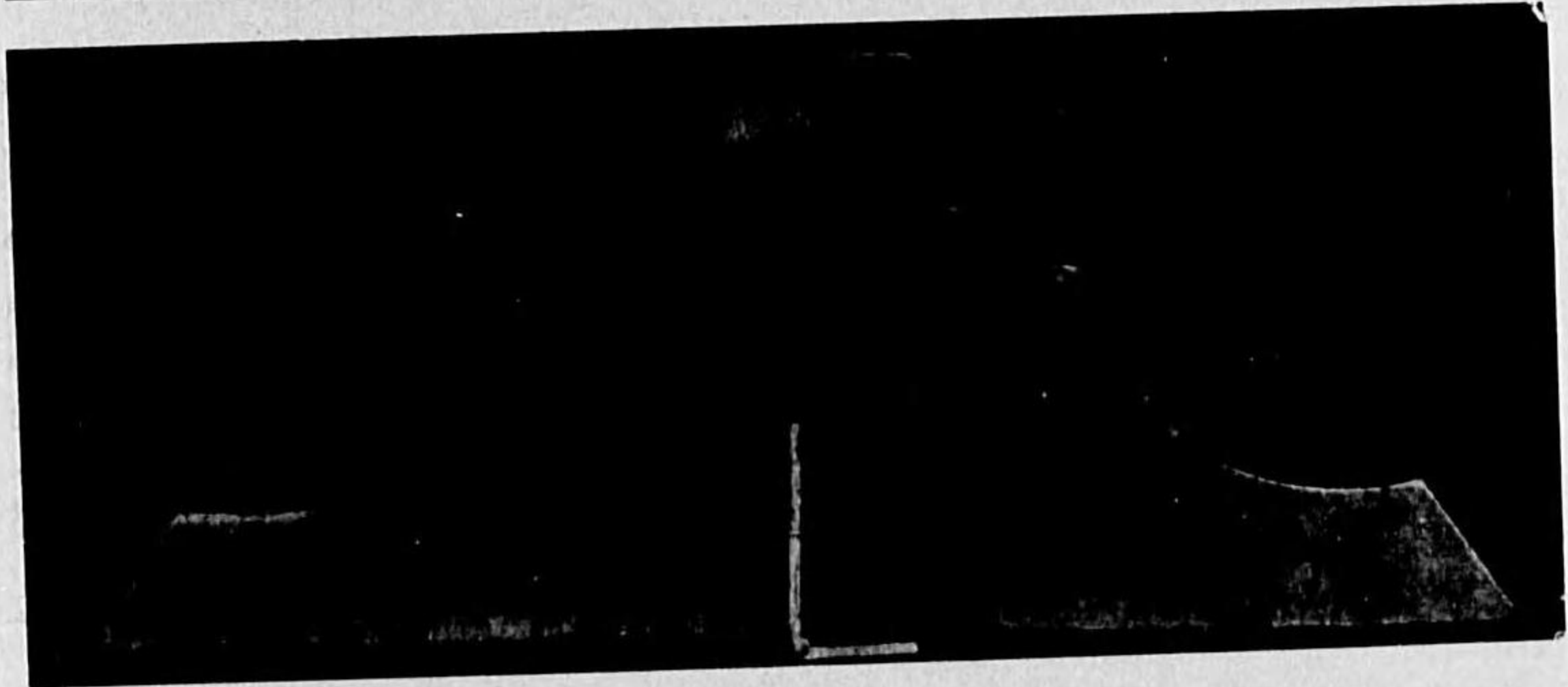
一四



一六



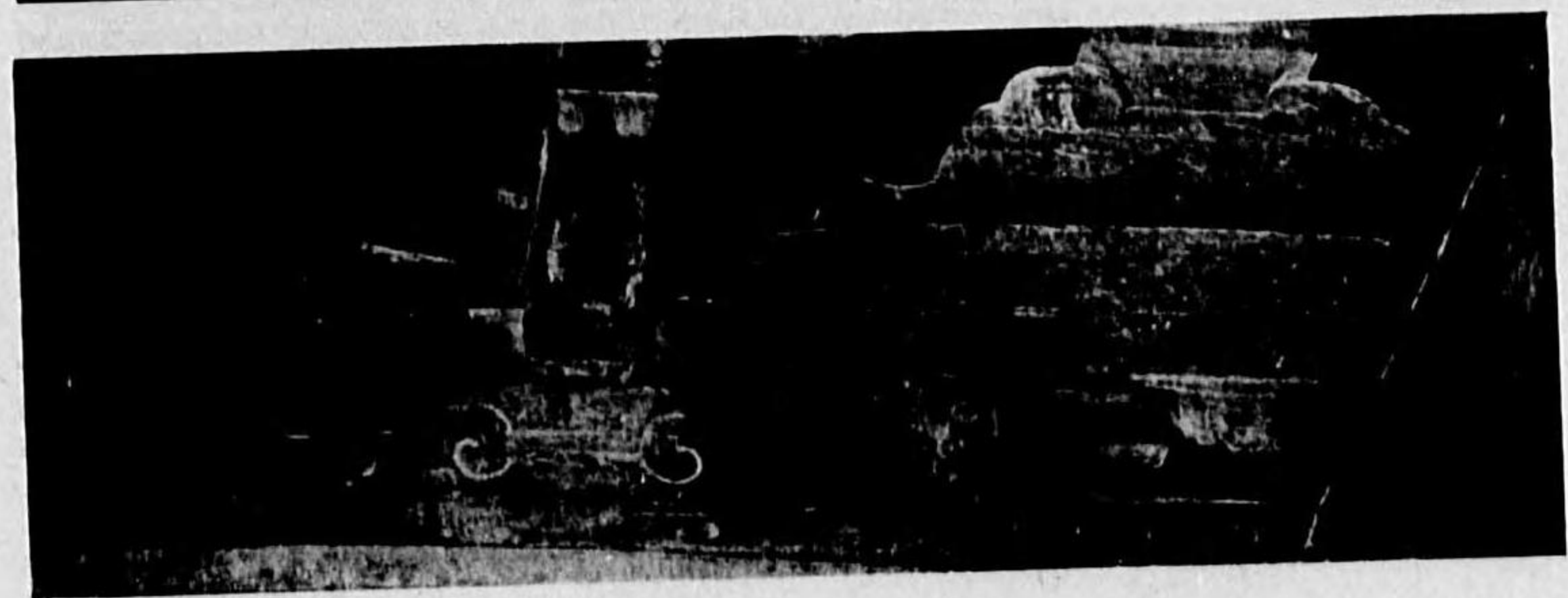
一七



一八



一九



二〇

一六、東福寺月下門控柱頭貫上臺股

一七、教王護國寺慶賀門東妻臺股

一八、蓮花王院本堂(三十三間堂)大虹梁上臺股

一九、不退寺南門控柱頭貫上臺股

二〇、法隆寺東院南門柱上構架式部分

(昭和十二年十月二日)

(物差は曲尺の約一尺(二呎)・昭和八年四月三十日)

(物差は曲尺の一尺・昭和五年五月二十四日)

(物差は曲尺の二尺・昭和九年八月二十六日)

(昭和八年五月十二日)

(前頁より)尙また追追と向拜の「手挾」(タバサミ)等にも用ひられる様になった點などからみると、當代にこの種の臺股があるのは不思議でも何でもない。夫から一七は奈良式には相違ないが、併し全體の曲線は、最早奈良時代の性質を全く失ひ、全然鎌倉式になってゐる。恐らくこれは鎌倉時代に諸門を再建に等しい程の修理を行ひ、その時奈良式、即ち創建當時の様式に則つて建築したものと見える。だから卷込を大きくしたのはいいが、下向きの茨から脚端に向ふ曲線は根本から奈良式の所はなく、脚端に茨を一つ付け、先を斜に切つたの等は、奈良式には全然見ない手法である。そこで平安・鎌倉兩時代の板臺股は平安。前代の繼承であるが、左右の卷込は小さくなり、時に薄くて割合に背の高いものでき、板臺股の名が相應しい様になつてきた。側面には鎬もできだした。臺股の面には極彩色を以て寶相花文様を描いたのもあつた。

鎌倉。一般に背が高くなり、厚さは漸く減じ、左右の卷込は完全に「目」となつた。この目は時に「猪の目」形又は「曲玉形」或は「若葉形」となつたりした。板臺股に大體三種あつたものの如く、(一)は脚端に茨を一つ作り先を斜に削いたもの、(二)は當代格狹間・手挾等に使用された特殊形のもの、(三)は復古式のものである。門に用ひられた板臺股に於いては、時に本柱が梁の上迄のびて、両面から其下部を挟んだりしたのもあつた(二三)。

といふことになると思ふ。尤もよく探したら除外例もあらうが、大體は誤りはあるまい。

二一、法隆寺東院南門東妻

二二、同 廻廊内部蟬股

室町時代

室町時代はあらゆる點に於いて鎌倉時代の續きと見られる。蟬股亦然り。ここには僅に二例を掲げたに過ぎないが、二例でもある程度迄は此點を了解し得るであらう。

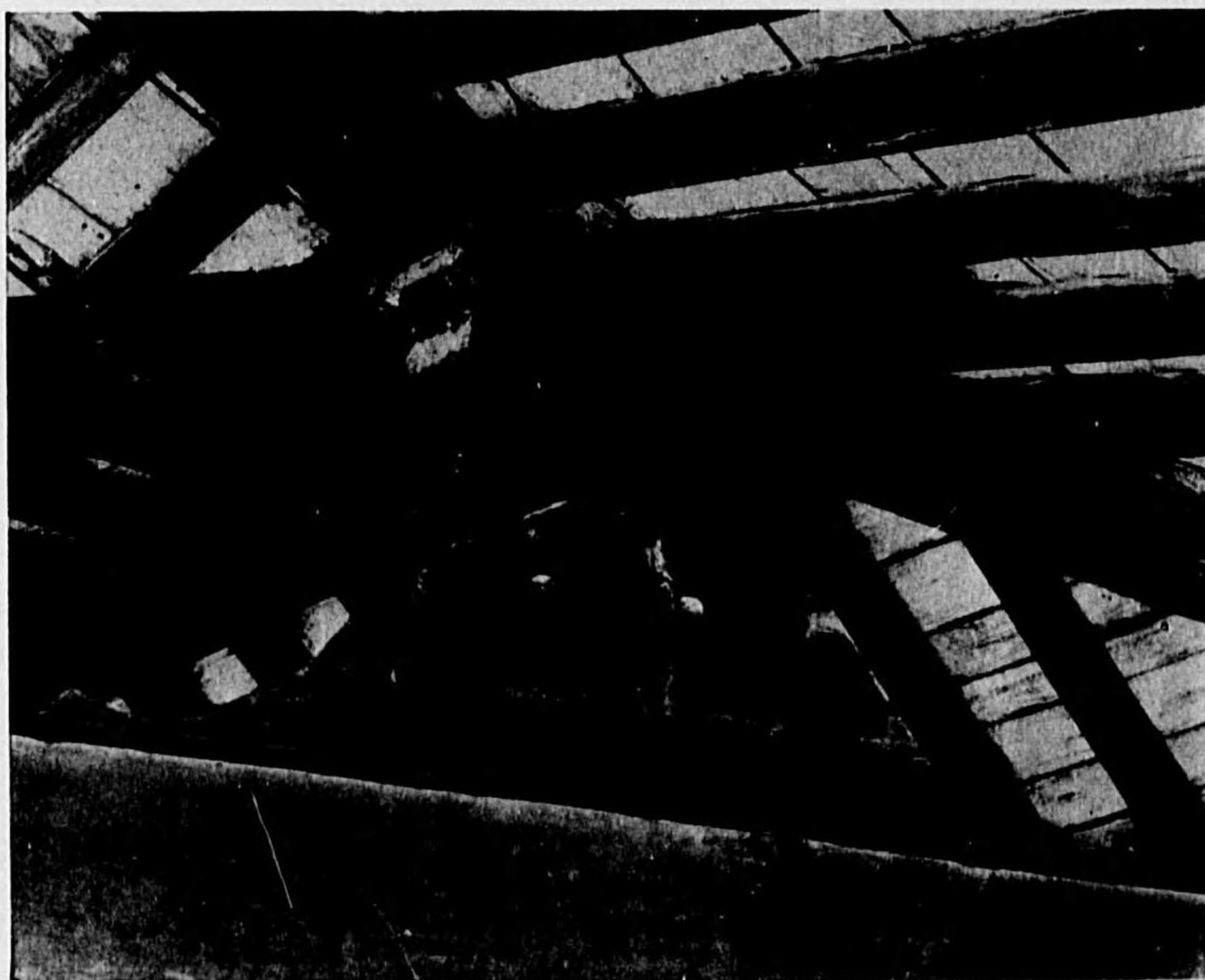
二〇・二一は同じもので、後者は全景だが前者は其一部分、但し場所は異なることを斷つておく。東院の南門はアケズノモンと稱しいつもしめてある様である。ものは三間一戸八脚門で時代は室町だが、二一で見る様に正に二重虹梁蟬股の妻飾である。其虹梁は古式で「肩」も「袖切」もないが、其形は到底奈良時代とも平安時代とも思へぬもの、又蟬股は二〇に明らかな通り卷込は著しく細く長くなり、純然たる渦文に迄進展してゐる。さうして其茨の形や脚端に至る迄の波形曲線の形、脚端を少し外に膨らまして切斷したところ、どうもどこ迄も感心ができない形をしてゐる。夫から本柱上に唐様に非ざる二料を使用してゐるところは、蟬股には關係のない事だが注意しなければならぬ。

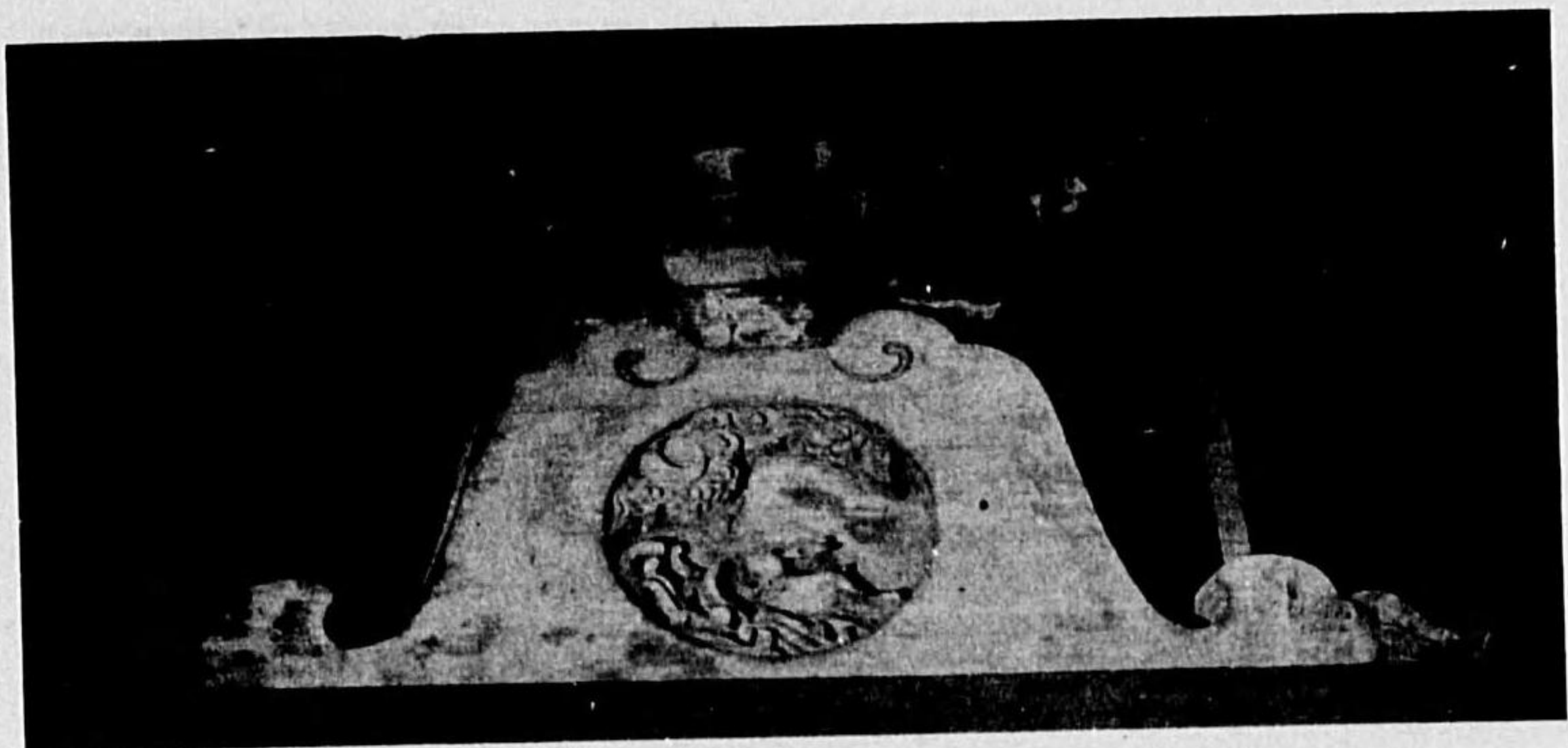
二二は東院歩廊のうち東側と南側との曲り角で、隅行の虹梁の上においた板蟬股の上に鬼料を置き、其鬼料に枳肘木を含ませ、其枳肘木上に卷料を置いて化粧棟木を支へしめてゐること、鳳凰堂翼廊上層に於ける場合と同じである。さうして此事は既に七に圖を掲げて略解をしておいたが、あれとこれを比べて見ると、蟬股の形は全く同じで、ただ一は平安一は室町、肘木はよく見えまいが鬼料亦然りで、間に鎌倉を挟んでゐるだけで、時代の相違による形の相違は、拙い説明を読むよりは讀者諸君自身圖を比べた方が早い筈である。蟬股と鬼料と肘木と、相互の割合も亦、面白いものの一である。要するに次の一行で充分であらう。

室町時代の板蟬股は鎌倉時代の繼承で、時に形式が少しく不満足になつた位のことである。

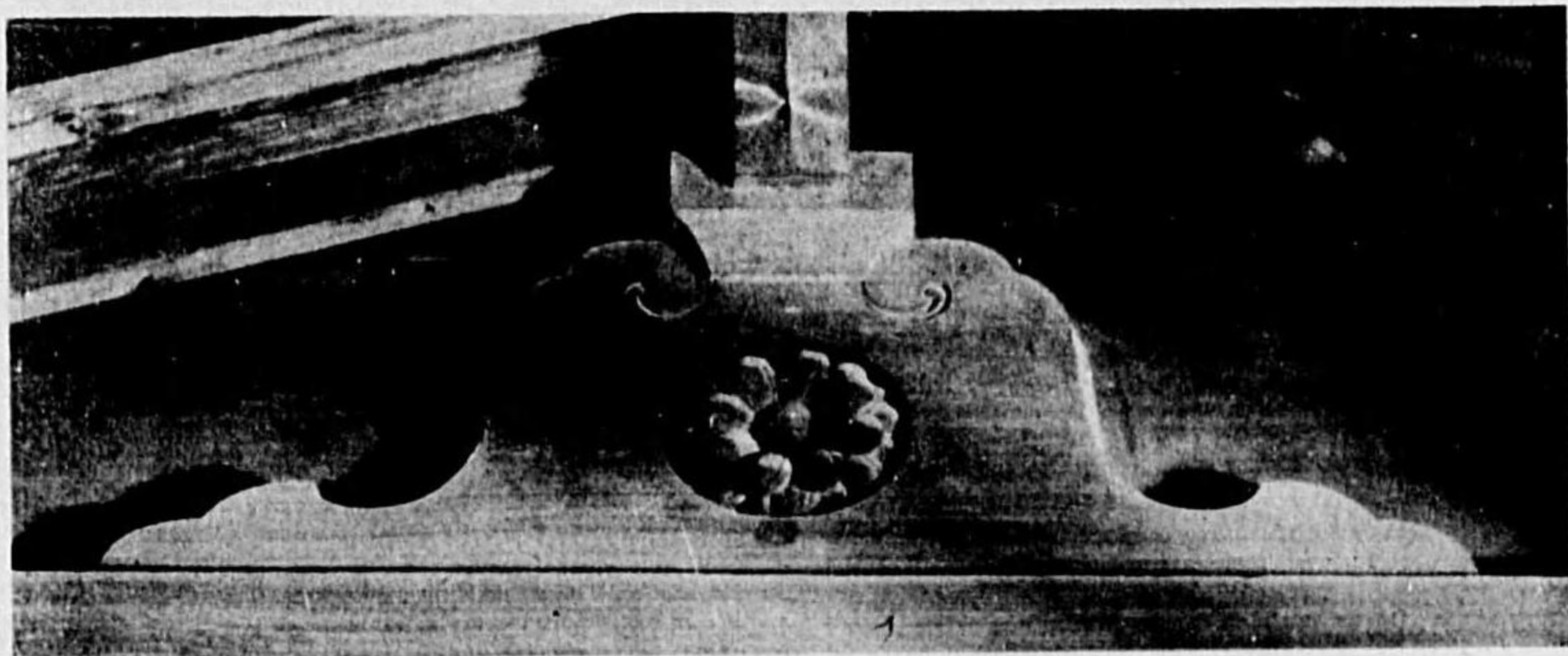
(昭和十三年十月二十七日・近藤豊氏)

(昭和十一年五月十四日)

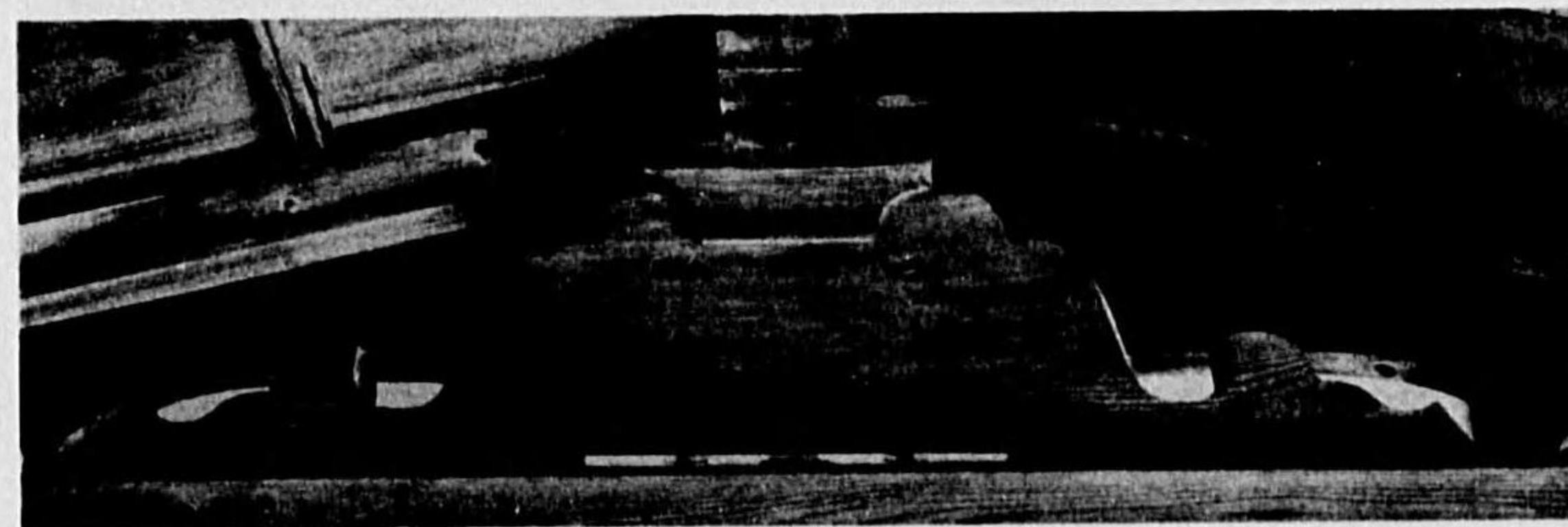




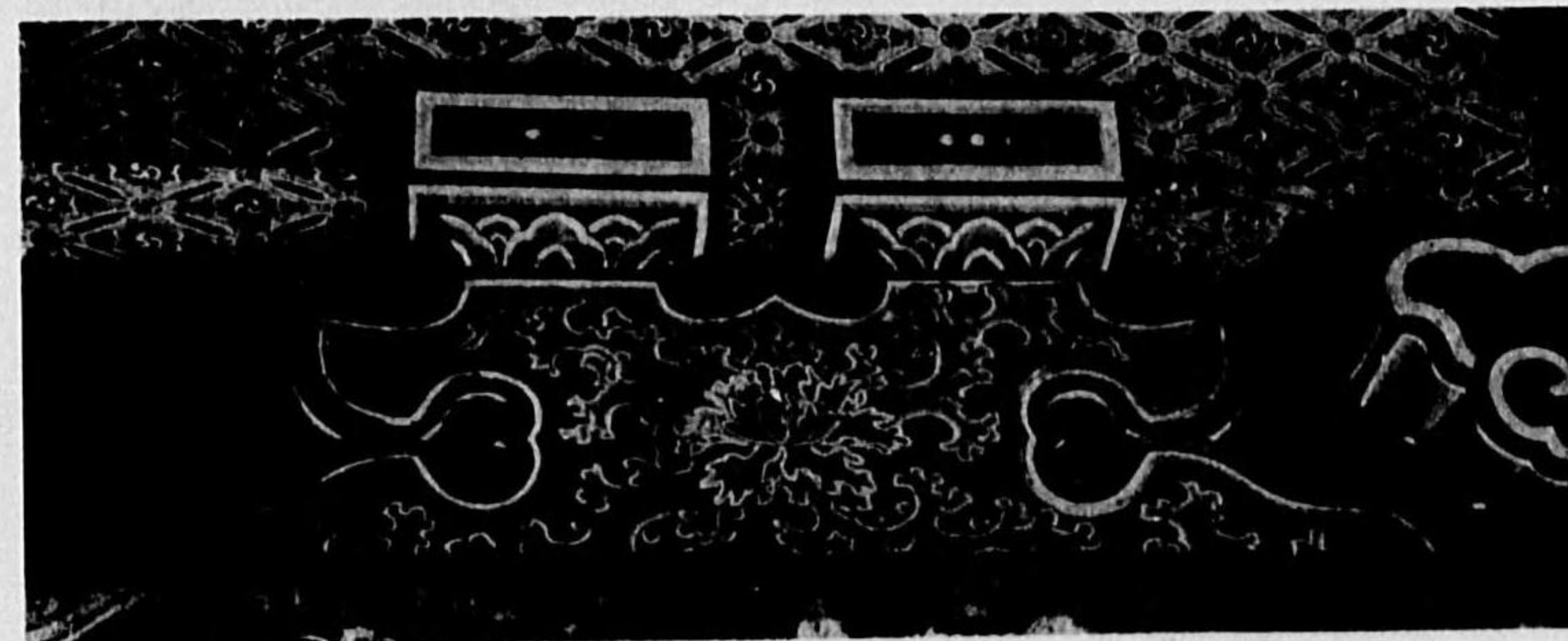
二三



二四



二五



二六

二三、性高院表門鬘股北面

(昭和七年二月十九日)

二四、妙心寺佛殿附廊北端鬘股

(昭和六年十月十一日)

二五、醍醐寺三寶院表書院唐破風板鬘股

(昭和五年三月十四日)

二六、知恩院三門上層繫虹梁上鬘股

(昭和九年七月十二日)

桃山・江戸時代

板鬘股は桃山になっても大して變りはなかつた。先づここにだした三例のうち二三は名古屋市所在の性高院門ので、こちらからみると板鬘股である。形は割合によろしい。中央に大きな圓い凹みをつくり、この圓内に「波に兎に雲に月」をほつてある。波に兎とか雲に新月は室町からの様である。二四は京都花園妙心寺の佛殿附廊の夫、佛殿は新しいが廊は古い。古いだけでは判然せぬが桃山らしい。少なくともここに圖示した板鬘股は桃山式が濃厚である。圓文内に菊花を入れてある。二五は脚端が全體に比べて少し大きすぎる。だからこの三つのうちでは私は最も形がよくないと思つてゐる。以上何れも巻き込みが少し中心の太い渦文をなしてゐる上に、性高院の分は脚端が葉化しかけてゐる。室町には全體が葉化して菜の様になつたものもある位だから(近江甲賀・油日神社樓門)、桃山に脚端葉化のがあつても夫は少しも珍らしくはない。二六は京都市東山にある浄土宗の總本山、其名天下に轟いてゐる知恩院の三門上層の世にも不思議な形の二料を頂いてゐる鬘股——といつてもよからう——であり、多分二つとあるまいと考へる。此門は元和二年、經藏と共に建立されたさうだから、精確に言へば江戸時代かも知れないが、當然桃山でいい。まだ此等の他に板鬘股から變化してきた雲・波・若葉鬘股等がある。故に左記の様な結論になるであらう。

桃山江戸時代の板鬘股はやはり室町時代の踏襲で、全體の形は割抜鬘股より遙によろしい、時には雲鬘股・波鬘股・若葉鬘股等と呼ぶ種類もできてきた。此等は板鬘股の兩面全體にすぎ間なく雲・波・若葉等を彫刻したと見られるので、板鬘股の一種と考へられるが、裝飾兼構造の兩方を兼ねた本來の意義を失つたものだから、墮落したものとして取扱ふべきである。稀に何とも命名し能はない様な、一種の鬘股の様な木片に二料をのせたものがある。これもやはり變形板鬘股と見られぬ事もないが、恐らく類例は他に見出し難かるべく、「二料板鬘股」と假に命名しておくが、この様な特殊のものも稀には存在した。

刳拔藁股

二七、宇治上神社本殿藁股 其一

(飛鳥園)

二九、中尊寺金色堂内陣藁股

(飛鳥園)

二八、同

其二

(木下助三郎氏)

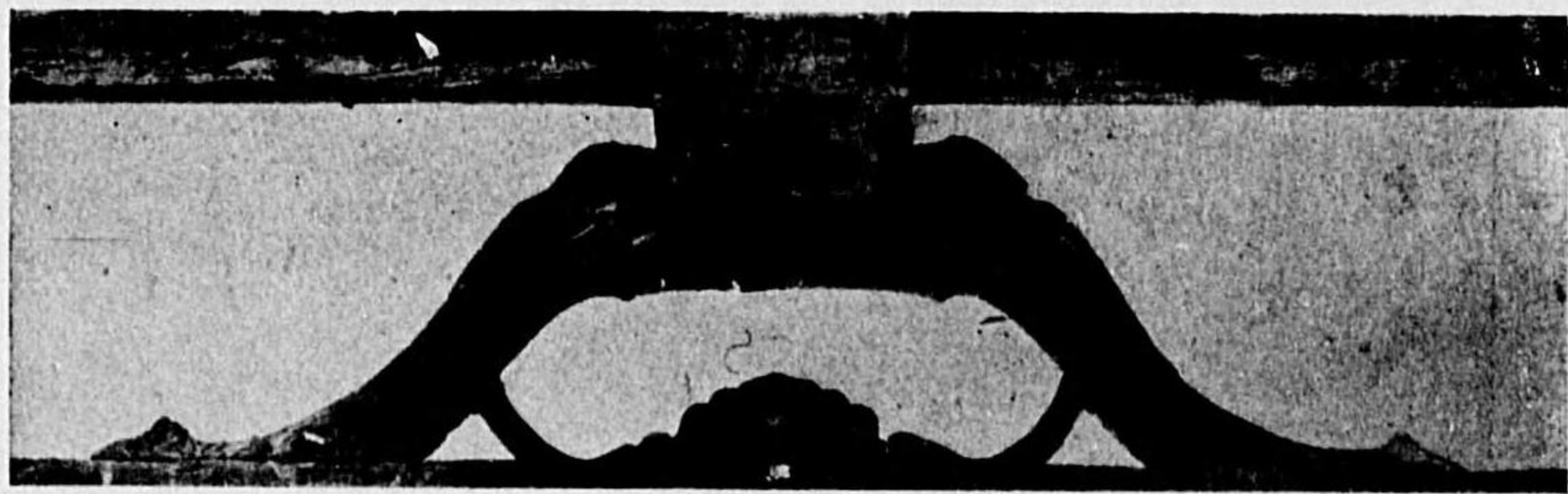
三〇、一乗寺三重塔第二重藁股

(昭和十六年十二月二十六日)

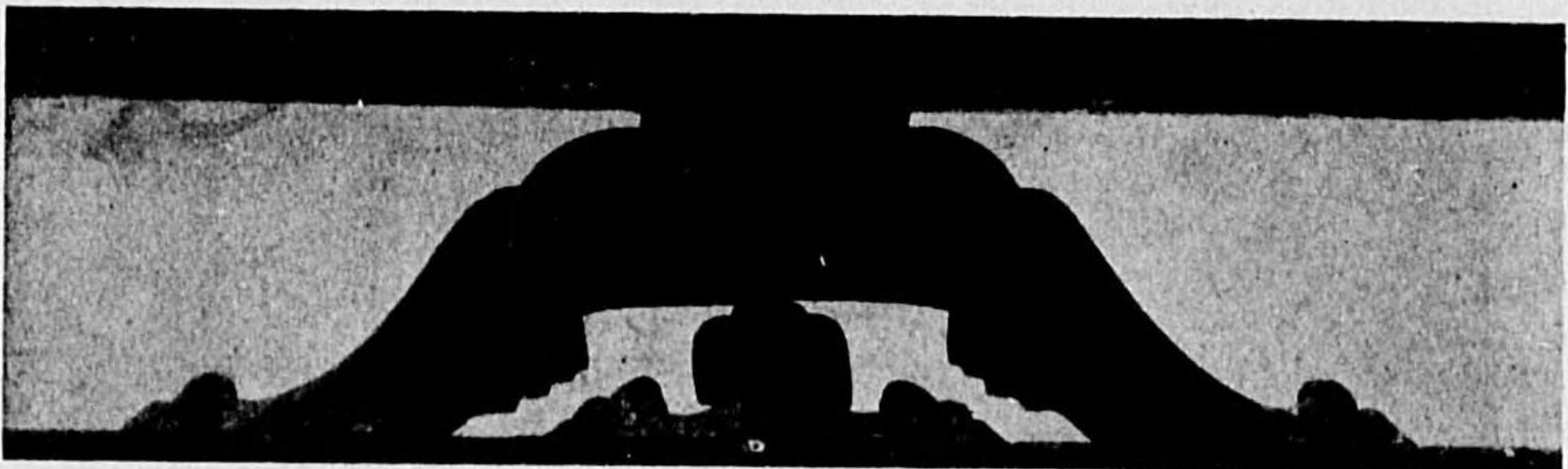
板藁股が奈良時代に於いて充分發達し、完好なる曲線形の美しいものに迄進歩し、遂に平安時代になって最早行詰つて了ひ、何とかしなければならなくなつて來た時、如何なる動機か知らないが、板藁股の内部を刳抜き、ほんとうに蛙が兩脚をひらげた、「カヘルマタ」の名に相應しい様な形のものできだした。此は板藁股の背が高くならない間は到底できる見込はない。鳳凰堂中堂大虹梁上の夫の様な、背が高いのができた後恐らく古代の割束、合掌等と併せ考へ、板の内をくりぬく代りに曲線形をした二本の木を中央で合せ、其上に料を置き、これでは大して力にならないから、裝飾専用として料拱間の間料束に代へて、試に社寺建築を造つてみたら、殊の他評判がよく、又技術も逐次進歩して、立派なほんとうの刳拔藁股ができたものと想定してゐるのである。

平安時代

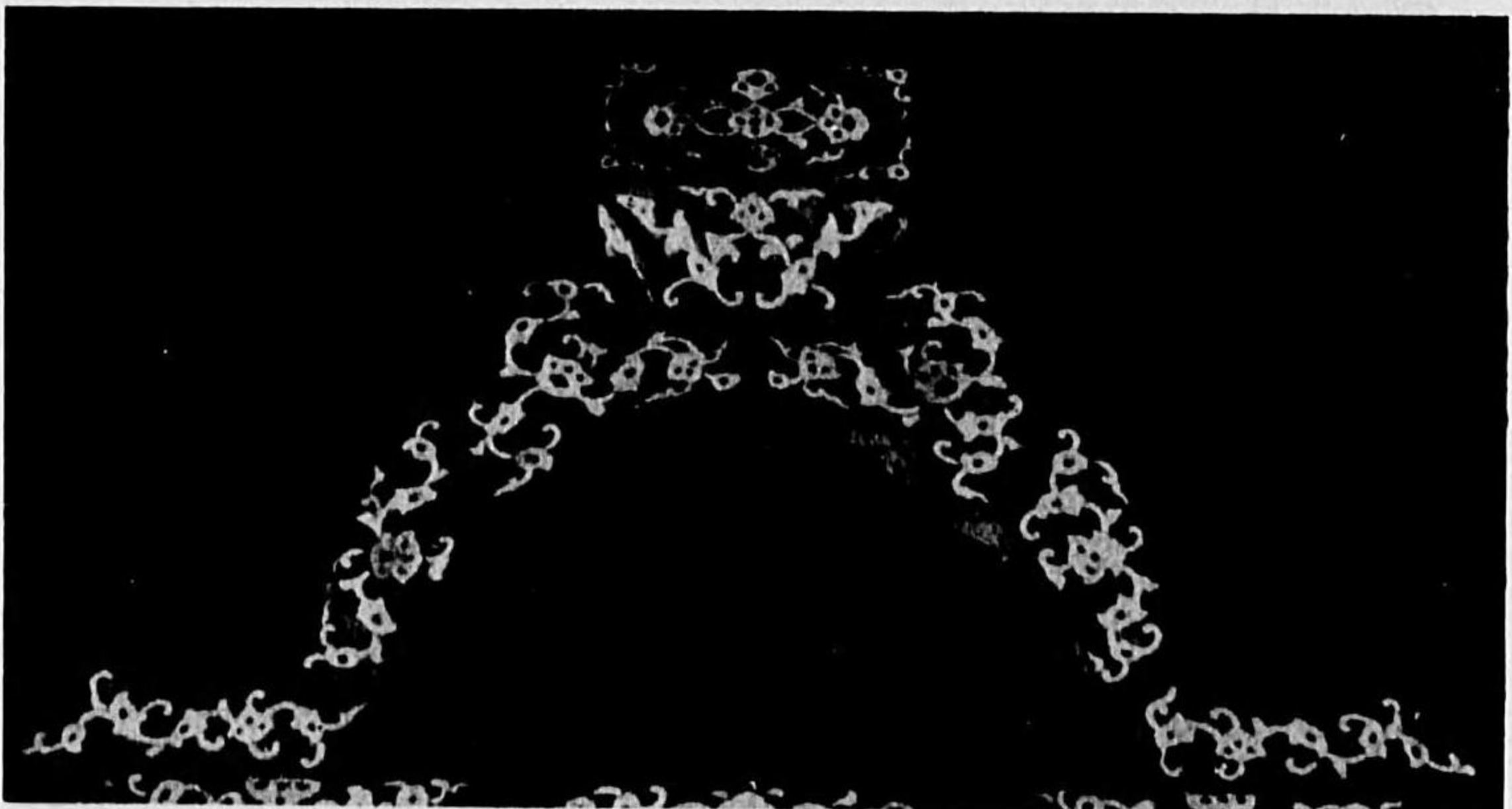
二七・二八は宇治の鳳凰堂の川向ひ、宇治神社の少し上手にある宇治上神社(ウジカミジンジャ)本殿正面の料拱間にある二種の有名な藁股で、上のが右殿下のが左殿のである。二木片を中央で合せてあるのは、料下の縦線で明らかであらう。兩脚内の飾りは、上のは一木で出來てゐるし、下のは兩脚と關係なしにおいてあるから、後になつて——ではあるまいが——入れようと思へば、いつでも入れる事ができるが、下の兩脚の内側兩肩につけてある簡単な飾りは、脚から刻み出したのだから、兩脚と同時になければならぬ。後に眞の刳拔藁股ができた時、上の様な兩脚内の飾も、下の内側飾と中の遊離した中心飾と、總て一木から彫刻する様になつて來たので、この二例は刳拔藁股發達史上重要な位置を占めてゐるものである。二九は一の關の先の平泉所在、中尊寺金色堂内陣の螺鈿入藁股で、外軒のは螺鈿が入つて居ないが形は全く同じである。三〇は兵庫縣加西郡下里村阪本所在、法花山一乗寺三重塔第二重目の平安藁股。昭和十六年に修理が始り、解體中であつたので、出かけて寫したのが此。物差は曲尺の約一尺(二呎)。



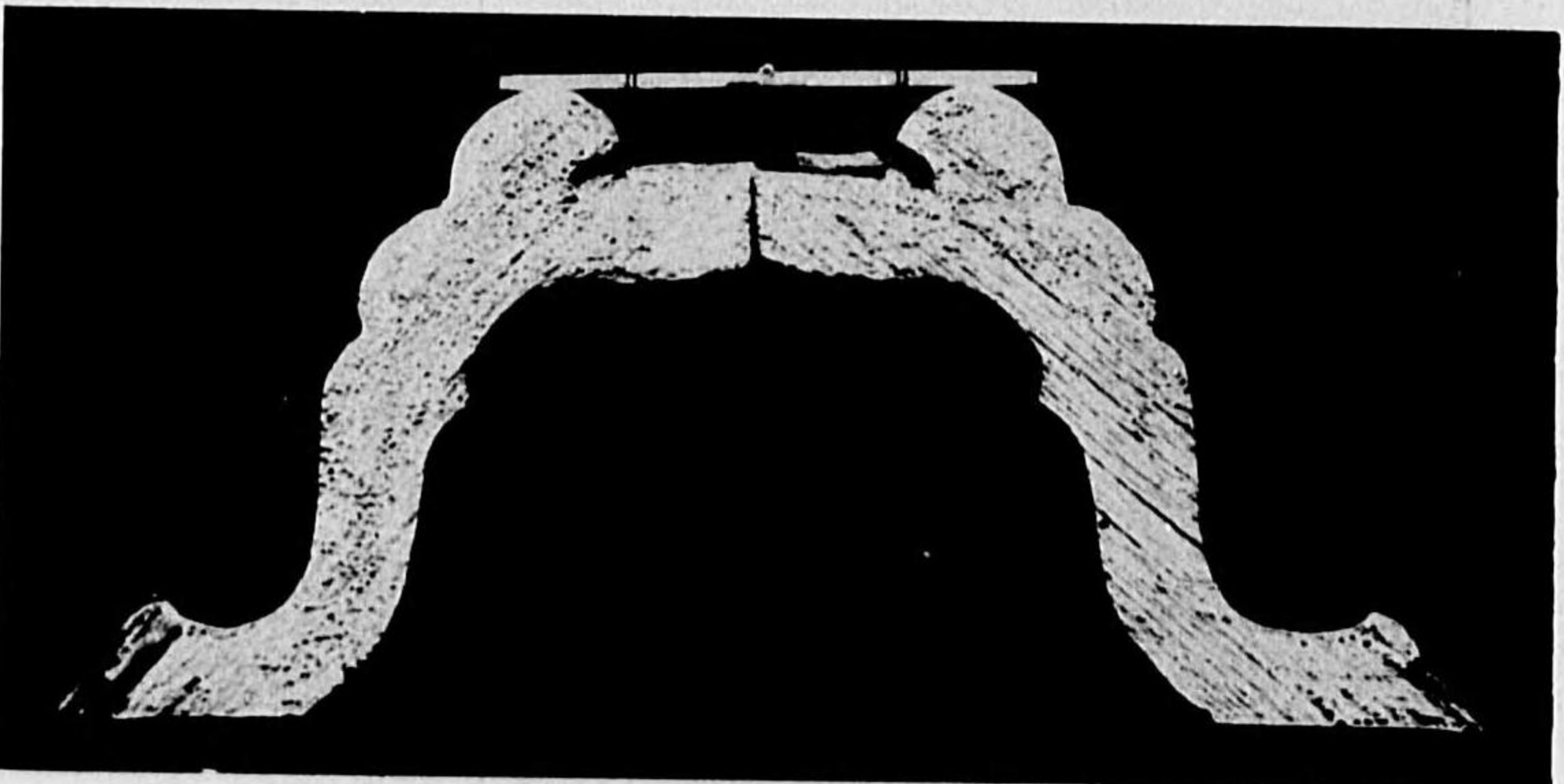
二七



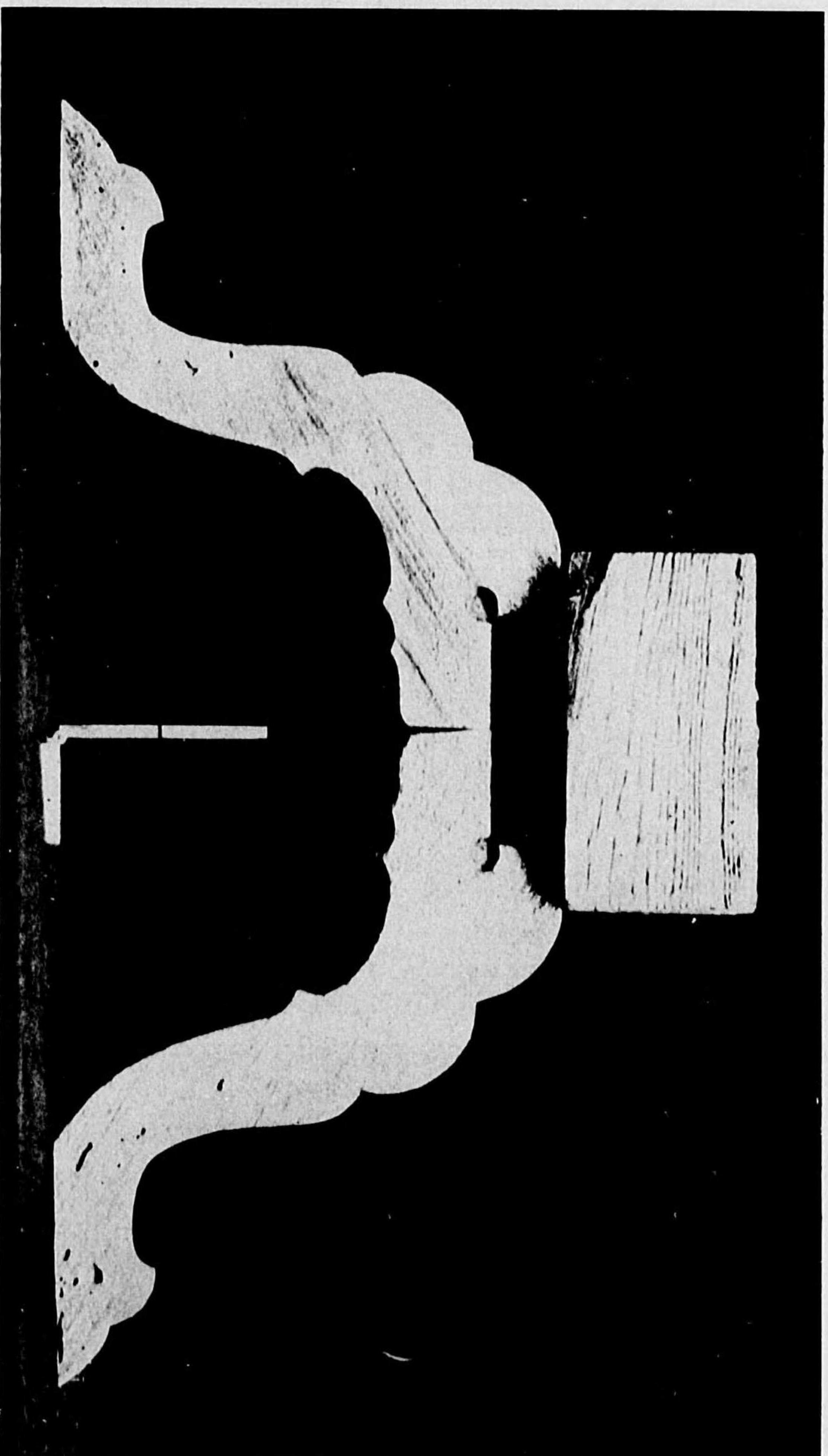
二八



二九



三〇



三一

三一、一乗寺三重塔第一重臺股

(物差は曲尺の約五寸(六吋)。昭和十六年十二月二十六日)

一乗寺へ行くには播但線法華口で下車して徒歩一里餘、或は姫路驛から乗合自動車を利用して、あと十町ばかり歩くか、どちらかによるのが目下の有様。山間の大寺である。ある書物に「就中塔婆は最も見るべく、寺傳に永祿五年大修理を加へたと云ふ。

「一乗寺記」には大永の火災を免ると云ひ、且つ鎌倉の特徴も窺はれる」とあるが、これは何かの誤りらしく、鎌倉時代の特徴はなくて、反て平安時代の細部が窺はれるし、伏鉢には「承安元年」の陽銘さへある位である。此塔に於いては臺股が特に目立って

ある。圖に於いて見る如く、兩木片を中央で合せてあるのと、其兩脚の形式とから容易に時代の古い事は推定できる、其上の料の比例等も亦、鎌倉迄は下がるものではあるまいと思はれるが、兩方の卷込が殆んど完全な「目」になつてゐるところ等を考へに入

れると、平安でもさう古い所へはもつて行けないであらう。そこへ承安の銘があるので、平安末といふ結論が出て來るのである。

外側兩肩の内方を向いた突は普通一つであるが、これには二つあるから他のは大分異なつて見え

る。其上に内側のも、突が一つ多いだけなら當然であるが、普通同じ様な曲線が連続させてあるのに反

し、中心に近い方が小さく其次を大きくして、そこに差をつけてあるから、變化があつて面白い。同時にまた前頁下圖の様に、内輪に突一つのも用ひてあ

る。一人で全部造つたのではないからであらう。

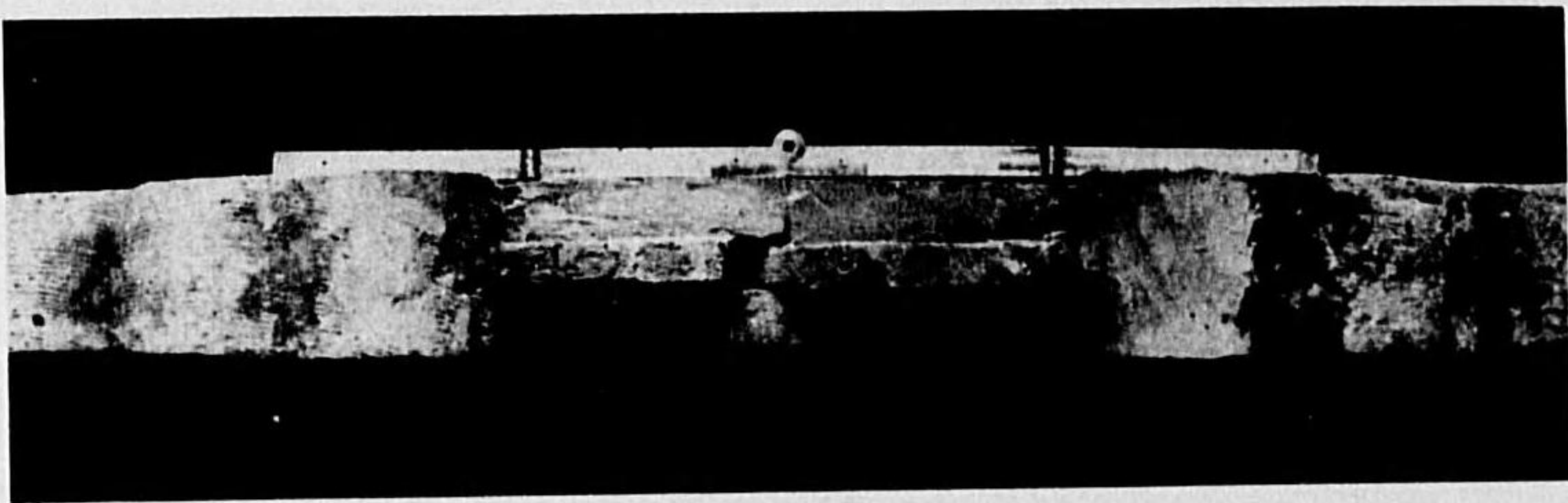
三三 一乗寺三重塔初重臺股を上から見たところ(二木片のつぎ手を示す)

三三、同 兩脚を接手からはなして斜上からみたところ(外方)

三四、同 兩脚を接手からはなして斜上からみたところ(内方)

三五、同 脚端下端の迂り止め柄を示す

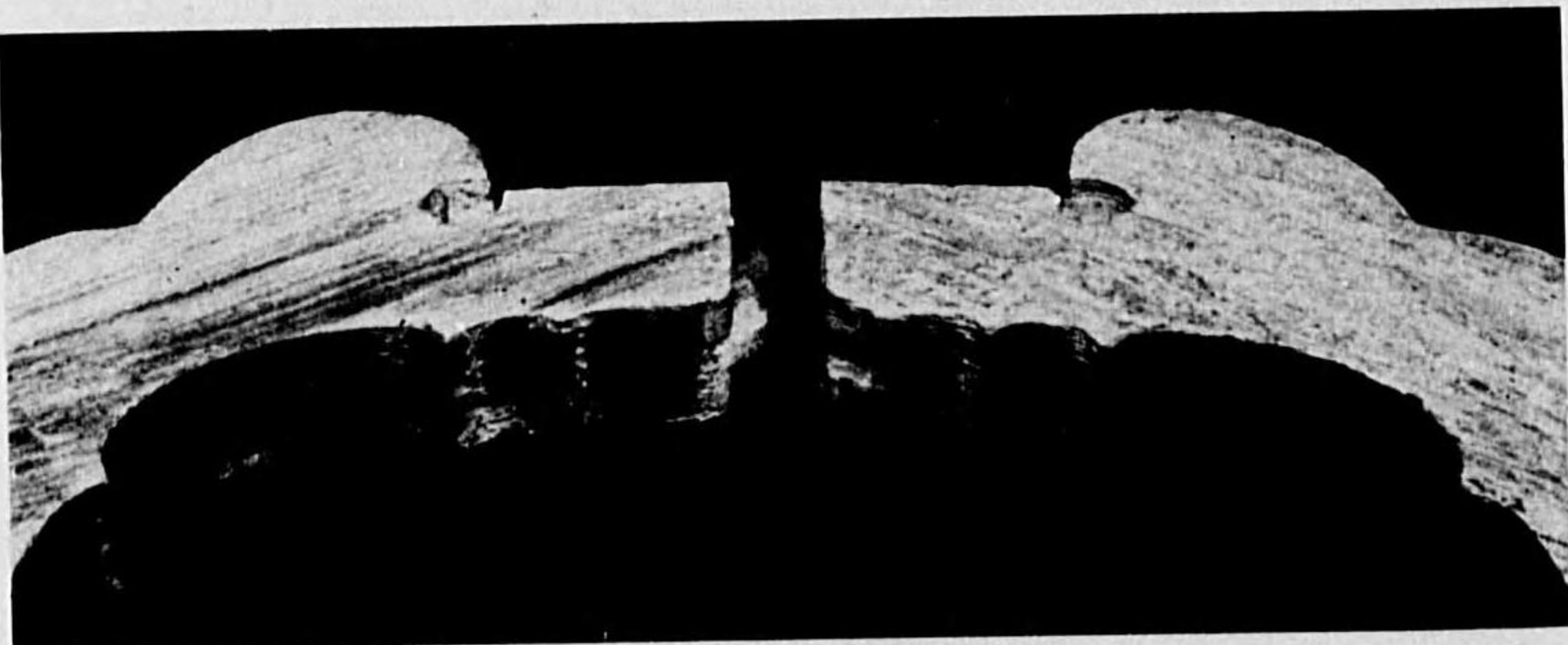
平安後期の此種二木片を中央で合せた臺股は、從來知られてゐた四例——二七・二八・二九及び醍醐寺藥師堂の分——は解體した時に見なかつたので、つき手がどの様になつてゐるか知らなかつたが、此塔に於いて實は初めて充分にみる事ができたのである。左の四圖に示す通りで、先づ三二に於いては兩脚をつけて了うと一方の出た所が他の引込んだところに入つて固定され、上端の出た所は其上にのる料下の引込んだ所に入るから、兩脚と料とはしっかりと組めるのである。其柄の大きさ、臺股の厚さ等は其上の約一尺(二呎)の例の物差と比べて大概の見當はつく筈である。次に三三は中央のつき手から離して外側斜上から、三四は同じく内側斜上から見たところで、柄がどの位どの様につくつてあるかが判るであらうと同時に、柄穴の深さや、柄の角が斜に殺ぎとつてある所の有様も、充分呑み込めるのである。最後に三五であるが、これは臙に迂り止めが、丁度靴の踵の様につけてある。ほんの裝飾臺股かと思ふと、さうには違ひないが、中行き届いた仕事がしてあるのは、何といつても敬服する次第である。三三をみると蛙が兩脚をひろげた様で面白い。



三三



三三

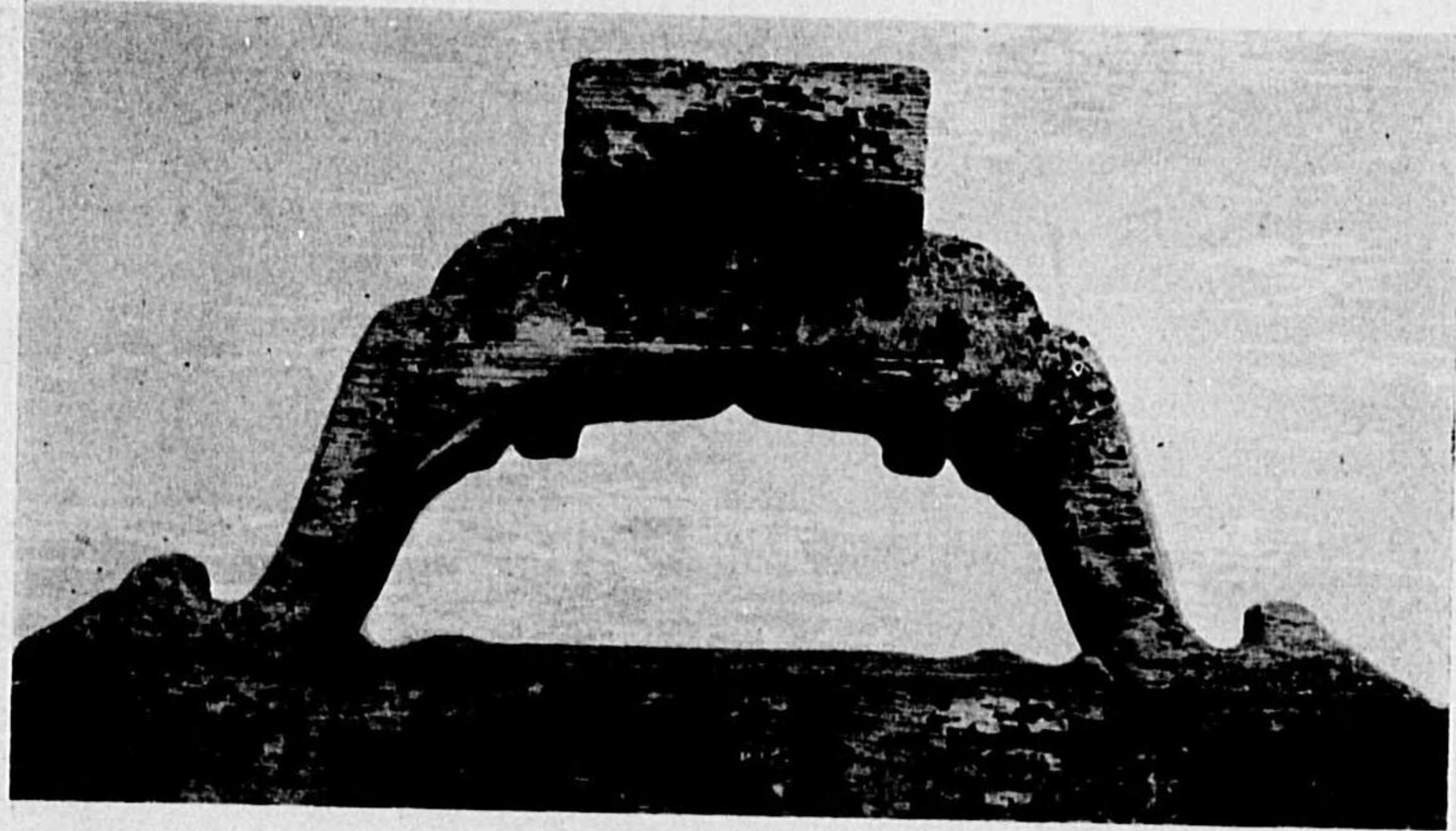


三四



三五

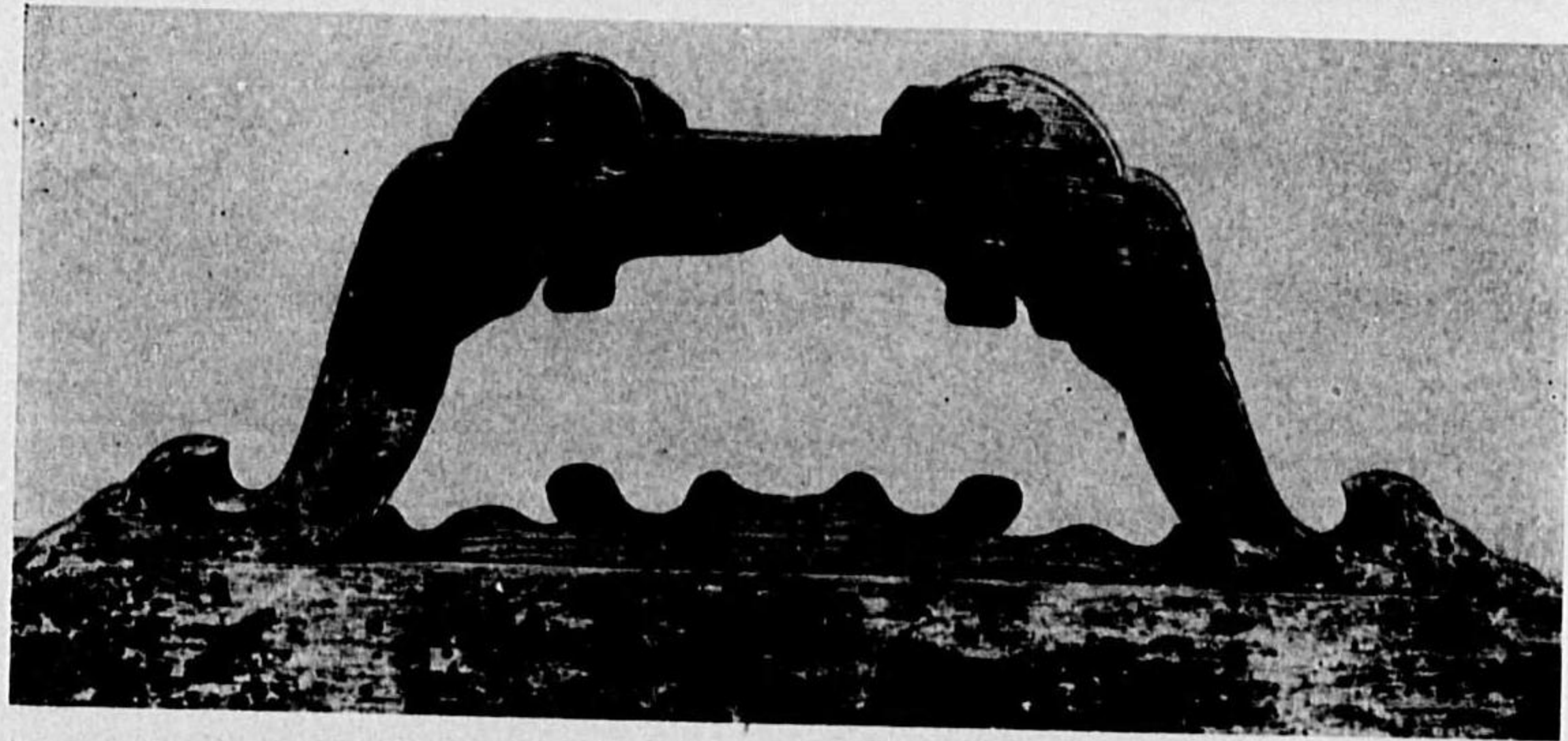
三六



三六、圓成寺境内春日堂臺股
三七、同 白山堂臺股

(大正四年十月十五日)
(大正四年十月十五日)

三七



三八

三八、圓成寺境内嚴嶋神社社殿正面臺股 (木下助三郎氏)



圓成寺(エンジョウジ)は奈良縣添上郡大柳生村大字忍辱山にある大寺で、奈良市を東に距る三里。以前は人力車で樂に行けたが、其後驛前から乗合自動車を通ふ様になり、一層便利になつた。併し此は僅かの間で、恐らく現在は僅か日に一回位になつた事であらう。健脚の人は歩いてでも知れたもの、いい途で途中に奈良時代と認められる大きな——多分東大寺に用ひるための——礎石が其ままにしてあつたりするのも見られ、愉快に歩く事ができる。私が初めて此寺へ行つたのは明治四十年の六月で、當時は大分ひどくなつた多寶塔もあつたが、間もなく倒潰して跡方もなくなつて了つた。

寺は勿論南面してゐるが、境内の東端即ち本堂に向つて右の端に、同じく南面して二棟の春日造の社殿が、間にある板扉で連なつて建つてゐる。元の春日神社・白山神社であらうが、今は春日堂・白山堂といふ名で呼んでゐる。二棟共鎌倉初期と認められるが、其向拜の料拱間には、夫夫三六・三七に示す様な臺股が入れてある。兩方共よく似てゐる。即ち兩脚内の上の方についてゐる飾りは殆んど同じで、向きは反對だが二四の兩肩についてゐる簡単な飾りが一段の進化をしたものと見られ、下にある飾りは兩脚が一木から刻み出されてゐるため、下の方が弱いためか脚端をつなく意味で、其つなぎに僅かに彫刻を施した迄の事。平安末にあれ位發達し、半は裝飾から殆んど八分通り裝飾化したものだから、鎌倉初にこれ位に進歩するのは當然である。併しまだ上は上、下は下で、上下の飾りに連絡はない。
然るに同じ境内に一人で運搬ができさうな小神社建築、嚴嶋神社といふのがあり、同じく鎌倉初期と認められるが、社殿一ぱいの向ひ唐破風をもつたもので、今から十五六年前迄は本堂正面の椽の東端にのせてあつたが、今はどうなつてゐるか知らない。其唐破風のつき當りに三八の様な臺股がある。兩脚内側兩肩の飾が一層發達した事は、上二圖と比較すれば直に了解し得ようが、下のは二八の系統のものであり、さうして此場合は上下の飾りが完全に連絡してしまつた。ここに於いて讀者諸君は内部空虚の臺股なる二七—三八の變化發達の順が了解できたと思ふが、かくして次頁に示す數例の様な鎌倉時代の圖案的左右相稱臺股はできたのであらう。

三九、新薬師地藏堂墓股

(飛鳥園)

四〇、峰定寺本堂厨子墓股

(大正九年五月八日)

此所に掲げた四圖は、何れも鎌倉時代と認められる「圖案的左右相稱墓股」で、斯様な彫刻を持ったものも、順序を経て追追とできて来たので、さう突然にはできないものではないと同時に、例へば日光の眠り猫の様なもの、即ち繪畫的の彫刻をもつたものは、先づ圖案的、換言すれば比較的原始的のものから、同様に順序を経なければ、一足飛びでは駄目なことを判らせるつもりで、多くの例を掲げたのである。そこで先づ此四圖を上から下へ順順に見て行く事にする。

三九は奈良市新薬師寺境内、本堂に向つて左手に、東面して方一間の地藏堂と呼ぶ小建築の科栱間墓股であるが、この輪郭は前數圖と比較すれば、この時代にこの位になるのは當然と思へるであらう。又脚内の彫刻に就いて觀察すると、兩肩につけてある小彫刻は折角三八に迄進歩したものが、逆戻りをした様にも見えるかも知れないが、洗練された結果と見た方がよろしく、又兩肩から下方中心に向つて中心飾を支へてゐる兩腕は、中央に茨が一つでき、中心飾も二七・二八・三八の夫等より、大分に工合がよくなつて來てゐる事が判るであらう。これが一轉化すると高野山不動堂背面中央の寶珠入鎌倉墓股になり得るのである。此種及び此系統のは非常に多いから、例等を擧げてゐてはきりがなからもうやめる。

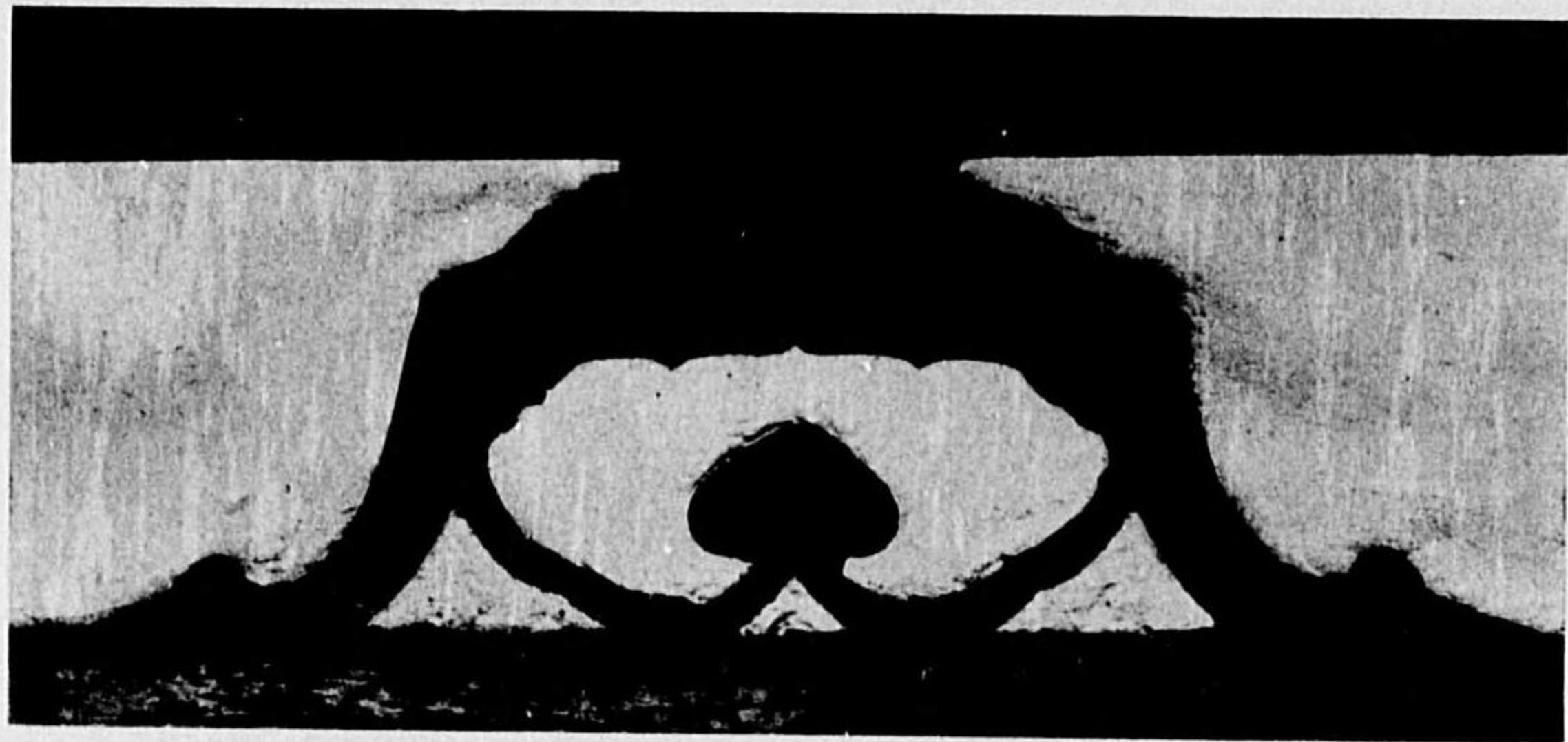
此種の墓股から四〇は容易にできる。中心飾が花化し、兩腕が葉莖化するとこれになる。峰定寺は京都府愛宕郡花背村大字原地新田にある。態態丹波の山奥迄見に行かなくとも、斯様な例も他にいくらかもある。ただ手許にあつたから出した迄の事。そこでもう少しこれが込み入ると四一になる。これは莖も二つからみ合ひ、牡丹には半開の花と蕾とが莖の途中から出で、中心の花から斜上に二つ斜下に二つ、つまり對角線の方向に四つの蕾を出してゐる點を忘れてはならぬ。夫から向ひ合ひの揚羽蝶だが、蝶の翅が圖案化されてゐるのも注意する必要がある。此墓股は非常に手が込んでゐる様ではあるが、やはり原始的の域を脱しない。といふのは薄い板にほつたもので、繪畫との距離がさうないからである。これに比べると、次の四二の方がやや進歩してゐる、理由は兩肩から出べき莖はずつと下の方になり、中心飾の花も幾分中心線から左右を異にて單調を破るべく努力したのであらう。併しながら其花の莖は、叮嚀に左右から中心に向つてゐる。だからやはり幼稚といふ評は免れ得ないであらう。大福光寺は京都府船井郡高山原下山にあり、下山驛から近い。多寶塔には此他に面白い墓股が多い。

四一、淨土寺(尾道市)多寶塔墓股

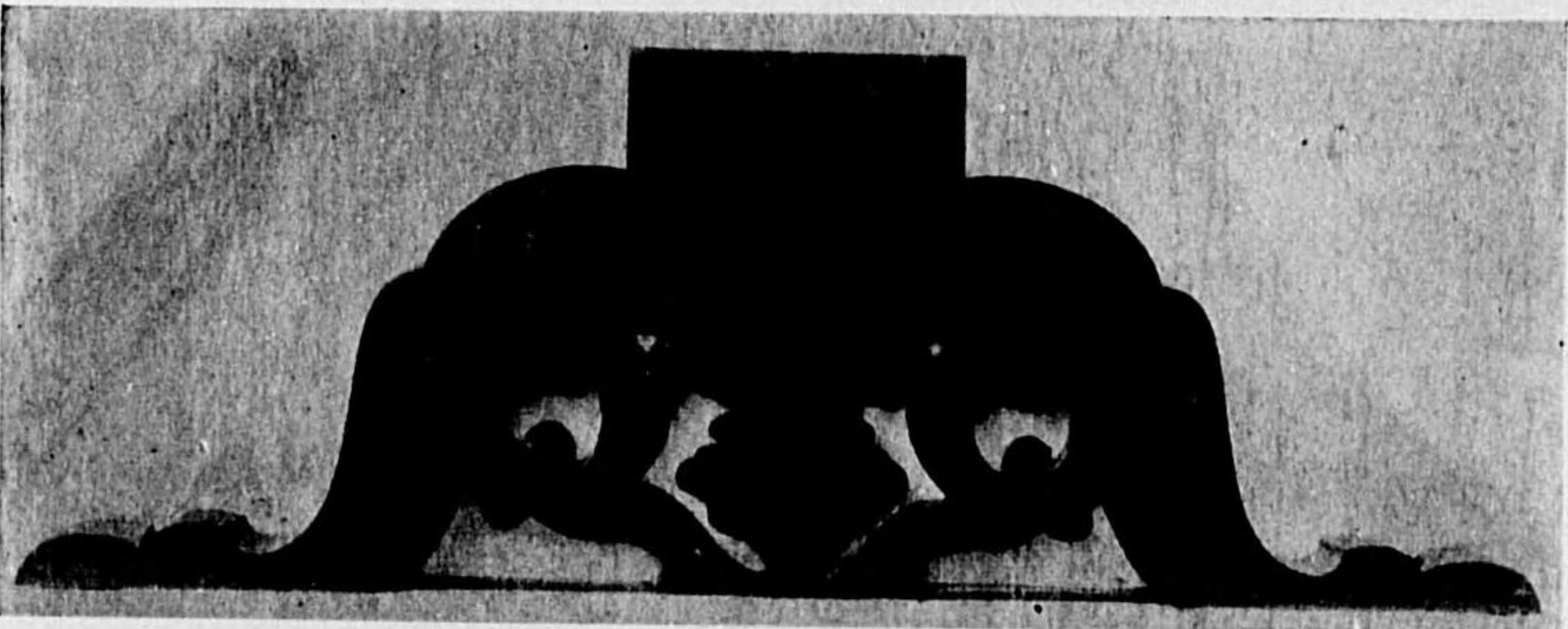
(昭和十年七月九日)

四二、大福光寺多寶塔墓股

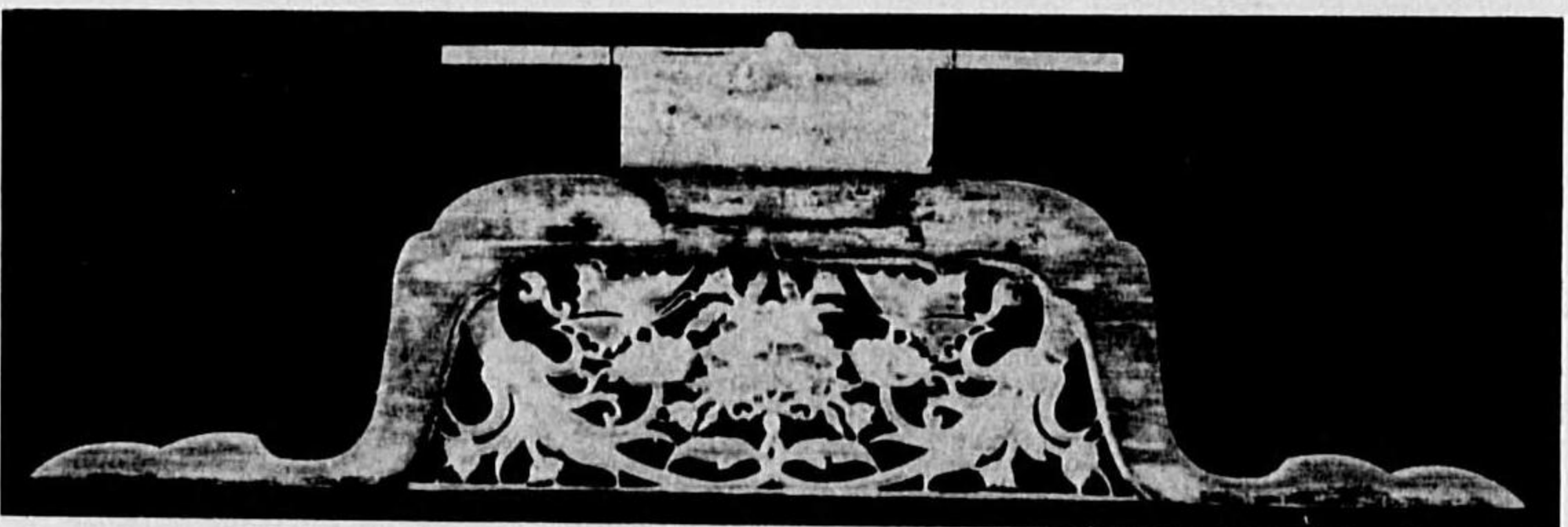
(家藏寫眞複製)



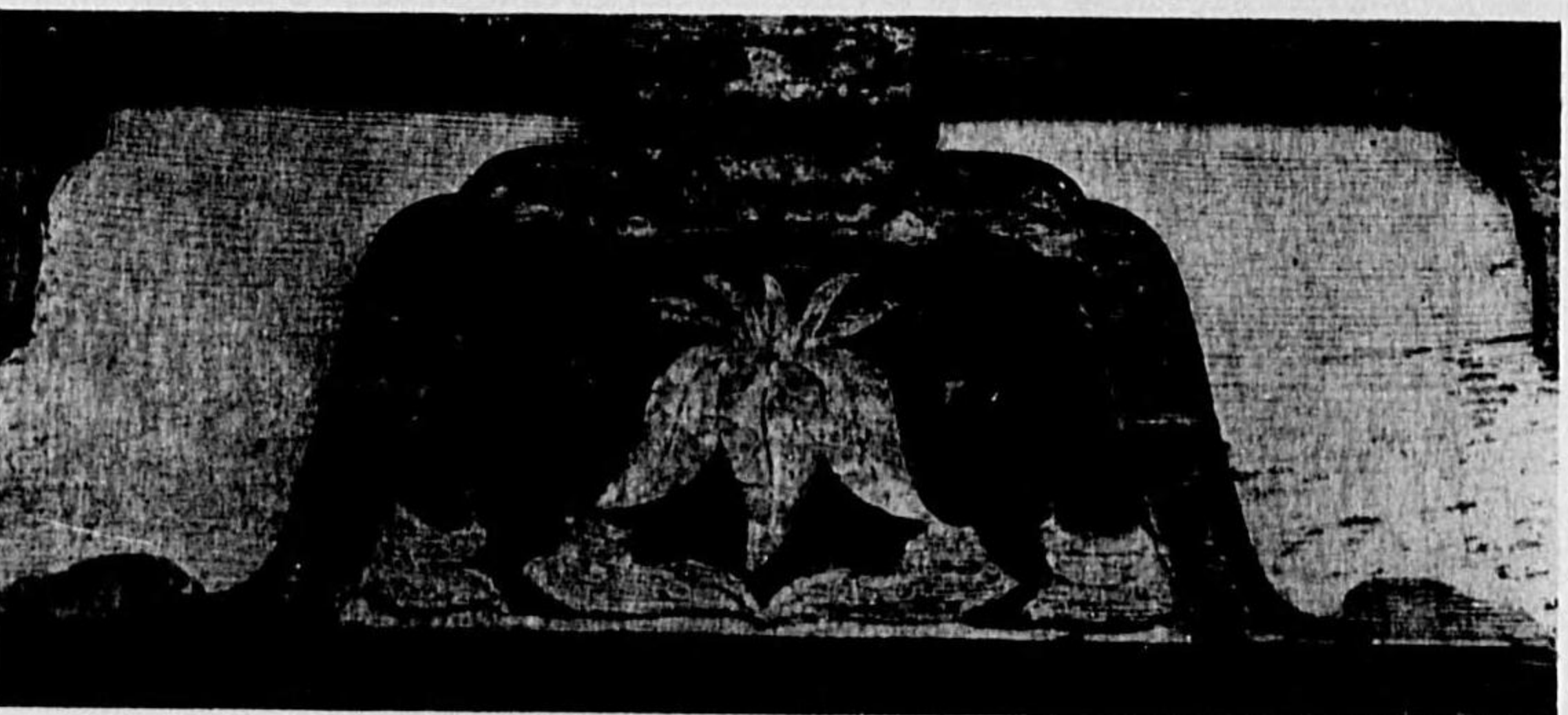
三九



四〇



四一



四二



四三

四三、一乗寺護法堂西側面科栱間鬘股(兵庫縣)
 四四、同 東側面科栱間鬘股(兵庫縣)

(兩圖共物差は曲尺の約一尺二呎)・昭和十七年七月七日

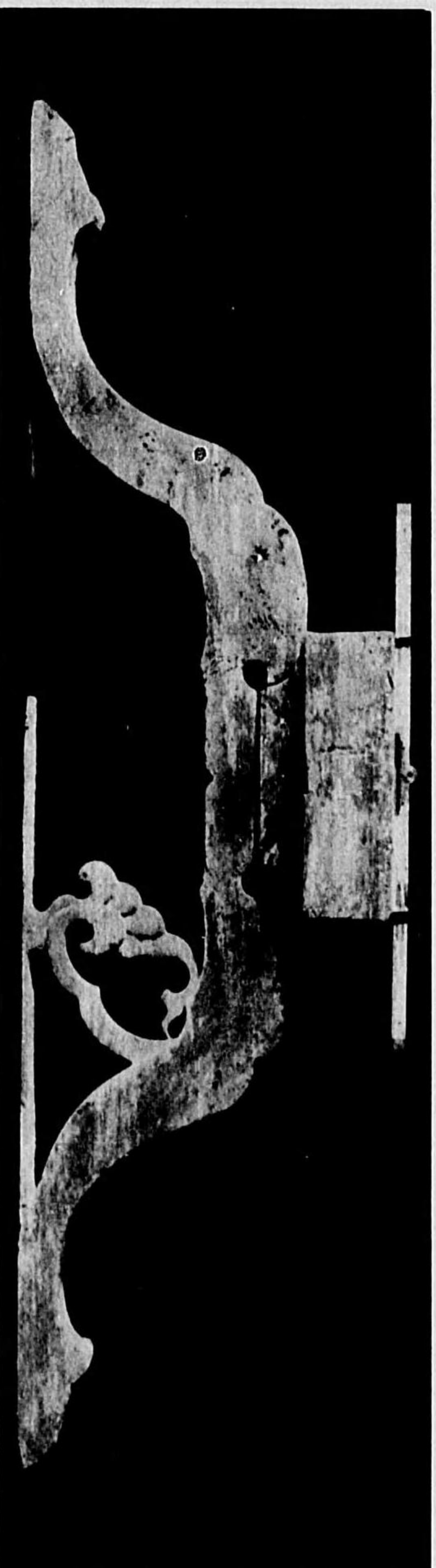
護法堂一に毘沙門堂といふ、一間社春日造、科栱間は正面と兩側面は鬘股で、背面は間科束。本堂後方の小高い所に南面して建つてゐるが、場所が狭いので、折角の鬘股はよく見えない。これも暴力を以て脚内の彫刻をもぎとつたものか、被害甚だしく南面のは何もない。東及び西側面の分だけは、夫でも幸に一方だけ残つてゐるので、解體の機を待構へ、出かけ行つて寫して幸にうまく出てゐたので、ここに掲げて聊か解説をしておく事にした。

最も珍らしいと思ふのは中心飾がない事である。何か知らないが、まるで「若荷の子」が芽を出しかけた様なものが両方にあり、中心には何もない。これはあつたのがとれたか、とられたかしたのではなくて、初めから無かつたものと思はれる。といふのは取り去られた跡がないからである。其上に東側と西側とは少し彫刻の仕方が異なる事、圖に於いて見るが如くで、人によつて夫好み好みがあるから、一概には言へないが、下の方がとりつけられて了つてからは效果的であらう。正面のがあつたらあつと何か考へられるかも知れないが、彫刻が少しも残つてゐないので考へようがない。

輪郭も脚内の彫刻も、まことにきやしやによくできてゐるが、其割にどうも脚の先が少しもの足りない。脚の先ときては、何としても洗練されてゐない。忌憚なく評すれば不思議に拙い。又脚も肩の美の邊から下が殊に内側で急に細くなり過ぎてゐる。つまり肉を落しすぎてゐる傾があるのは惜しい気がする。

中心飾がないといふ事は、鎌倉時代のものとしては珍らしいし、又何となしに物足りなく思はれなくもあるまいが、佐牙神社本殿(京都府綴喜郡三山木(ミヤマキ)村大字宮津)の「栱の葉に角鴬」の相對せる彫刻のある鬘股の、あの中心にある栱の葉がとれたようなものと見られるから、この様に中心飾を全然缺いたのがあつても不思議はない筈である。ともかくも非常にきやしやな裝飾専門のもので、其點に於いては法隆寺聖靈院内陣廚子正面唐破風下のと似てゐるといへる。

四四



四五、一乗寺護法堂東側面臺股詳細

(物差は曲尺の約一尺二呎)・昭和十七年七月七日

前頁下圖中央の部分を擴大したもの、若荷竹の様な

ものは西側の様に下についてゐるよりは、この様に少

し上つてゐる方が、より効果的である事はいふ迄もな

く、さうして其形も大變珍しいには違ひないが、實

はこれによく似た相當に大きな木鼻は奈良の不返寺本

堂内陣にあるのでみると、鎌倉時代頃に全然ない事も

ないといへる。用ひ所もまるで異なつてはゐるが、考

へは同じである。其尖端が芽を出した様に二つに分れ

てゐるのも、この方が西側のより大きくてよるしい。

つまり全體としてこの方が優れてゐる様である。

三つの臺股に共通の事實は、兩脚の内側、下に近い

邊が稍や細くなりすぎてゐる傾がある事である。夫が

らもう一つ氣になるのは脚の先で、これだけの臺股を

彫刻する腕の持主が、どうして斯様な拙い事をしたの

か。子僧にやらしたとしても、親方が少し手を入れれ

ばいいのにと思はざるを得ない。

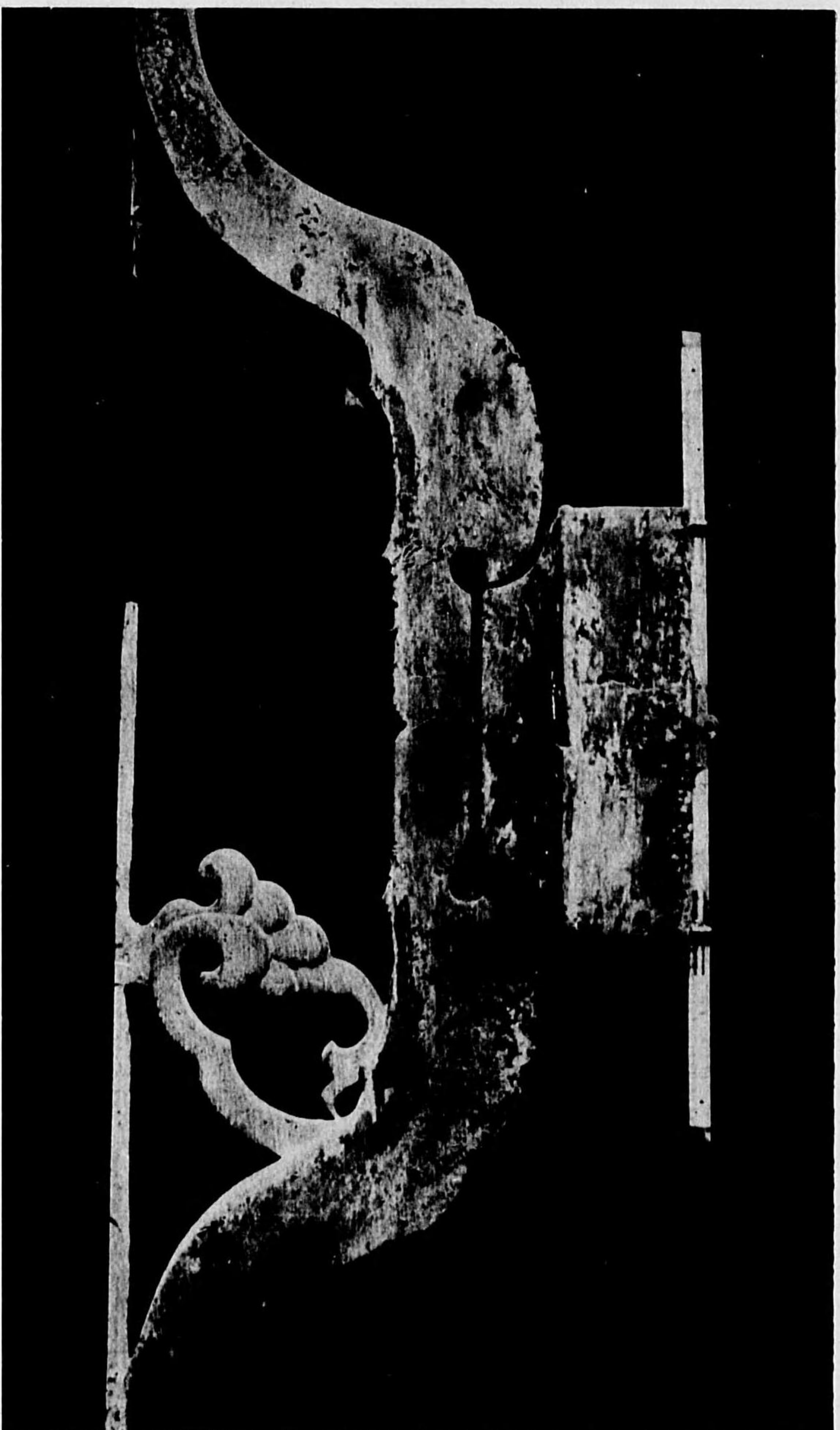
此圖に掲げたものは、私が以前に行つた時は脚内の

若荷竹の様な飾の左のは確かにあつた、其後いつか誰

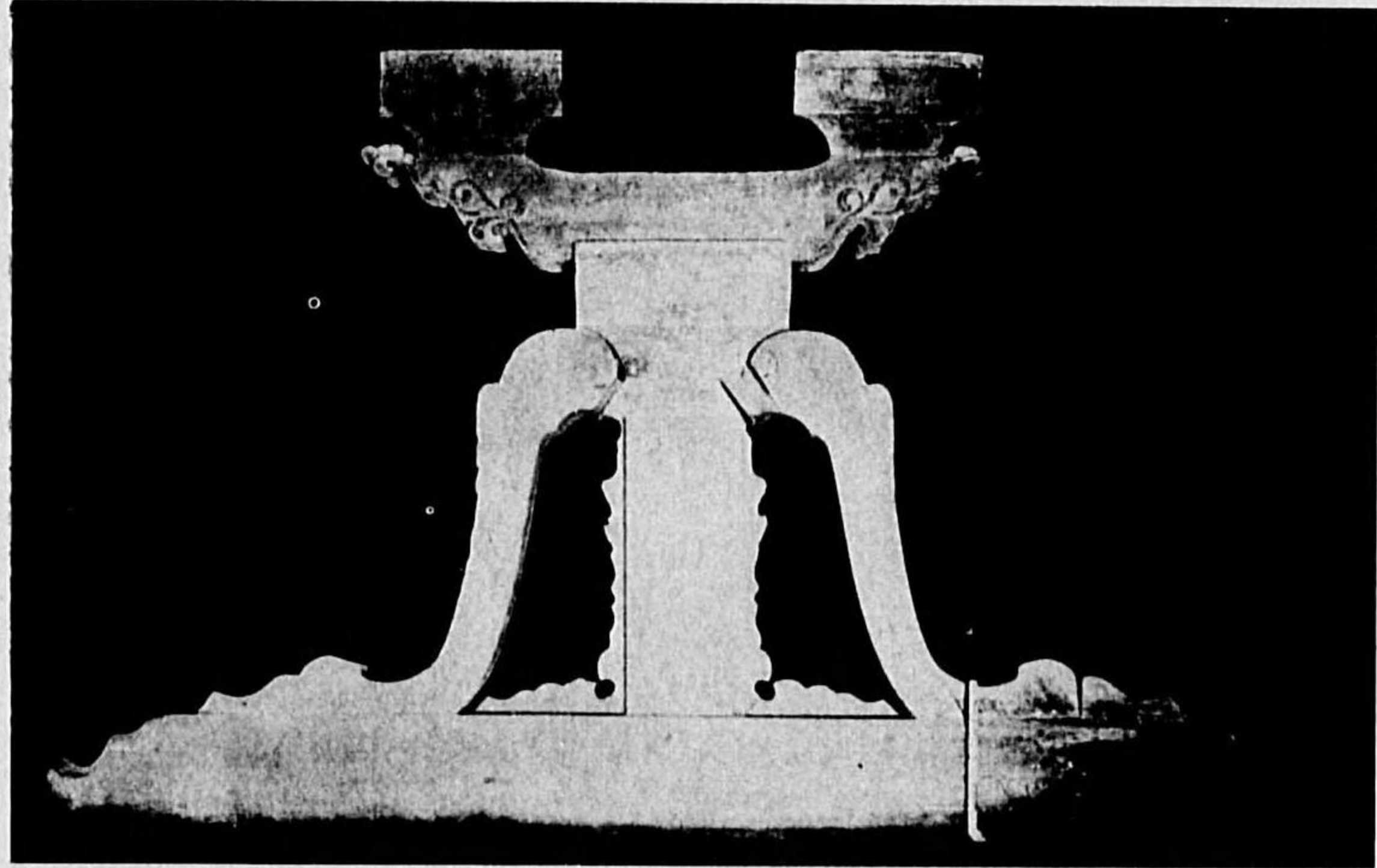
かが暴力でむしりとりて持つて行つたと見える。此事

に就いては、いづれ他日證據を提出して、ありし日を

偲ぶ事としよう。



四五



四六・四七・四八、不退寺南門冠木上大臺股正面・部分・側面

(上圖物差は曲尺の一尺・右下圖のは同約一尺(二呎)・上圖昭和九年八月二十六日、下圖昭和十年二月二十一日)
 修理のため解体以前には、一般に室町時代のものと考へられてゐたが、化粧棟木下の實肘木に「正和六年正月廿四日」の墨書銘が発見されたので、鎌倉時代といふ事が明らかとなつたのである。此は其全形寫真でみる様にあらゆる點に於いて獨創的意匠より成る唯一無二の大臺股。先づ冠木の上に兩端に木鼻式の繰形を有する木を置き、其上に高さ約二尺五寸、脚端より脚端に至る六尺餘の大割拔臺股をおいたものであるが、一木から刻みだすと、若し狂ひでも來た時始末に不良なると、又木材の經濟といふ様な考へや、仕事の難易といふ事も手傳ひ、先づ間料束の様なつもりで中央に束をたて、其上に料をのせ、料に繪様肘木を含ませて二料を其兩端に据え、これで例の大實肘木を受け、棟木の下に入れたのであるから、棟木以上の重量の一部は、この束で充分に支持してゐるのである。そこで臺股の兩脚は左下圖の様に兩方から薄い木を合せ、引獨鉗を用ひて離れぬ用意をし、中央の束に對しては恰も扱首棹の如き役目をさせてある。中央の束の左右及び臺股臺上の飾は、臺股の脚端をいろいろ工風してつき合せた様なもので、大した問題ではない。この設計者の考へを忖度すると、初めからこんな新工夫をするつもりはなく、間料束をかい考へてゐるうちに、この様なうまい考へが出たのだらう。大工友吉は當時の第一流の大家の一人であつたのであらう。

- 四九、八幡神社本殿臺股(兵庫縣加東郡小野町大字淨谷(キヨタニ))
- 五〇、相樂神社本殿臺股(京都府相樂郡相樂村大字相樂)
- 五一、大山田神社相殿應神天皇社殿臺股(長野縣下伊那郡下條村大字陽阜)
- 五二、寶塔寺多寶初重東側臺股

室町時代

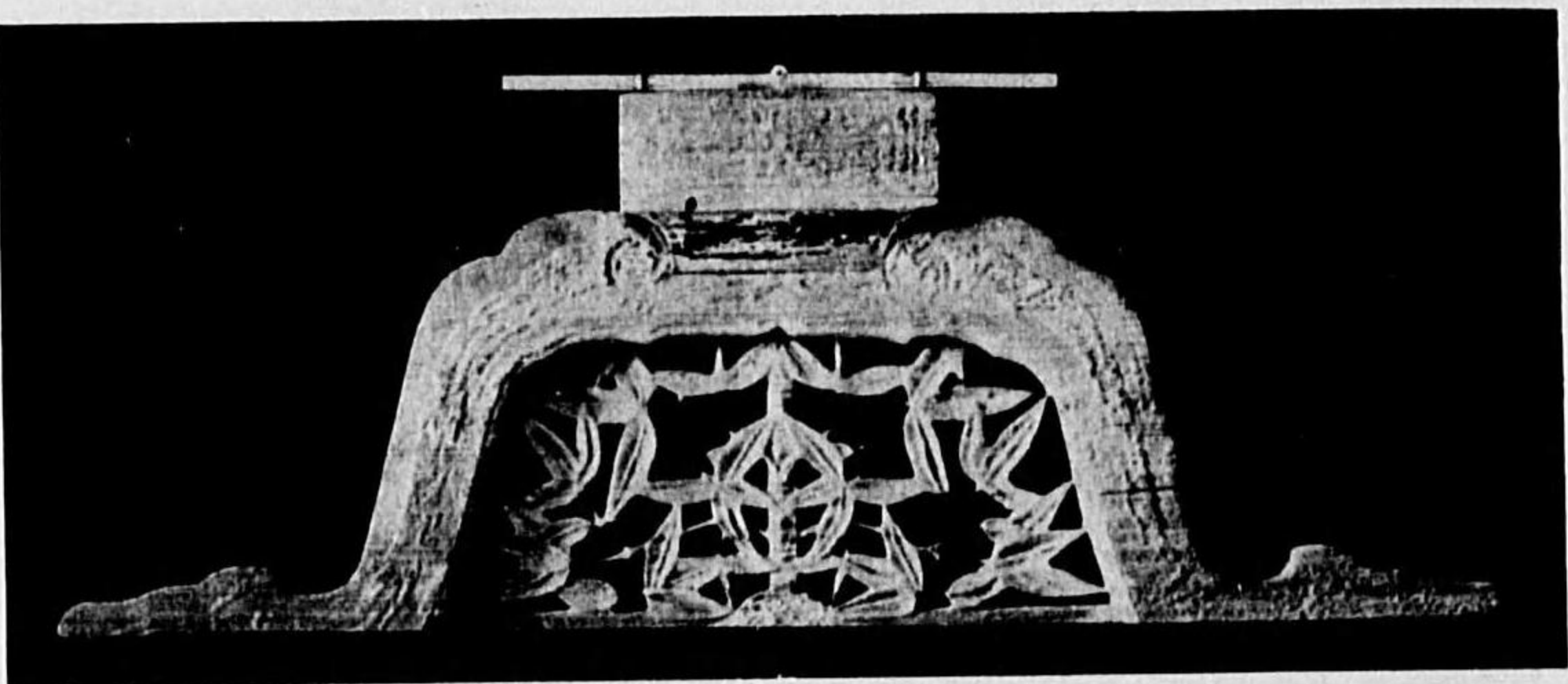
臺股も亦室町時代は鎌倉の引續きで、少しくやしやになった位でよく似てゐる。さうして前代に既に左右相稱の圖案的のものから、一方に鳥一方に花、先づ花鳥といった様な繪畫のものに進展してきた位だから(大福光寺多寶塔のもの一例あり)、當代になつては益益其傾向になつたのはいふ迄もないのであるが、先づ圖案的のものから始める。

四九は竹圖案のもの。中央の盛土から竹が垂直に生へ、左右全く相等しく葉が配置されてゐる。惜しい事に破損のところがあるので判然しないが、葉で何か繪にでもなつてゐるのではないかと思つても見たが、どうも判らない、中央の部が「萬」字の様に思はれなくもないが、とにかくこんな工合に竹を用ひたのは他の例を知らない。當初は彩色されてゐたものの如くである。綠色で多分美しかったらう。

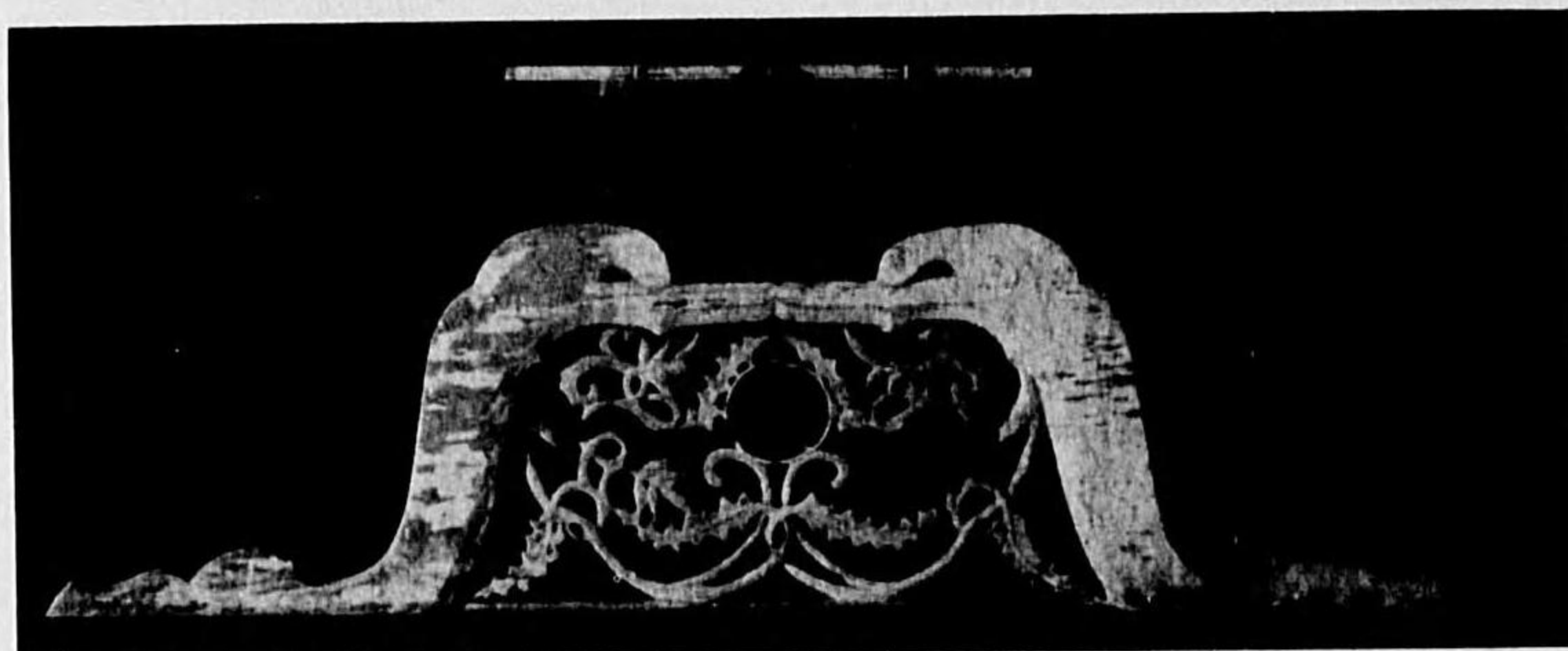
五〇は藤唐草としては、さうした極端にきやしやになつた此種のものとして、抜群のもの。この本殿は三間社流造で、從て臺股は三個あるが、兩端のものだけ中心に圓があり、中央のものにはない。この圓内に何が入つてゐたか判然しない。

五一は形も少し拙くなり、脚端も葉化し始めて、臺股としては墮落の傾向を示した。脚内の意匠は橋に鳩がとまつてゐるところと思はれる。植物があつて夫が中心飾となり、鳥を左右に配したのは、少なくとも吉野時代を下らざる京都府綴喜郡三山木村鎮座佐牙神社本殿の柏に角桌の臺股の系統で、敢て當代に初まつたのではないが、大してうまくなし、其輪郭は感心ができかねる。

五二は京都深草寶塔寺の紛失臺股のありし日の面影。こんな立派なのを盗まれても知らずに、修理の時いい加減のものを想像で補つてゐるのは、果して誰の責任であるか。左右相稱の便化蓮唐草の好例。



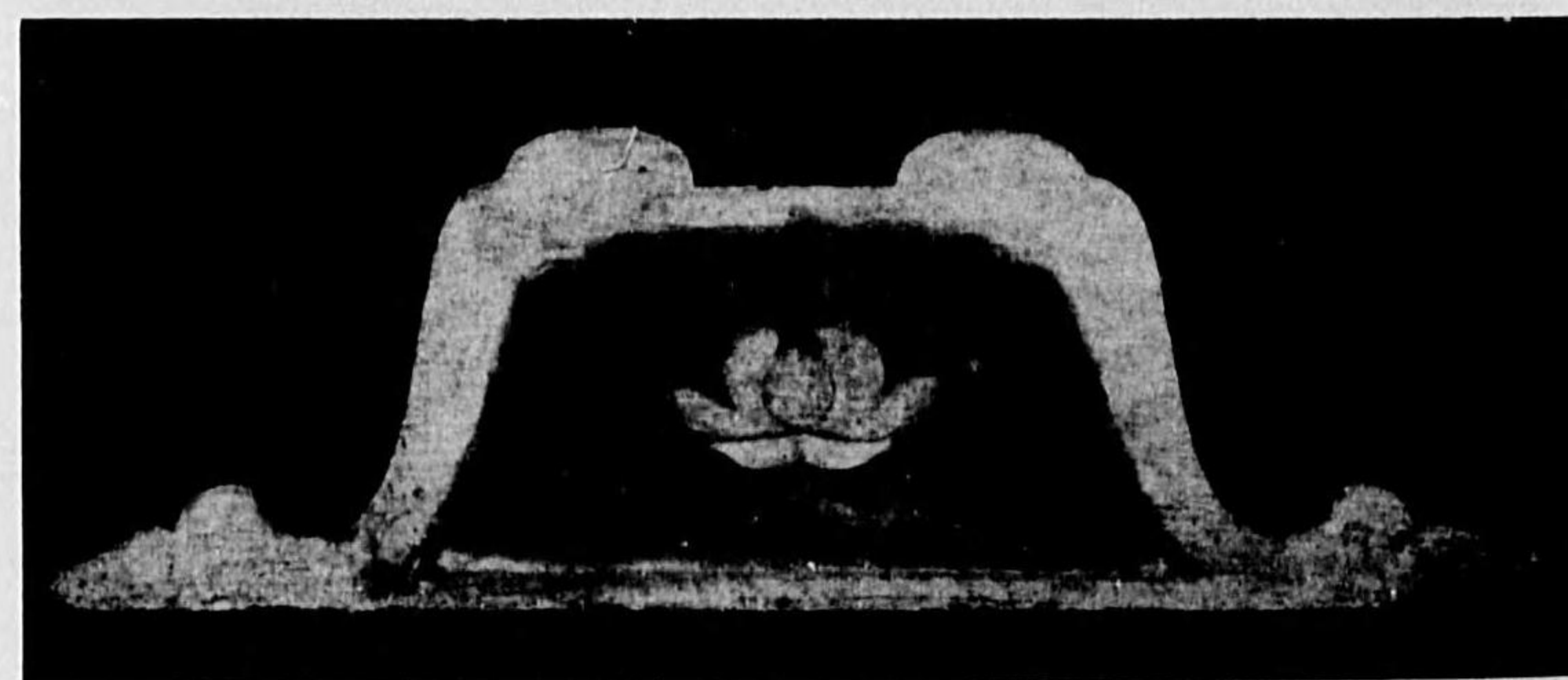
四九



五〇



五一



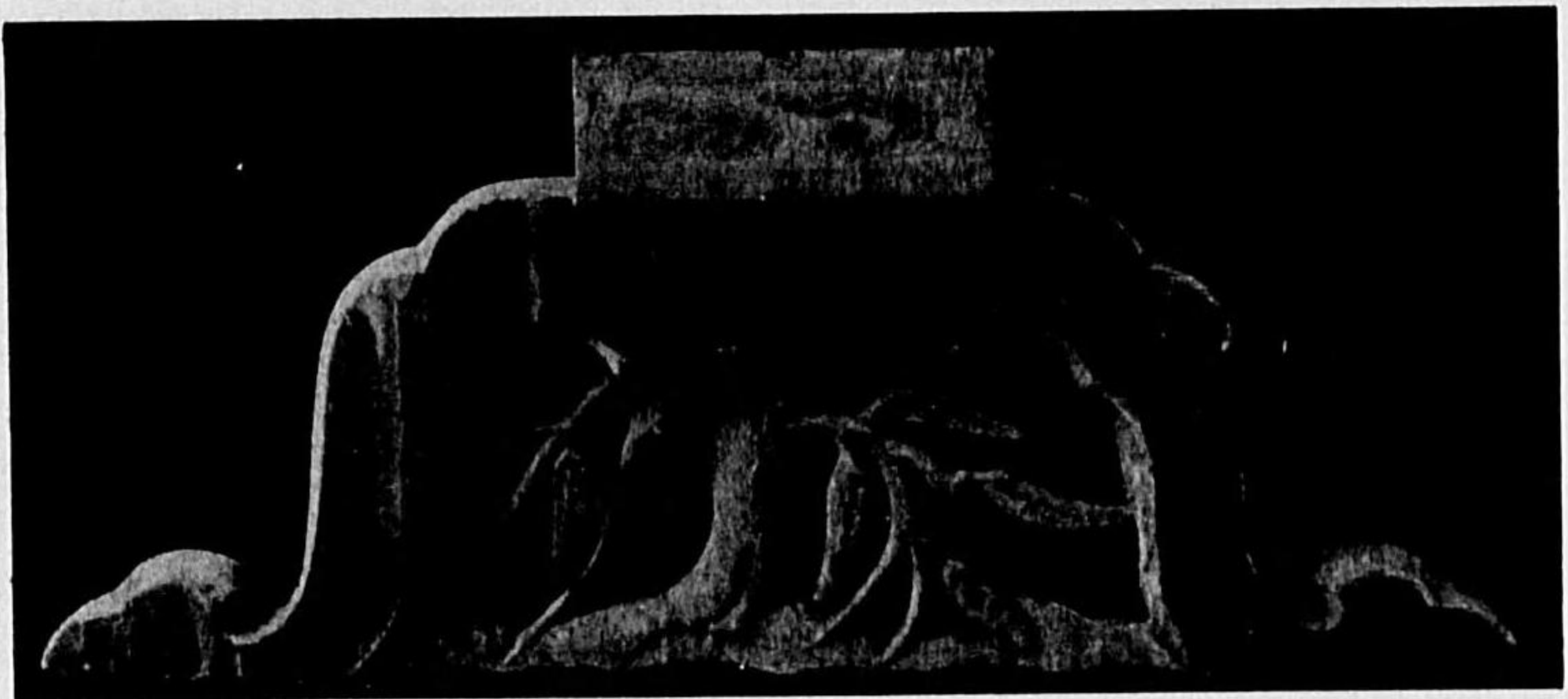
五二

(物差は曲尺の約一尺(二呎)・昭和十年八月二日)

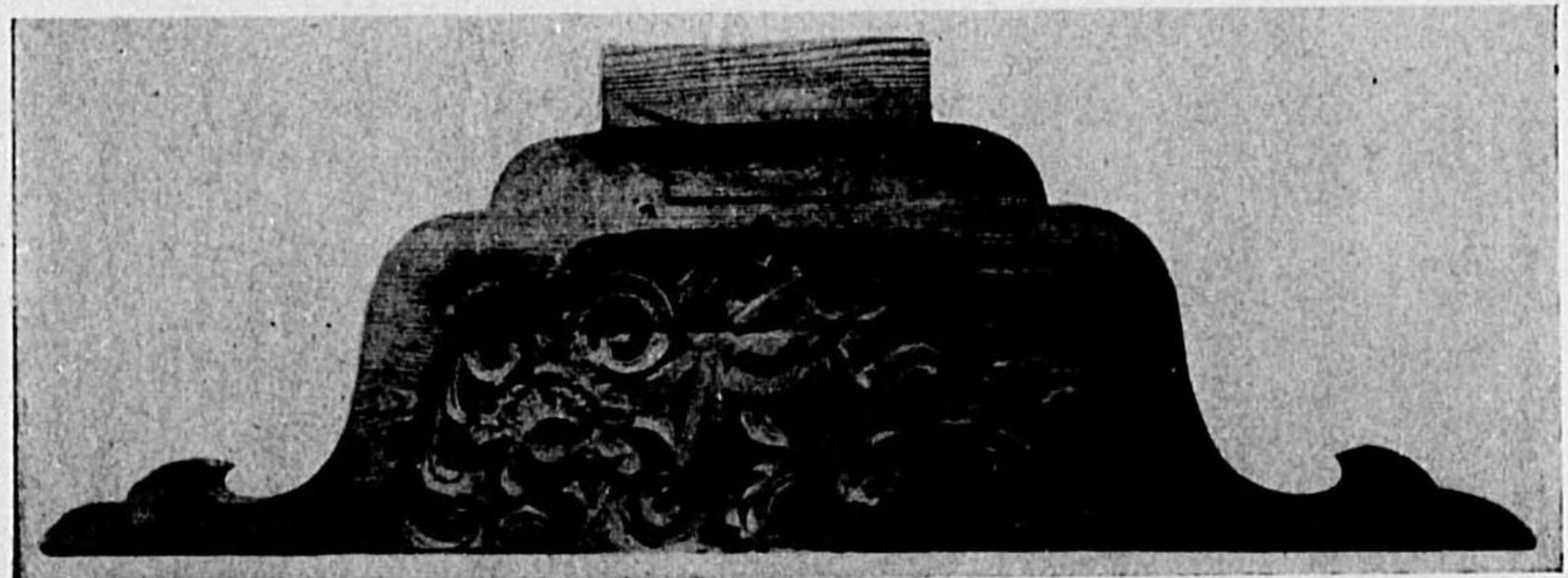
(物差は曲尺の約一尺(二呎)・昭和十年四月二十五日)

(家藏 寫眞複寫)

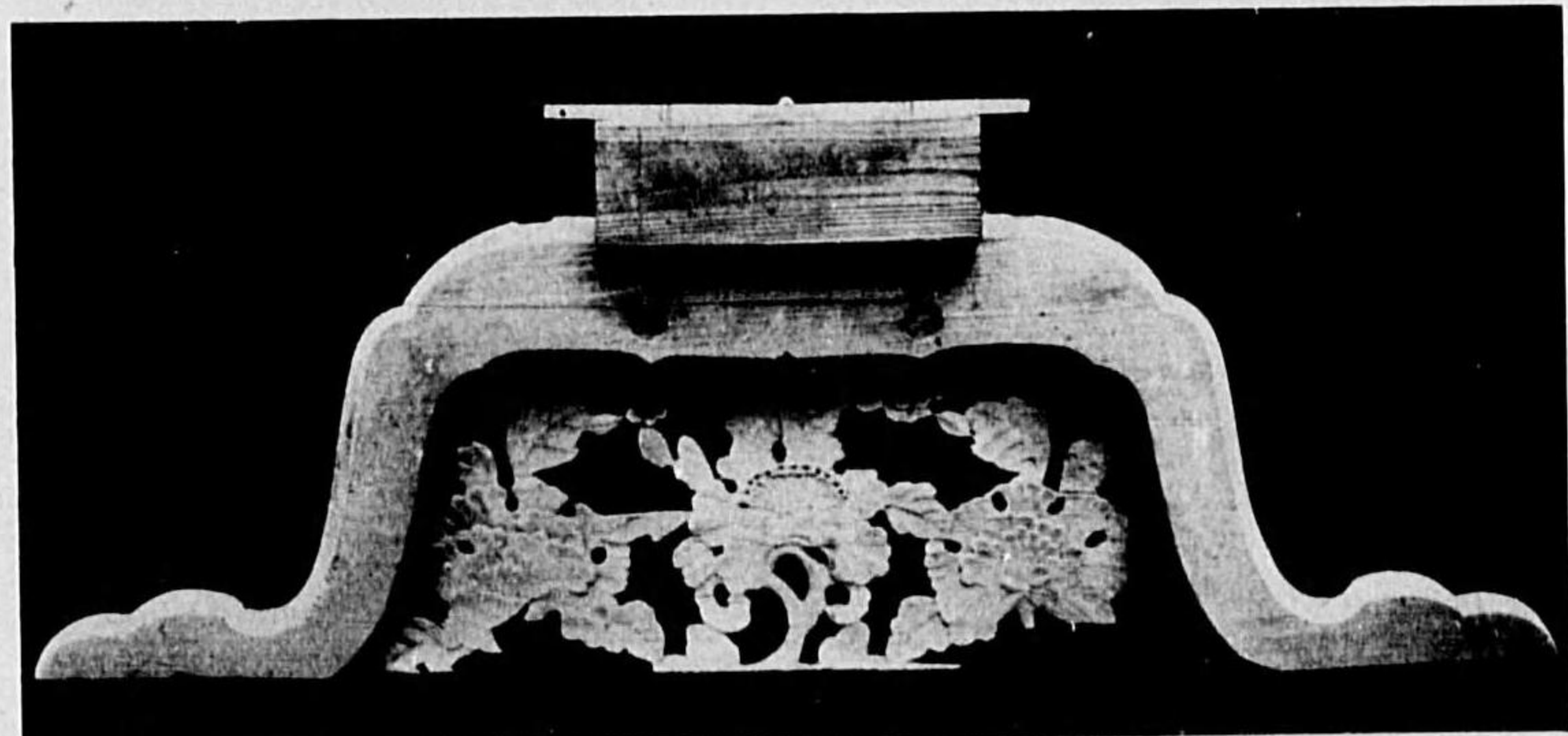
(木下助三郎氏)



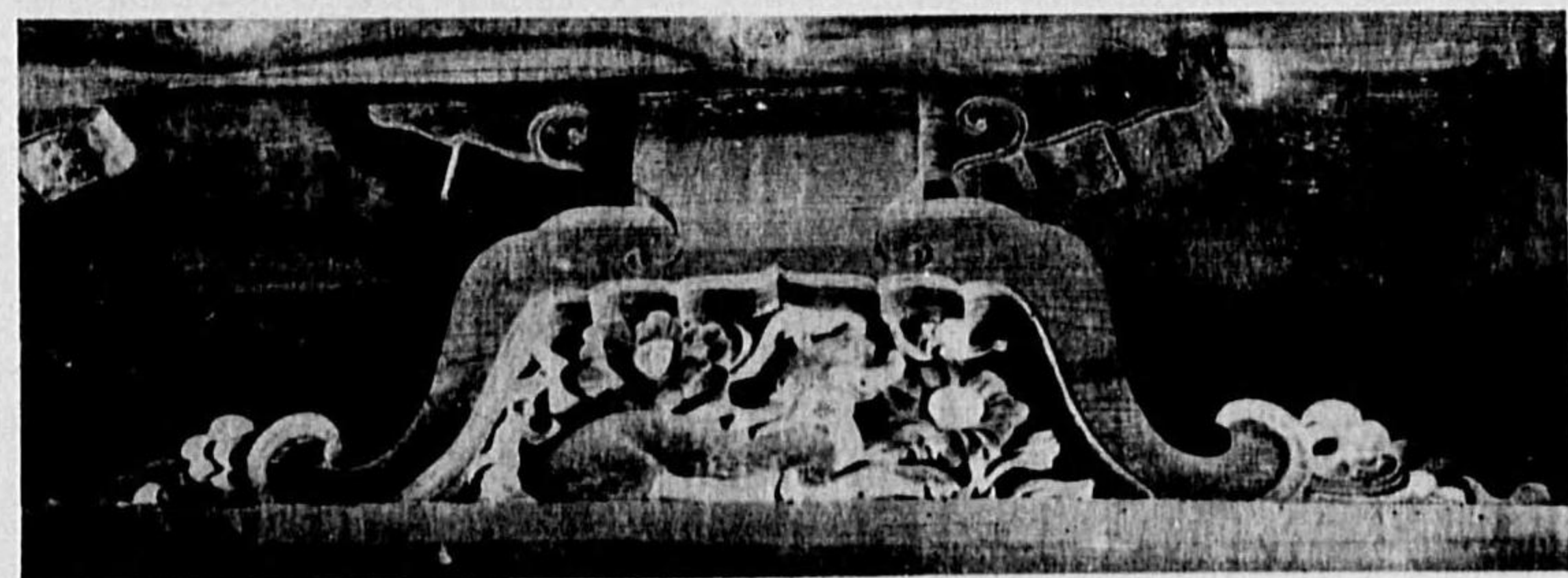
五三



五四



五五



五六

五三、許波多神社本殿臺股(京都府宇治郡宇治村大字五箇庄・郷社)

(昭和三年五月二十五日)

五四、油日神社本殿臺股(滋賀縣甲賀郡油日村大字油日)

(家藏寫真複寫)

五五、平清水八幡宮本殿臺股(山口縣吉敷郡平川村大字平井)

(昭和十三年三月二十五日)

五六、八幡宮本殿臺股(愛知縣寶飯郡八幡村大字八幡)

(昭和九年二月二十四日)

私は尙ほここに同じ室町時代の臺股で、兩脚内に圖案的东西のものから繪畫的のものに移り行く連鎖をなすと認められるもの四例を掲げておく。五三は三間社檜皮葺の建物向拜臺股の一で、此神社一に木幡神社とも柳神社ともいふ様である。内陣安置厨子の扉に「永祿五年^{戊午}九月二十六日造立之」「五箇庄楊大明神」の墨書があるから、建築も室町式である以上略同時代のものと認められるが、楊(柳)とは枝の向きが反對だが大明神といふせいか、臺股内に「柳」が刻してある。大分厚みがあり、中心に垂直に太い幹があつて、左右に枝が垂れてゐる。右と左と等しくはないが、幹が中心に直立してゐるのだから、相稱の意味の不相稱である。

次の五四は中心に明應三年八月二十二日、同社本殿上棟の時の大勸進由旭といふ人の花押を入れ、左右に牡丹の花と葉と莖とを配したもので、熟視する時は模様に興味の盡きぬものがあらう。

第三番目の五五は山口市に最も近い湯田驛から徒歩で二十町位だらうと思ふが、先年修理ができて、檜皮擬ひの銅板か何かで屋根を葺いて了つた様だが、美しくなつた事は確かである。その向拜臺股の一が即此で、よくもこんなに薄い板へ透彫をしたものだと、只管感服するのみである。此は牡丹が地面から三本生へてゐて、各一つづつ大きな花をつけてゐたが、左右の幹が折れて亡くなつて了つたので、花が宙に浮いてゐる。これも亦細かい所はさうではないが、大體が左右相稱である。

以上三つの臺股に比べると、五六は大きな獅子が中央に右を向いて座り込み、右下と左上とに牡丹があり、あと葉で然るべく埋めてある。尤もこれは向つて左端ので、右端は左を向いて駈けてゐて、埋草も大分自由だが、これ等もいはば獅子を中心にして左右に花を配したもので、相稱式から脱化しきらず、多少古い型が残つてゐる事を現はしてゐるといへる。

五七、大將軍社社殿八幡宮本殿蓼股(京都市伏見區深草鳥居崎町藤森神社境内)

(物差は曲尺の二尺・昭和三年十月六日)

五八、油日神社樓門蓼股(滋賀縣甲賀郡油日村)

(家藏寫眞複寫)

五九、土佐神社社殿蓼股(高知縣土佐郡一宮村大字一ノ宮)

(家藏寫眞複寫)

六〇、法隆寺地藏堂蓼股

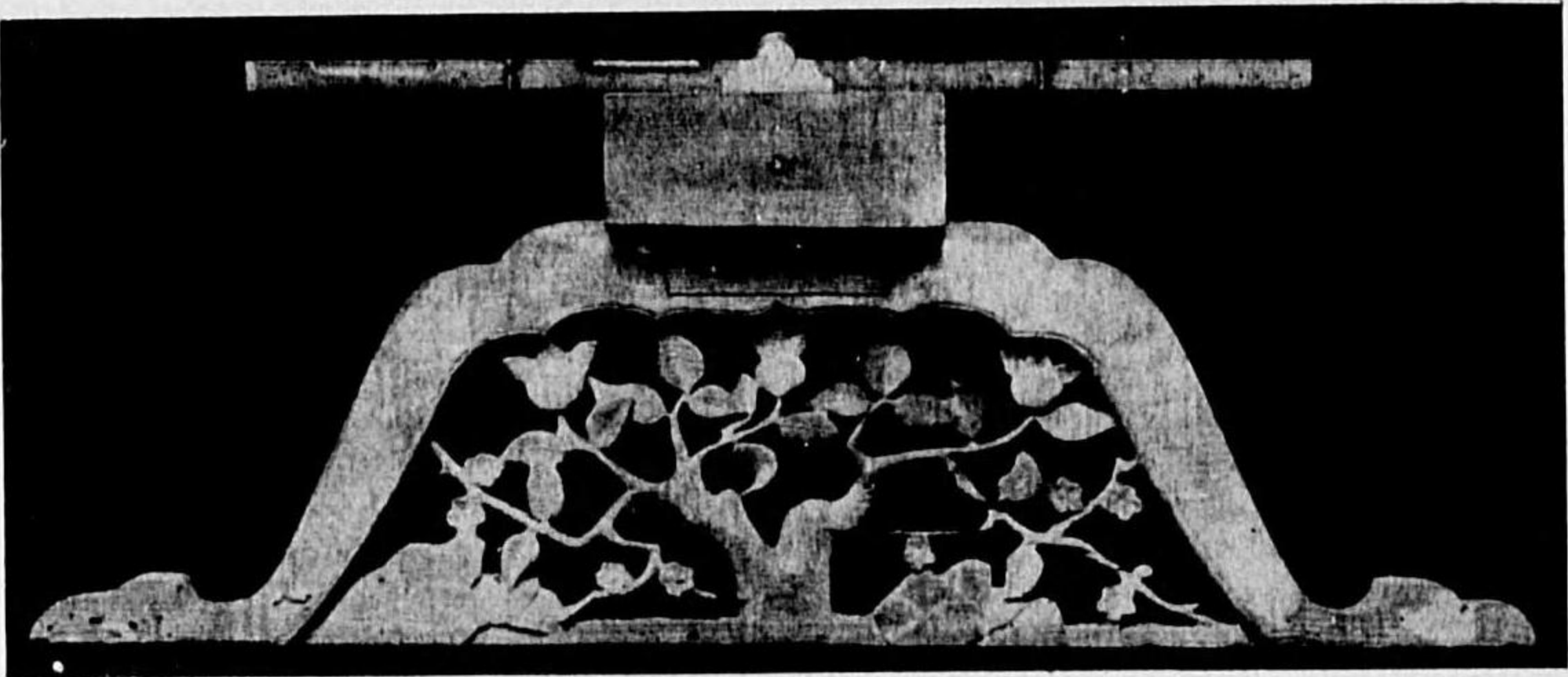
(昭和十二年五月十二日)

更に室町の二例を掲げておく。五七は深草の藤森神社のであるが、この神社は社殿が二棟あり、一を大將軍社といひ、他を八幡宮本殿といふ。共に頗るきやしゃな蓼股があるが、前者のは菊でひどく破損して居り、推定復原も容易でない状態。もう一つの方は即此で橋樹が刻してある。太い幹から細い枝が出て、花も咲き實もなり、且つ葉もつけてゐる。當代には蓼股や欄間等に橋は相當に用ひられてゐる様である。ここで注意しておくが五四・五五及びこれは、兩方の卷込の痕跡さへなく全く消滅して了つてゐる。

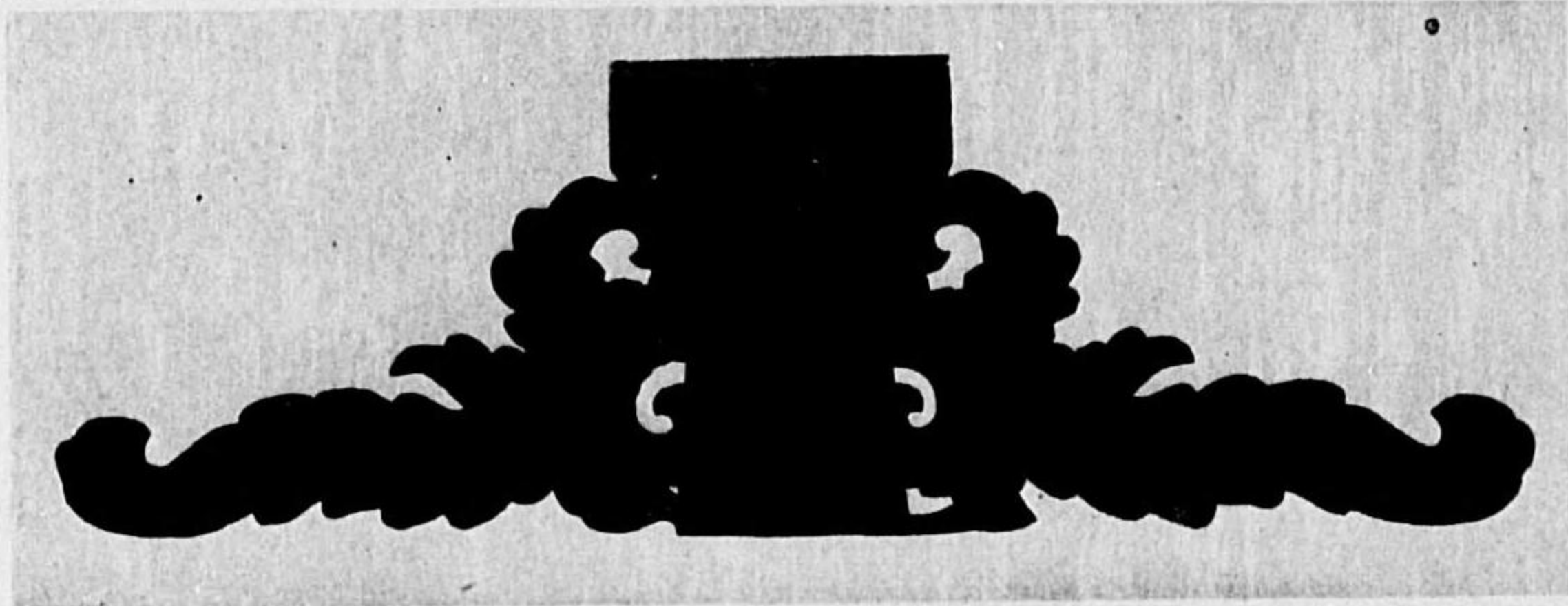
五八は油日神社(前出)の樓門ので、永祿九年上棟の建築に用ひられた全體葉化した蓼股である。由是觀之、江戸時代に雲蓼股・波蓼股乃至若葉蓼股がさらにあるのは當然といへるだらう。

五九は土佐神社本殿の數多き種類の裝飾蓼股の内の一で、何れ支那の故事をとつたのであらう、私にはどういふ場面を現はしてゐるのか判らないし、又判らせようとも思つてゐないが、とにかく地面に岩があり、草や木が生へてゐて、上には雲があり、人が二人立つて何かしてゐる。この建築は元龜元年長曾我部元親の再建、元和五年以後何度も修理されてゐるとの事であるが、此等の蓼股は總て當初のものと思ふ。果してさうなら我國に於いて少なくとも蓼股内の彫刻に人物を用ひた最古の例ではあるまいか。人物は大體桃山以降であるが、元龜元年といへば桃山と紙一枚の差で、こんなのがあつて然るべきである。

六〇は鎌倉時代末のもの。同時代蓼股の補遺として、實は圖版の組合せ上、不退寺の次に掲ぐべきのをここに廻したのである。地藏堂は棟木に應安五年の墨書があり、時代も確かである。其如何に五〇に似てゐるかを比較してみよ。珍らしい繪畫的藤唐草、洵に精巧な出來榮。圖柄からいふと互に替つたらよささうに思はれるものである。



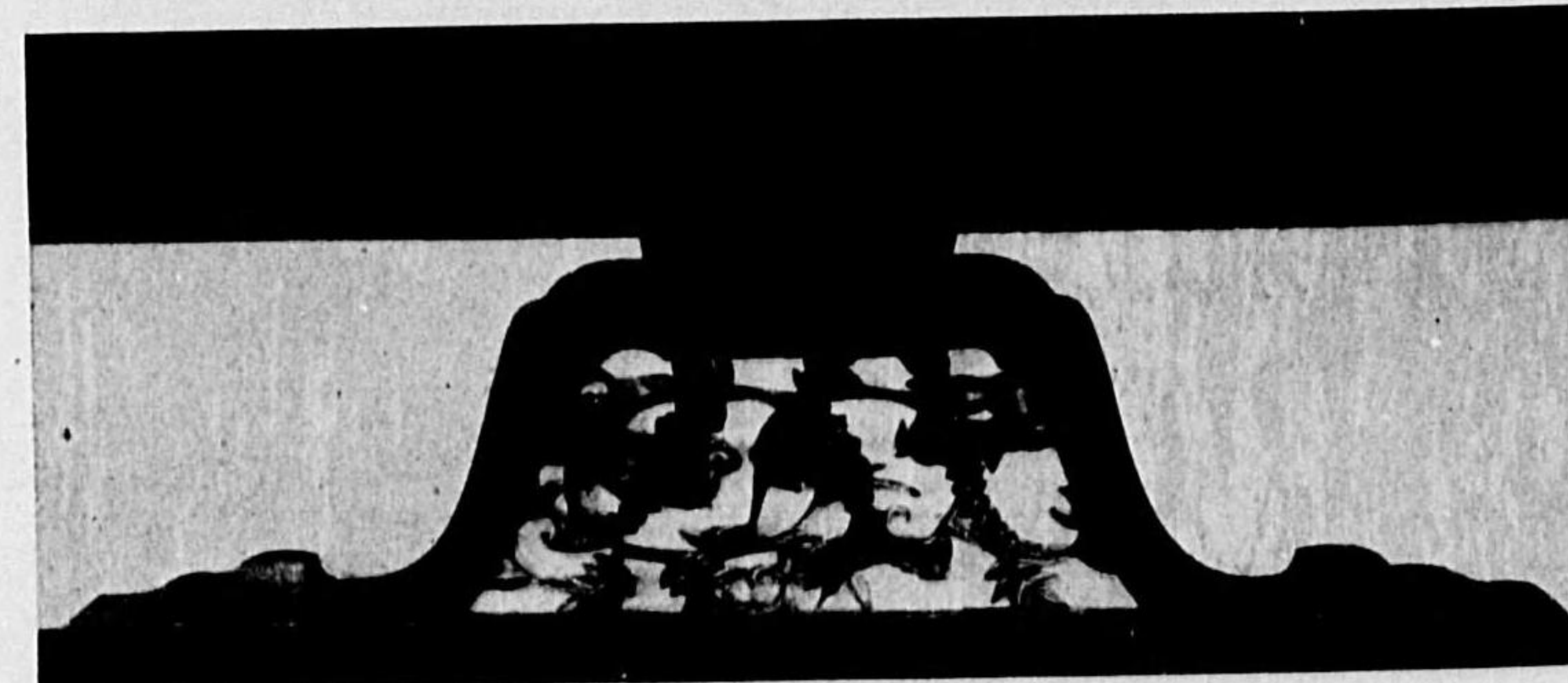
五七



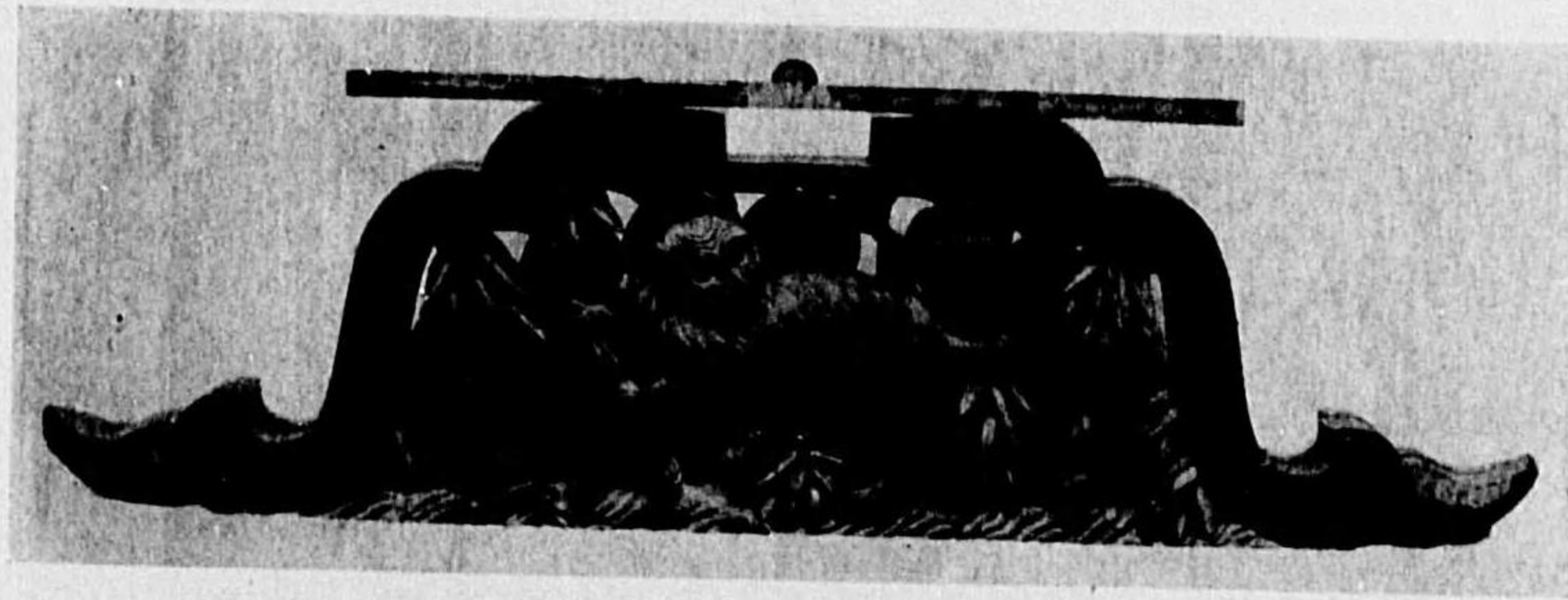
五八



五九



六〇



六一



六二



六三



六四

六一、傳元譽田八幡宮御陵前拜殿臺股

六二、性高院表門臺股(名古屋市千種區田代町)

六三、吉野水分神社社殿臺股(奈良縣吉野郡吉野町大字吉野山)

六四、大崎八幡神社拜殿臺股(仙臺市八幡町)

桃山時代

六一は今大鐵沿線恵我莊(エガノショウ)在住佐藤佐氏の所有せられるもの。表が「竹に虎」で裏は「松」。竹に虎は室町時代から實例があり、其後相當に用ひられてゐるが、古いのは兩前肢を竹にかけてゐる位だからまだよろしいが、時代が降つてくると竹の幹に猛烈な勢でかみつてゐるのがある。竹藪には多く筍が生へてゐる。此所に示した四例の中で、輪郭はこれが最も拙く、正に五九の系統と見られる。

六二は板臺股の様な彫刻を入れた様な曖昧臺股であるが、これは兩面異り、こちらは「松・竹・鶴龜」の謂はゆる蓬萊山の景だが、反對側は板臺股の中央に圓文(鎌倉式)があり、其圓内に「浪に雲に月に鬼」をほつてある。此彫刻は室町系統である。こちら側の蓬萊山の松と鶴とが輪郭から喰み出してゐる所は、時代の下つてゐる事を示してゐる。

六三の輪郭には金銅——今は緑青が出でまるで緑色だが——飾金具が打つてある。そこいら中、やたらむしように飾金具を打ちだしたのは桃山からである事を知つてゐれば、一見ただけで桃山以降だと氣がつく筈である。脚内の彫刻は浪に蓮だが、大蓮花を中心飾とし、葉と半開の花と蕾とを可然配置してある。當代傑作臺股の一。

六四は脚内の彫刻が「猫に牡丹に揚羽の蝶」。此種の彫刻の特性として猫は必ず右、牡丹と蝶とは必ず左に位置してゐる。此猫は起きてゐて蝶をねらつてゐるらしいが、蝶等にかまはず平氣で眠つてゐるものもある。牡丹に猫は室町からあり、臺股脚内に入れて蝶を添えたのは桃山に左程珍らしくなく、日光東照宮廻廊の様なのは寧ろ珍種といへよう。

(撮影年月日未詳)

(昭和七年二月十九日)

(昭和七年八月二十五日)

(昭和九年七月三十一日)

六五、豊國神社唐門臺股

(飛鳥園)

六六、妙心寺浴室正面臺股

(昭和六年五月三日)

六七、醍醐寺三寶院臺股

(飛鳥園)

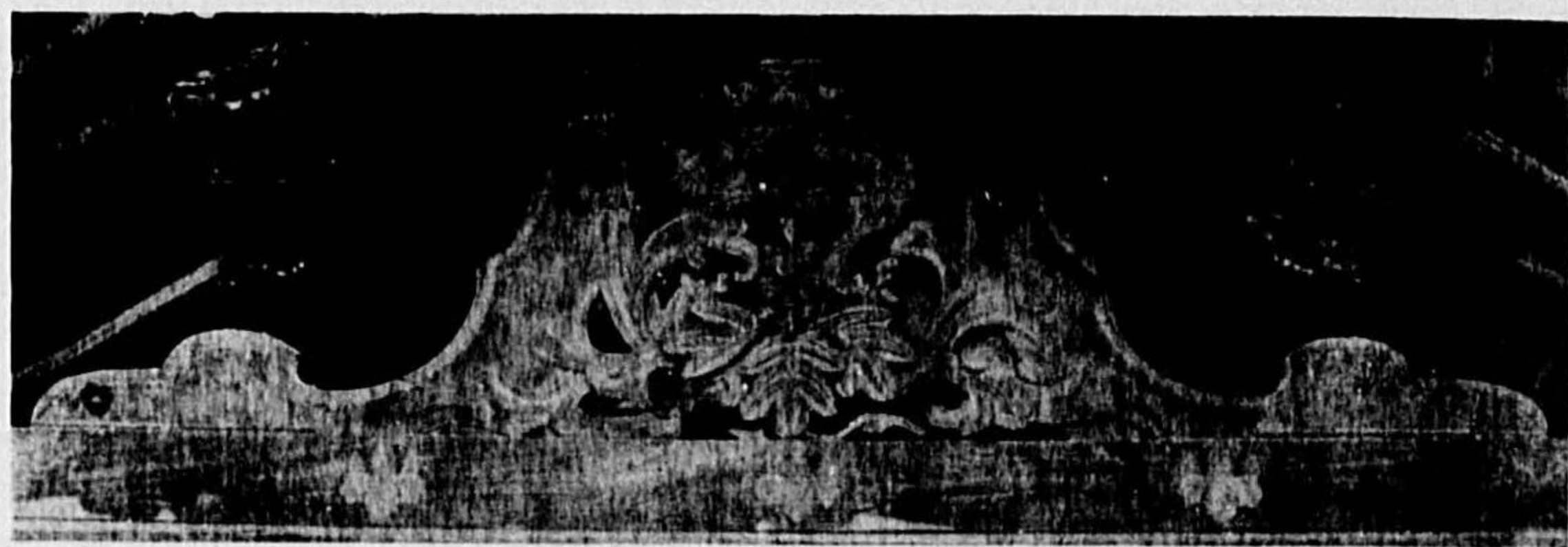
六八、荒見神社殿臺股

(昭和十年六月六日)

京都市東山區大和大路正面茶屋町といふと、どこか判りにくいのが、實は博物館の北隣、別格官幣社豊國神社の唐門は、伏見城の遺構といふ事で、南禪寺金地院から移建したものといふ。六五は其臺股の一で、大きい事は大きい、拙い事も思ひ切つて拙い。其輪郭は締りがなく、脚端は異常に發達し、之に反して上の料は意外に小さく、何とも形容のできない脱俗超凡臺股である。但しこれは輪郭のわる口で、脚内の桐はよくできてゐる。其中心飾はできの大變よろしい太閤桐である。もう一つ注意すべきは、空隙を充填した唐草が輪郭へはみ出してゐる事で、この手法は桃山位から始まつた様に心得ていい様である。次の六六は京都花園妙心寺浴室正面の大臺股。此浴室には天正十五年上棟の棟札があるが、明暦二年再造云々の記録もある。そこでこの臺股は明暦かも知れぬが、桃山そっくりと見られるから、明暦としても手法様式上桃山に入れておいて差支はあるまい。輪郭の肩のあたりが兩脚よりも薄いので、物足りない位はがまんしておく。扱て脚内の彫刻は下に波上に雲、向つて中心より左手に雲中より下界に向つて前に三後に一指の鱗のある脚が出てゐる。他分龍が昇天する所であらうが、洵に面白い取扱であると思ふ。

主として桃山頃から萬年青を彫刻に用ひだした如くである。木鼻や臺股、或は神社の透塀等に間見え受ける。六七は其一例で、これも亦輪郭は思ひ切つて拙く、内輪上方の曲線は力が抜けて了ひ、脚端は異常形を呈し、少し位の外科手術では整形はできさうにもない。内部の彫刻は萬年青。織田信長が萬年青を愛好したので當代から流行したといふのは、俗説とるに足らぬとしておいてよろしいようである。

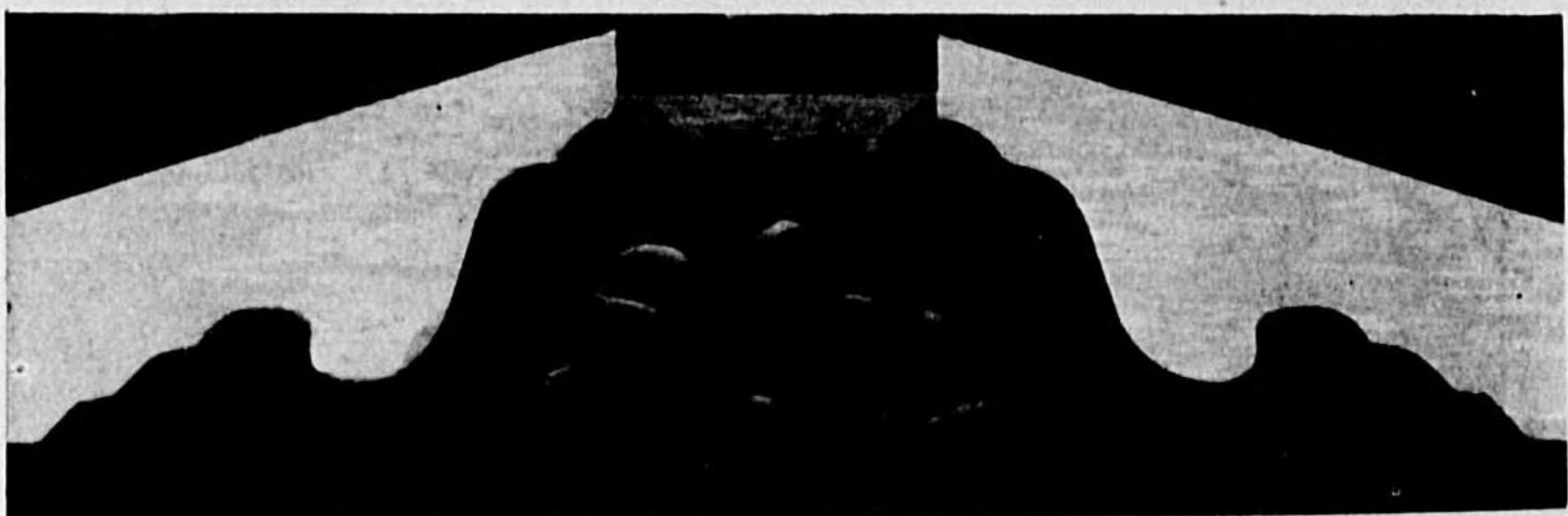
六八は京都府久世郡富野莊村大字富野鎮座の村社荒見神社ので、奈良線長池驛から程近く、汽車の窓から森が手にとる様に見える。既に扉二一から二三の解説で述べた様に、慶長十七年の建築であるが、新しい割に臺股としては鎌倉直系で、他の當代のと比べてよくできてゐる。どうも相變らず肩の肉が薄いのが目障りだが、兩脚も比較的無難であり、脚内の彫刻は牡丹か何かの開いたのが中心飾で、其兩方に蕾を配し、此種の彫刻の事由をよく示してゐる。但し時代が時代だから、莖が兩脚の内側から自然に出ず、そこに少し無理がある位は見逃しておいてよろしからう。



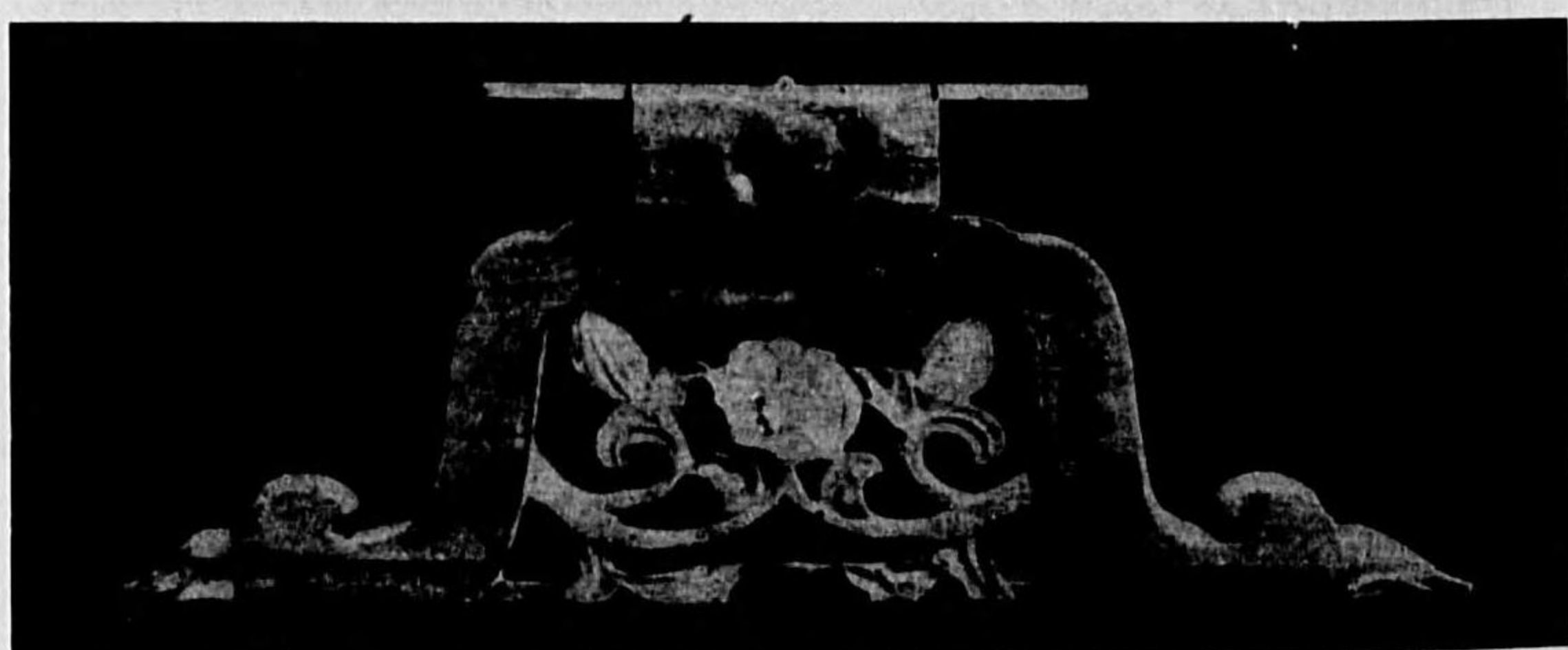
六五



六六

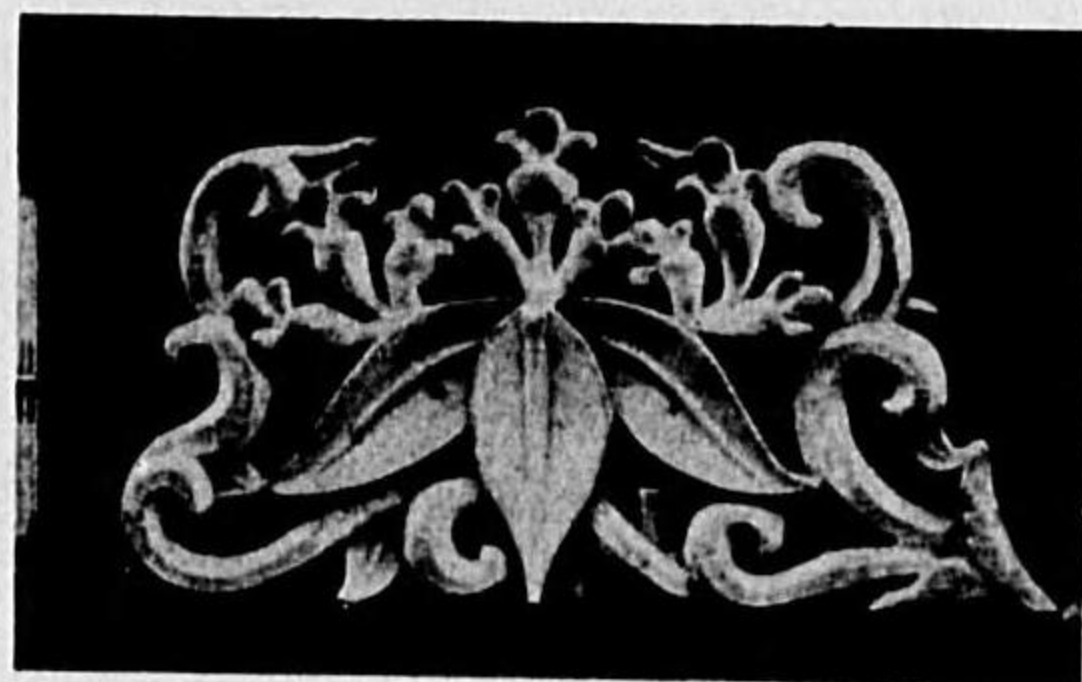


六七

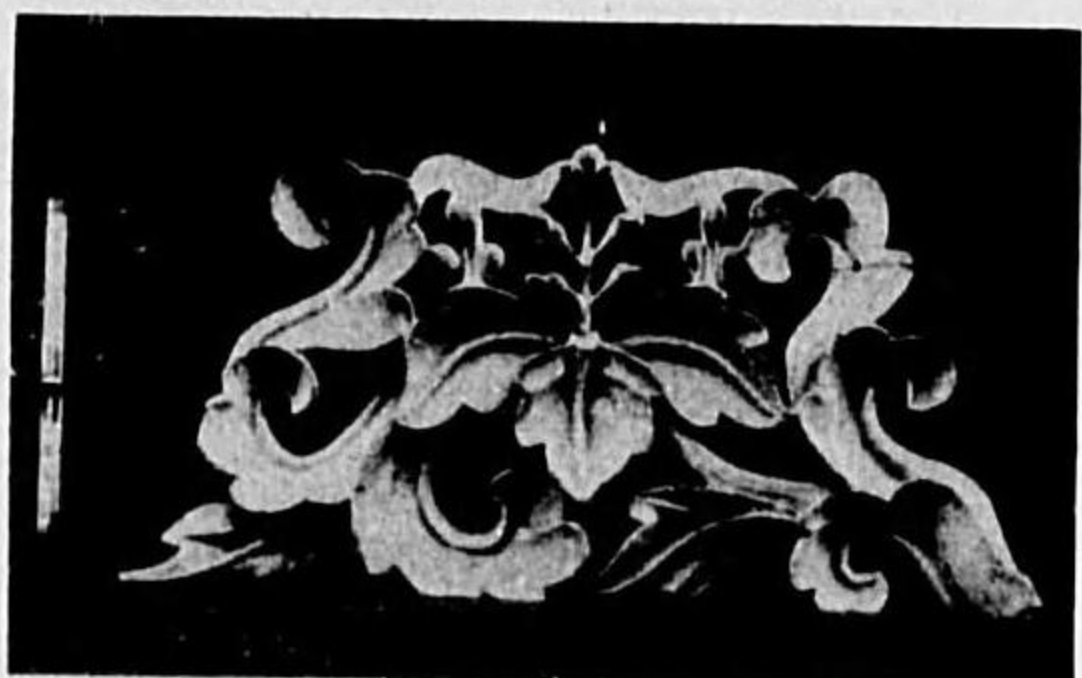


六八

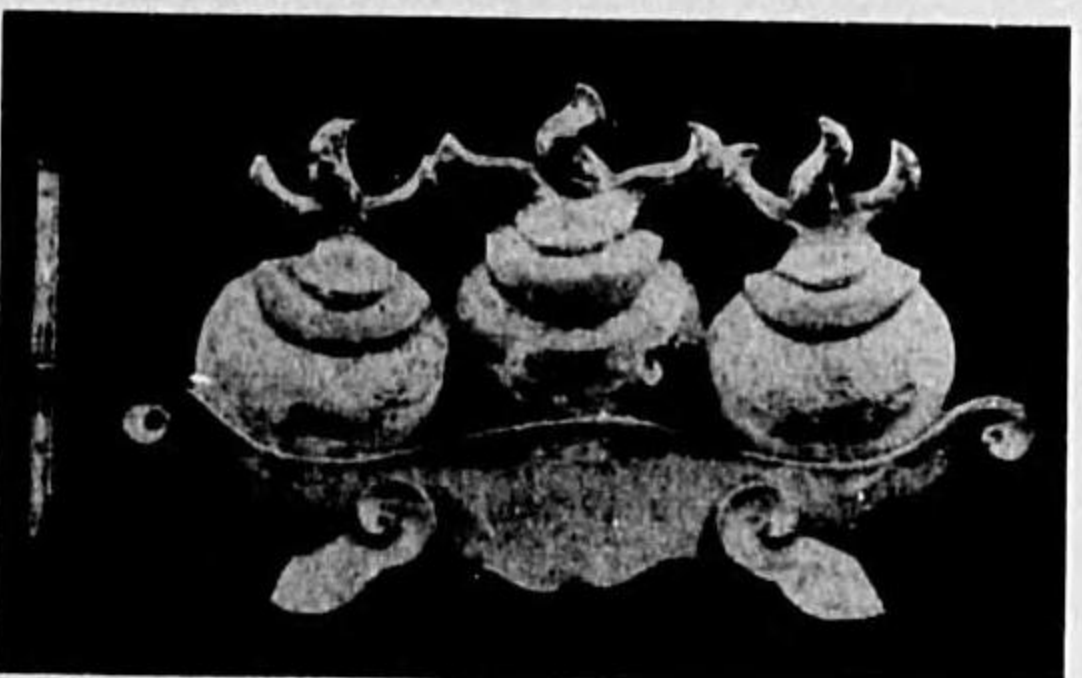
七〇



七二



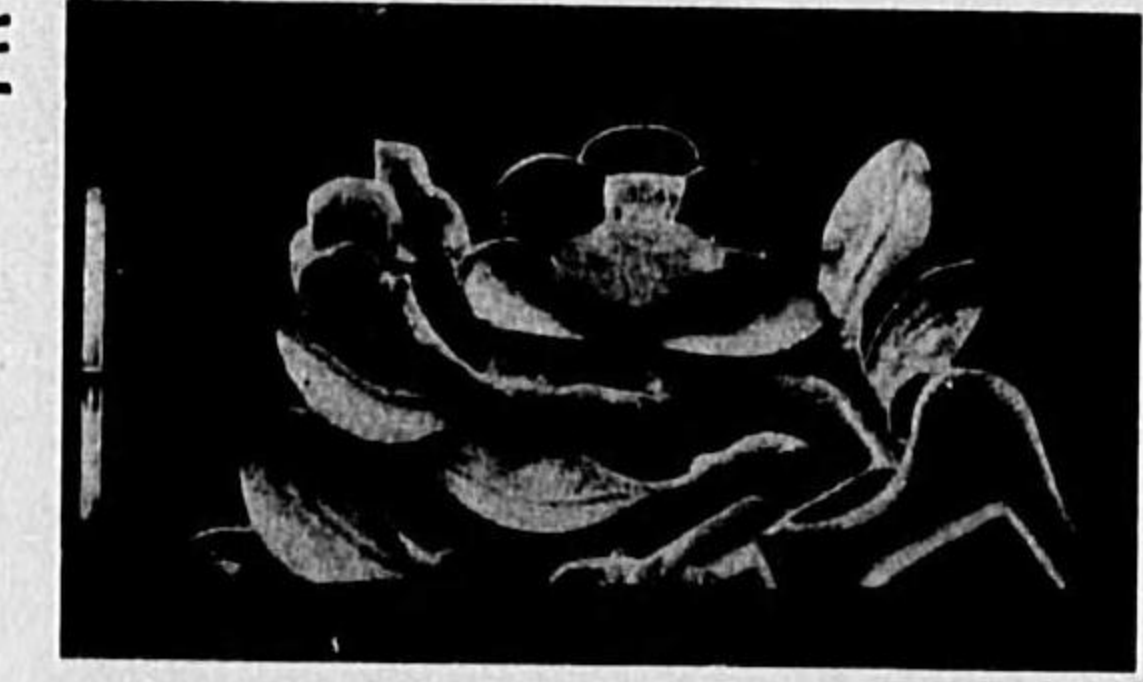
七四



七六



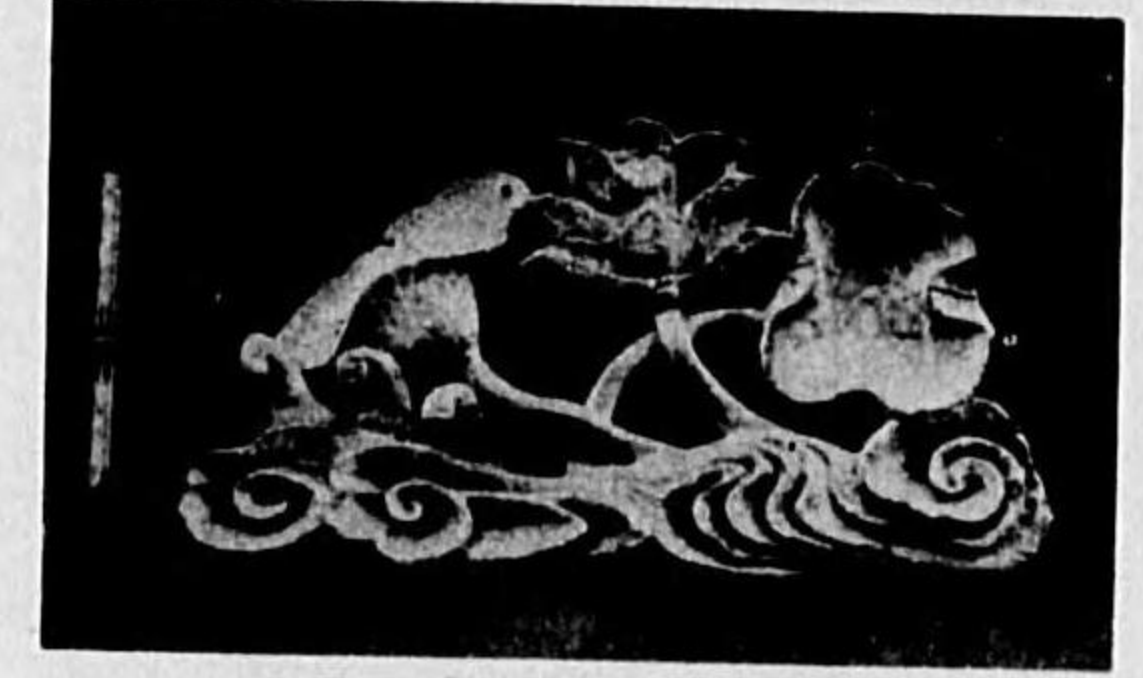
六九



七一



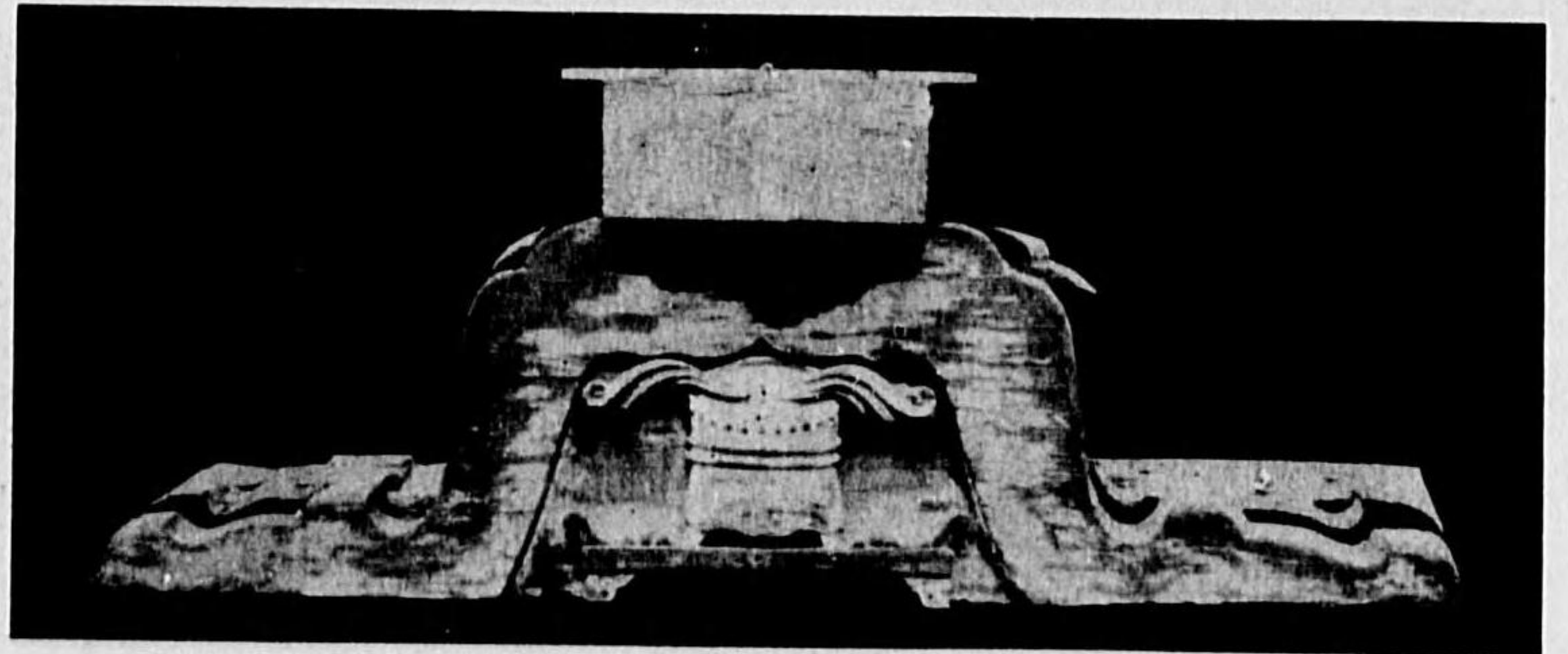
七三



七五



七七



六九、金剛寺多寶塔初重東側中間臺股(大阪府南河内郡長野町)

(物差は曲尺の約一尺(一呎)・昭和十四年七月六日)

七〇、同

西側北の間臺股内彫刻

七四、金剛寺多寶塔初重北側中間臺股内彫刻

七一、同

東側北の間臺股内彫刻

七五、同

南側中の間臺股内彫刻

七二、同

西側南の間臺股内彫刻

七六、同

南側東の間臺股内彫刻

七三、同

東側南の間臺股内彫刻

七七、同

南側西の間臺股内彫刻

(以上八圖共物差は曲尺の約五寸(六吋)・昭和十四年七月六日)

天野山金剛寺多寶塔に就いては、既に「科・肘木」の一七・一八の解説中に述べたから、ここに再び繰返さないが、何にしる初重四方の椽への階段昇勾欄擬寶珠の銘が餘りにはつきりしてゐるので、全部を慶長にしてしまつてゐる書物もある様だが、夫は極端で少し工合がよくない。併し初重四方科栱間にある十二個の臺股は全部桃山である。ここには總て同一の輪郭は一つだけにしておき、他の八つは内部の彫刻のみにして。これで殆んど全部が判るであらう。

六九は香爐らしい。筆返しについてゐる臺の上に、略ぼ圓壺形の器を置き、中央から左右に妙なものが渦を巻きながら三本づつ出てゐるのは、香の煙を圖案化したものと思はれる。其意匠の巧拙は姑く措き、珍らしい考へなので輪郭ぐるみ掲げたのである。七〇―七三の三つは夫夫龍膽・椿花・桐を中心飾とし、其他は一見相稱の如く、實はさうでなく便化した蔓(唐草)や葉を入れたもので、このうち桐は當代に稀でない(一例は六五)。

七三の桃は前代以降用ひられたものの如く、七五の蓮は鎌倉に實例がある。後者はやはり花を中心飾とし、左右に葉、下には水と雲をほつたが、大してうまくはない様である。七四のは多分寶珠で、上のは火焰のつもりらしい。桃山の寶珠三つとしては拙い方である。カシユウ芋が芽を出しかけたのではあるまい。七六・七七は何れも水鳥。水鳥は當代には賞用された様である。以上何にも大してうまいといふ程でもない。

七八、日光大猷院廟拜殿向拜臺股

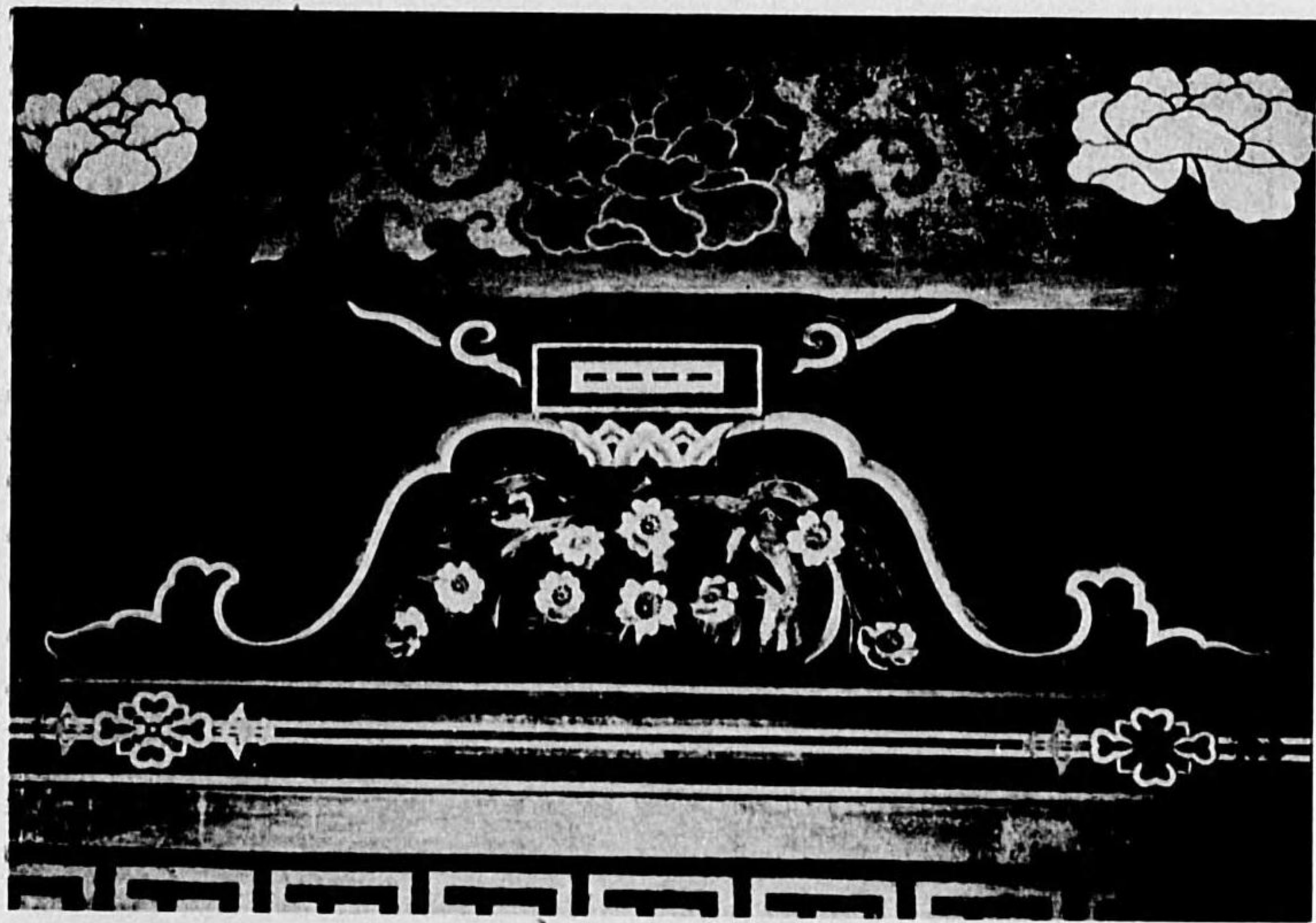
江戸時代

(昭和八年七月二十五日)

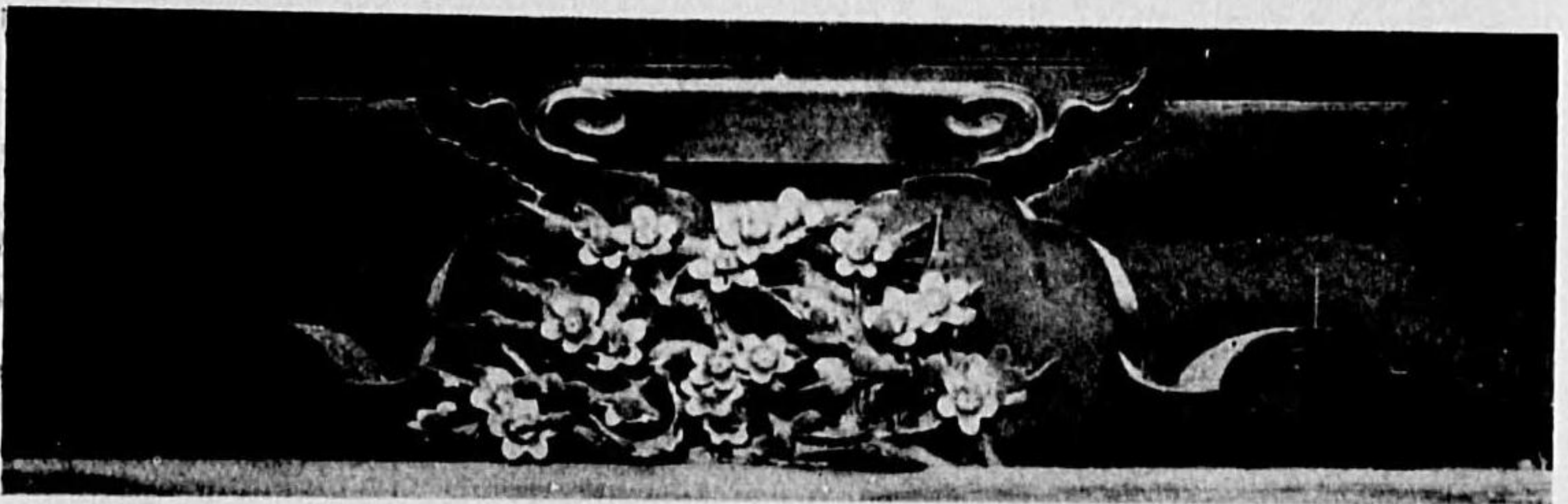
承應二年の建築だから、桃山でも江戸でも、何れでも差支はないが、豊國神社の桐の場合に説明した通り、これも輪郭は實に拙い。併し内の彫刻は反對に非常によくできて居り、鷹は臺股の厚さの倍程も前方へ飛び出し、又其とまつてゐる松は葉が輪郭の外にはみだしてゐる。これは總て厚く彩色がしてあるから、見そこなつたかも知れないが、一本からほり出したものであると思つた。果して然らば大分厚い大きな材料からでなくては出来ない。とにかく前代から此時代の初めにかけては、彫刻に全力を盡し、輪郭なんかどうでもよかつたといふ取扱をしたのであらう。其輪郭外、上は水平材、左右は料枳で限られた部分は、全體彫刻を以てうめてある。夫が「松竹梅」で松のほり方が鷹のとまつてゐるのと同じだから、全體として込み入つた美しい彫刻がある中に、拙い腫れ上つた様な輪郭だけの臺股を入れた様に見える。つた。これが桃山・江戸時代の通弊で、どれが主要な裝飾が判らなくなつて了つたのである。序ながら松と竹と梅と三つ揃つたのは、建築彫刻には珍らしい方である。



七九



八〇



八一



八二



七九、日光東照宮廻廊蓐股

(昭和七年七月二十三日)

八〇、妙心寺佛殿脇壇蓐股

(昭和六年十二月四日)

日光東照宮の廻廊には随分澤山の蓐股がある。今はつきり記憶してゐないが、三百以上あつた様に思ふ。同じ植物でも牡丹や菊は最多で、桃や栗乃至松や蓮は少しも珍らしくなく、どこにでもあつたが、草本では蒲公英や「ささぎ」・茄子・瓢箪等、木本では櫻等は珍例に属する。ここに掲げたのは、その珍例の一なる「櫻」で、十輪の満開の花をつけてゐる(七九)。妙心寺佛殿脇壇にもつと多くの花の咲いた櫻が入つた蓐股がある一例以外に私は見た事がない、慾にはもう少し花をまとめ、蕾も間に入れば一層よかつたらうと思ふ。櫻としては妙心寺の方が遙によくできてゐる。

八一、木の間観音堂蓐股

(家藏寫眞複寫)

八二、伊那森神社蓐股

(家藏寫眞複寫)

日光東照宮の廻廊には随分澤山の蓐股がある。今はつきり記憶してゐないが、三百以上あつた様に思ふ。同じ植物でも牡丹や菊は最多で、桃や栗乃至松や蓮は少しも珍らしくなく、どこにでもあつたが、草本では蒲公英や「ささぎ」・茄子・瓢箪等、木本では櫻等は珍例に属する。ここに掲げたのは、その珍例の一なる「櫻」で、十輪の満開の花をつけてゐる(七九)。妙心寺佛殿脇壇にもつと多くの花の咲いた櫻が入つた蓐股がある一例以外に私は見た事がない、慾にはもう少し花をまとめ、蕾も間に入れば一層よかつたらうと思ふ。櫻としては妙心寺の方が遙によくできてゐる。

八〇は右に記した妙心寺佛殿脇壇の四つの蓐股の中の一で、これは「梅」である。褒めたあとで直に悪口をいふ様だが、どうも輪郭が甚だ入念にまづい。いくら文政十三年で、江戸末だからといったところで、輪郭へ縦横無盡にはみ出てる梅の彫刻が、際立つて巧みなのに申分のない對照をなしてゐる。料上の物差は曲尺の約一尺(一呎)。

八一は信州諏訪郡のある人から、寫眞を送つて来て、この様な蓐股のある建築があるが、文様は菊水と見えるが相當の年代があるだらうか、意見を書いて貰ひ度い、但しこの寫眞は返送に及ばず。とあつたので頂戴に及び、しまつてあつたのを複寫したのである。そこで木の間観音堂とはどこにあるか、つい尋ねておくのを忘れたので、今では判らないが諏訪郡内であらうといふ見當をつけてよらしい理由がある。この脚が拙いのは記す迄もないとして、脚内のは「菊水」ではなく、中央のは「海膽」である。うにといつても大變な種類があるが、恐らく沿海岩礁の間に珍らしくない、雲丹の元なる「ムラサキウニ」の棘と管足とをすべてとり去り、殻の形を多少誇張して歩帯と間歩帯の別を明らかにして刻み、これを中心飾として左に海草右に海水を配したもので、多分江戸末のものであらう。蓐股内の彫刻としては大して感心のできないものである。

八二も同じく信州だが、上伊那郡伊那村の伊那森神社向拜科栱間のもの。漆喰でも塗つて彩色があつたと見え、輪郭には疵をつけてある。松と竹とをほつたもの、前者は左から右に曲り、後者は垂直な幹に左右平等に葉をつけてゐる。輪郭も拙いし——といふよりは、話にならないといった方が適評であるが——内部の彫刻もいゝ加減なものだが、江戸末(?)蓐股の一例として掲げておいたのである。

八三、妙心寺佛殿佛壇背面臺股

(昭和六年十二月六日)

八四、唐招提寺廢戒壇院南門臺股

(飛鳥 岡)

此等三種は何れも何れの點からみても大したものではないが、後になるとこんなものに迄なつてくる事を示すためにだしたのである。これ等のうちでは一番上のが最も珍らしくて面白いであらう。

八三はこれ以上拙くはできないといふ様な輪郭の臺股の前に、輪郭を無視して勝手に雲をほり、雲中に人頭獸身、額上に寶珠を頂き、其左右と背上とに角を生やし、顔面に三眼と、背上に少なくとも二眼——五眼の様にも見える——を有する不思議な動物がほつてある。これは「白澤」(ハクタク)といふもので、支那から渡來したのである。いつ頃渡來したか私は知らないが、桃山以降時時でてくる。ところが其原産地はもつと西らしく、神話傳説時代のギリシヤ、西亞細亞地方、メソポタミア、カルデア等にも出現したものの如く、印度ではサンチ大塔の門の彫刻内に納つて居たりする。昔日本では旅行の時この圖を懐中してゐると道中安全であるから、旅行の時は忘れない様に持つて行けといふ事が「旅行用心集」といふ書物にかいてある。そんな所から考へるとこれは魔除けになるらしい。佛殿は火事でやけた後、漸く再建したのだから、再び魔がささない様に、北向きに白澤の像を刻して臺股の内に入れたのであらう。

八四は支那人らしいのが、水上を滑走してゐる(?)魚の上に乗る、巻物か何かをひろげて見てゐるところがほつてある。どうも乗物は魚らしいが、餘程波が固いと見え、恰も蝸牛が小砂利の上を前進してゐる様に、腹の皮が反て波形をしてゐる。これは先づ悪口として、魚は鯉だとすると、のつてゐる人物は琴高位のところかも知れない。江戸時代だから人物があつても差支はない。

八五は背の高い臺股内に「雷神」を入れたので、もう一つ「風神」がある。元はどういふ所に用ひてあつたか判らぬさうであるが、大鼓が何れも桃山以降の巴文を有し、謂はゆる蛸蚪(カヘルコ)であるのと、雷神の姿勢面貌、臺股の輪郭等からみて、或は桃山迄のぼるかも知れぬが、私はこれを江戸時代に入れておくのである。昔の江戸淺草の淺草寺の南門、今は何もないが「雷門」(カミナリモン)といふ市電停留場の名に残つてゐるのは、多分雷神と風神とか、日光大猷院二天門の夫の如く、北側に



八三

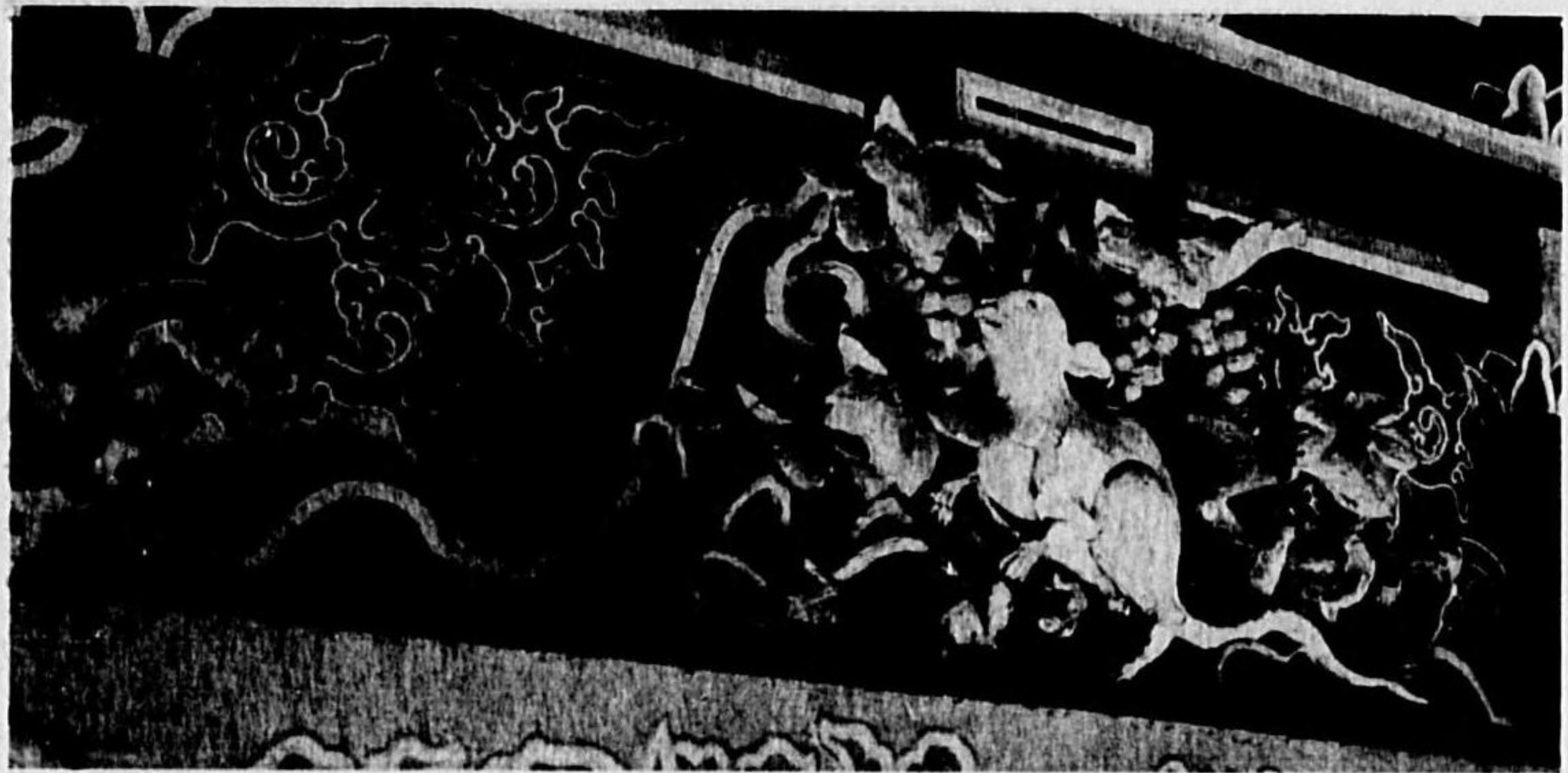


八四



八五

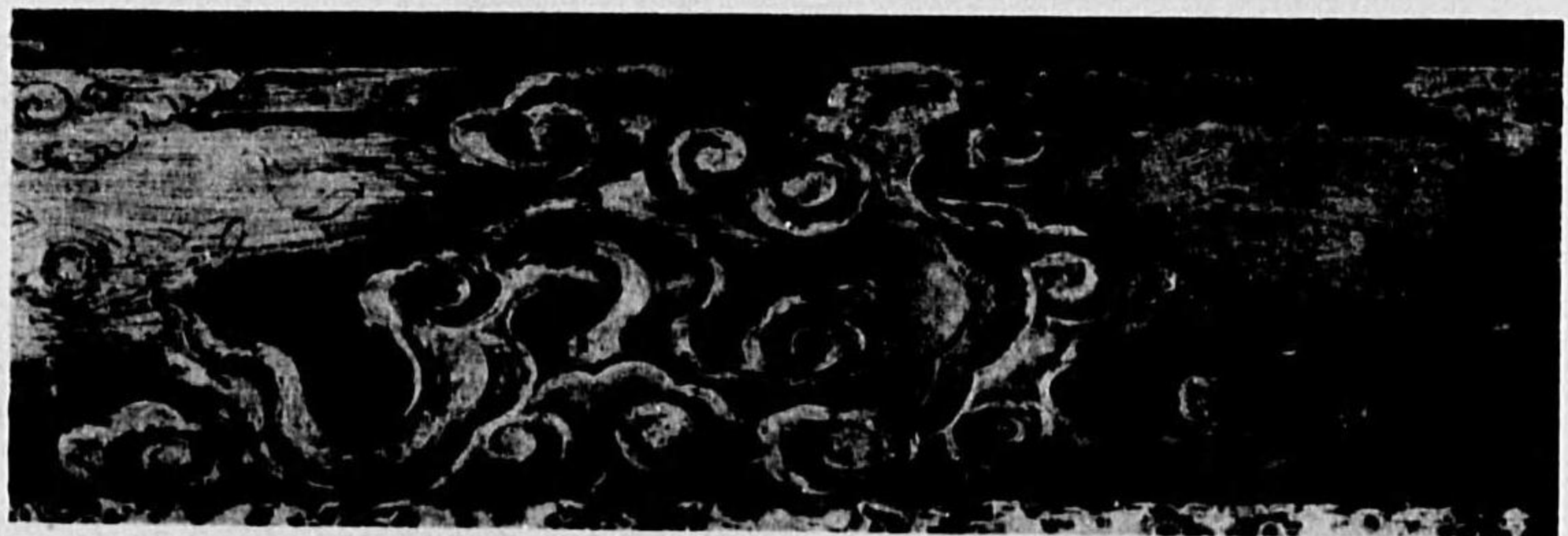
八六



八七



八八



八九



八六、日光東照宮五重塔初重簷股

(撮影年月日忌失)

八七、谷波山華嚴寺本堂簷股

(昭和五年八月九日)

八八、四天王寺金堂簷股

(昭和十年六月一日)

八九、八幡神社本殿簷股

(昭和六年三月二十七日)

江戸時代簷股の實例として、最後に尙ほ四つの例をだしておく。
八六は日光東照宮五重塔初重四方の十二の簷股の一つづつ入れてある十二支のうちの「子」で、北側中央のである。五重塔は外側に柱間が十二あるので、桃山以降には十二支を入れたのが珍らしくない。長押の上に簷股の輪郭を置き、十二支神に何か植物を配し、別に彫刻をして長押の上に置いたので、輪郭とは全く没交渉である。文政末のものでも彫刻はよくできてゐるから、反對に拙劣なる輪郭を隠すのには都合がよろしい。別格官幣社東照宮といふ堂堂たる神社に、佛教建築たる五重塔があるのは何故か。元來廟建築は神社と寺院とを混じたもので、主として江戸時代貴族の専有物であつたのだから、塔があつても差支はないのである。

八七は有名な谷波山華嚴寺のもの。簷股と其上の繪様肘木との間にあるべき料が消滅して了ひ、上下融合して妙な形のものになつて了つたので、江戸から現代にかけて、この様な要領を得ないものは決して少なくない。中央の孔は格狭間に原因するものであらうが、この様にとろけて了はない以前の形を考へてみると、やはり鎌倉系統である事が偲ばれるから面白い。例へば三九の中央下及び左右下の孔が埋り、上の方の大孔だけを残り、且つ輪郭を思ひ切つて拙くすると、即これになる。おそろしいことである。

八八は謂はゆる「雲簷股」だが、丁度前例を全部雲化すると、これに似たものになる。内部には貴い本尊が安置されてゐるのだから、そのあたり五色の雲が棚引いてゐるつもりか何かで、こんなものを用ひたのかも知れないが、これはどうも何とも始末によくない。浪簷股にしても似たりよつたりの變なものである。雲も飛鳥以來、其形が随分に變化したものである。

八九は兵庫縣神崎郡船津村宮脇鎮座、八幡神社の輪郭のない「竹虎簷股」である。虎の皮の黄色に黒線の文様は、光線の強烈な印度の様なところで竹林の内にゐたら保護色を帯びてゐて、何かにつけて都合がよからうが、この様に全身を露出し、竹幹に噛みついてゐる等は以ての外、繪空事も甚だしい。雄の孔雀が雄の孔雀の前で尾翼をひろげてゐる二條城二の丸御殿の欄間(欄間三)同様、知らずにはぼると、こんな馬鹿氣た彫刻をして得意になり、人に笑はれることになるのである。物差は曲尺の二尺。

蓐股一覽表

飛鳥時代	遺物なし。
奈良時代	前期……同。 後期……「板蓐股」。厚くて肩卷込は大、又は卷込なし。形完好なものがある。
平安時代	前期……遺物なし。併し恐らく卷込は稍や小さくなりかけたであらう。 後期……卷込は小さくなったが、脚端の上端に角がついた位で、左迄發達はしてゐない。背高くなり厚は減じ、「板蓐股」の名に相應しくなってきた。内部空虚の謂はゆるくりぬきのものが出來たが、何れも二木片を中央で合せたものばかり、脚内の彫刻も甚だ簡單。 「板蓐股」の卷込は完全に「目」となり、圓・猪目・曲玉型等となり、時に或は全く消滅し、痕跡を止めぬものもできた。脚端も大に發達したものもあつた。時には復古式と認められる(奈良式)のものもあつた。
鎌倉時代	和様……「刳拔蓐股」は益益發達し、時に純裝飾的となり、内部の彫刻は大發達をとげたが、主として圖案的であつたし、又繪畫的のものもあつた。普通中心飾を有するも、稀に全然ないものもあつた。 前代後期の様に二木片を合せたものもあつた。 天竺様……一種に限る。 唐様……蓐股を用ひず。
室町時代	脚端の葉化したもの。又輪郭を缺いたものもあつた。
桃山・江戸時代	「板蓐股」の面を圓形に凹めたのは前前代からあつたが、其圓内に文様や花等をほつたりした。其他特殊形状をしたもの等。時に著しく拙劣なる輪郭のものもあつた。 「刳拔蓐股」の内部の彫刻が輪郭からはみ出したり、或は輪郭は輪郭で別につくり、内部の彫刻のみ其前へ置いたもの。其「雲蓐股」・「浪蓐股」等。

一、醍醐寺藥師堂内外陣境欄間
二、西明寺本堂内外陣境欄間 其一

飛鳥・奈良時代

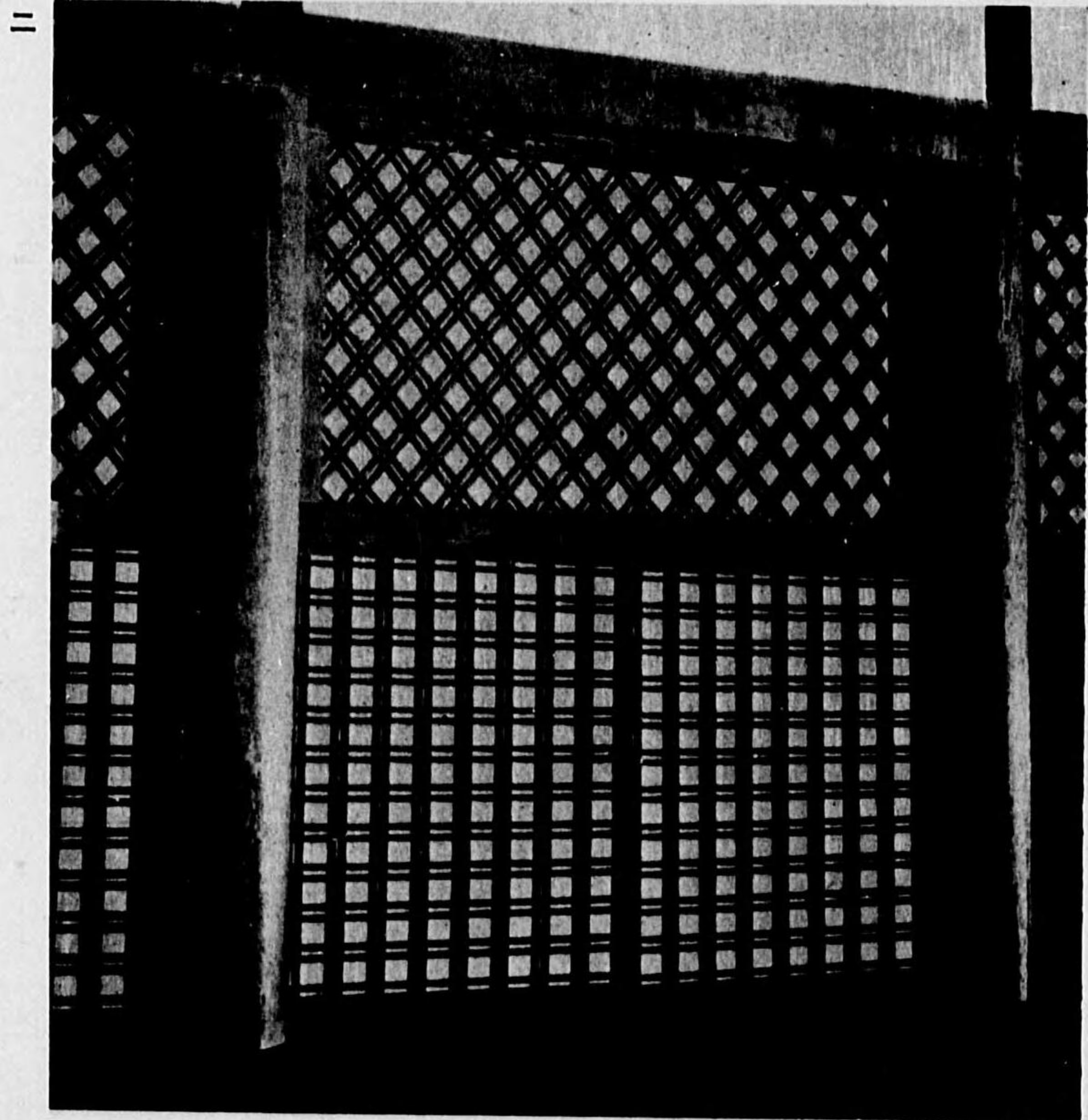
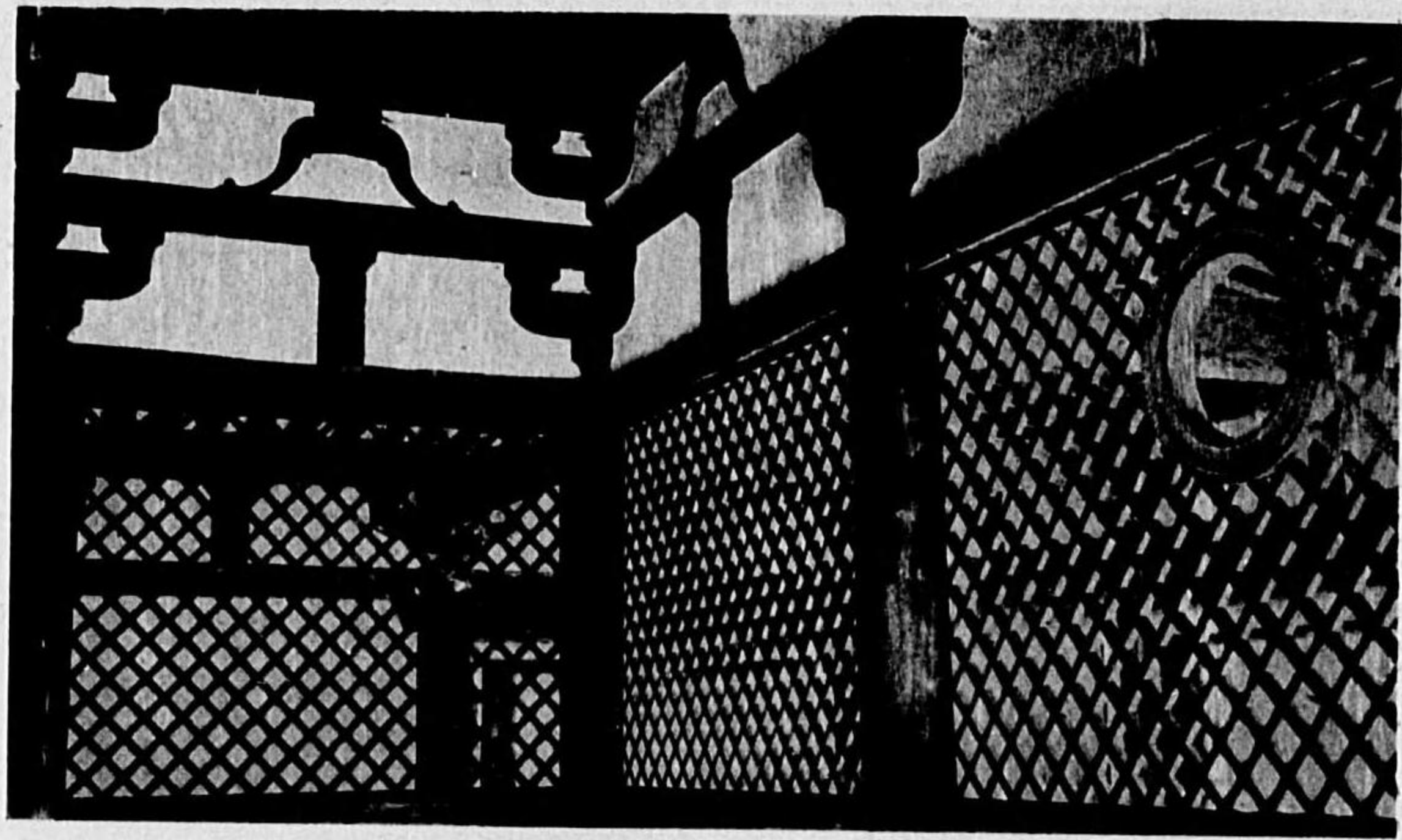
飛鳥・奈良時代に欄間の有無は遺物がないので未詳。

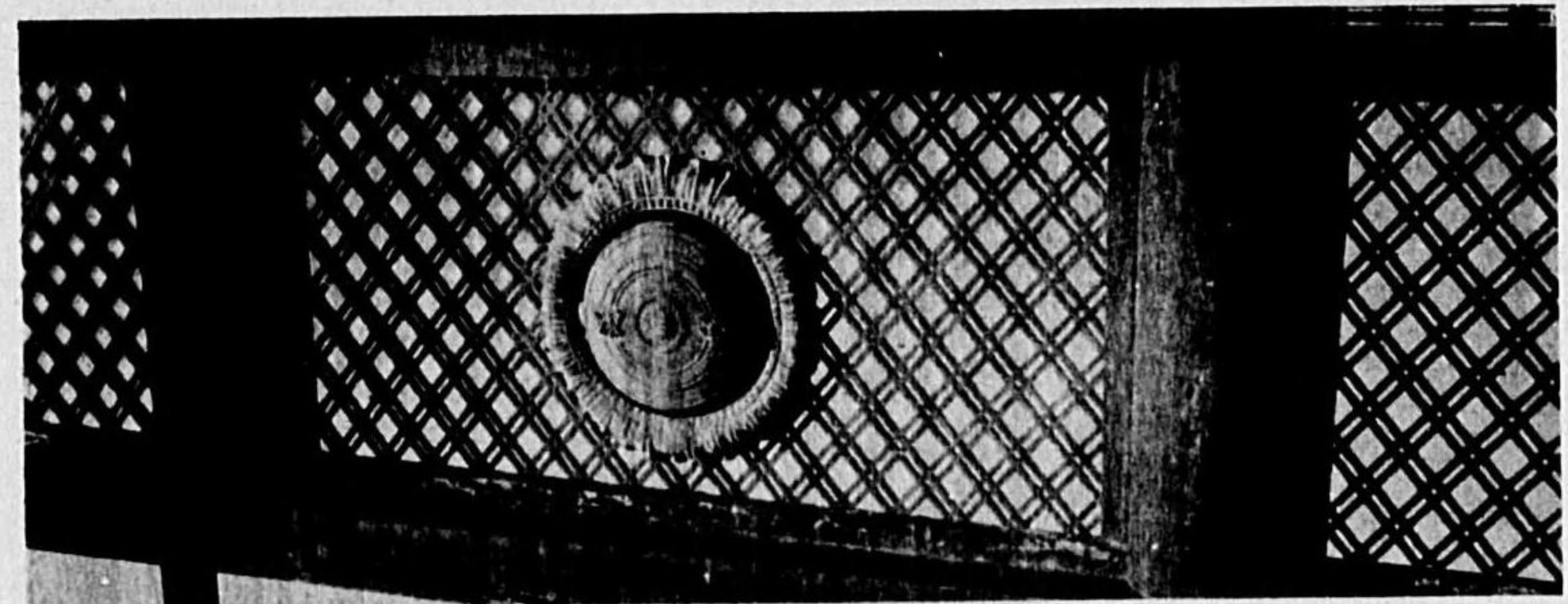
平安時代

格子及び菱欄間ができたものの如くである。格子欄間は山城宇治の鳳凰堂中堂に實例があり、菱欄間は同じく宇治の宇治上神社本殿(左右殿)及び一が其好例である。但し前者には當初かどうか知らぬが、古い材料もある様だから先づよろしいとしても、後者は一つも古いものがない。こんな風だからあてにはならないけれども、この様な簡単なのはあってもいい筈である。はつきり判らないが、格子欄間は確かだから、夫を45にした菱もあつたとしておく。

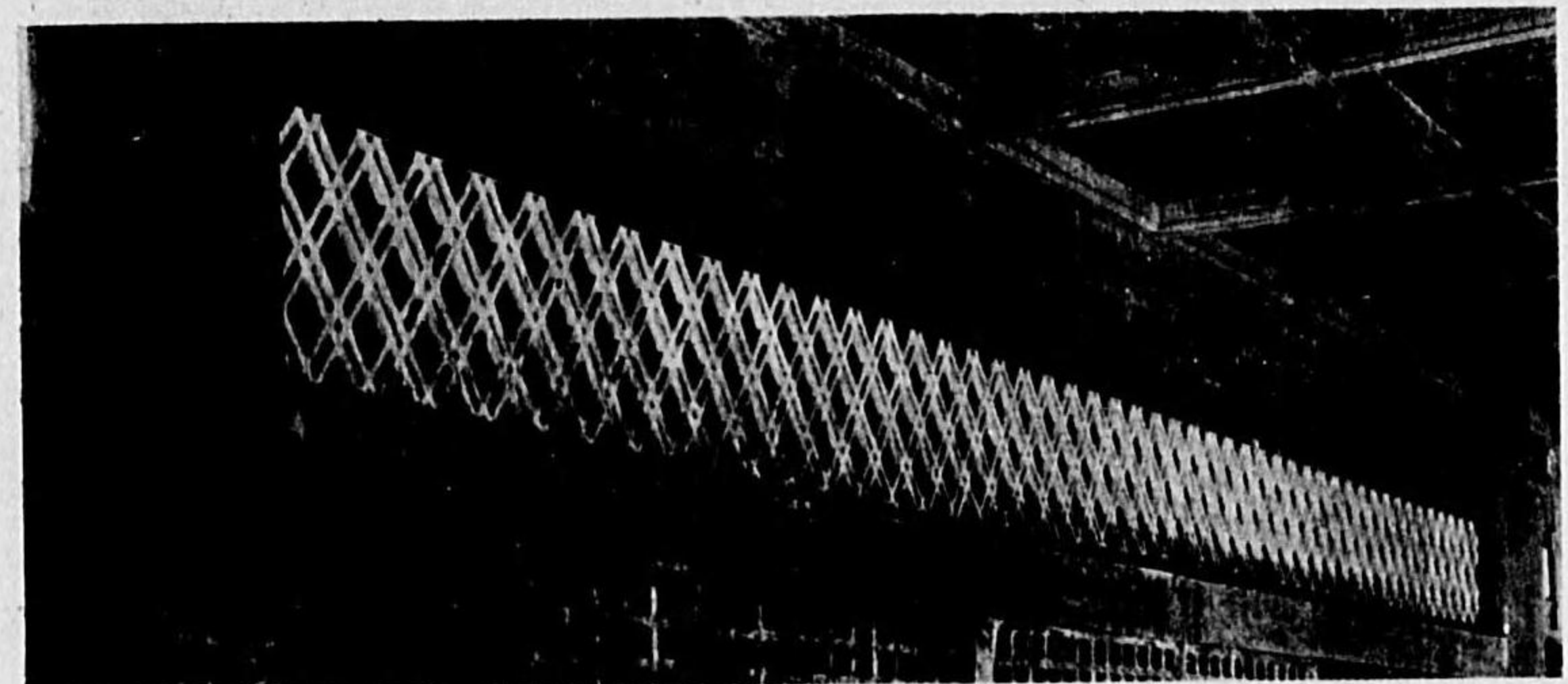
鎌倉時代

吹寄菱欄間は當代の和様建築にはいくらもある。二は其一例だが、この他法隆寺聖靈院・當麻寺曼荼羅堂等、或は又和歌山市松生院本堂でも、いくらでも例を擧げる事ができる。前代に一本であつたのが當代に入つてから二本となつたのは、格子にも吹寄があり、種にもある様に、至極順當な發達の仕方である。勿論吹寄でないのもあつた。さうして此種の欄間はすつと後世迄あつたのである。





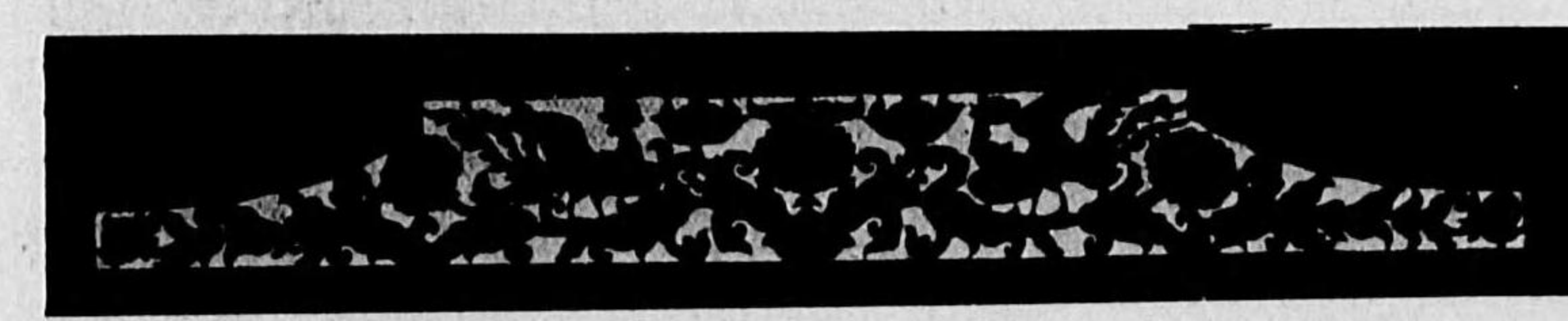
三



四



五



六



七

三、西明寺本堂内外陣境欄間 其二

(昭和四年五月十二日)

四、法隆寺聖靈院内外陣境欄間

(撮影年月日未詳)

五、新羅善神堂外陣欄間

其一

(昭和五年十月十八日)

六、新羅善神堂外陣欄間

其二

(昭和五年十月十八日)

七、同

其三

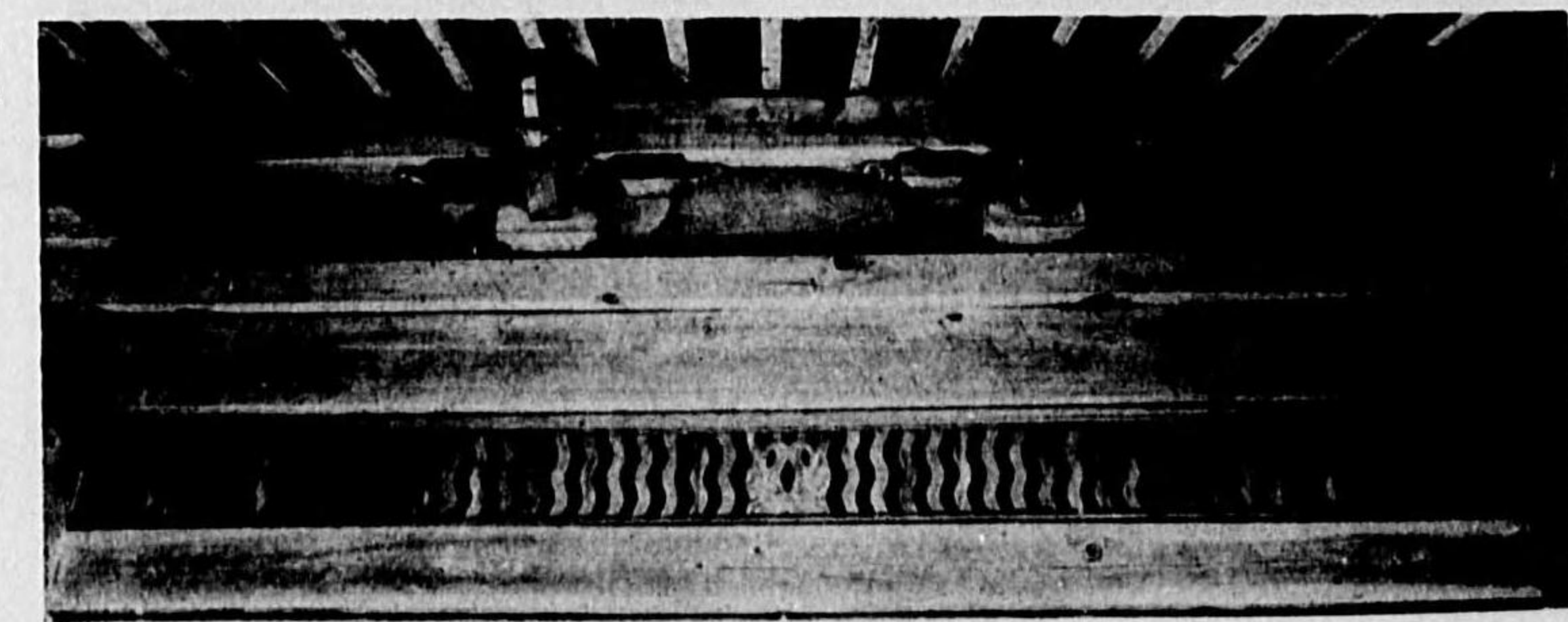
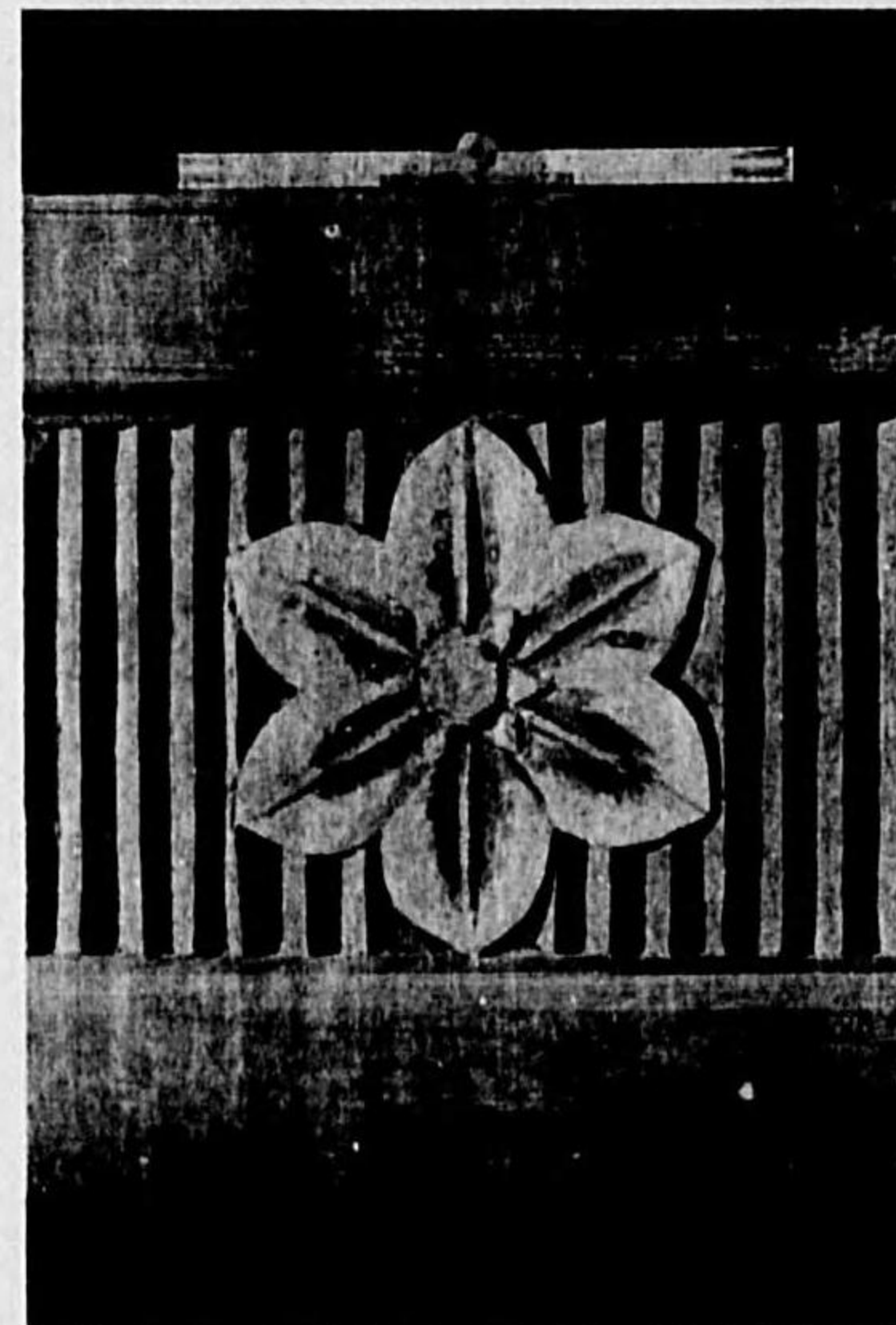
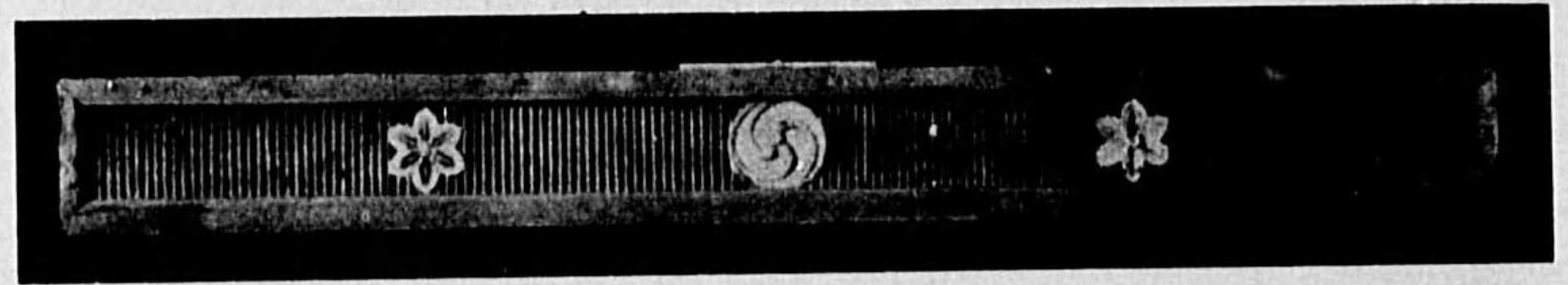
(昭和五年十月十八日)

鎌倉時代は平安時代の續きの簡単な幾何的線條欄間の他に、これも至極簡単な唐草・天人・樹木等を入れたのもあり、又時に比較的手の込んだ、併しどこ迄も平面的のもあった。唐様建築のは謂はゆる「弓欄間」。天竺様のは板連子か。

三は前圖と同じだが、ただ中央に蓮花文の輪郭をもつた窓をつくり、其窓の中に鰐口をかけてゐるところを見せたのである。醍醐寺薬師堂の推定復原欄間にも、窓をあげてゐるのは、これも亦全く推定で、ただ飾りであらう。四は三間持放しの吹寄菱長欄間で、こうなると中中立派で、現代の夫とは凡そ縁の全くない簡素さをもち、而もこれが格子・小組格天井・天井廻縁下の盲連子等と、洵に不思議によく調和をしてゐる。

五・六・七は其昔新羅大明神といったが、今は新羅善神堂と呼んでゐる三間社流造の神社建築で、近江大津の園城寺から少し離れたところにある建築に用ひてゐる欄間である。五は正面中の間の夫を外から見たもの、六は同じものを外陣内から見た所で、眞つ黒になつたが、反て其意匠がよく判る。七は右側面の分を同じく内から外に向つてみたもの。前二つは中心から左右相稱であり、後の一つだけがさうなつてゐない。實際曆應三年頃のものとしては、餘りに發達し過ぎてゐる様で、或はあと入れてはないかと思はれるかも知れないが、よく見るとある厚さの板にほつたもので、極めて平面的である。河内の建水分神社本殿の欄間も左右相稱がある。又中央を除いては相稱ではないが、同じく平面的であり、而も同じく建水分神社にも、さういふのがある。してみるとこれはただ大變に込み入つてゐる様に見えるだけで、實は吉野時代にこの位があつても當然であるといへるであらう。奈良縣宇陀郡宇太村大字古市場の宇太水分神社本殿脇障子上欄間には「梅の木」・「菊」(これは中央から左右相稱)・「天人」等を透彫にしてあるが、何れにしても大して込み入つたものは未だできなかつたのである。

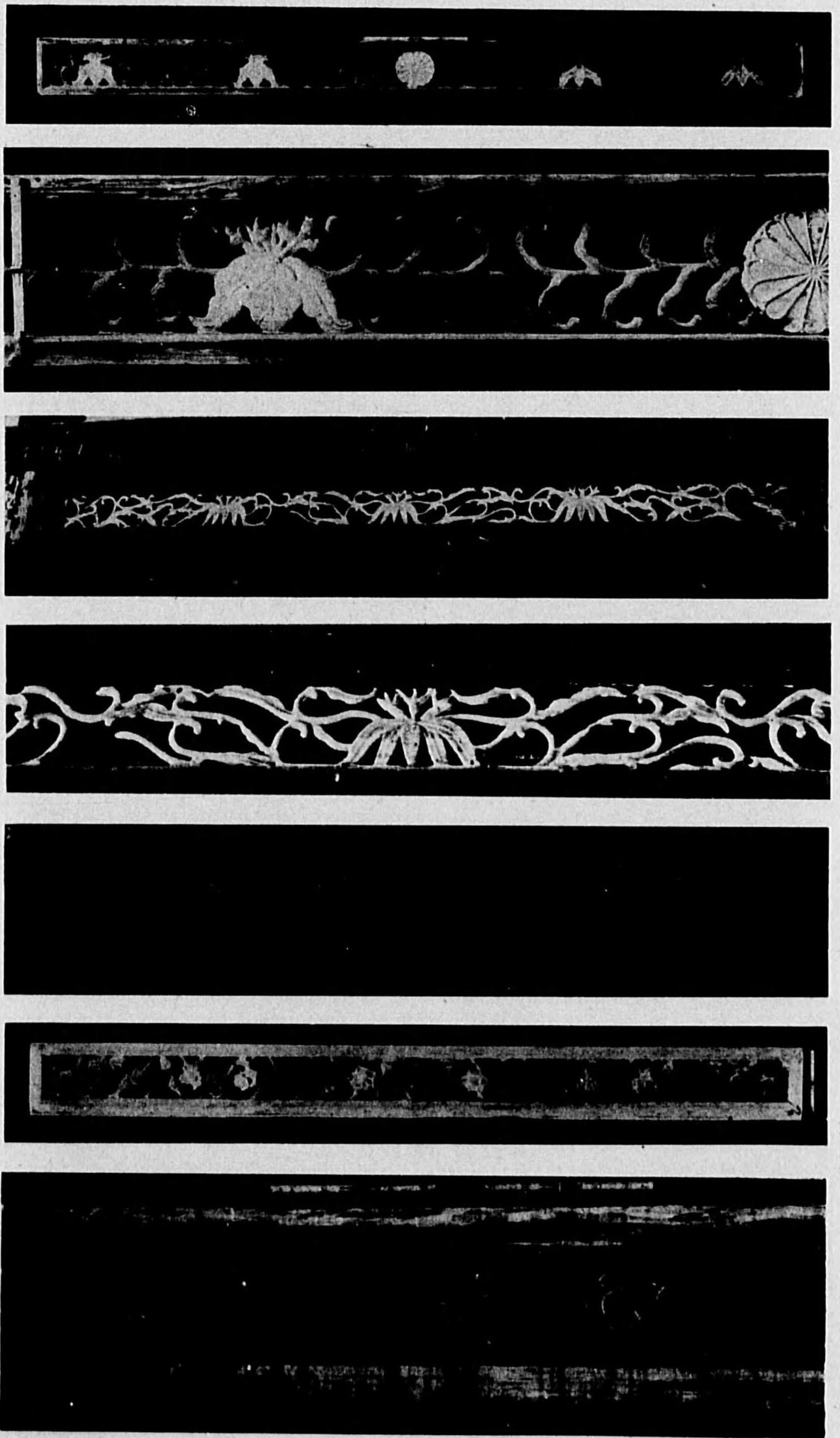
- 八、久世神社本殿内陣欄間 其一 (昭和十年六月六日)
- 九、同 其二 (昭和十年六月六日)
- 一〇、同 其三 (昭和十年六月六日)
- 室町時代
- 幾何的のものは「菱格子」又は「吹寄菱格子」があり、他に圖案的东西も繪畫的のものもあつたが、何れも前代同様厚さが殆んど一定であつたから、結果はどうしても平面的で、一般に立體觀に乏しかった。又一種の複合文もあつた、例へば首連子の地へ散模様を配した如きものである。
- 唐様欄間は前代同様弓欄間で、中心飾のあるものもあり、又ないのもあつた、唐様は此一種に限られてゐたものの如く、他の種類を未だ見た事がない。天竺様のは有無未詳だから、恐らくあるまいと思はれる。
- 八―一三は京都府久世郡久津川村大字久世鎮座、久世神社の内陣及び外陣欄間二種を示したものである。八・九は内陣扉上長押と天井廻縁との間に於いてある細長い部分の欄間で、四方を「留」にした額縁の内に首連子を入れ、其上に中央に巴文、左右に水仙の様な花をおいて裝飾してある。額縁も連子も素色であるのに、巴文と花文とだけが彩色をしてあるから、夫だけが目立って甚だ美しい。巴は最早蛸蚪になつてゐるが、瘠せて尾が長く、江戸時代の夫とは全く反對の形をしてゐる。一〇・一一は巴と花とを大きくしたのである。物差は前二者は曲尺の約一尺(二呎)、後二者は其半分。
- 一二・一三は外陣の夫であるが、これも亦内陣と同じ様な細長い部分の中央に十六瓣の菊花文、其左右適當なる間隔に桐を配し、其間に菊及び桐より夫夫便化した細い唐草を出し、全體を透彫の様にしてある。長押の六葉の瓣面、又は屋根の破風板等に菊と桐とを用ひたのは桃山時代からの事で、江戸に入つても尚ほ相當に使用されてゐるが、其元はやはり室町時代からだといふ事がこの欄間から了解できるであらう。物差は上圖約一尺、下圖約五寸。



八
九
一一
一二
一三
一九

一〇

一二
一三
一四
一五
一六
一七
一八



- 一四、水度神社本殿欄間 其一 (昭和十年六月六日)
- 一五、同 其二 (昭和十年六月六日)
- 一六、同 其三 (昭和十年六月六日)
- 一七、相樂神社本殿欄間 其一 (昭和十年五月五日)
- 一八、同 其二 (昭和十年五月五日)
- 一九、不動院金堂欄間(前頁下圖) (昭和十年七月十日)

左右相稱の原始的欄間の更に一例を示すことにした。夫は水度(ミト)神社本殿ので、京都府久世郡寺田村寺田鎮座、前記の久世神社と相距る事遠くない。これは笹龍膽唐草の透彫で、一四に見る如く中央と左右に殆んど等間隔に笹龍膽を配し、其間に適當に便化した蔓と葉とを入れたもので、久世神社外陣の夫の様に唐草はいちけて振れてゐないから、見た所餘程形がよろしい。一五は中央一六は向つて左のものを中心として詳細を示したものである。はつきり記憶がないが、社殿の水平垂直材(格子は黒色)はベンガラか丹かで、とにかくあかい所へ、欄間の透彫は白緑で相當に美しかった。

相樂神社は三間社流造である。さうして各間に入れてある欄間は、不相變薄くて平面的ではあるが、これは前二例に比べると一段の進歩を示して居り、左右相稱でも一見さうは見えず、中中うまくつくつてある。欄間の唐草は二種あつて、中央の最も広い間は一七に示した「牡丹唐草」、左右から出て中心で出會つてゐる。左右の少し狭い間のは「橘唐草」、牡丹同様左右から出てゐるが、一つの方がひどく破損してゐるので、双方共同じ意匠かどうか判然しない。此三種何れも大變にきゃしゃで實によくできてゐる。牡丹唐草は既に鎌倉時代からあるから、室町に出て来るのは當然であるが、橘の方は前代にあつたかどうか記憶がない。室町には臺股脚内の彫刻にはあつたが(臺股五一)、欄間ではこの神社で見ただけ、他に遺物の有無を知らない。以上は和様欄間であるが、唐様の一例を一九に出しておく。一例で充分だと思ふ、唐様のはいつても浪型をした連子、つまり薄い板を浪型に削り、夫を小間返(コマガヘシ)、等間隔に實質と空間とが同じになる様にする事をいふに並べるのである。而して中心飾を有する場合と然らざる時とあり、又中心飾がある時はそこから左右で連子が反對に向く様にしてあるが、中心飾がない時は間數が偶數の場合半分から右の間と左の間との夫とは、浪型の連子が相對する様にしてある時もある。

- 二〇、薬師堂欄間(宮城縣仙臺市木ノ下國分寺境内) (昭和八年七月三十日)
- 二一、西本願寺白書院上段の間欄間 (昭和九年二月八日) 二二、醍醐寺三寶院欄間 共一 (昭和五年三月十四日)
- 二三、醍醐寺三寶院欄間 共一 (昭和五年三月十四日)

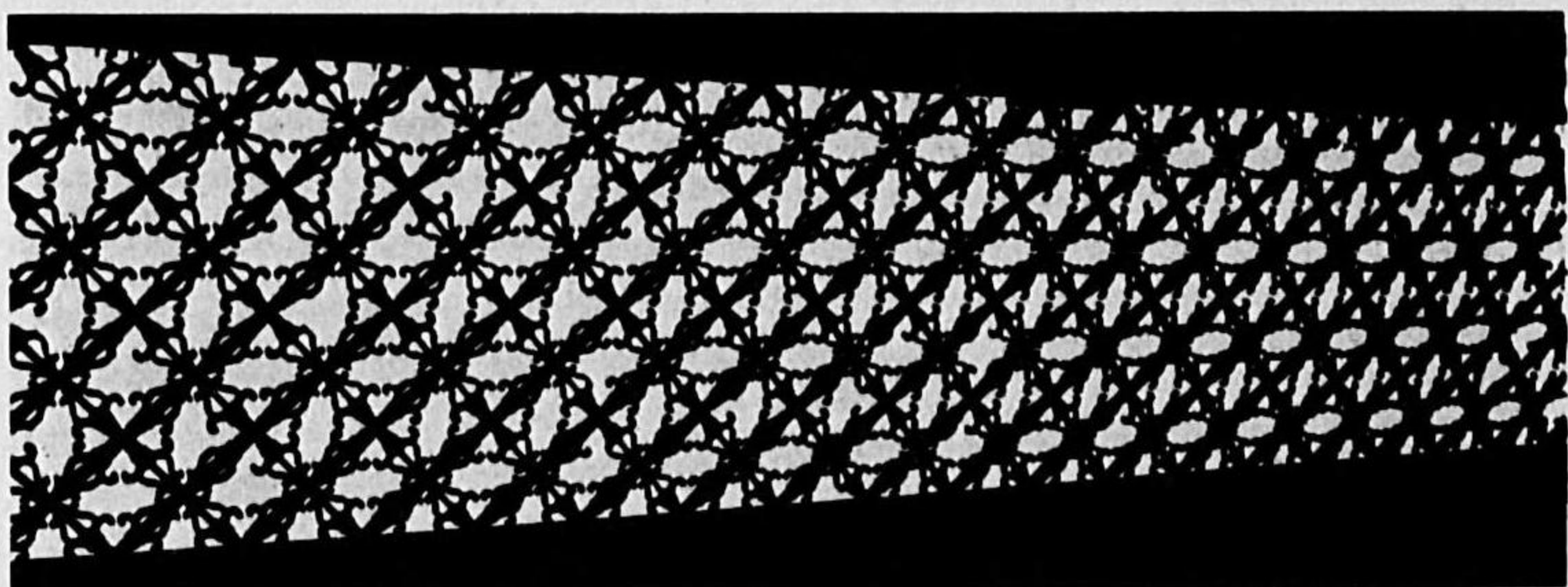
桃山・江戸時代

桃山時代になつてから立體的で濃艶な彩色をした。夫だけで立派な美術品たり得る欄間ができてきたが、又他に至極簡素なもので、薄い板に上下左右相稱な形を現はした様なものもあり、同時にまた前代からの引つづきなる花狭間つなぎや格子、乃至菱格子等もあり、或は細い丸太や削り木等を巧に利用して新機軸をだしたの等もあった。つまり當代になつてからいろいろの種類のものできだし、さうして江戸時代に入ったのである。要するに欄間は當代に長足の進歩をしたので、従来見なかつた美術品に發達したのであつた。

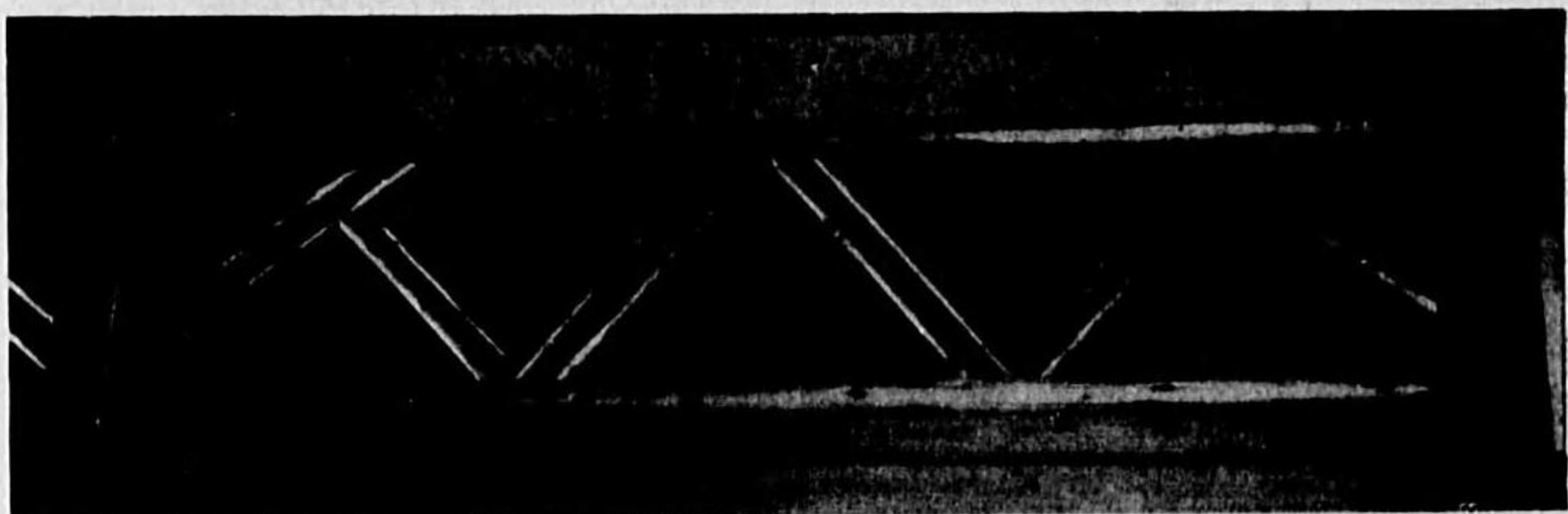
二〇は吹寄菱——といつても正方形を45°にしたのであるが——格子の間に菱格子を入れ、花狭間つなぎとしたので、これは其次の二一と殆んど同じ意匠である。この種のは桃山時代には割合に多い。江戸時代も亦然り。其骨線だけを考へてみると、平安からのつづきであり、ただ花狭間を入れただけの差である。さう考へると二二は吹寄せの菱格子を折半したものと見られる。これは細い丸太を斜に並べ、中心から左右で同じ様な形に造つた迄のこと。新機軸ではあるが、古欄間から暗示を得た事は容易に推察ができる。二三は四角又は三角の目が六角即ち籠目になつただけで、これも細い丸太と細く削つた木とを以て巧に組立た迄の事だが、どこ迄も簡素で氣がきいてゐるところに、設計者の腕が見られるのである。



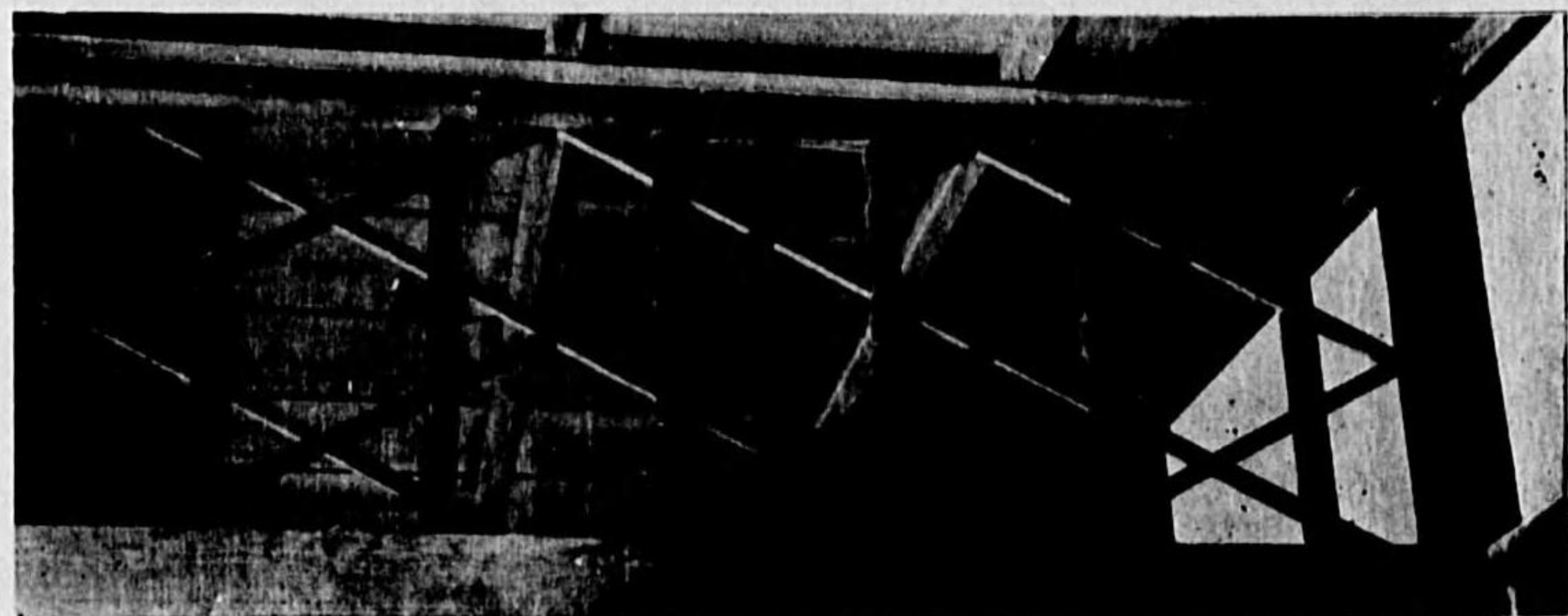
二〇



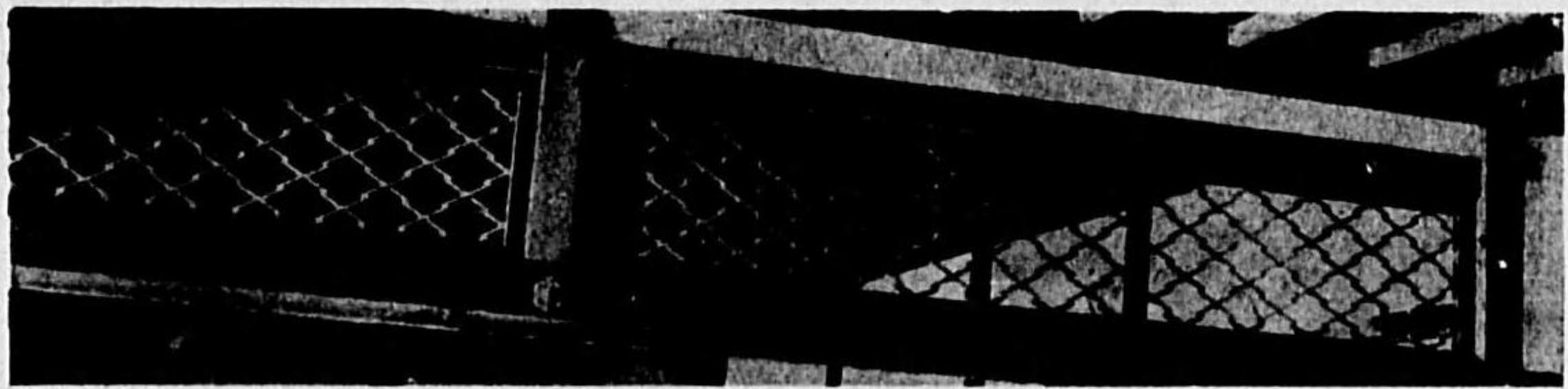
二二



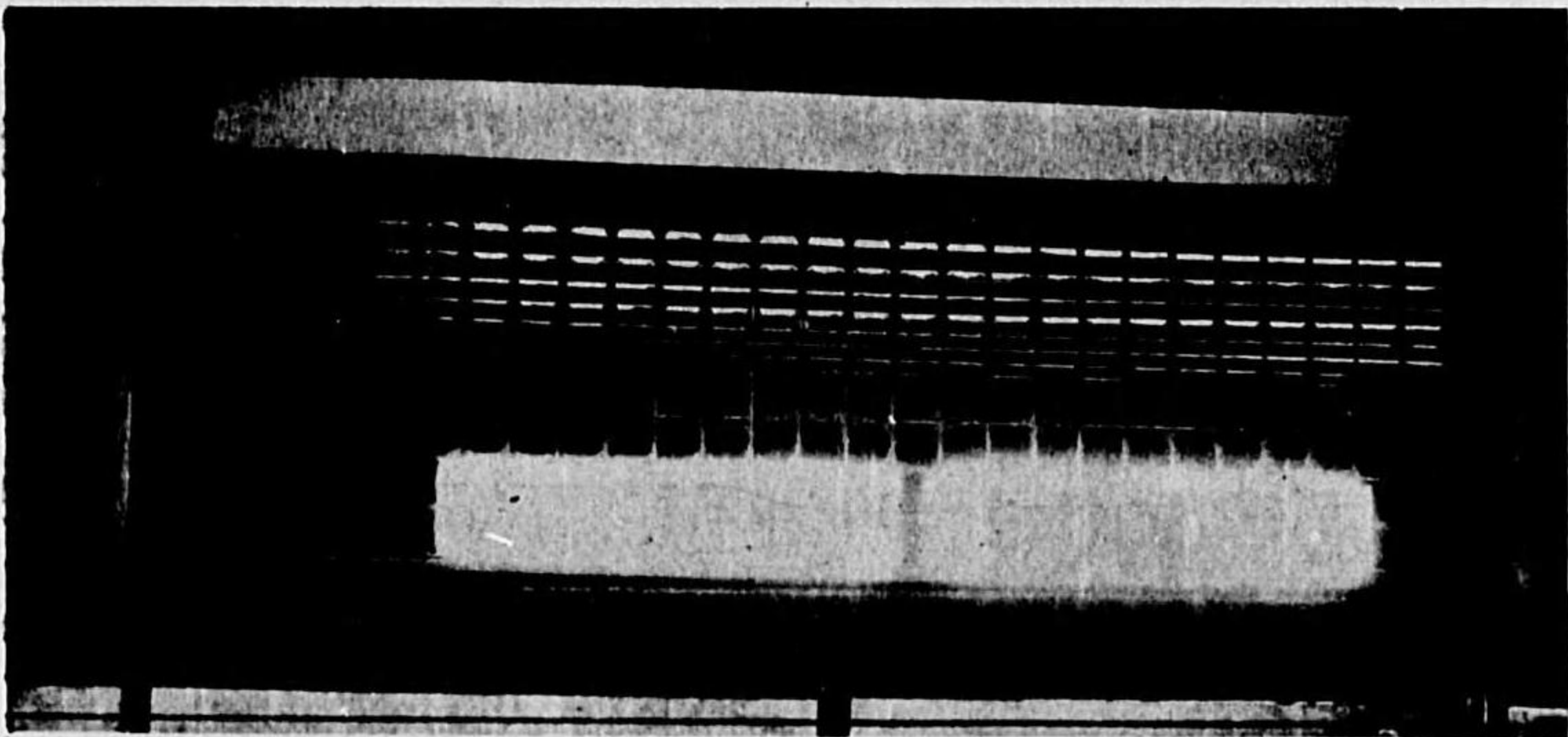
二三



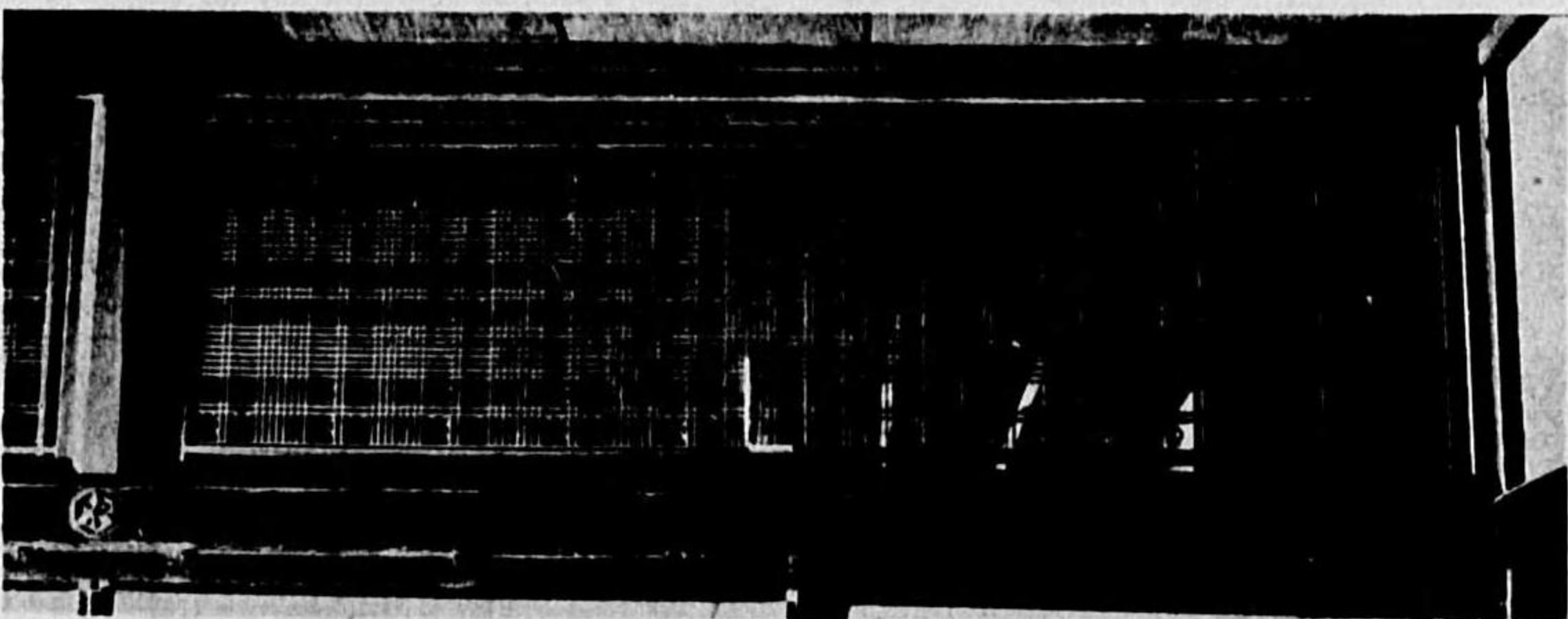
二三



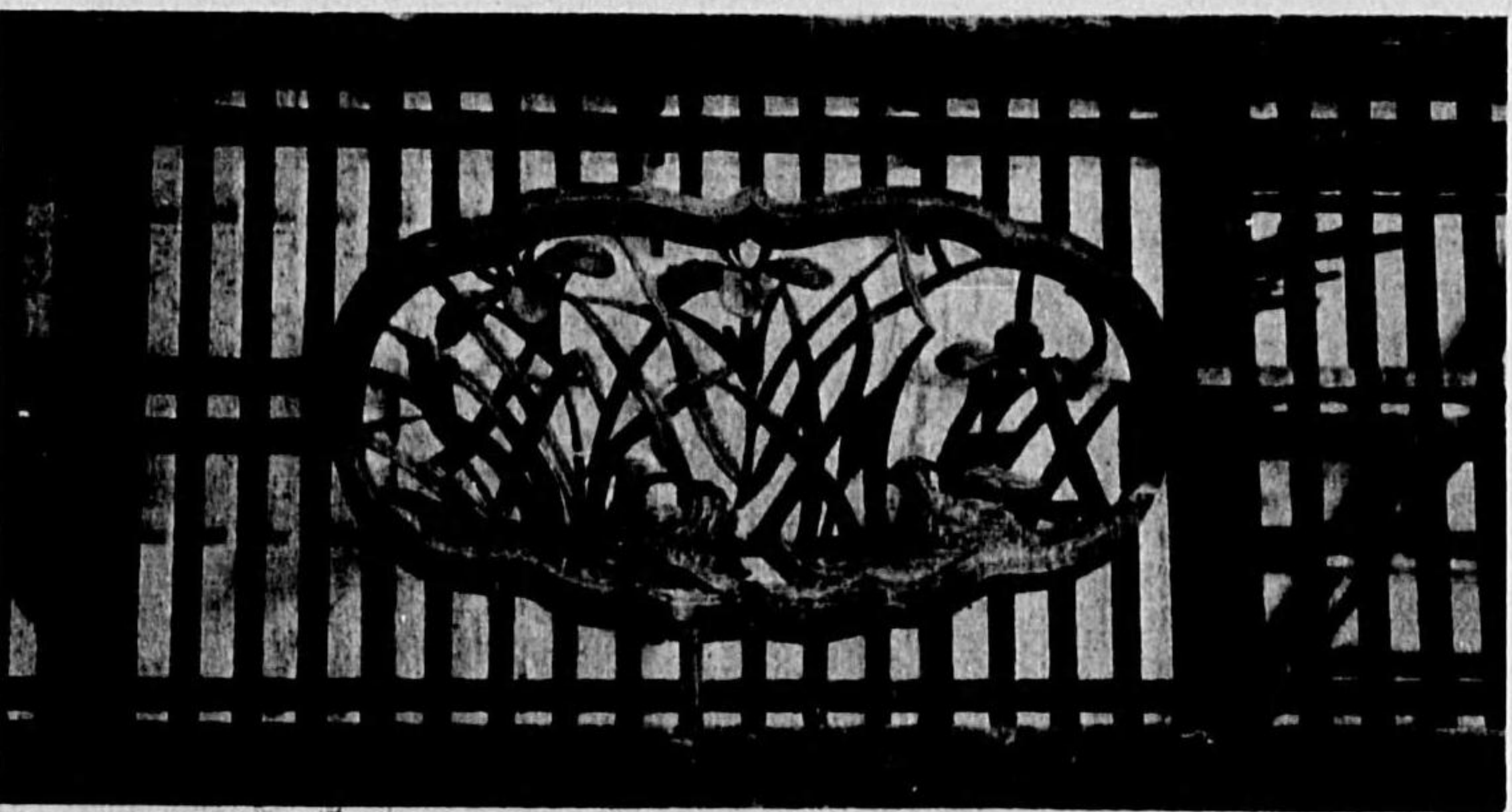
二四



二五



二六



二七

二四、西本願寺飛雲閣欄間

(昭和八年七月十日)

二五、西本願寺黒書院欄間 其一

(昭和八年七月十日)

此所に示す四種の欄間は、實は大して珍らしいものはなく、何れも前からの引つづきで、只夫等に少しづつ手を入れたに過ぎないのであるが、最下の例が組合せ式になってゐて、いはば複合欄間とでもいふことができる。

二四は「松皮菱」。菱欄間を構成する斜平行線を一直線にしないで等距離に電光形にしたもの。一直線のものなら平安からあるが、謂はゆる松皮菱にしたのは、古いところに見當らぬ様である。

二五は骨となつてゐる部分は簡単な格子に過ぎないので、格子だけならこれも鳳凰堂に、而も其交叉點に螺鈿を入れたものであらう。今は全部盗まれてゐて一つもない様であるが、かたが残つてゐる——のがある位で、別に桃山の發明でも何でもない。桃山としては淋し過ぎる方であるが、其交叉點の四方に、ほんのちよつとした飾をのりではりつけたため、趣が全く變つて了つたのである。二六も亦同意匠で、これは縦横の線を交互に二本と八本とし、其二本の交叉點に、これも亦簡単な飾をつけたもの。一見前者と大分の差がある如くであるが、實はさうではなく前者から後者は容易にできる。

二六、西本願寺黒書院欄間 其二

(昭和八年七月十日)

二七、妙成寺書院欄間

(昭和十六年二月十一日)

二七は能登に於ける日蓮宗の大本山、石川縣羽咋郡上甘田村瀧谷の妙成寺(ミョウジョウウジ)書院欄間の一、此書院は元和二年の建立とあるが、勿論全部桃山式と見てよろしい。これは篋欄間(ヲサランマ)の中央へ格狭間形の輪郭を入れ、其内に花菖蒲に水に水鳥、つまり池に水鳥(鶯鶯らしいもの)がおよいでゐて、其池に菖蒲が生へてゐて、蕾一つと花三つとをつけてゐるところである。此頃には此種のが流行したらしく、京都市の二條城二の丸御殿の多くの種類を見出す。菖蒲は桃山時代には珍らしくなく、臺股の脚内等に用ひられてゐる。彫刻は上出来だが、輪郭の格狭間が反對に實にまづくなつてゐる——此例のみならず、豪華を極めた二條城二の丸御殿のものも亦同斷——のは、よく時代の傾向を現はしてゐるといへる。此頁に掲げた種類の欄間は、觀心寺(大阪府南河内郡の有名な寺)書院に多くの好例がある。

二八、今治市外邸宅欄間

(昭和十二年十二月十五日)

三一、日光大猷院廟仁王門欄間

(昭和十年七月二十四日)

二九、降井吉彌氏邸書院椽欄間

(昭和八年六月八日)

三二、同 二天門欄間

(昭和十年七月二十四日)

三〇、知恩院小方丈欄間

(昭和十五年十月十二日)

二八の邸宅は愛媛縣越智郡大井村大字新町にあつて、元は井手積之助氏の所有であつたさうだが、今は村の管理に屬してゐるから、見學には村役場に申込まなければならぬ。尤も役場の隣りであるし、今治市から乗合自動車を通じるから至極便利である。此欄間は玄關の八疊と、次の間の八疊との間にあるものの一で、何れも中心飾は桐であるが、この方は桐の花がとれて了つたから、元の有様は判然しないが、この方は桐葉の肋だけを透彫にしてあるのに、他は肋だけを残してある。周囲の唐草は同じである。其輪郭は大分拙くなつてゐるところをみると、江戸時代に下げた方がよささうである。

二九は板に雲を透彫にしたもの。降井氏邸は大府泉南郡熊取村大字大久保にある。阪和電鐵熊取驛から程近く、街道筋に沿へる大邸宅である。宇治鳳凰堂の後方、浄土院附屬の書院のあの有名な三種の欄間の様に、桃山から江戸へかけて、一枚の板を切り抜いた様な模様の欄間は、吉野の吉水神社社務所や南河内の吉村邸の様な込み入つたものもあるが、又至極簡單なものあり、種類も可なりあるが、前記浄土院の「藤」や、この「雲」等は珍らしい方であらう。江戸時代と認む。

三〇は知恩院小方丈椽の竹の節欄間の透彫。二條城から移建したままとすると、寛永のものだから桃山式が多分にあり、桃山に入れるべきであらうが、移建の際多少の手入をしたとして、この部分はどうか知らぬが、どうも江戸へ入れた方が適當らしく思はれるのである。大したうまいものではない。

三一・三二は共に同時代と見てよろしい。前者は松皮菱のうちに何だか妙な模様を入れ、後者は龜甲繫の龜甲文の中に、これも變な形の三方に出たものを入れたので、其骨になつてゐる松皮菱と龜甲繫とは何れも前代にあるので、ただそれ等を少しかへてその中へ不得要領の形を入れたもの。どうも兩方共大して感心はできかねる。



二八



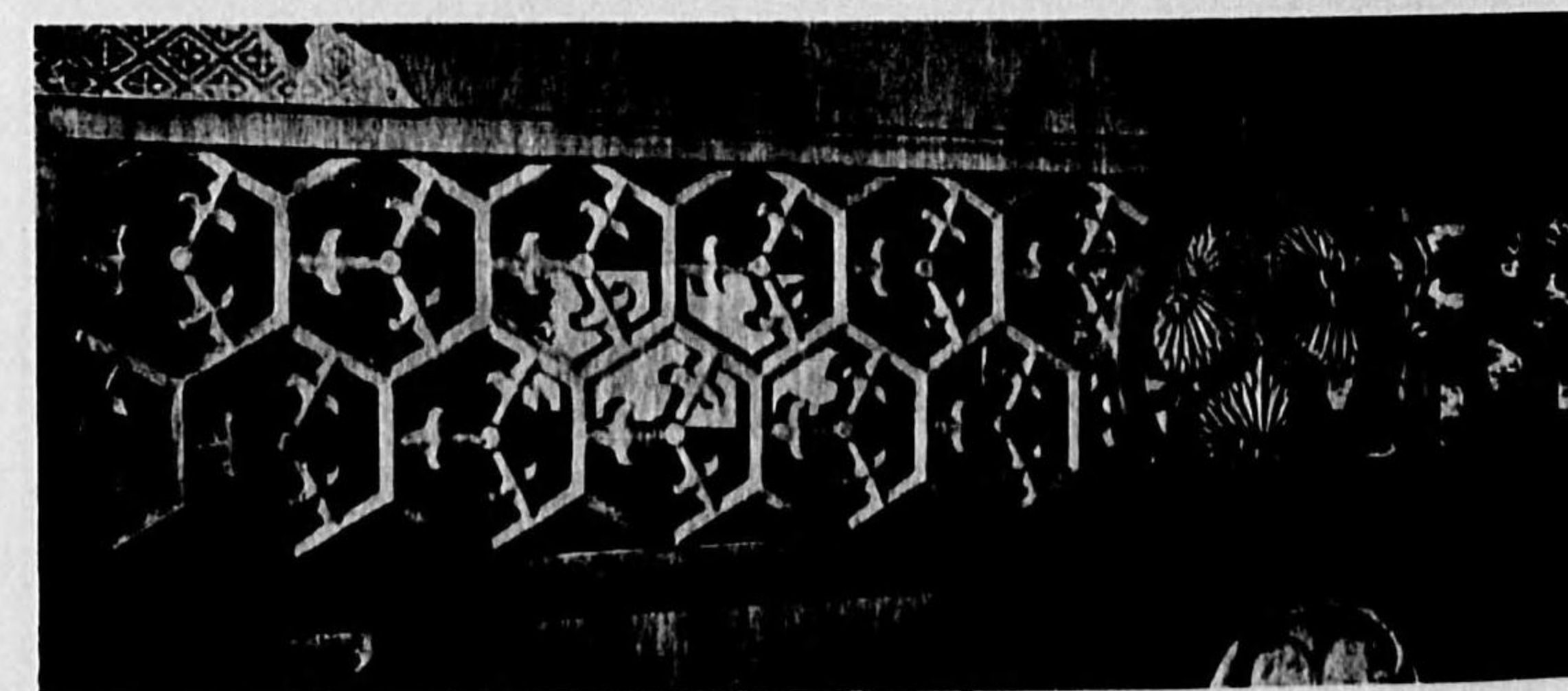
二九



三〇



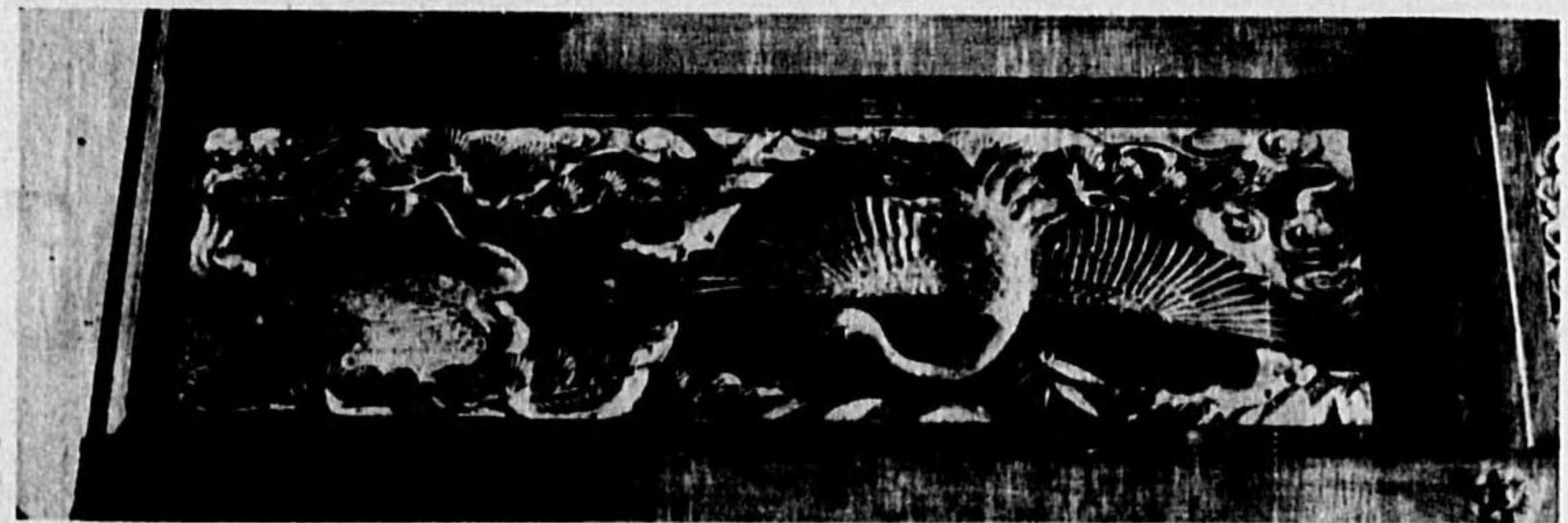
三一



三二



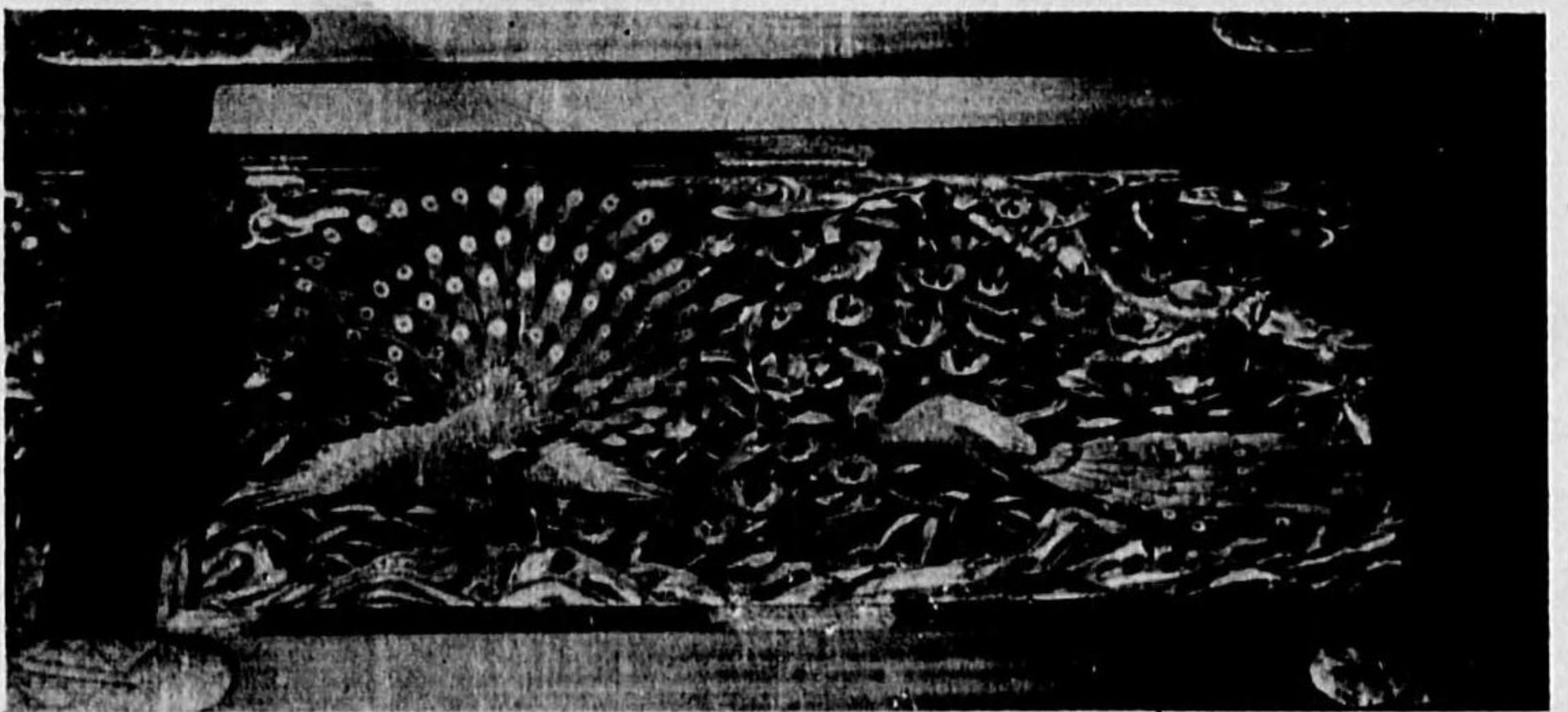
三三



三四



三五



三六

三三、西本願寺白書院欄間

(昭和八年七月十日)

三四、西本願寺鴻の間欄間

(昭和八年七月八日)

三五、二條城二の丸御殿欄間 其一

(藤原義一氏)

其二

(同氏)

最後に桃山時代の豪華艶麗且つ極めて精巧なる欄間四種——といつても上から二番目には少し當嵌らないかも知れないが——を示しておく。先づ第一に三三の「藤に松」から記載を試みる。藤の花が所狭き迄に満開で、其間に葉が適當に配せられ、上の方に松がほつてあるのでみると、松にからんだ藤の花の満開の場面を現はしてゐるらしい。上下の額縁に接する所は、夫雲と岩か土かをほり、そこをうまく取扱つてゐる。總て厚みがあり、凡そ前代迄の平面的のものと著しい差がある。こんなのは桃山にならなければとでもできて來ない。左下額縁に沿へるは曲尺の一尺の物差。次の三四は同じく西本願寺の對面所と上段の間の間にある欄間の一部で、これは其西端のもの。この長方形の間の右端から老松が生へて居り、竹もほんの添え物といつた調子に五枚の葉をつけたのが地面から出てゐる。其老松の枝に鶴か鴻か——鴻の間といふからさうだらうが——とにかく渉水目の鳥と雛とが居り、右方に一羽飛んで居る。雌雄と雛とで一家族であらうが、こんなのも亦前代にはあり得ない。

三五は二條城二の丸御殿槍の間欄間の一で、下には水と岩、上には雲、其間には松と竹と、夫から牡丹かも知れないと思はれる様な植物を、殆んど空隙のない迄に入れてゐる。斯様に混雜してゐると、どれがどれだか、どこからどこに連なつてゐるのか、この頃流行の言葉でいふと、まるで叢林か密林の内へ迷ひ込んだ様で、美事は美事で立派は立派で、よくもこの様に大したもの彫刻したことだと敬服もするし、褒める事も人後には落ちぬつもりだが、たしかに統一はとれてゐない。いはば群雄割據でただ全體が金碧燦爛として眼を刺戟するばかり、主眼とするものはどこにあるのか。夫に比べると三六は孔雀の様な雉科の鳥類の習性を無視した不自然極る彫刻ではあるが、同じく混雜はしてゐても主眼點があるだけよろしい。これも亦同様に下に岩上に雲と松・竹・牡丹(?)か何かで地をうめ、左右に二羽の雄孔雀を配したもので、殊に左方の雄鳥が先端に美麗なる眼狀點を有する尾部に近い羽毛をひろげてゐるので、夫が著しいからである。欄間は桃山でこの様に發達をしたのである。

欄間一覽表

飛鳥時代	……未詳。
奈良時代	前期……未詳。 後期……未詳。
平安時代	前期……未詳。 後期……菱格子(?)。
鎌倉時代	和様……菱格子・吹寄菱格子。末期には牡丹に鳳凰の複雑なものがあつたが、どこ迄も左右相稱又はさうでなくても何れも原始的意匠より成る。 天竺様……未詳。窓とも欄間とも見ゆるものに短冊形の薄板を小間返に打つたものがあつた。 唐様……弓欄間(浪連子)。
室町時代	和様……直連子に散文様、透彫(例へば牡丹・橘・桐に菊・笹龍膽等)。其他 天・唐……他の二様式は前代同様。
桃山・江戸時代	花狭間・松皮菱・箆欄間・雲・龜甲文・中心を通る線に水平には上下、垂直には左右相稱の透彫、又は繪畫的雄大なる透彫等。 同時に大發達をとげた厚手のもの、例へば「松竹に孔雀」・「椿に小鳥」・「葡萄に栗鼠」等、 両面彫刻を異にしたもの等。珍らしいのは四天王欄間。

木鼻 一六一

- 一、不退寺南門實肘木鼻
- 二、靈山寺本堂向拜木鼻

(昭和九年八月二十六日)
(昭和十五年八月八日)

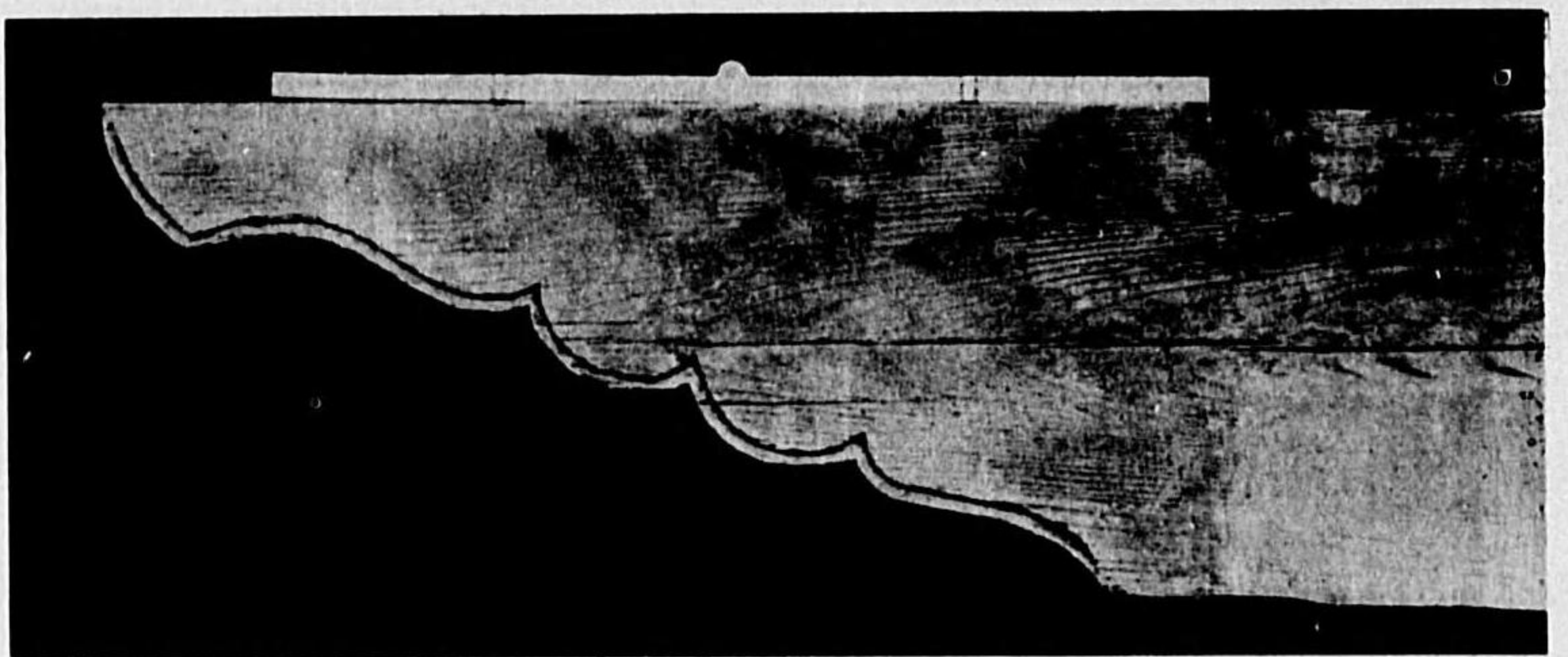
- 三、淨土寺淨土堂軒
- 四、醍醐寺經藏木鼻

(飛鳥園)
(昭和五年二月四日)

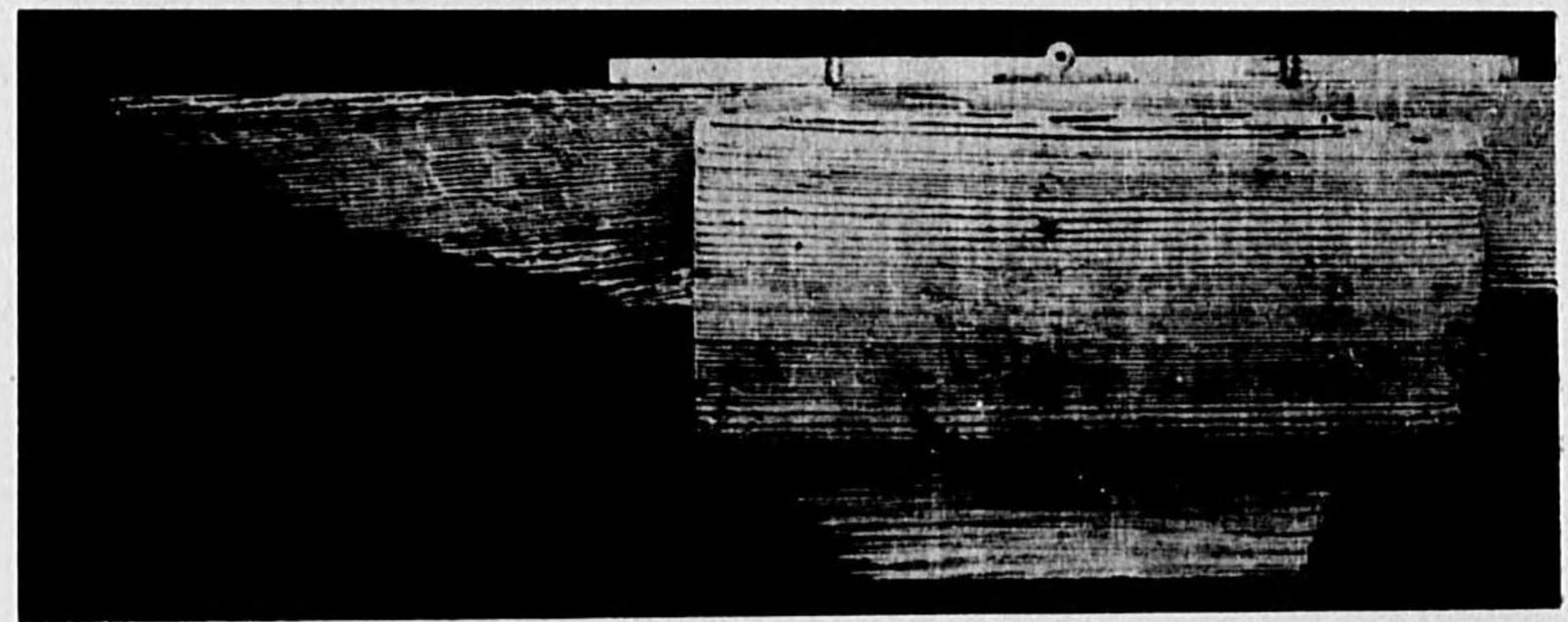
鎌倉時代

木鼻は鎌倉時代以前にはない様である。若しあつた所で夫は裝飾のため或る形を刻み、故意に頭貫とか肘木とかいふもの
先を反對の方向に出したのではなくて、實は切るべきものを大して邪魔にもならないから、其ままにしておいたといふ程度で
ある。普通木鼻は天竺様又は唐様建築と共に、鎌倉時代に支那から輸入されたと考へられてゐるので、從來なかつたものが突
然でてくる筈はないから、やはりさう思つてゐていい様である。そこで木鼻に鎌倉より古いのではないことになる。あつたけれ
ども懸魚の様に遺物がないのではなくて、全くなかつたと考へてゐていい様である。

現存の當代木鼻は、最古と認められるのは天竺様ので三・四・五等に掲げた様な、始めと終りとが波形をなし、其間は圓弧
の様な曲線の連続から成つてゐるものだが、これ等の木鼻は忽ち和様建築に影響し、無いよりはあつた方が遙に賑かだから、
夫を少し形をかへ、又はかへずに、其まま和様に用ひたのを、今日大和平野の社寺建築に於いていくとも見る事ができるので
ある。大和では、鎌倉初期に東大寺の復興に際し、南大門及び大佛殿等に天竺様を採用したので、さうして唐様即ち禪宗は京
都や鎌倉に於いて勢力があり、大和ではさう行かなかつたのも手傳つたせい、鎌倉時代の和様建築についてゐる木鼻は、殆
んど總て天竺様のグリグリ式である。一・二は天竺様の夫に比べると、いくらか曲線の性質は柔かになつてゐるのは、鎌倉で
も終りに近い頃だから——前者は正和六年、後者は弘安七年——さうあるべきで、例へば仁治元年の墨書銘ある唐招提寺鼓樓
の等は、純然たる和様に随分しつかりした天竺様の木鼻をつけてある。尙ほ天竺様の木鼻は「鎬」をとつてないが、唐様だと
する。後にはさうでないといふよりは、所屬曖昧で、とつたのもとらないのもあるとしても、初の間は其別が頗る明らかであ
る。上二圖物差は曲尺の約一尺(一呎)。



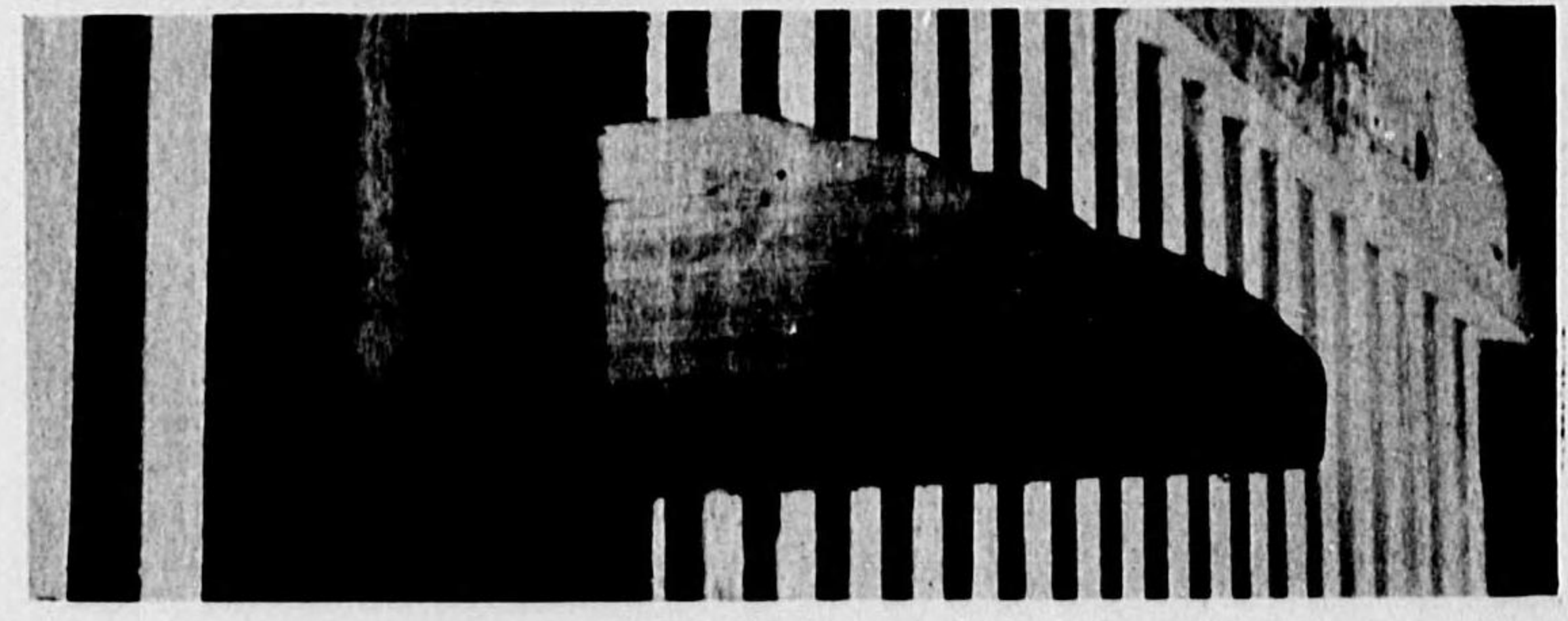
一



二

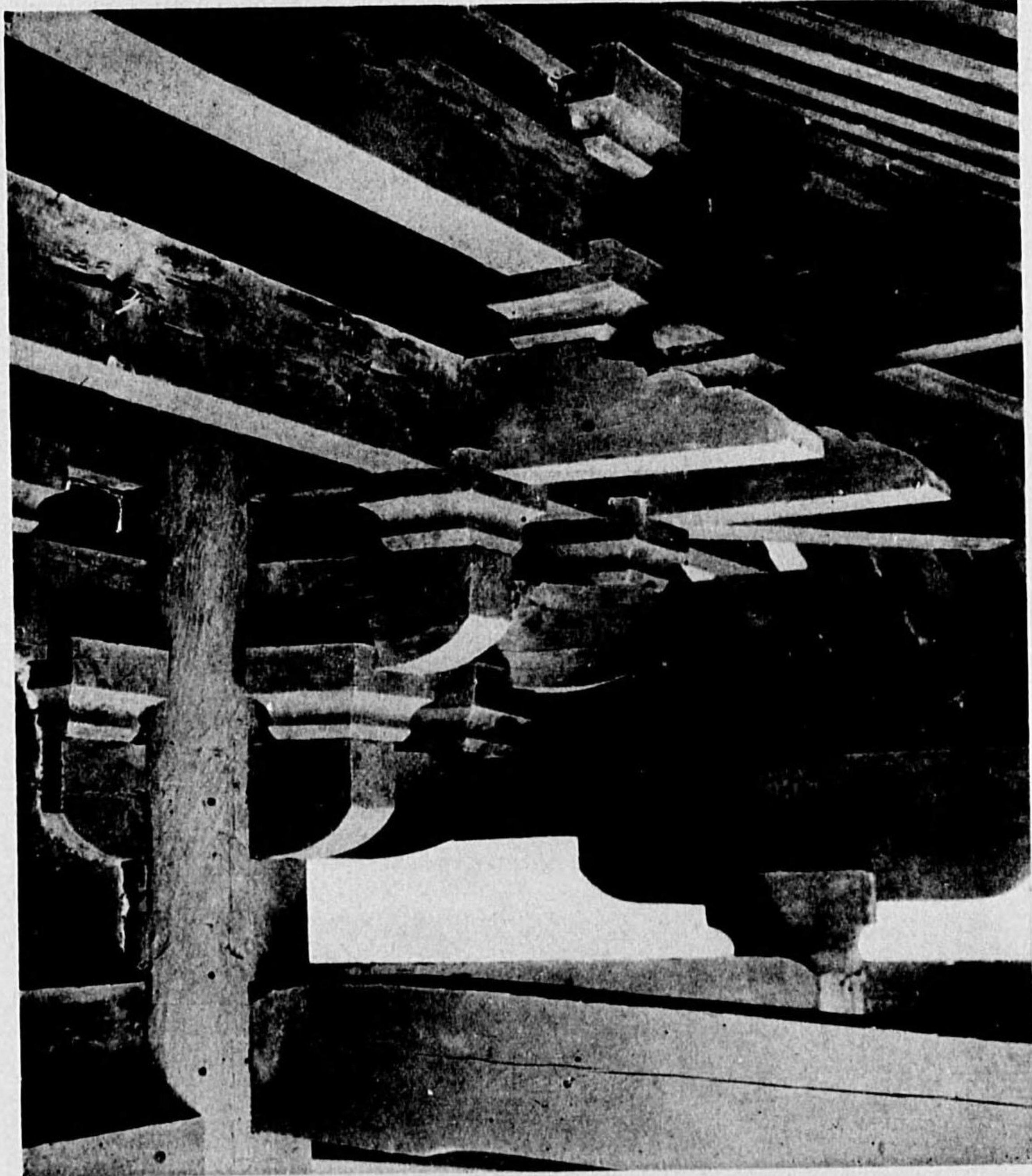


三



四

五



六



五、東大寺開山堂(良辨堂)内部外陣木鼻

六、八幡神社拜殿木鼻(兵庫縣加東郡小野町大字淨谷)

(飛鳥園)
(昭和十年八月二日)

五に於いても右上に近く多くの木鼻が出てゐるが、何れもきまりきつたグリグリばかり、他の線形はない。天竺様のはいっどこにあつても、きまつてこれであるから、變化には乏しいが旗色は極めて鮮明である。ここでは木鼻だけの事だけ考へればいいのだが、序に大きくて寫眞がはつきりしてゐるから、既に述べた事ではあるが(料・肘木二七)、柱に肘木が挿込んである所、料線の下に一種の線形をもつた天竺様料の形を注意しておくとする。

六は隅木の下への添え物だから、木鼻といふは當らず、持送(モチオクリ)と呼ぶのが正しいかも知れないが、この様な所に用ふる持送といへば大概手挾(タバサミ、後出)式のものばかりで、この様なのは珍らしいし、木鼻と見られない事もないからここへ入れておいたのである。

此は鳥の頭である。鳥頭は殆んどなく、筆者は僅に信州上伊那郡三義村大字山室の遠照寺釋迦堂の内部で見たのみで(二一)、比較的類例稀だから、旁これにしておいたのである。首の上端で頭の直後に球形のものが見えてゐるが、これは寶珠らしく、さうとすればこれは瑞鳥の頭で多分鳳凰位のところであらう。

七、靈山寺本堂向拜木鼻(奈良縣生駒郡富雄村大字中(ナカ))

(昭和十五年八月八日)

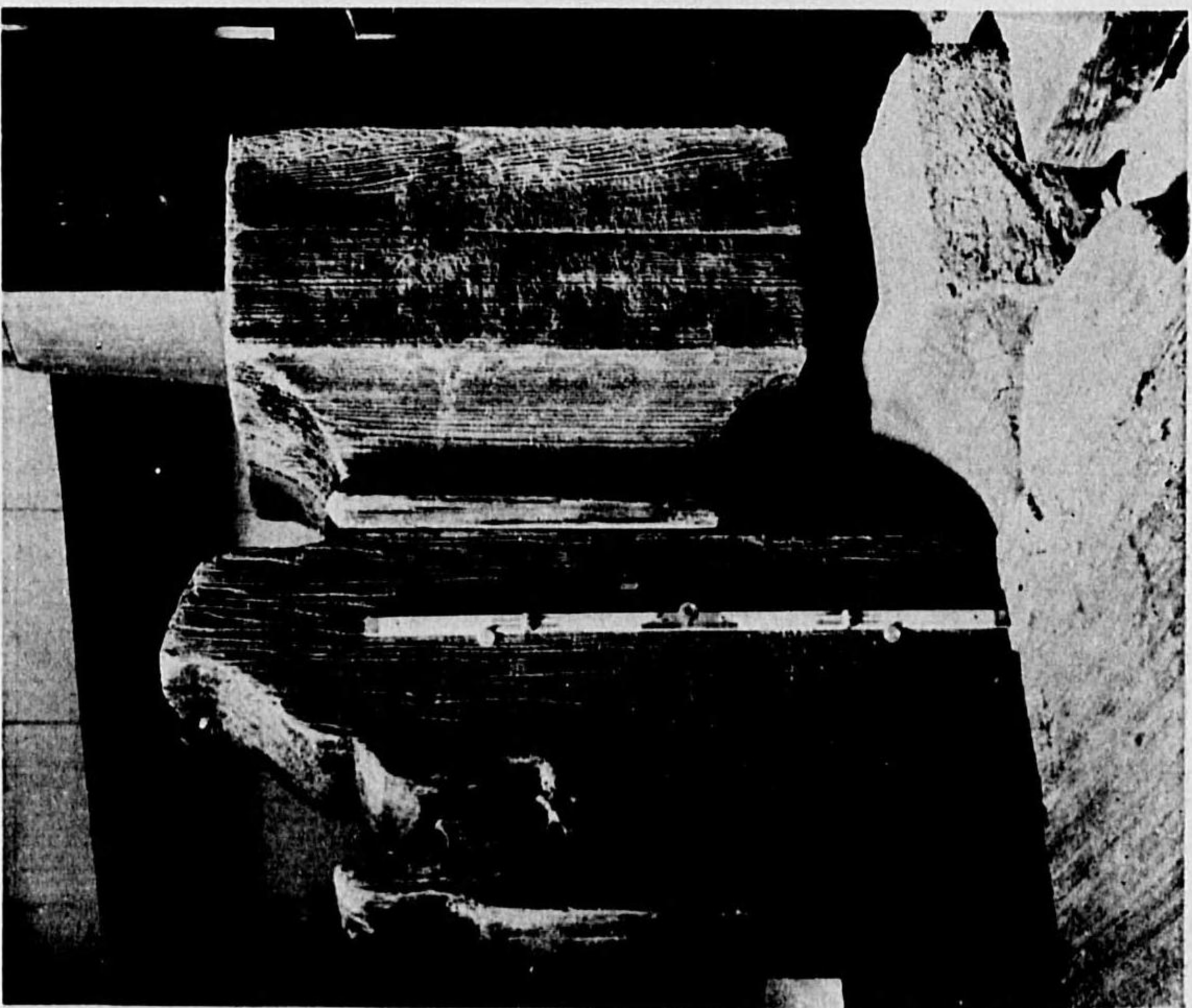
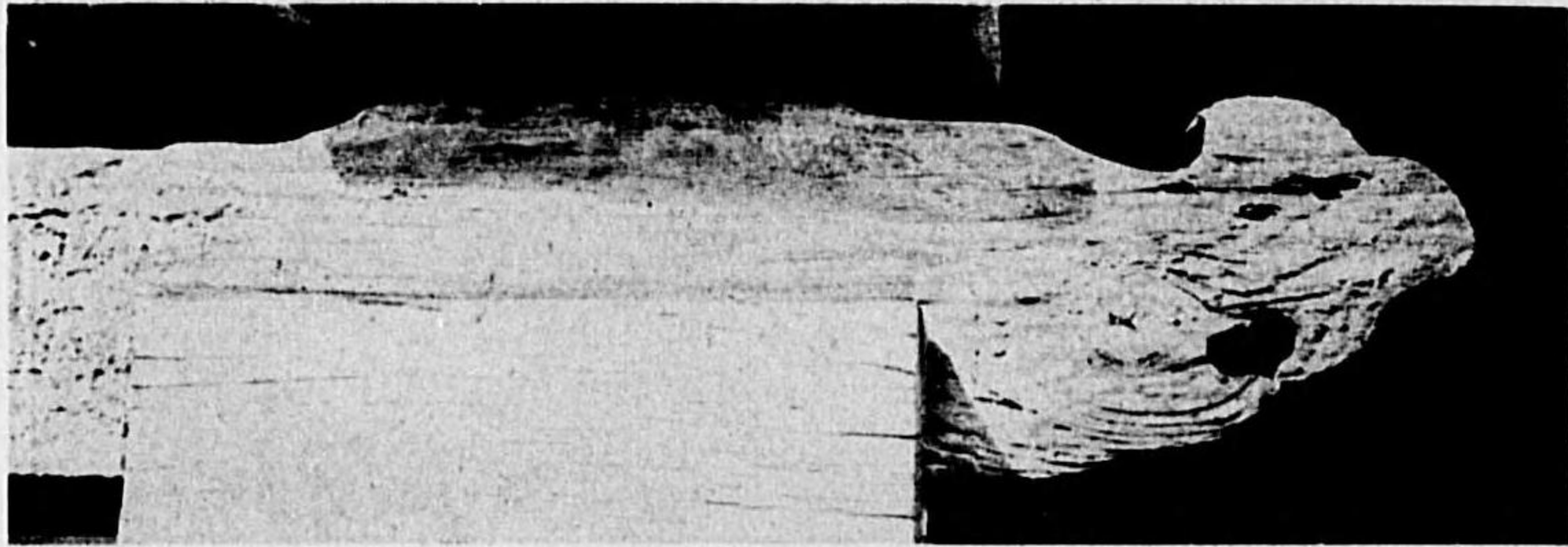
八・九、唐招提寺舍利殿・禮堂木鼻二種

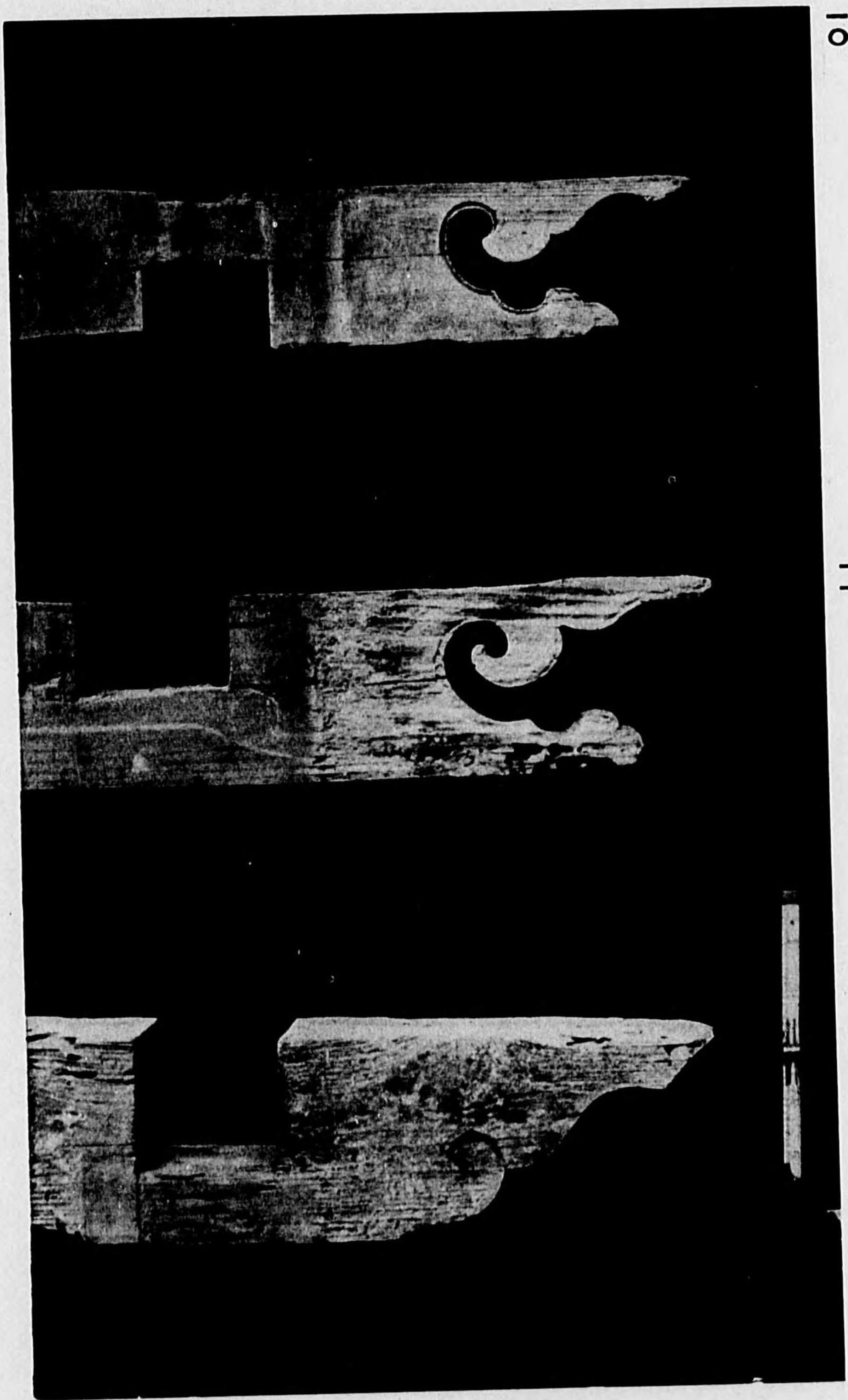
(下圖物差は曲尺の約一尺(一呎)・昭和十四年八月十一日)

鎌倉時代の唐様木鼻を代表せしむる適當な寫眞が手許にないので、遺憾ながら今回は意に満たぬものを掲げるもどうかと考へたので省き、止むを得ず室町時代のものを以て代用しておく(一九)ことにして、ここには兩様式からできた——どちらにでもとれる——と認められるもの三種をあげておく。

七と八は實によく似てゐる。一方は下端の茨の内に「猪の目」ができ、他は同じところに銀杏形ができてゐるだけの差、一方が他方を真似たとしか思はれない位、或は同じ大工が刻みだしたと見た方がいい位、似てゐるといふよりは同一といった方が適當かも知れない。これには僅か鑄がある。木鼻等といふものは、臺股脚内の彫刻と同様、鉛筆の先で書いてゐる間にどうでもなるものである。力に關係のあるものではなし、大工の頭の働かせ様によつて、いろいろの形は當然できてくる。

此等二つに比べると、九は稍や込み入つてゐる。下の二つは同じ建築にあるのだから、同時に存在してゐるので、どちらが先にできたといふ事は、ここでは言へないが、其形からいふと、下の方は猪の目が途中にあつて、ここを口と見ると下顎ができてゐるし、下向きの天竺様木鼻に少し波を打たせ、下へ來る迄に引込んだ茨をつくり、茨の内方に猪の目をつくつて、其尖つたところを外に開くと即此になる。これは天竺様から極めて容易に變化してくるが、唐様からも同じである。だからこれ等ははつきり其原をいふわけには行きかねるが、大體に於いて天竺様は象・猿・獅子等に、唐様は若葉・雲等に變つてくる。





一〇

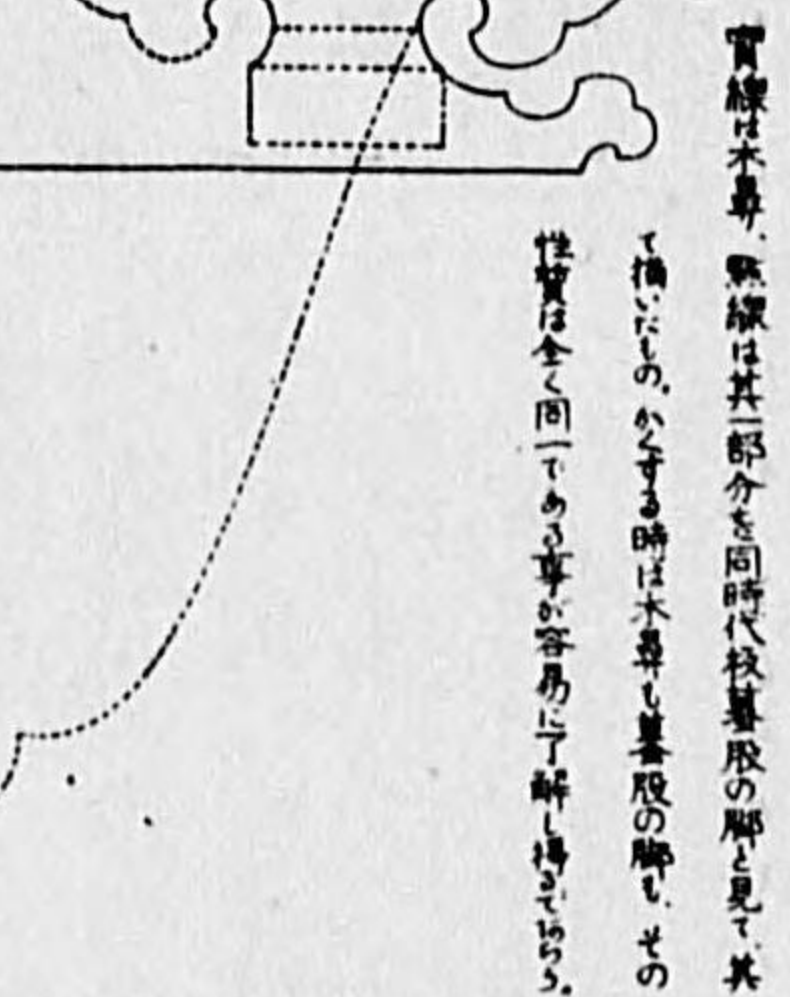
一一

一二

一〇、 一乘寺護法堂木鼻
一一・一二、同 辨天堂木鼻

(物差は曲尺の約五寸(六吋)・昭和十七年七月七日)

さう澤山あるとも思はれない。今私が宙で記憶してゐるのは木積の釘無堂(孝恩寺觀音堂)と鶴林寺行者室位のものである。上二つはたしかに變つてはゐるが、よく見ると其上の半分は板葺の脚そっくりであり、下の一つは極僅かの訂正によりて



上は護法堂、下は辨天堂木鼻の略圖

昭和十七年六月廿九日

そっくり其儘板葺になるのである。こういふ風に考へると、いろいろ形は變つてゐるが、どこにあつても材料は何であつても、同一時代のものは總て曲線の意味は同一である。いつもいふ様に幣軸に取付けてある鐵製龕座と懸魚とは、材料と大きさに於いて大分の相違はあるが、曲線の性質は全く同じだから、一が判れば他が判る筈である。夫が判らない様なら、夫は其人の頭がわるいのである。出八双の先端の曲線も亦然りである。

此様な見方をすると、この兵庫縣の田舎にある寺の元鎮守と思はれる春日造の小建築の頭貫の鼻は、ただ他のと形式が變つてゐる點に氣がついてゐるばかりでなく、もつと遙に興味が出てくるであらう。この木鼻だけみて時代の見當がつかなくても、頭の中で點線の様な形を描いてみると、はつきり判らなくとも大體の見當はつく。例へばこの場合、鎌倉か室町位のところであらうとは容易に推定されるであらう。

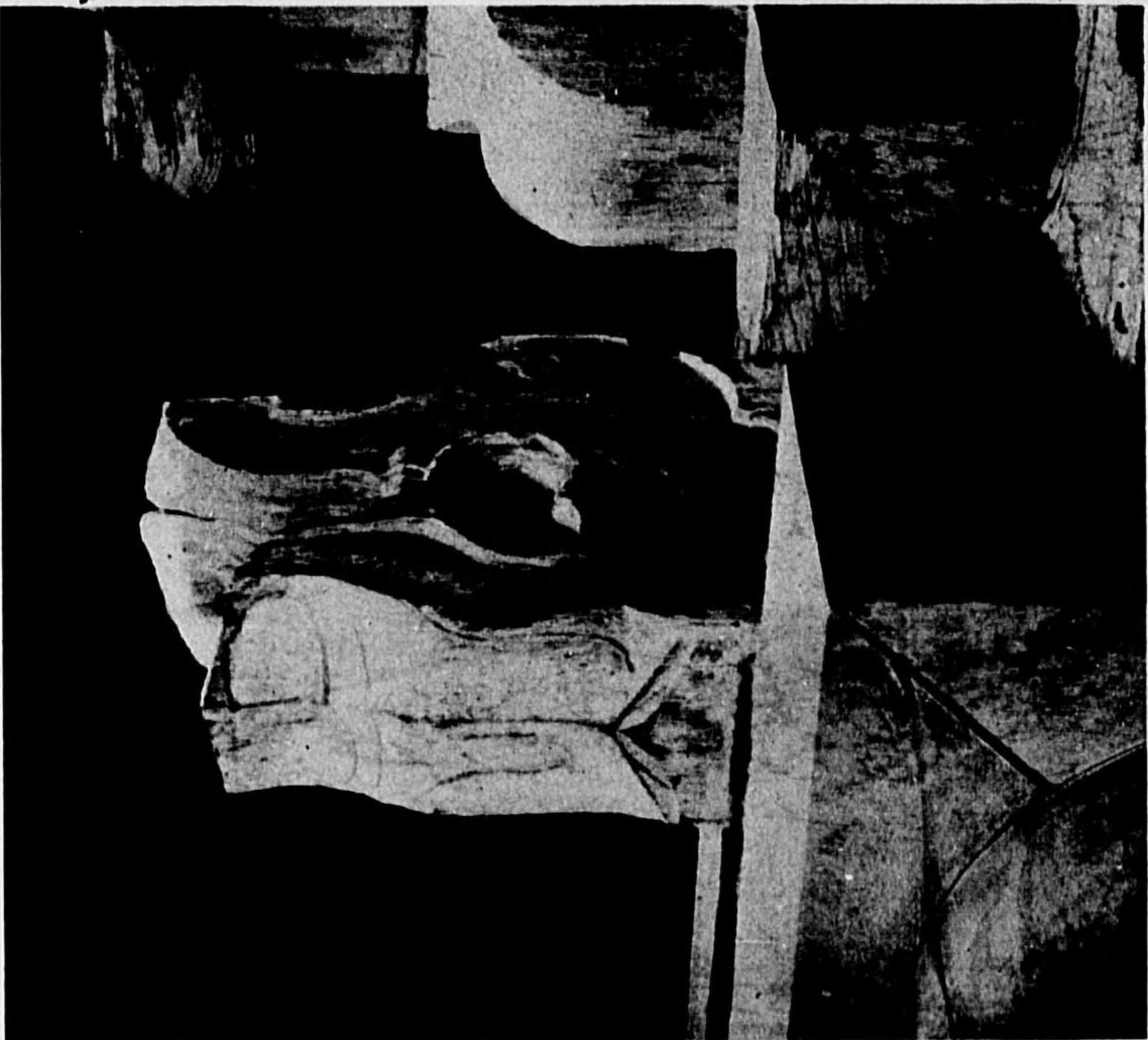
一三、前山寺三重塔木鼻(長野縣小縣郡西鹽田村前山)

(昭和十年五月二十五日)
(昭和六年五月十日)

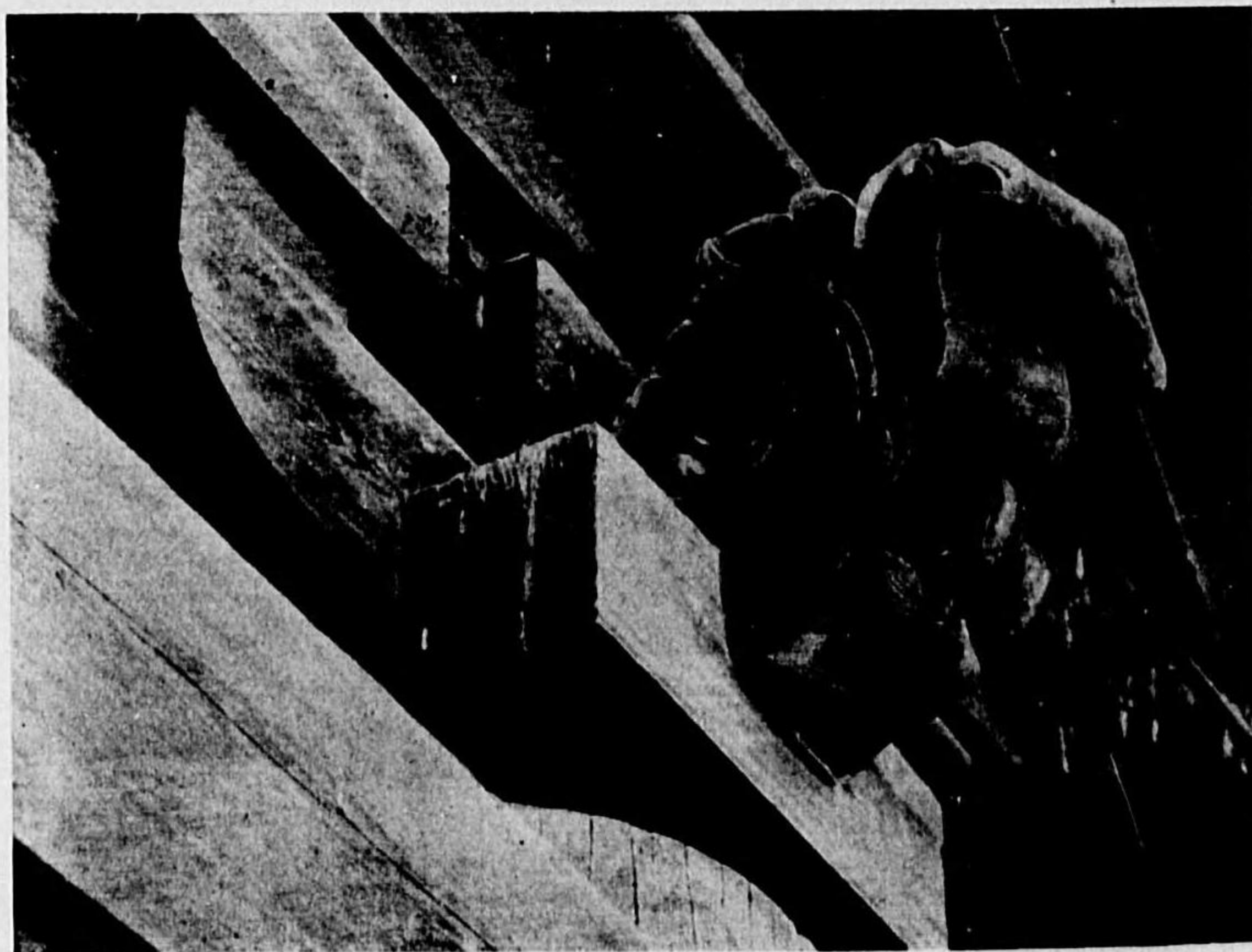
一四、押立神社本殿妻木鼻(滋賀縣愛知郡西押立村北菩提寺)
前山寺(ゼンザンジ)は先年修理の際、周圍に亂生してゐた樹木を伐り倒してあたりをひろくしたので、風通しもよくなったし、風致は全然一新した。推定復原か或は證據があつたのか、相當に手の入つてゐるところもある。時代は鎌倉末位に推定されてゐる様であるが、初重四方の椽の邊が面白い。といふのは木の椽をはつてゐるのは、其側面は全部板を以て覆ひ、大體石の基壇を木材を以て造つた様な感を抱かしむるのである。石は石で木は木で全然異なつてはゐるが、石の基壇が木に代つた當初は、或はこの様な方法で造られたのではあるまいかと思はれ、頗る興味がある。但し現在ののは通風を考へ、椽下の側板の一部が引戸にして開閉のできる様にしてある。

扱てこの塔の頭貫の鼻であるが、一三でみる様に長押と臺輪との間に挟まれて、隅柱から二方へ、合計八つ出てゐるが、大して感心のできない形をしてゐる中に、唯一つだけが頭上に近く一眼を、猪の目を口と見立てたものか、申譯の様な小さい牙を、下顎から上方に向けて垂直に刻みだしてゐる。これは一見したところでは「象」の様な感がする。天竺様式の木鼻が漸く發達してくるに連れ、この様ないたづらをしだして、遂に純然たる象頭が生れだしたと見てよささうである。木鼻を八つともさうしないので、七つはまともだが、一つだけこういふ風にしてゐるところが面白いので、謂はゆる「象鼻」なる後世の拙劣不可解な木鼻の發達した原は、こんなところからだらうといふ推定材料を提供してゐるのである。天竺様には鎬はないのに、これにはあるが、この位になつてくると其邊は自由で、さう規則通りにばかりはいつてゐない。

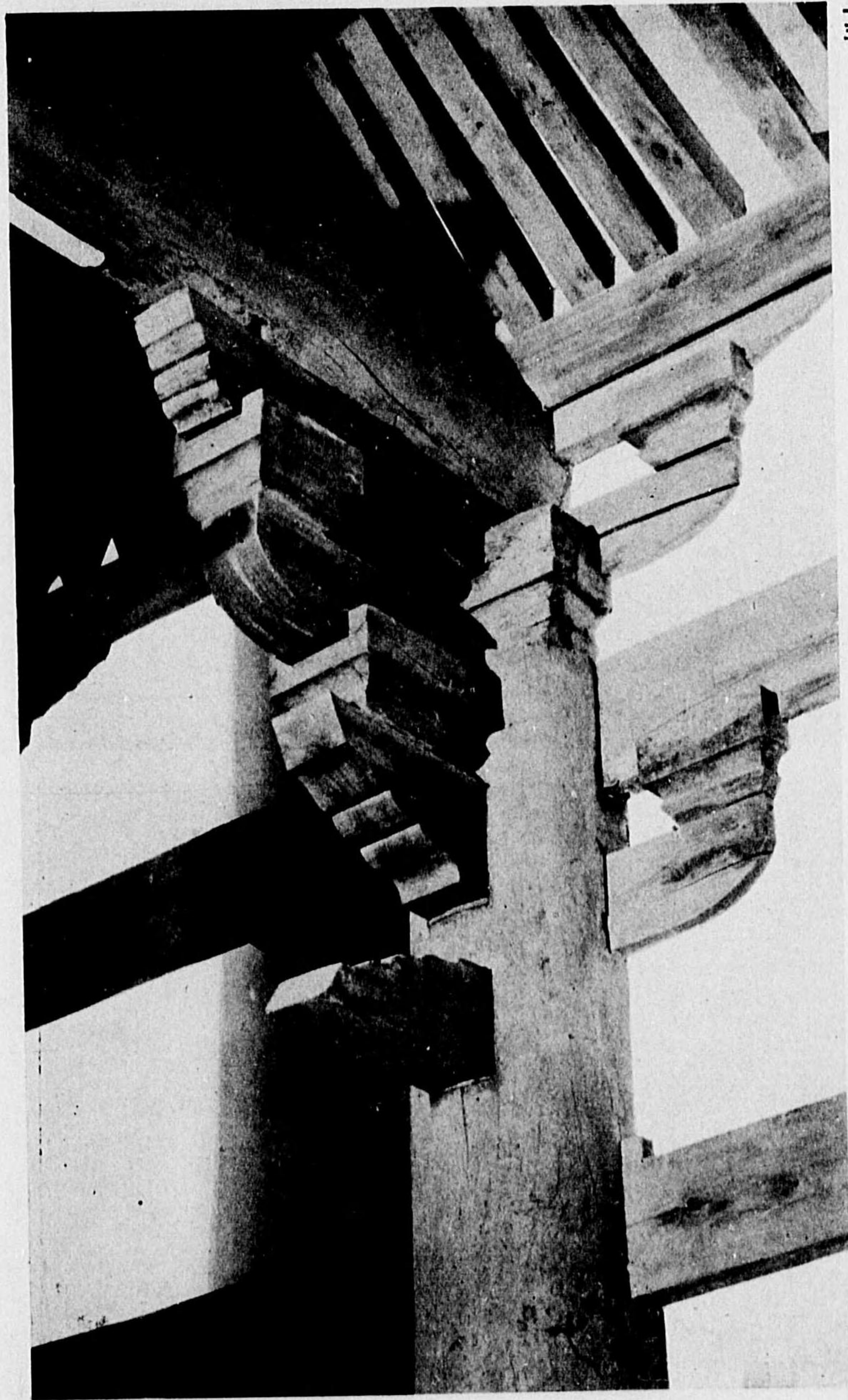
一四は建保三年の建築といふ押立(オシタテ)神社本殿側面の中央柱上の大料に含まれた木鼻だが、内部を知らないから、どうしてここからこの様な木鼻がでてゐるか判然しない。これは確かに唐様木鼻からきたもので、側面は若葉を以て美しく裝飾がしてある。この木鼻は建保としては發達しすぎてゐる様だが、室町へ下げる程でもなし、姑く鎌倉としてここに採録した。



一三



一四



一五 淨土寺本堂外陣木鼻

室町時代

(昭和十年三月十五日)

此も亦兵庫縣加東郡小野町大字淨谷の淨土寺で、其本堂であり、淨土堂に對して西面してゐる。若し創建當時のが残つてゐたら、建久四年で最古のものであるが、惜しい事に室町の再建である。建久六年の醍醐寺經藏が先年焼失して了ひ、愈よ心細くなつてきた際、例ひ室町のもので、此本堂や岡山縣の吉備津神社本殿等が残つてゐるのは有難い事である。

寫眞で見る通り、これも亦天竺様の木鼻が多數出てゐる。これを鎌倉時代の天竺様建築の夫、即ち三・四・五等に比べて著しい差は、彼の場合其遊離端の曲線が一連続のものであるのに、これは明らかな角がつき、波形の曲面と一平面とからできてゐる事で、時代が後れるとこれだけの差があるのである。ところで一は和様ではあるが、こんな木鼻がついてゐたので、近年迄室町と認められてゐたのである、だから必ずとは言へないが、大概こうなつてゐるといへるのである。

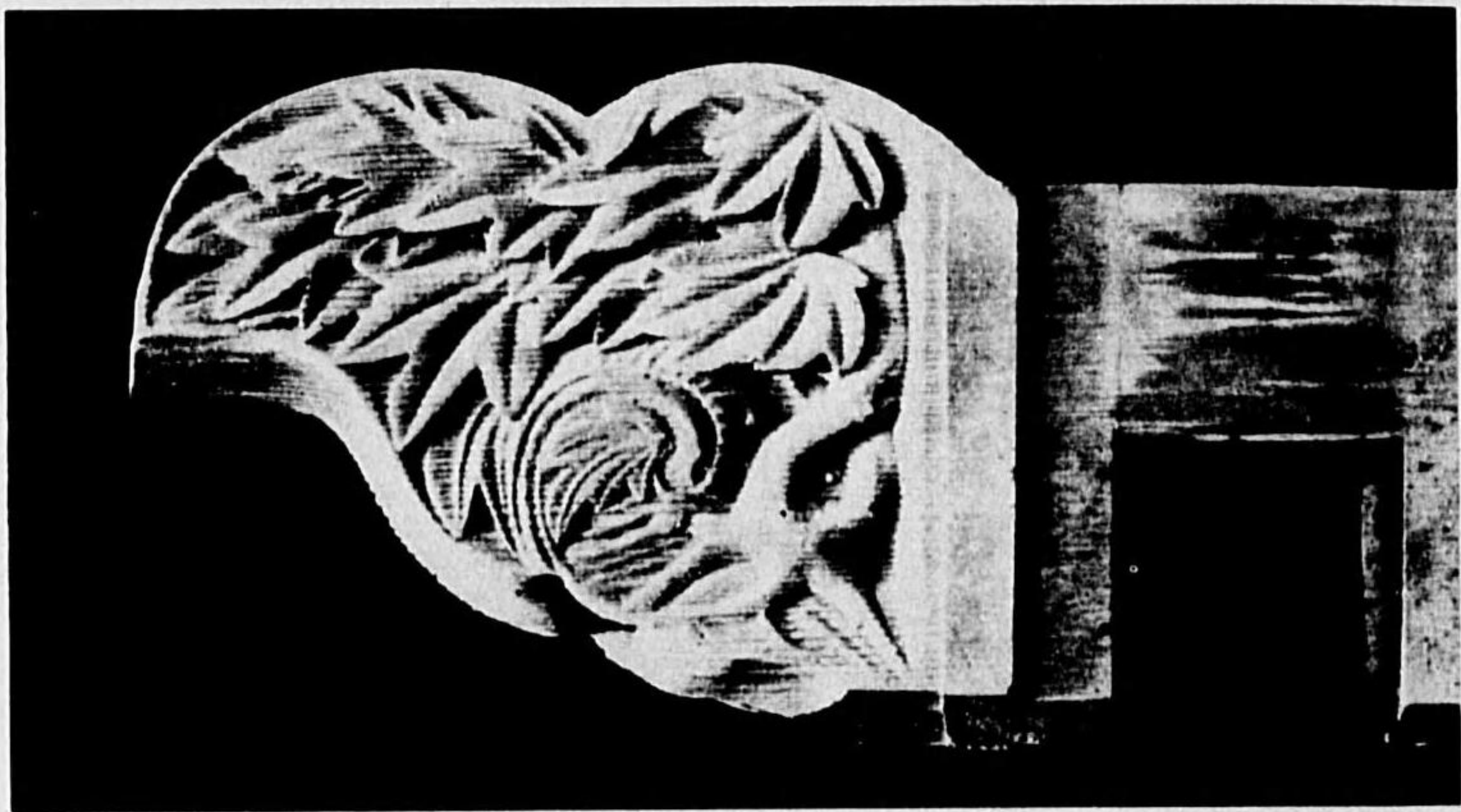
- 一六 北室院本堂西側南端木鼻南側
- 一七 同 南側東端木鼻東側
- 一八 同 東側南端木鼻北側

(昭和十五年十一月一日)
 (昭和十五年十一月一日)
 (昭和十五年十一月一日)

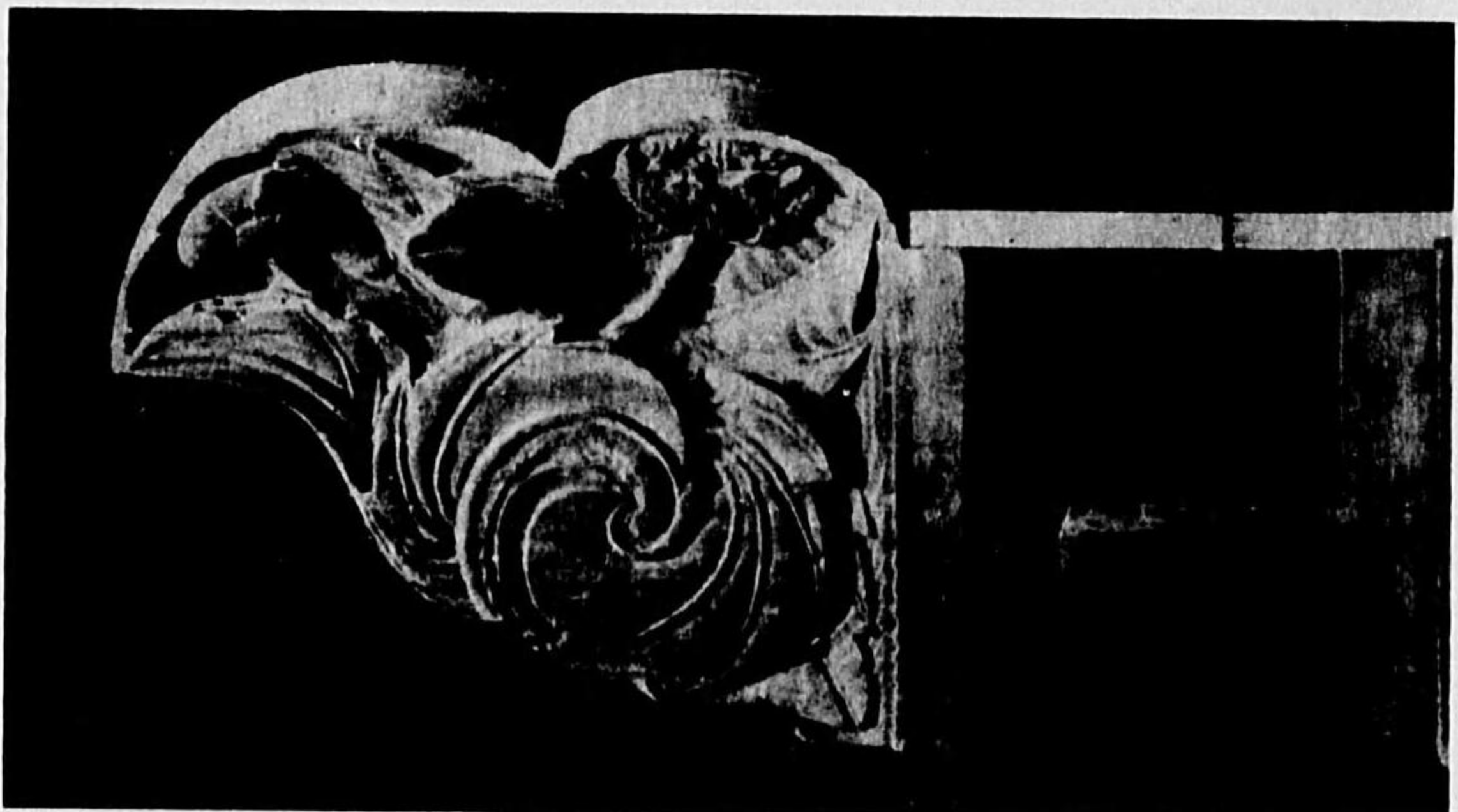
北室院は法隆寺東院傳法堂の裏、中宮寺表門に向つて左側に南面して建つてゐる。此建築が明應三年だといふことは既に記した通りである(東一〇解説)。其科栱間の裏束にいろいろの彫刻がしてあり、殊に瓜等をほつてゐて随分に面白いが、四隅の木鼻も亦、両面其彫刻を異にしてゐるので、以下數種を掲げ、略解をつけておく。

埃及國に於ける古建築に於いて、柱が多くあつた時、其柱頭にいろいろの變つた彫刻をしてゐるのは、いくら規模が大きくても同じものばかり並んでゐるのより、一つ一つ觀るのが随分樂みなものである。歐羅巴では東羅馬建築の柱頭亦然りで、此點ギリシャ、ローマあたりの古典建築等より面白い。我國の古建築には柱頭といふものがないから、こゝにいふ事はできないが、ここに初めて木鼻の両面で文様をかへるといふ新手法ができたのである。臺股兩面の彫刻をかへたのは鎌倉末位からと見られ(兵庫、彌勒寺、康曆二年)、木鼻の両面と裏束の裏の彫刻はここに(裏束の分は兵庫鶴林寺三重塔にもある)、大瓶束の結縮も他にもあるが一例は蓮花王院門の夫にある(東三九—四二)。先づこんな風で我國では時代が降る程この様な傾向を帯びてくるのである。

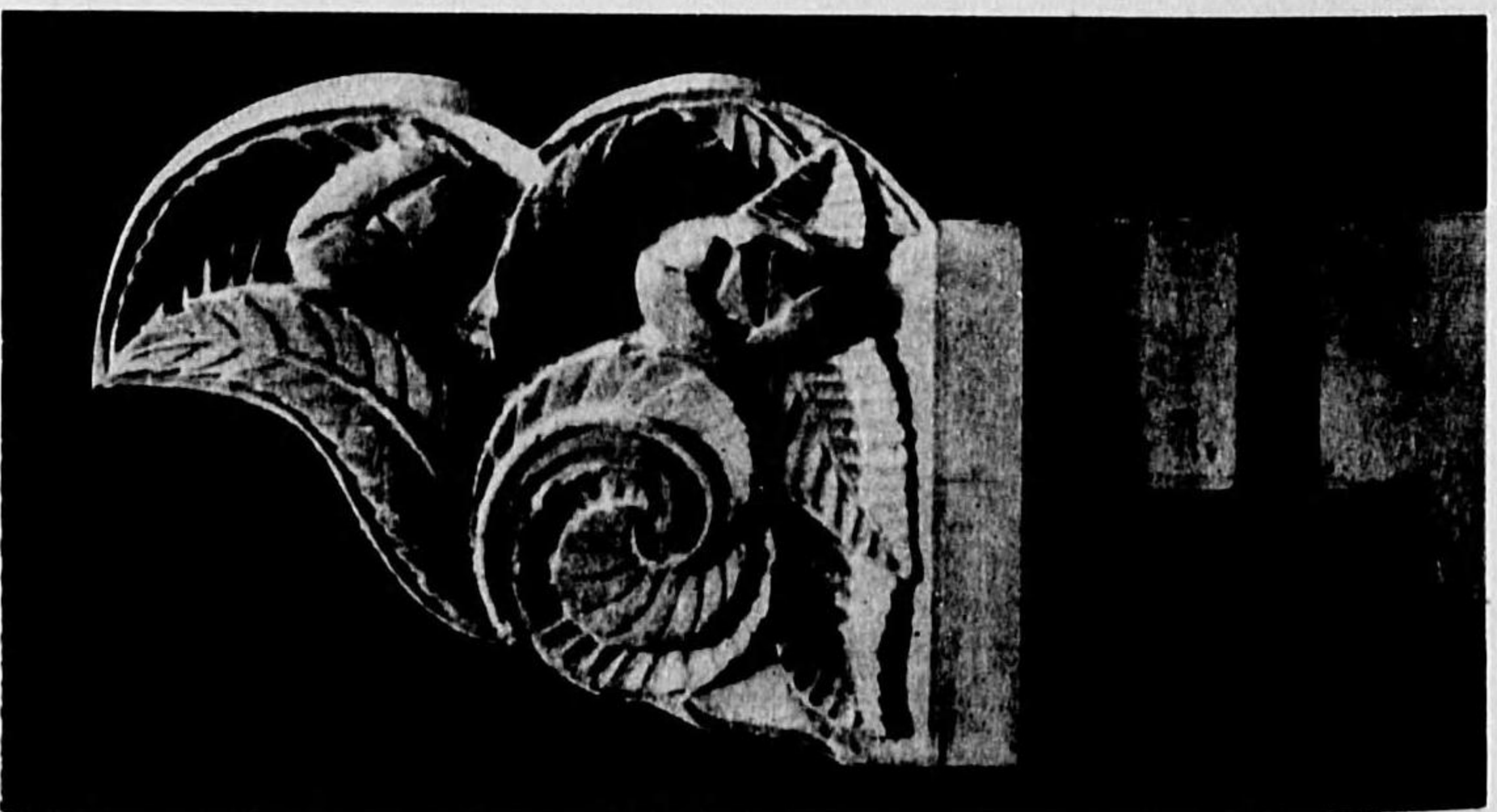
此所に掲げた三圖をみるに、一六は楓である。楓ではないかも知れない、といふのは其特徴の一たる蝶の形をした實がほつてないからだ、先づこの様な葉を多く重ねて刻してあるから、さう見てよからう。餘り例のない圖案らしい。一七と一八とはよく似てゐる、前者は左に蕾右に花、あとは葉を以て然るべく充填した「牡丹」らしく、後者は果實が割れかけたのが左に、大分に割れたのが右に、あとは前例の如く葉でうめてあるが、其葉縁が鋸齒状になつてゐると、果實の工合からみて「栗」らしい。牡丹に唐獅子を添えたのは鎌倉にもあり、臺股に入れたのは室町にある。併し木鼻は室町かららしく、又栗は少なくとも桃山位からと考へてゐたのに、先年書寫山圓教寺の金剛堂臺股内彫刻にあつたのを見た。特例だらうと考へたのは、寡聞の結果であり、當代に稀れといふ程でもなささうである。



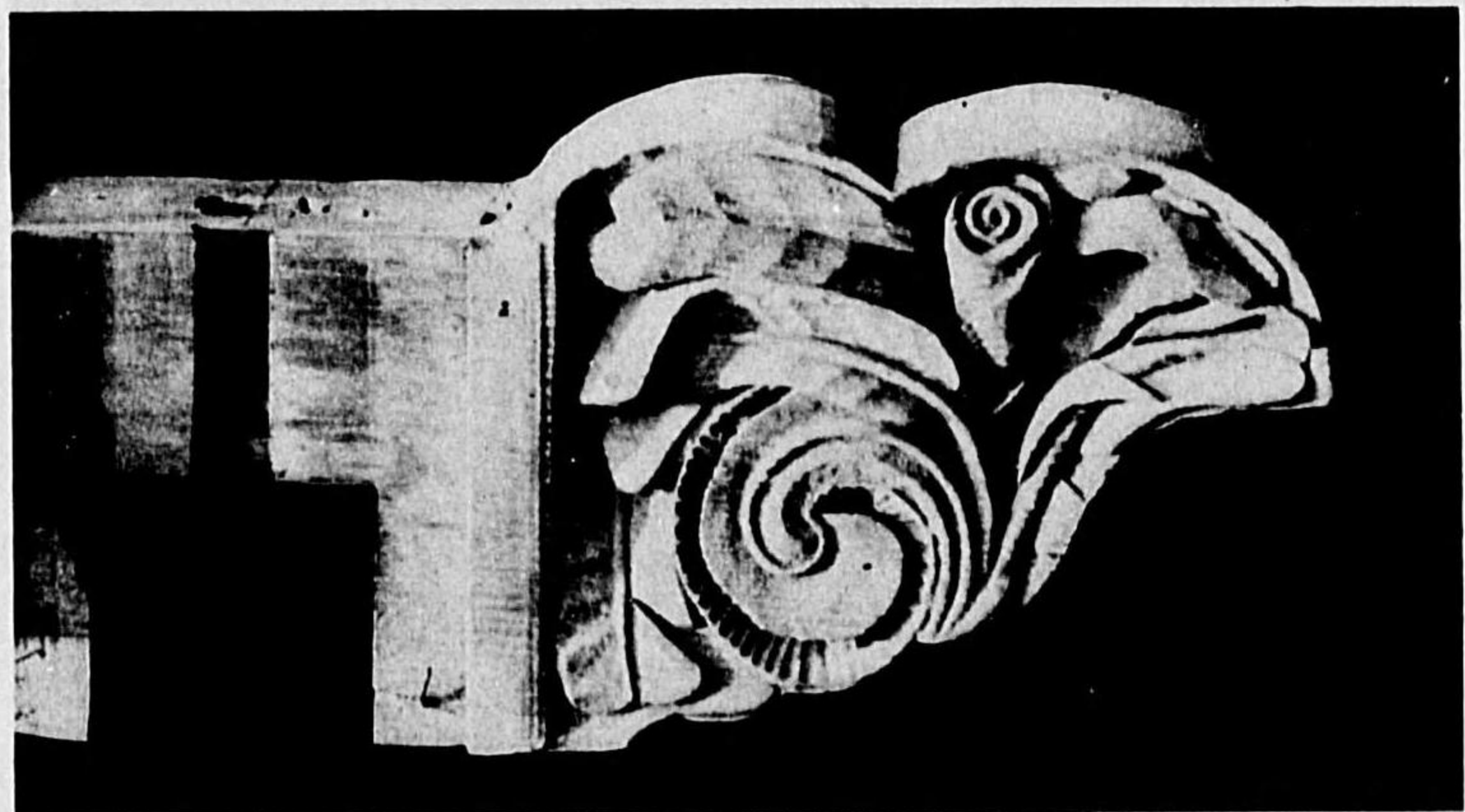
一六



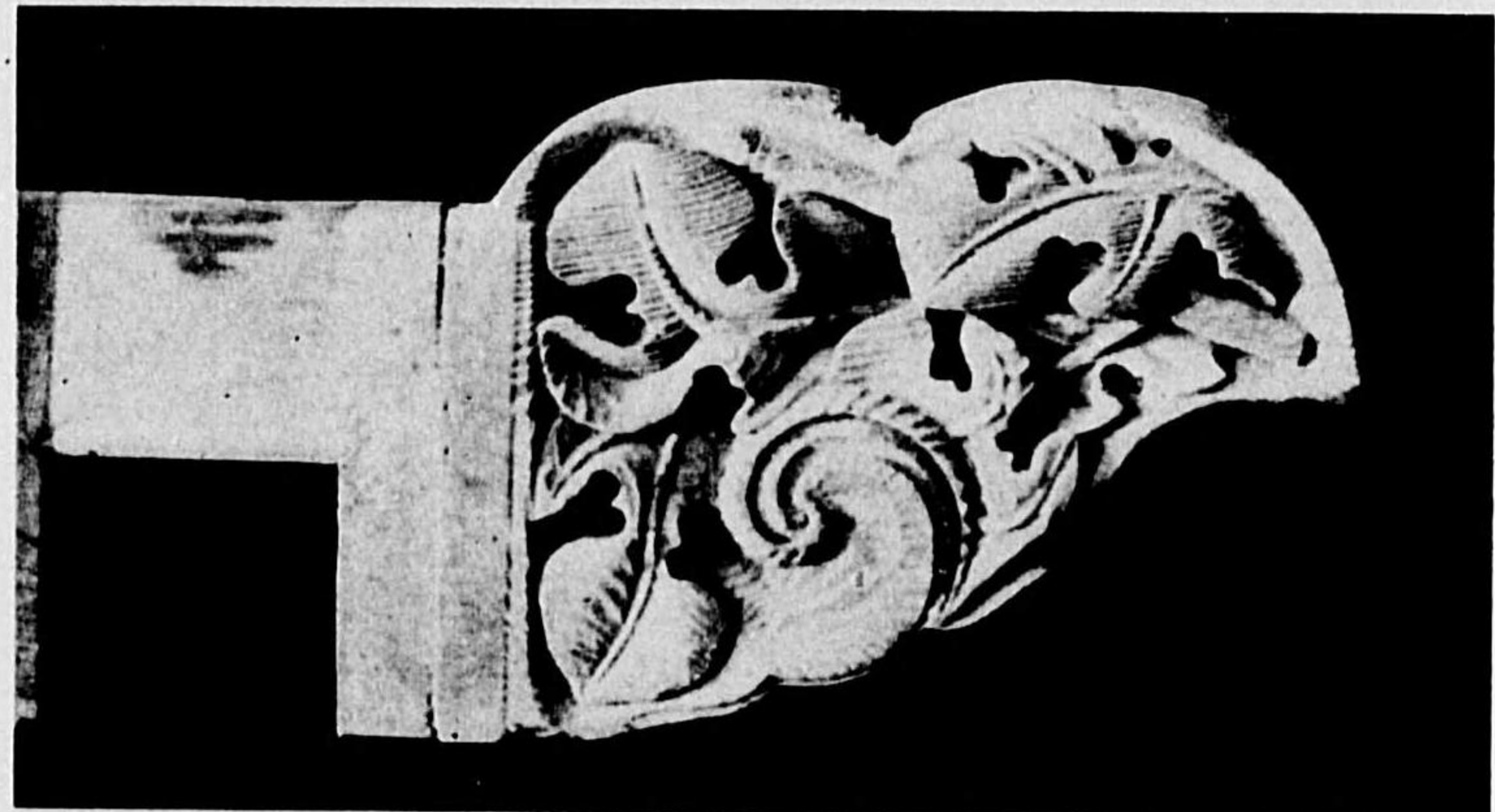
一七



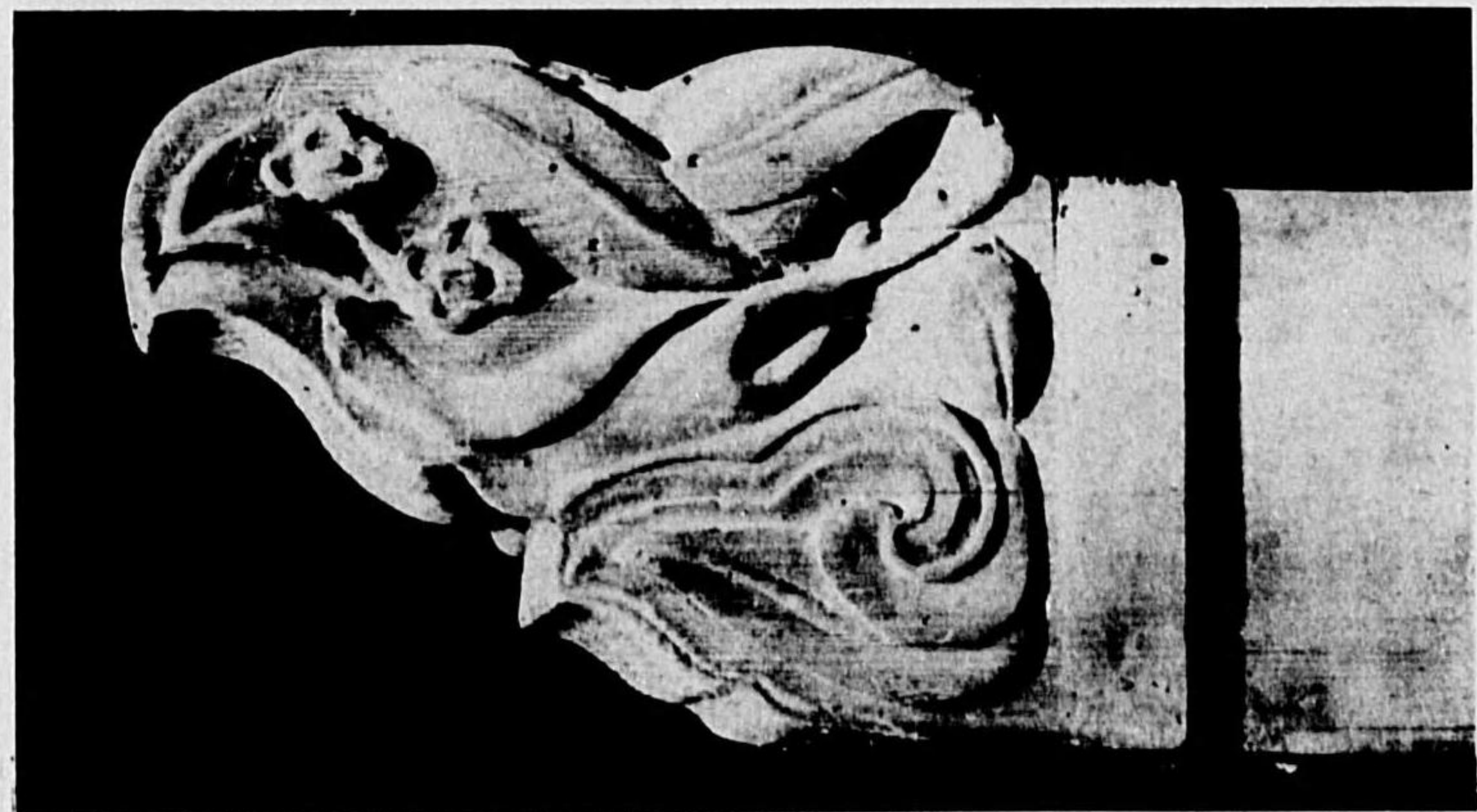
一八



一九



二〇



二一

一九 北室院本堂西側南端木鼻北側

二〇 同 北端木鼻北側

二一 同 向拜東端木鼻北側

(昭和十五年十一月一日)

(昭和十五年十一月一日)

(昭和十五年十一月一日)

北室院本堂の木鼻は四隅に二個づつ、合計八個のうち、模様は異なったのを全部寫真にとつて置かうと考へたが、微力さうばかり行きかねたし、似たものも左程面白くない平凡なものもあつたし、裏の方は大に略式を用ひてあつたりしたので、ここに五個を掲げる事にしたのであるが、そのうち表裏ともだしたのは一つで、即ち一六の裏が一九である。これは何をほつたものか、葉の出てる所は適當だが、上に向いてゐる渦巻はまさか巻物ではあるまいから、新芽を現したのかも知れない。これは表の楓樹の方が面白い。二〇の表はただ葉で埋めてあるので、大して珍らしくもないが、裏は蒲英公の様で變つてゐる。この様なのは他でつい見ないが花のないのが淋しい。これで花一輪と輪郭が球形をなした種子でもほつてあつたら随分面白からうと思ふ。これが裏即ち北側で、態態見に行く人の少ないのは尙更おしいが、これをつくつた人は、何も人に見せるためではないのだから、そんな事は問題にしてはゐないかも知れない。

此本堂は方三間で正面に一間の向拜がつき、その部分は極も木舞も皆吹寄せになつて居り、柱間には虹梁を架渡し、其鼻はやはり両面異なつた彫刻をしてある。其表即南側は次に圖示しておいたし、其解説に譲るとして、裏は東が桃で西が枇杷である。二一に出したのは東方の「桃」であるが、下の方は大に便化してある。桃の幹は中頃の引込んだ茨のところから斜右に出で、左方に二つの満開の花をつけ、右方に一つは上、一つは下を向いた果實がならしてある。花はないが大きな實が三つなつてゐるのは、同じ室町時代の建築なる山口市の八坂神社蔭股にもある、だから室町には用ひられたが、ここは花を二つつけてゐて、而も其花が二つ共四瓣なのが少しばかり氣になる。尙ほ序ながら京都祇園の八坂神社樓門の留蓋には實が一つなつてゐる桃の樹をつけてある。これは恐らく留蓋に桃を用ひた最初のものであらう。

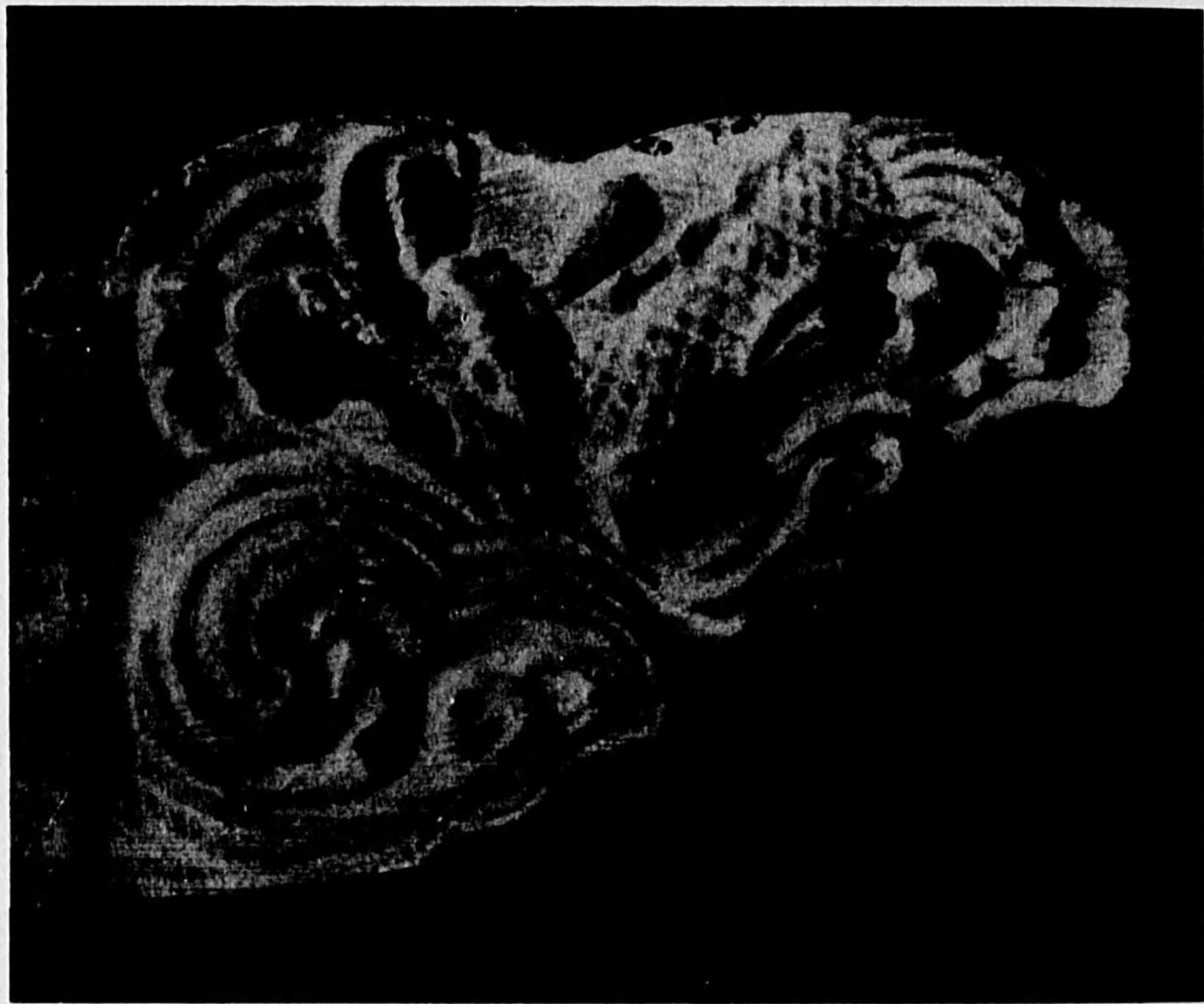
二二、北室院本堂向拜東方木鼻南側
二三、同 西方木鼻南側

(昭和十五年十一月一日)
(昭和十五年十一月一日)

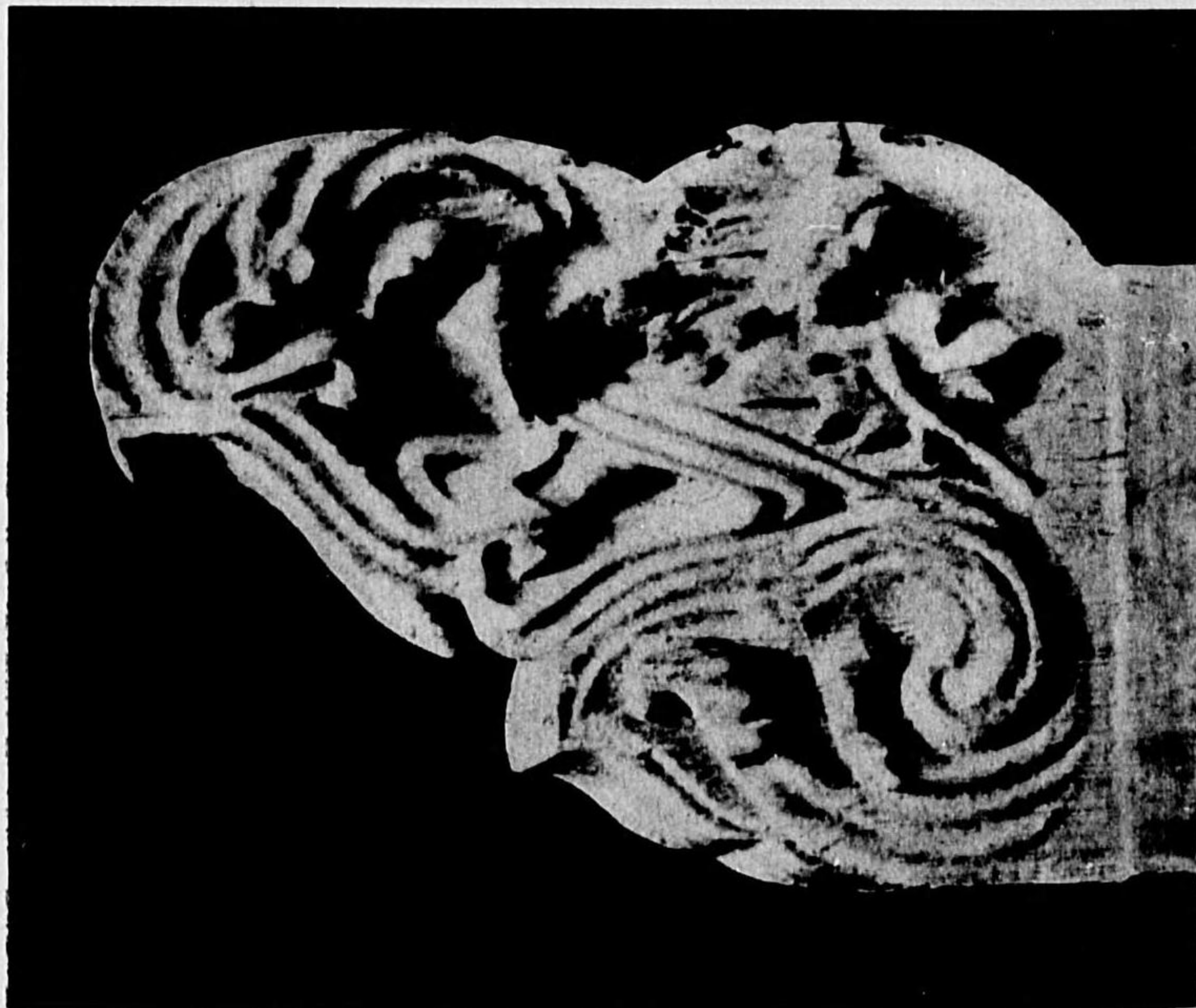
向拜木鼻は正面から見た時、向つて右即ち東方の分二二が「波に鯨」で、其裏が前圖に出した「桃」、向つて左なる西方のは二
三の「波に龍」で裏は「枇杷」である。表の方は兩方共水に縁のある理想動物をほつてある。木鼻其物は全然日本化してひ、其
もとは天竺様か唐様かこうなると判然しない。

「鯨」は波間に跳躍しつつ突進してゐる有様を彫刻したのである。鯨が初めて現はれたのは鎌倉末の様であり、私の見てゐる
實例は、法道寺(大阪府泉北郡上神谷村)多寶塔肘木側面の彫刻、多治速比賣神社(大阪府泉北郡久世村)本殿裏股内の彫刻、松
見寺三重塔初重裏股(近江安土)、大法寺(長野縣小縣郡浦里村)觀音堂内廚子の屋根大棟兩端の木造鯨、定光寺(愛知縣東春日
井郡品野町沓掛)本堂須彌壇勾欄架木の端、土佐神社本殿向拜柱貫通彫刻(土佐一の宮)のもの等である。そこで例ひこれが木
鼻の内の一部におさまつてゐる極めて微細たる小形のもので、而も薄肉彫刻に過ぎないとしても、更に一例を加へ得たのは喜
ばしい。此は或は鯨ではなくて海の怪物たる摩竭魚かも知れない。若し摩竭なら其形莫大にして、兩眼は太陽の如く光り輝き
頭は峨峨たる大山の如く、船ぐるみ吞まれさうになり、夢中に觀音經を誦して辛ふじて助かつた商人の話が「大唐西域記」に出
てゐる位だから、廣大無邊な大海の光景を此小さい木鼻の中に盛つた伎倆は驚嘆に値するのである。

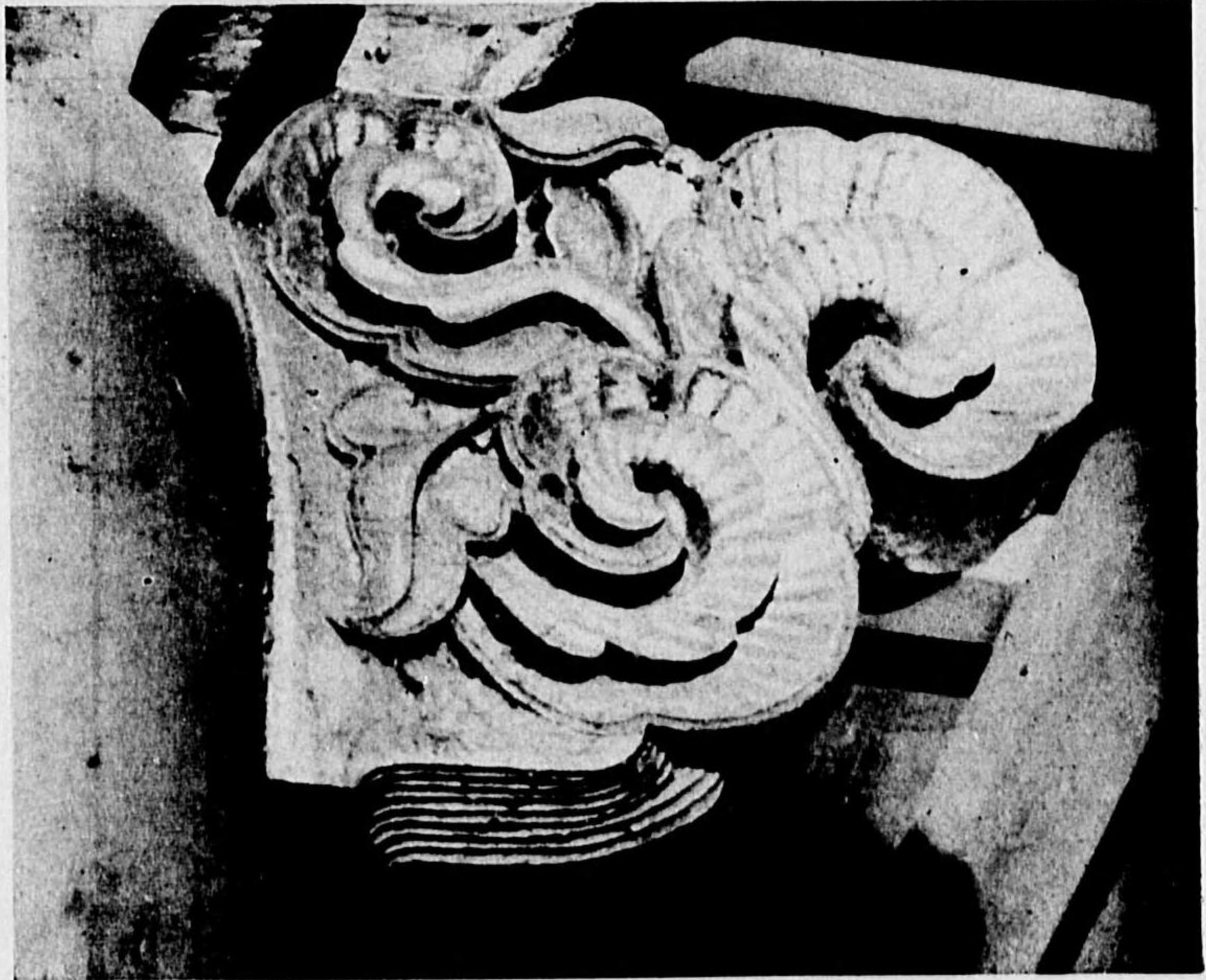
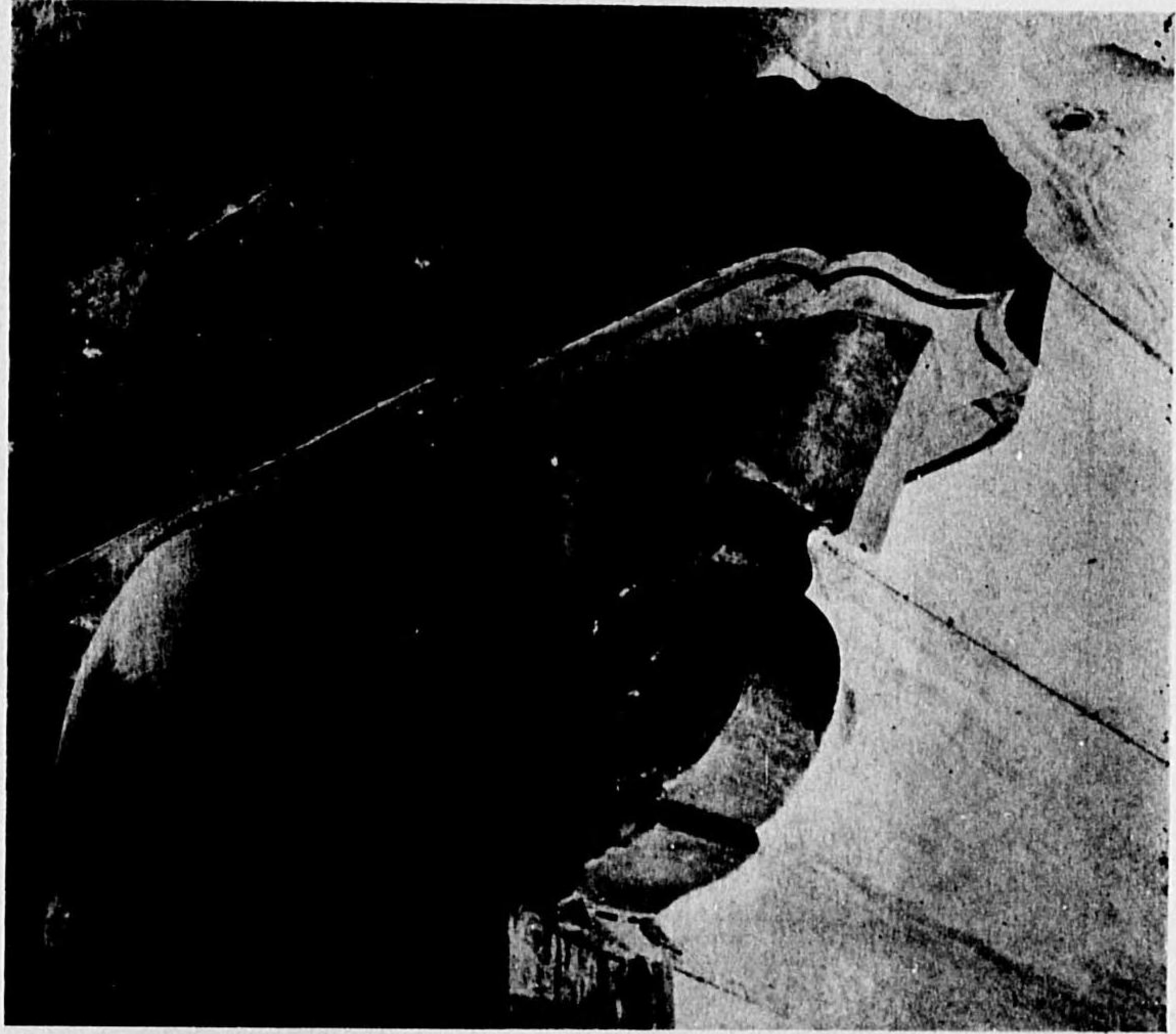
龍も亦同じく大海の波浪を蹴つて東方に向ひつつ前進を續けてゐる。龍が建築彫刻に現はれたのも室町らしく、時に裏股の
脚内におとなしくしてゐたり(奈良縣磯城郡安倍村阿倍、文殊院白山堂向拜)、或は桃山に極く近いが、木鼻兼肘木になつたり
(二七)してゐるが、前者は恰も鯢魚科の代表たるハンザキが小さい容器の内で蹲踞してゐる如く、後者は金壺眼に不氣味な大
きな口をあいてゐるから、まるで地質時代の動物の様で、浮世離れがしてゐるのに、これは如何にも龍らしい龍で、できも甚
だよろしい。上下圖共浪の彫り方、浪頭の形に注意せよ。桃山・江戸時代の浪頭の元は室町といふ事が判るであらう。



二三



二三



二四、官幣中社嚴嶋神社五重塔初重内部木鼻

(昭和六年三月三十一日)

二五、知恩院勢至壇須彌壇來迎柱木鼻

(昭和十五年十月十二日)

二四は鎌倉直系の唐様室町木鼻の一である。木鼻ばかりではなく、柱も臺輪も總てさうである。時代が少し下つてゐるだけに、多少技巧を弄した様な、忌味なところもなくはないが、既記の様にこれを以て鎌倉の唐様木鼻を想像し得る位、よく其原型を傳へてゐるのである。其側面の渦文、木口の著しい「鎬」が其特徴で、これには殆んどきまつて圖に見る様な線形を先端に有する臺輪が附屬してゐるのである。關東地方なら差向き鎌倉の圓覺寺舍利殿、中京なら永保寺、京都邊なら普濟寺(船井郡)佛殿・梅田釋迦堂(和歌山縣海草郡)、中國邊なら鞆の安國寺釋迦堂、關門附近なら巧山寺佛殿、九州なら大分縣の神角寺本堂へ行つて見れば、そこに多くの實例を見出すであらう。

二五は唐様の若葉木鼻である。輪郭は前者とよく似てゐる、といつたところで一足飛びにこうはならないし、又なり得もしない、順序を経なければならぬが、結局こうなる。つまり室町時代には唐様直系の原始的のもあつたと同時に、こゝろいふ風に全然變化發達したのもあつたのである。先づ木口に著しい鎬のあることは前者と同じだが、これでは鎬の一部分に其方向に平行せる小溝を並べてほつてゐる。此は時にこれと直角の方向につくつたのもある。其兩側面は全然葉化し、普通の葉もあるが、大きな卷いた葉は葉縁から中肋に向つて圓鑿でついで飾つてある。此方法は此時代に賞用されたので、其一例は油日神社樓門の臺股に見得られる(臺股五八)。この若葉を雲にした例もあるが、何れも唐様式の輪郭をもつたもののみである。

二六、遠照寺釋迦堂内部木鼻

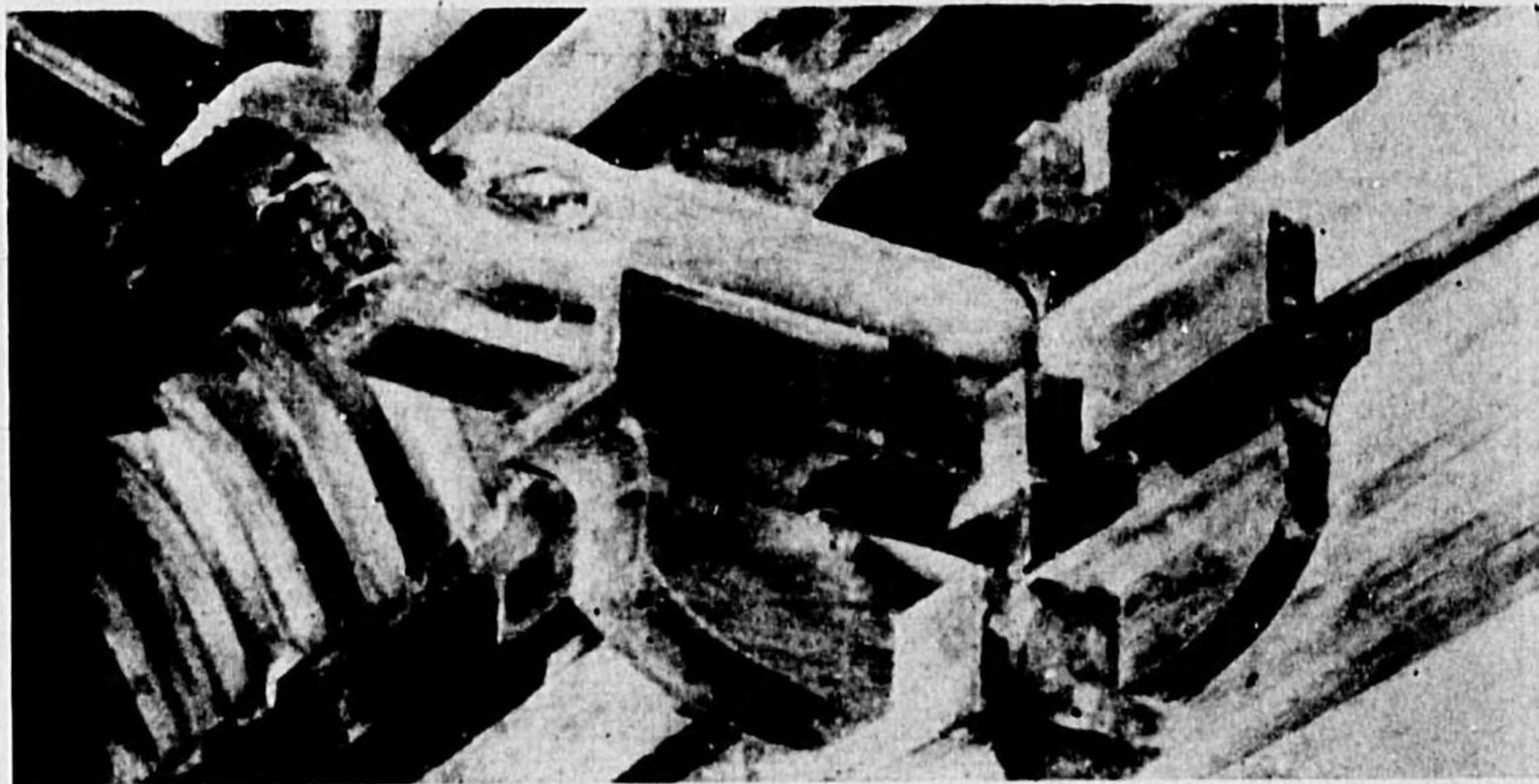
(昭和三年八月十七日)

二七、土佐神社本殿向拜木鼻

(明治四十三年三月二十八日)

遠照寺は長野縣上伊那郡伊那町を距る約三里半、同郡三義村(ミヨシムラ)字山室(ヤマプロ)にある。此寺に室町時代の方三間單層入母屋造の小堂があるが、其細部が中面白く、殊に内部の木鼻に鳥の形をしたのが目立ってゐる(二六)。これは或は鳥ではなく、よく見ると上顎らしいものに舌の様なものがついてゐるし、上顎が嘴の様子のびてゐるのも、實はさうではなく上顎の變形かも知れないから、これはやはり便化した象位かも知れない。併しどうも鳥の頭の様であり、若しさうとすれば随分珍しい一標本となすに足りよう。だから私はここに室町時代鳥頭木鼻の、今の所唯一の例として掲げておくのである。

土佐神社は國幣中社で、土佐一の宮。元龜元年長曾我部元親の再建といふ事である。だから桃山時代とは紙一重、一等席と二等席の間の手摺の邊と心得ればよろしからう。其本殿の正面に三間の向拜があり、其虹梁の端が向拜柱をつきぬけて出てゐると見せてゐる部分と、其上の普通なら天竺様式の料、及び其上の肘木、一切合切一つにして「雲と龍」とにし、其下の持送りを波形にしてゐる所に獨創的の意匠が働いてゐる。龍は頗る現代離れのした奇怪怪奇な面貌で、地質時代の大爬蟲類の様で面白い。

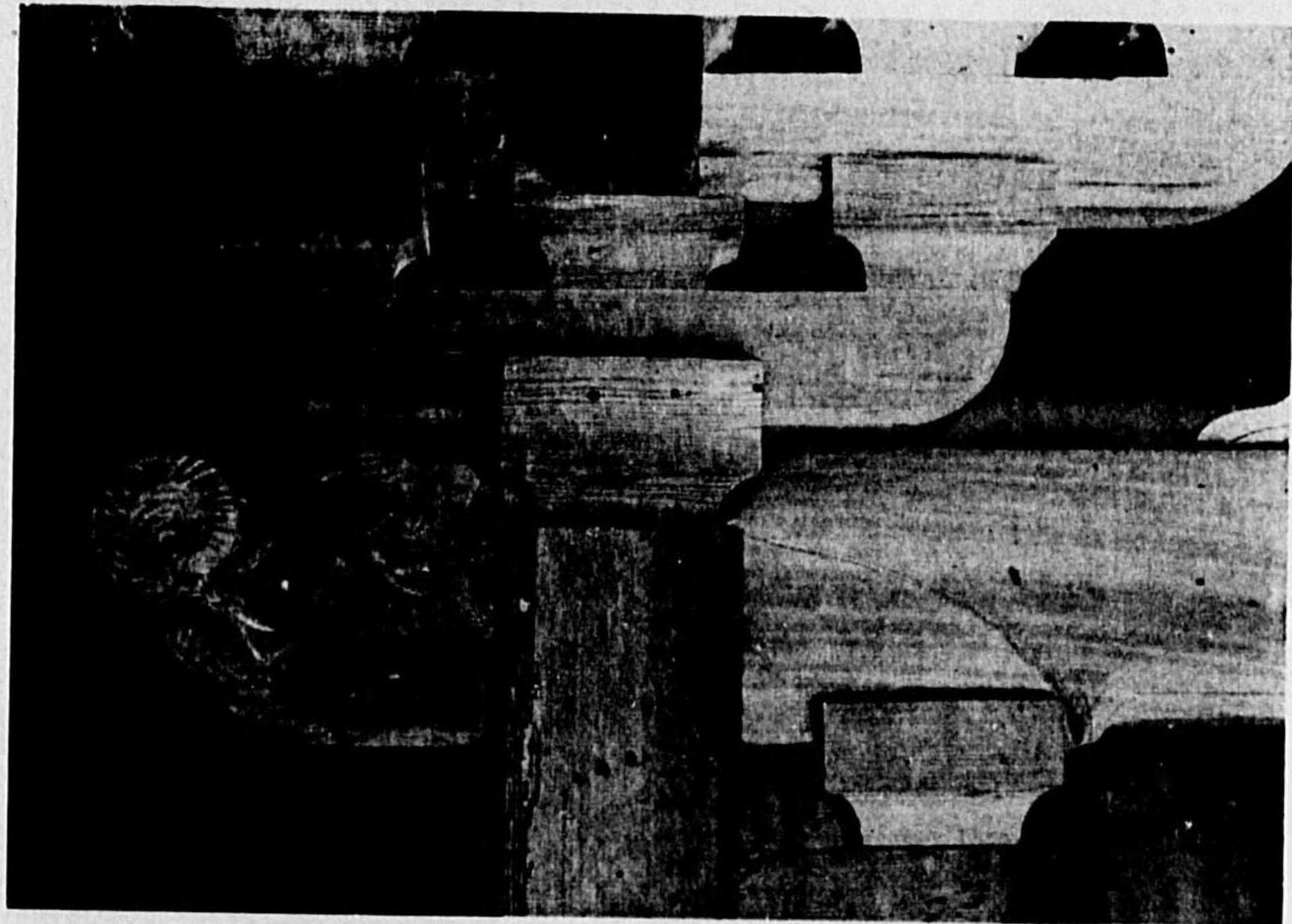


二六



二七

二八



二九



三〇



三一



二八、大山田神社相殿應神天皇社殿(長野縣下伊那郡下條村字陽阜)

二九、文殊院白山堂向拜木鼻(奈良縣磯城郡安倍村阿倍、文殊院境内)

三〇、多治速比賣神社向拜木鼻(大阪府泉北郡久世村和田)

三一、明王院本堂木鼻(福山市)

(家藏寫真複製)

(飛鳥園)

(昭和十二年五月七日)

(昭和九年三月二十八日)

二八は社殿も少し變つて居り、其向拜中央の臺股は既に圖示した通り、橋三つと向ひ合ひの鳩二羽で、この鳩が後になると一は退化萎縮し、一は進歩發達して大小の二羽となり、八の字を形つくる如くなつた元と考へられるもので、其虹梁の鼻は、ここに掲げた如く鼻端上方に反轉して渦文をなし、入念のサラーム型になり、口は猪の目形、頭髮迄整理して美しく梳つてゐるところの、餘り類のない木鼻である。柱上に三料、其上に五料を並べ、合せて八料も亦珍意匠である。

二九は向拜柱の兩方に木鼻をもつてゐる。普通向拜柱の間は頭貫か虹梁であるべきが、ここではさうなつてゐないで象の様なものに向ひ合せ、外方に向つた分はありふれた形のものを用ひてゐる。象形の方は牙も眼もなく、唯其輪郭が似てゐるのみであるのは、何れも當初彩色をしたので、眼等は描いたのであらう。外方木鼻の下端の中央に複雑な面の交會で斜十字ができてゐるが、この邊だのまた先端の尖つてゐるところを掣(シガミ)といふ。

三〇は多治速比賣(タヂハヤヒメ)神社向拜の木鼻である。此神社は室町時代の建築で細部に面白いところがあり、相當なもの考へてゐるが、惜しい事に彩色でだいなしにしてゐる。夫さへ剥せば立派なもの。不幸未だ當局の認むる所とならない。木鼻は圖の如くで、象と龍と犀と合せた様なもの。鶴もキミラ(Chimera)も三舎を避けさうな顔をしてゐる。

三一は他のに比べてみると至極平凡だが、其上の臺輪が秋田の古四王神社本殿の夫の様に、途中が弧狀に刻つてあるため、全體を一所に見る時は、他のと大分趣を異にしてゐる。其上の方にも小形のが出てゐるが、大小の差だけで同じ様な形をしてゐる。此堂の細部には變つた面白いところがあるのに、どうした次第か木鼻は左程でもない。

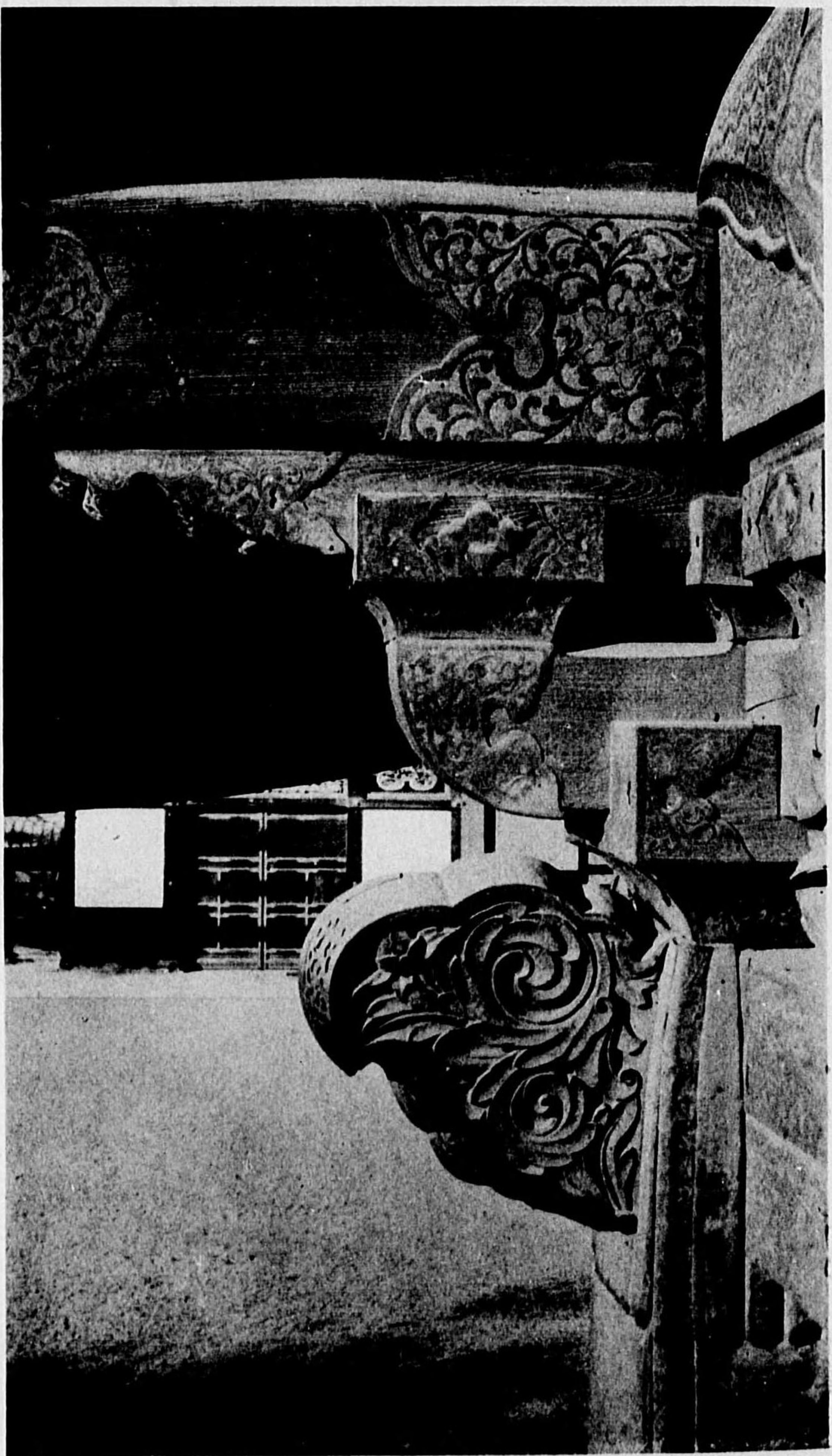
三三、恩賜元離宮二條城二の丸御殿唐門控柱頭貫木鼻

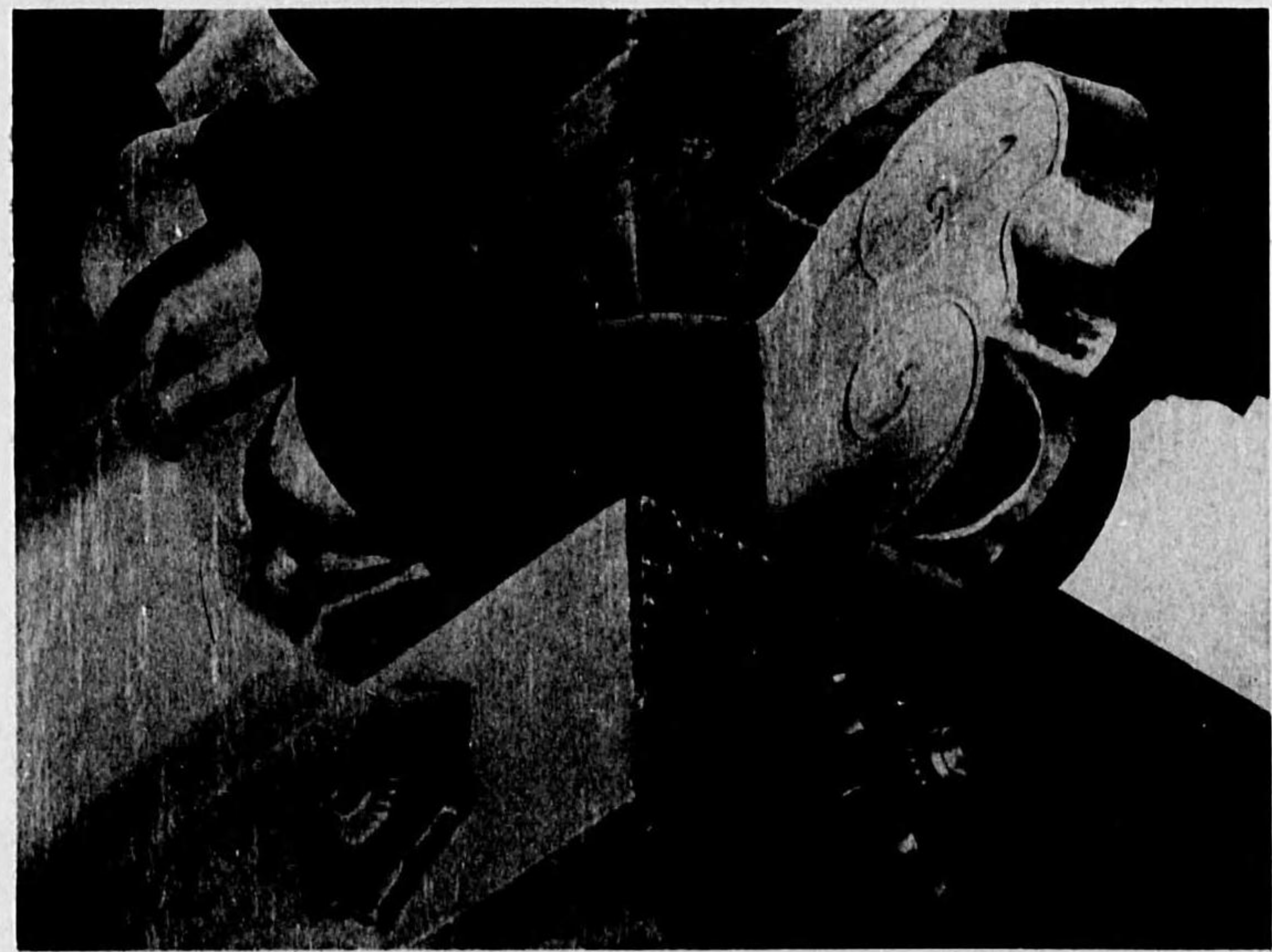
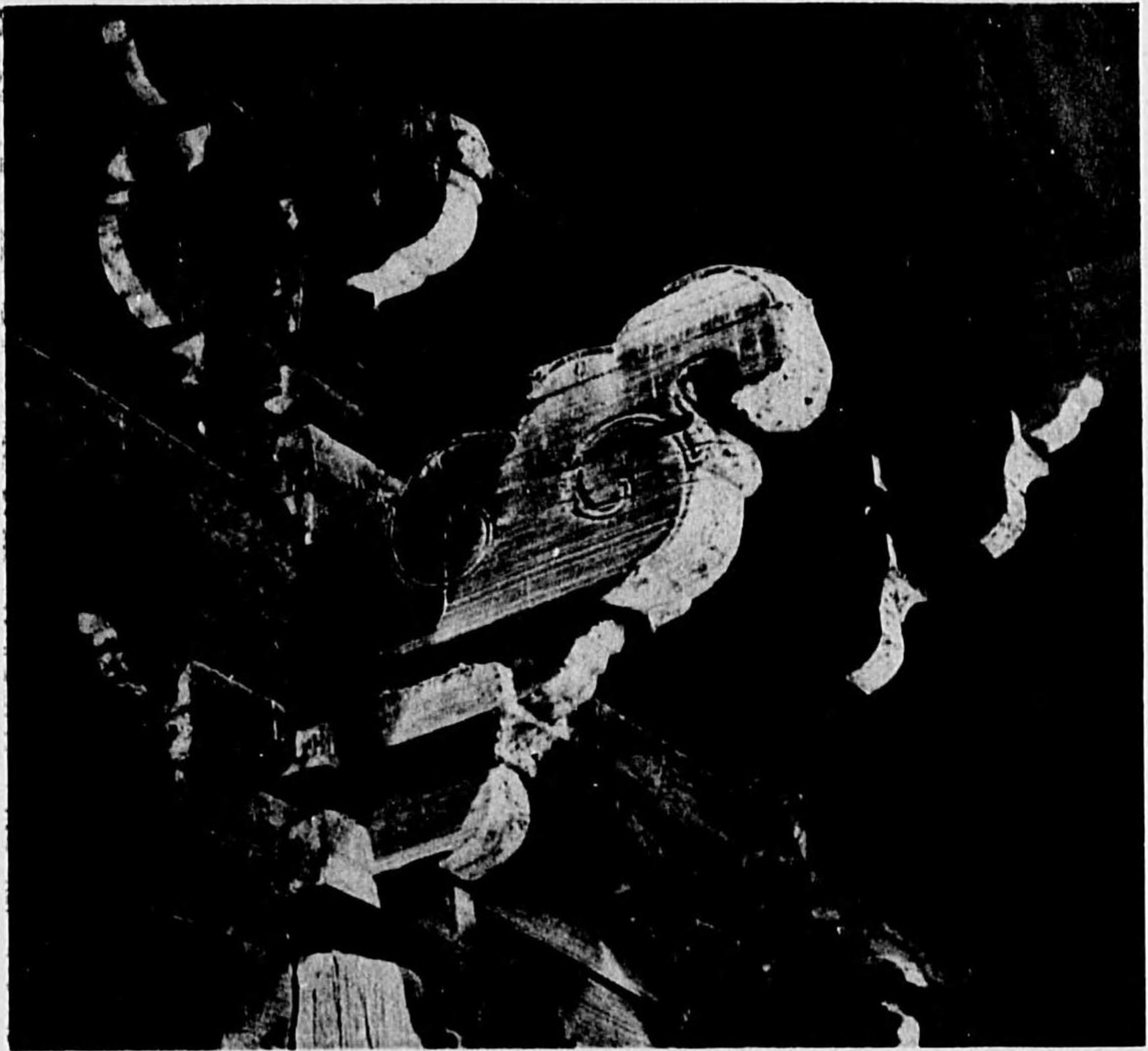
桃山・江戸時代

(昭和十六年十一月十四日)

此門に就いては既に東四三の解説に記したから再び繰返さない。木鼻のうちこれは控柱上の一であるが、鼻其物は輪郭も簡單であり、ただ覆輪(輪郭のこと)をとって、其覆輪から木口へかけ、精巧な透彫金銅の飾金具で覆ひ、美しく裝飾したのである。此手法は當代の立派な建築に用ひられたもので、東四三の圖にも化粧棟木下の實肘木の木口、及び大瓶束の肩の部分の覆ひ、此を以て葦束とも見せてゐるあの飾金具と同じ性質のものである。

木鼻の側面には便化した牡丹の葉と蕾とを刻んである。深さを一定し薄肉に巧妙なる刀法を用ひ、横の方から光線が當ると、この圖の如く明瞭に見え、十分の効果あらしめてゐる。これは洵にうまくできてゐる様だが、實はこの唐様の骨線は、次頁に示してある二種の木鼻に刻んである渦線に多少の修飾を加へたに過ぎないのである。而して夫等は鎌倉時代から漸次少しづつ變化をしてきて、初めに下方だけの渦文は上方にもでき、複雑化してこの様なものに迄發達を遂げたのである。此牡丹の一層進展したものは、即輪郭を驅逐した透彫で、四四・四五等に掲げた様なものである。尙ほ軒桁下にも飾金具で覆ふた實肘木の木鼻がある外、料・肘木其他隨所——今は綠青が出てゐる綠色だが——金銅の美しい飾金具で覆ふてある。





三三、教王護國寺南大門東妻部分
三四、神護寺大師堂内外境木鼻

教王護國寺は普通東寺といふ。此南大門は蓮華王院の西大門を移建したもので、全部が桃山時代である。三三は其東妻の一部分で、中央に突きだしてゐる大木鼻を初め、數種あるのを見せるための寫眞。今主として大木鼻を調べてみると、どうも形は大して感心ができない。遠慮なくいふと、もう少しいい形にできさうなもので、全體としても縮りがなく、象の鼻を短くした様なものが上から下を向いて居る。併しこの拙い形も實は桃山の産物ではなくて、既に先輩は室町時代に居る。夫は官幣中社嚴島神社多寶塔初重の木鼻で、よく似てゐるが、ただ側面の渦文が、この様に二つでなく、下だけであり、上の方には猪の目がほつてある。此は大きいから目立つので、室町の系統である。此大木鼻側面の渦文に就いては次圖を参照せよ。

神護寺大師堂は屏の解説に記した様に桃山時代の建築であるが(屏二〇)、内部内外陣境のところには三四の様な木鼻がある。内部だから上圖程あれてゐない、だから其形もはつきりと判る。これは鼻が下がつてゐないだけに、上圖より稍や形がよろしいが、渦文は全く同性質で、二つの渦文は何れも同方向から同様に刻まれてゐる。どうも見た所満足しかねるが、こんなのが可なり流行したのである。上下圖共木口の鑄の強いところ、殊に下圖鑿の取扱に注意せよ。かかる手法亦前代からあつたのである。

(昭和八年五月七日)
(昭和九年七月十七日)

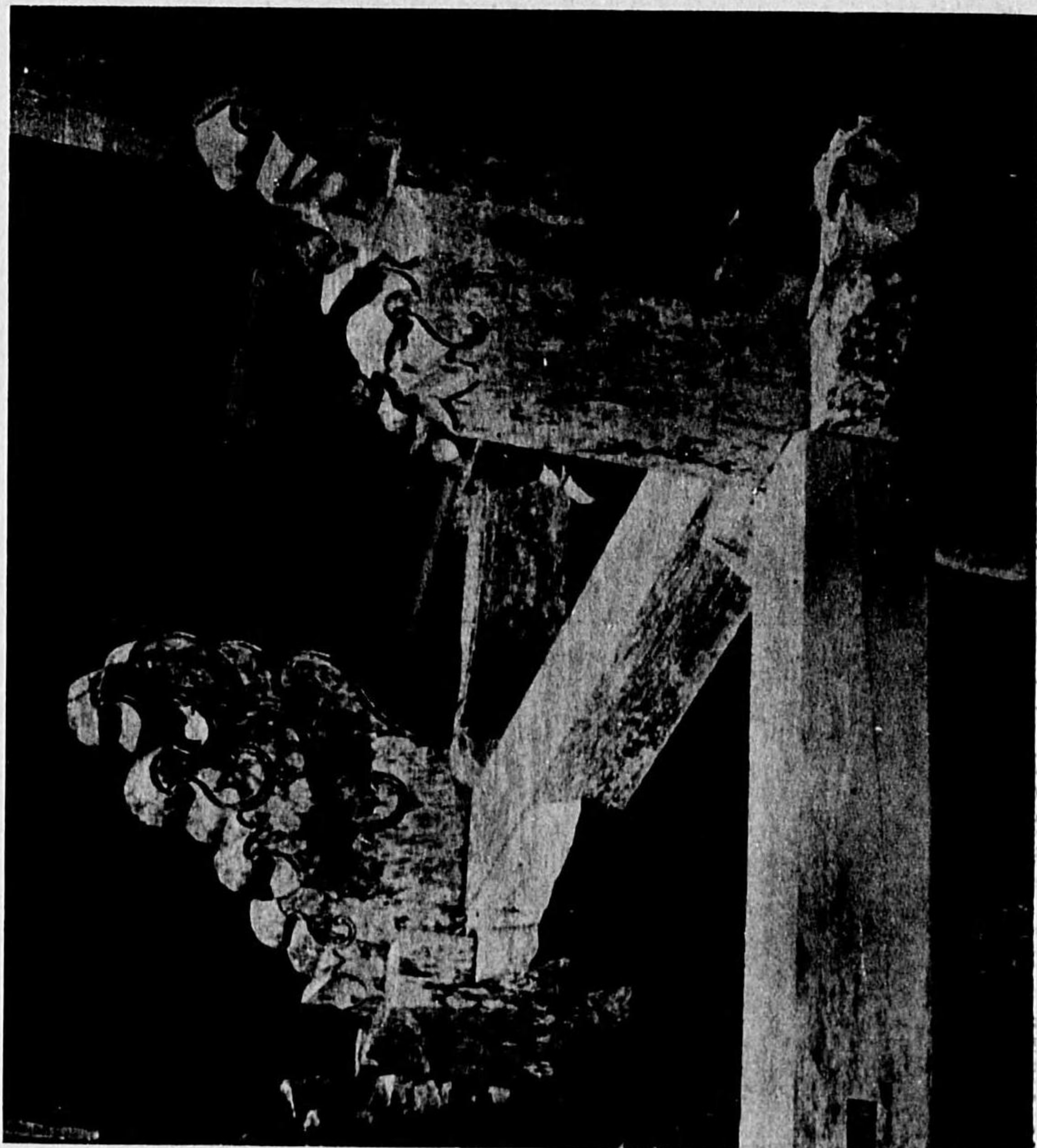
三五、瑞巖寺中門本柱上木鼻
三六、同 廻廊椽下持送

(昭和十一年八月一日)
(昭和九年七月三十日)

有名な松島の瑞巖寺の門で、本堂の正面にある。立關前にある御成門と共に慶長十四年成る。四脚門で多くの奇抜な木鼻がついてゐる。三五は本柱上の大木鼻を主とし、其他の小さいものも共に見せたのであるが、桃山の特徴たる「」型の入込を有するのに變りはないけれども、全體の輪郭が非常に珍らしく、恐らく類例はさうあるまい。三六は椽下の持送だけれども、全く木鼻型で上圖とよく似てゐる輪郭をもつてゐる。斯様に輪郭は新機軸を出してはゐるが、ただそれだけの事で、此様な形は美術的とは考へられない。折角この様な新意匠をするなら、もう少し何とかならなかつたらうか。

其側面に刻してある渦文は、上圖に四つ下圖に三つあるが、何れも同方向に同じ様な形をしてゐる。そこにはただ幾分の大小があるだけで、他に何の變化もない。ただ僅に下の分に桃山時代に虹梁の袖切のあたりに賞用された若葉がつけてあるのが變つてゐる。忌憚なくいへば桃山といふだけで、私は餘り面白いと思はない。此寺の廻廊には何れも此種の木鼻があるほか、虹梁の袖切・繪様肘木、立關の夫等にも不思議な形が見出される。

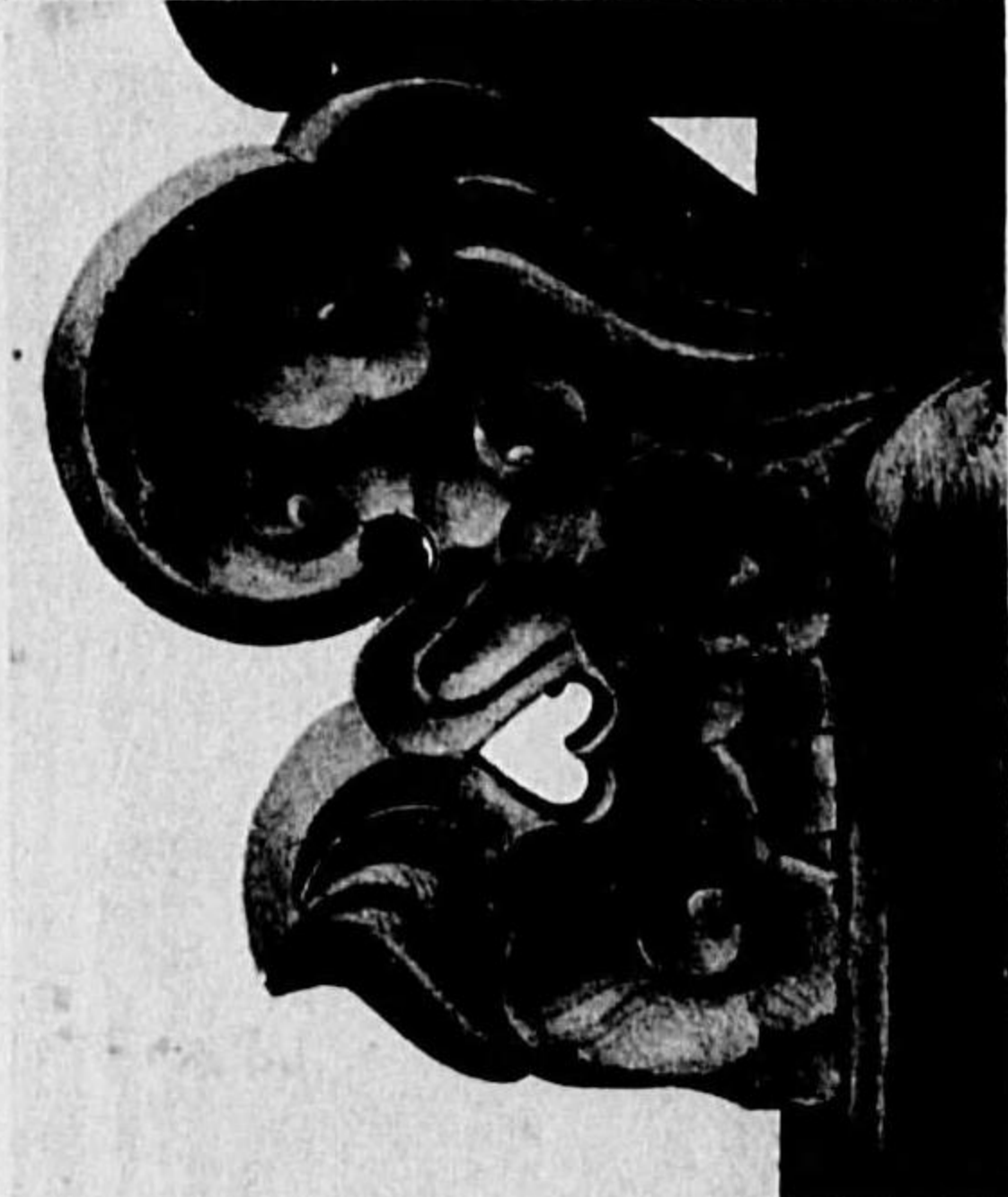
瑞巖寺は伊達政宗が紀伊の名工刑部左衛門國次に命じ、慶長十年着手同十四年落成したのでさうだから、いづれこの様な形は彼又は彼の信賴する部下の頭から出たのであらう。



三五



三六



三七、大徳寺唐門正面西側木鼻

(昭和七年五月三十日)

四〇、妙法院庫裏玄關木鼻 共一

(家藏寫真複寫)

三八、高野山奥院佐竹家廟木鼻 共一

(昭和二年四月二十九日)

四一、同

共二

(家藏寫真複寫)

三九、同

共二 (昭和二年四月二十九日)

大徳寺は有名な大燈國師の開基で、嘗ては五山の上位であつたし、恐らく知らない人はあるまい。その多くの建築のうちの方丈の前にある唐門の木鼻は「魚」なので名高い。此門は秀吉造營の聚樂第の遺構と傳へ、隨所に豪華な彫刻を充填してゐる。今ここに圖示したのは正面控柱上頭貫の木鼻で、三七に見る通り「波に魚」である。頭貫には全體に波をほり、粽付の圓い控柱に挿込まれてゐる邊に魚の尾を薄肉に刻み、木鼻としては同じ魚の頭に波を少し添えてある。だから頭は謂はゆる丸彫で、尾の方は頭貫の側面に極めて薄肉彫にしてある。魚が泳いでゐるうち木に挟まれ、抜け出さうとして全力を込めて胸鰭を動かし、尾を左右に振つて跳いてゐる様に見えるが、夫は見方がよくないので、洵に奇想天外の意匠、平凡なる工人の企及し得ざる所。前方に出てゐるのは「菊」、前者に比べるとこの方は大して珍らしくはない。控柱上に料拱を用ひてない事も注意しておく必要がある。

高野山の奥の院への參詣道には、諸大名の墓標たる五輪塔が多いので有名である。ただ何れも形が拙く、ろくなものはないのは惜しい。それ等の五輪塔に混じり、所所に極彩色の小建築が建つてゐる。此等は小さいながらも廟所で、そのうちに更に墓標がある。此等の廟所のうち、古くて面白いのは佐竹家の夫で、慶長四年のものであるだけに、其木鼻も三八・三九の如く、一は「瓜」で他は「萬年青」がほつてある。瓜は既に北室院本堂正面裏東に見たし(東一・一七)、土佐神社墓股(土佐一の宮)や八阪神社墓股(山口市)の脚内彫刻にもあり、又萬年青は當代に可なり用ひられ、これまた醍醐寺三寶院泉殿墓股(墓股六七)に見たところである。

四〇・四一は京都市妙法院庫裏正面車寄の木鼻の二例で、一は「雲」他は「萬年青」。此庫裏は屋根の煙拔の鬼瓦に慶長九年の銘があり、秀吉千僧供養の時の遺物と傳へ、庫裏としても珍らしい建築である。其木鼻の輪郭といひ彫刻といひ、洵によく時代を現はしてゐる。

四二、大徳寺唐門背面木鼻
四三、清水寺境内春日神社木鼻

(昭和七年五月二日)

四四、西本願寺唐門木鼻 共一

(昭和六年六月二十一日)

四五、西本願寺唐門木鼻 共二

(昭和六年六月二十一日)

四六、金剛寺本堂向拜木鼻

(昭和十四年九月二十七日)

四七、同 御影堂向拜木鼻

(昭和十四年九月二十七日)

四二は同じ大徳寺の唐門ではあるが、其裏側即北面控柱上の木鼻で、北面は波に鯉や菊ではなく、且つ柱上に料栱もあり、正背面變つてはゐない。此は東北隅の柱上から北方へ出てゐるものを西方からみたところ。今から十年前は丁度修理中で足場が架けてあつたから、いくら素人でもこの位のことではできたのである。これは若葉であり、其輪郭は前頁の圖よりは遙に唐様の木鼻をつくりである。だからこれで渦文がほつてあり、上に臺輪があつたら、昔の純唐様木鼻との差はない位である。曩に天竺様は主として動物化し、唐様は植物又は天然物化すると書いたのは、この圖を見れば一層了解し得る筈である。

四三は珍しい事に「桐」鼻である。牡丹や菊は桃山・江戸にかけてはいくらかもあるが、桐で而も夫が中心から左右相稱にならず、うまく五七桐を繪畫化してゐる所は敬服すべきである。

四四・四五は牡丹の透彫。大變な手間で、よくもこの様な面倒な事をしたものだ。江戸時代廟建築の手扱とか木鼻とかは、夫が合理的であらうと理屈に合はなからうと、その様な事には一切關せず、ただ立派に美しくしなへすればいいと考へたやうである。木鼻は元來頭貫とか虹梁とかいふものも先が柱の外に出たところに彫刻をしたのだから、こんな牡丹の透彫では木鼻元來の意味は既に失はれて了ひ、謂はゆる掛鼻(カケハナ)となつてしまつたので、彫刻としては大發達をしたが、木鼻としては墮落したのである。

四六は「猪」らしく四七は「龍」。新しくなるとこんなのがよくある。未だ併し桃山には「象」が多くかかる所に用ひられ、獅子とか獏とかは江戸へ入つてから多くなつた様である。「龍」もさう多くはなく、殊に「猪」等はめつたにない。何れにしてもおとなしく頭だけ出してゐるのが普通で、一對の前肢をだしてゐる等は少ない方である(名古屋市性高院表門木鼻)。

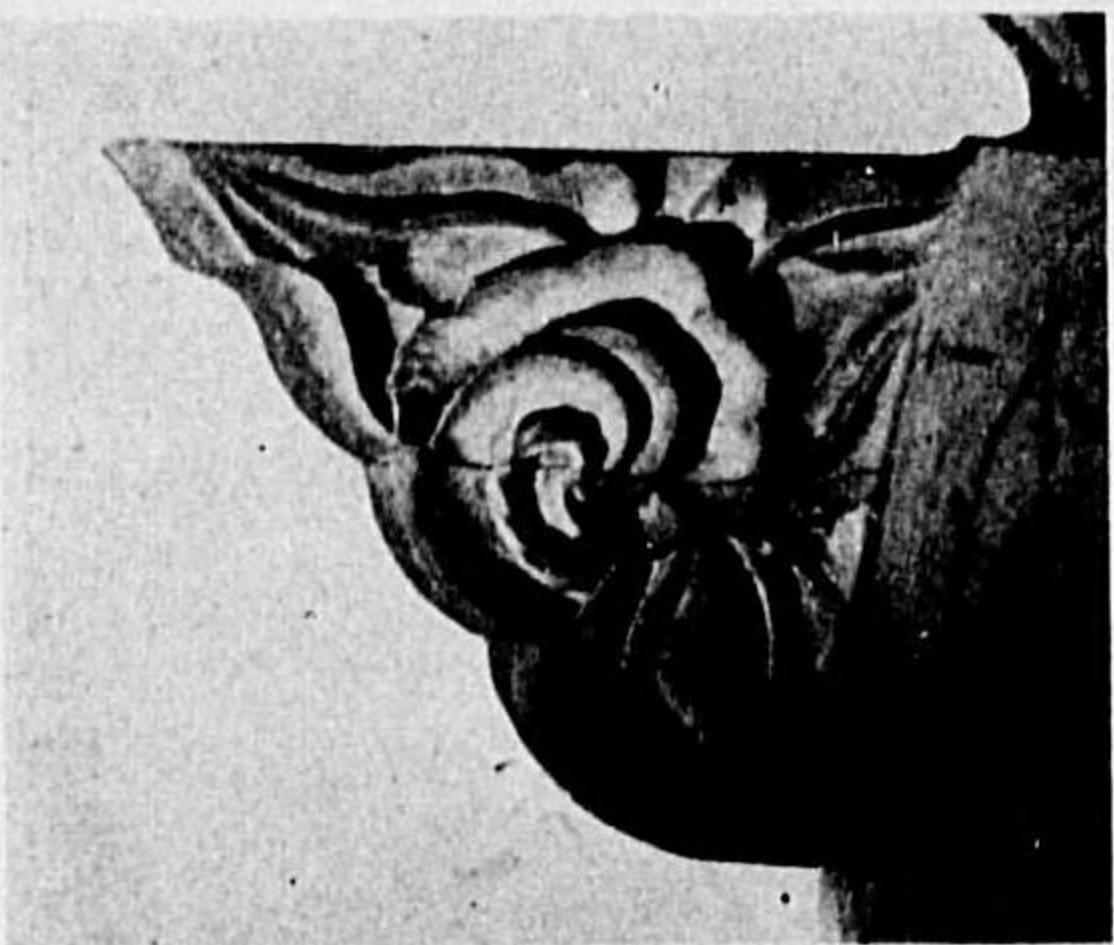
四三



四五



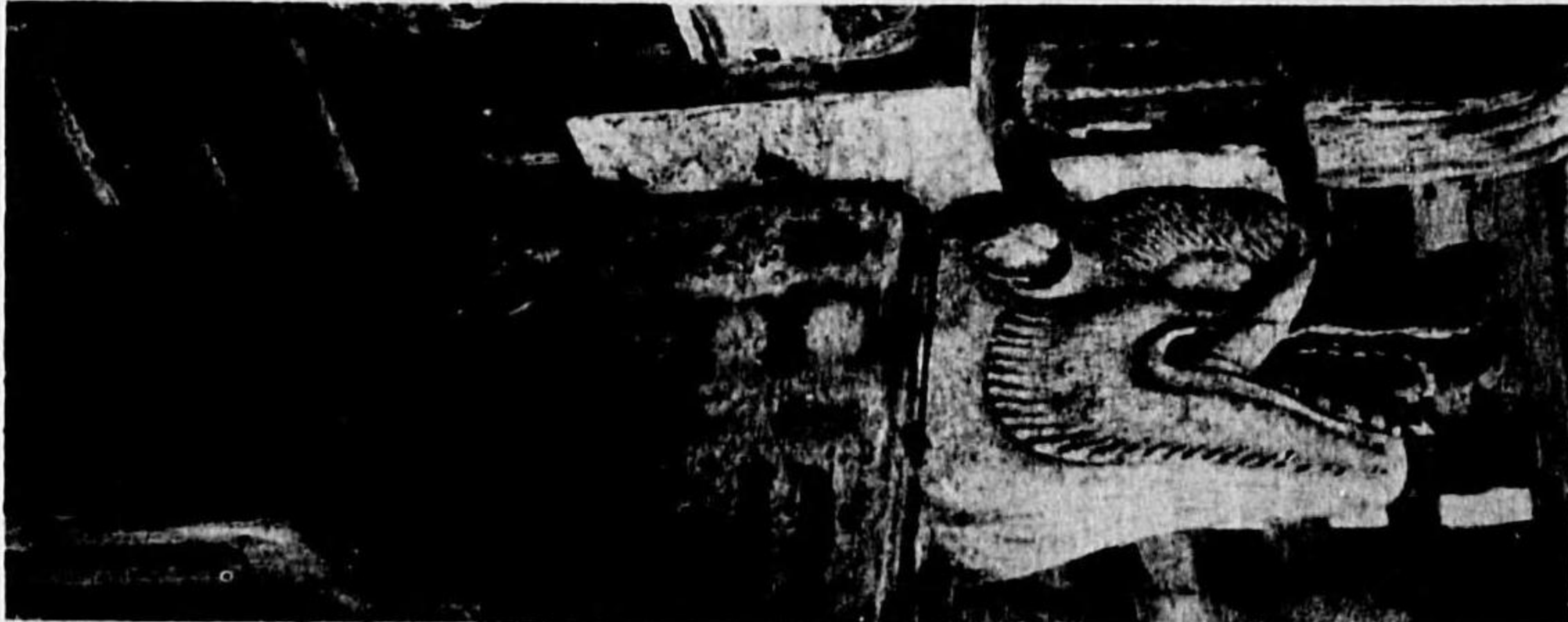
四二



四四

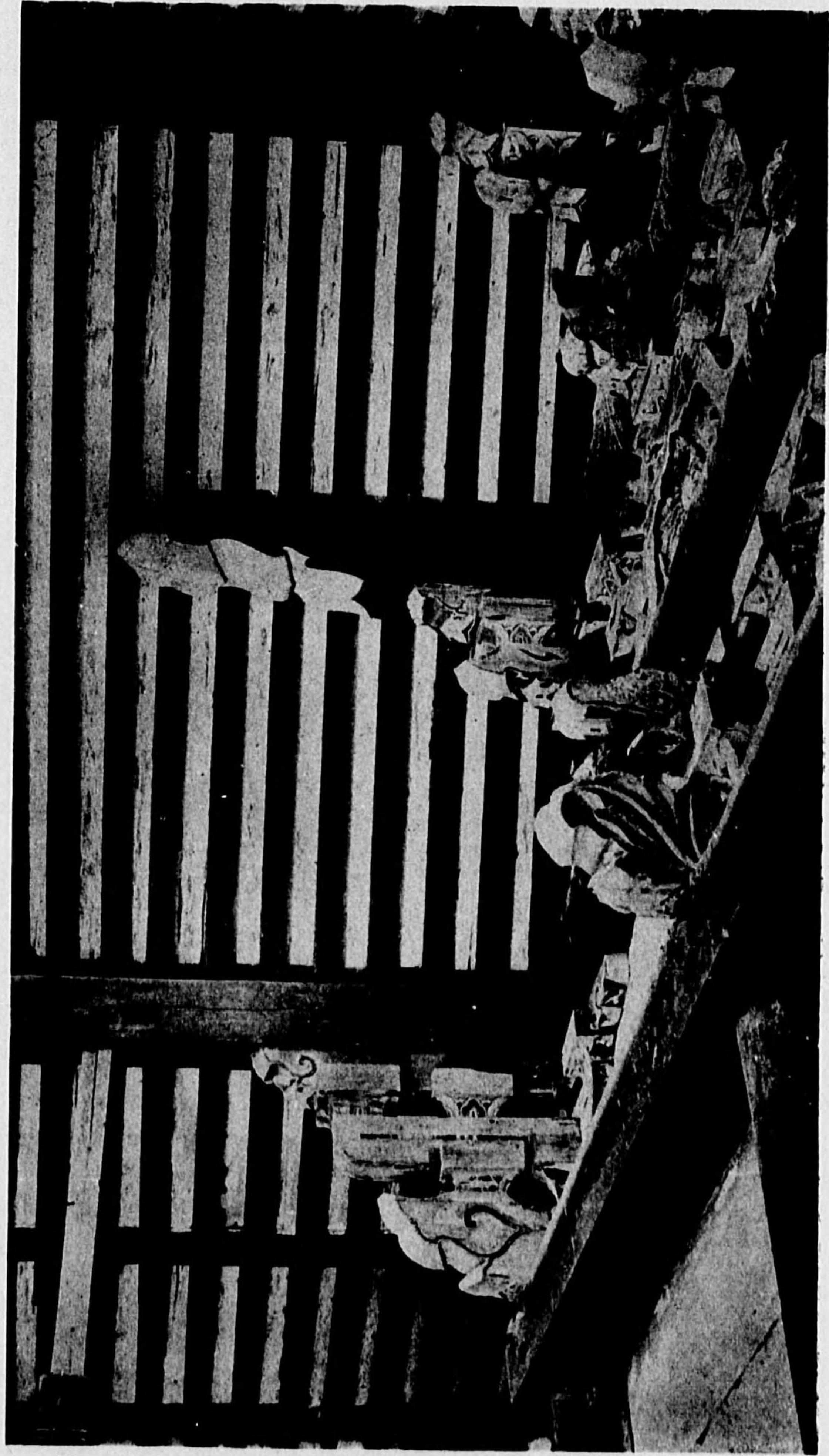


四六



四七





四八、與杼神社本殿妻部分（京都府久世郡淀町）

（昭和十年六月九日）

與杼神社といふのは淀城址に鎮座せる五間社流造檜皮葺の社殿で、京阪電車淀停留場から近い。椽勾欄の擬寶珠に「慶安二天八月吉日」の銘文があるし、各部の装飾がよく桃山式を發揮してゐるから、多分この頃のものであらう。臺股等にもいろいろの彫刻が入れてあるし、脇障子等も豪華な彫刻が入れてあるが、餘り込み入り過ぎてゐる様でなくもない。

今ここに木鼻の數例を示しておく。此建築の妻は恰も木鼻の展覽會の様で、互に似てはゐるが、よくもこの位、各種のものを使用したものだと思ふ。妻飾は二重虹梁大瓶束で、下側の二本の虹梁の中間に臺股を入れたに過ぎないのだから、珍らしくも何ともなく、いくらでもある種類である。併し四八でみる様に母屋桁の一つ、即棟木と軒桁との間の分を破風迄出さずに途中でとめ、其先を木鼻にしてゐるのは、聊變つたやり方である。これも妻から見ると大分に眼立ってゐる。扱て下方からみて行くと、軒桁下に三、中央の柱上に三、母屋桁上に三、臺股上に二、棟木下に一種、少なくとも合計十二種の變つたものがある。同じものは數へなかつたが、とにかく數を全部入れると二十七ある。勿論肘木の兩方にあるのは二つと數へての事だが、どうも多過ぎる上に、而も夫が大して感服しかねる形だから、建築としては木鼻過多症にかかつてゐるので、甚だ目障ではあるが、桃末江初あたりには、この様なものもあるといふ一例に掲げたのである。

四九、金戒光明寺鐘樓西妻棟木下木鼻

五〇、同 北柱上木鼻

五一、正傳寺鐘樓頭貫鼻(京都市上京區西賀茂鎮守菴町)

(昭和十四年二月二十二日)
(昭和十四年二月二十二日)
(昭和六年四月十二日)

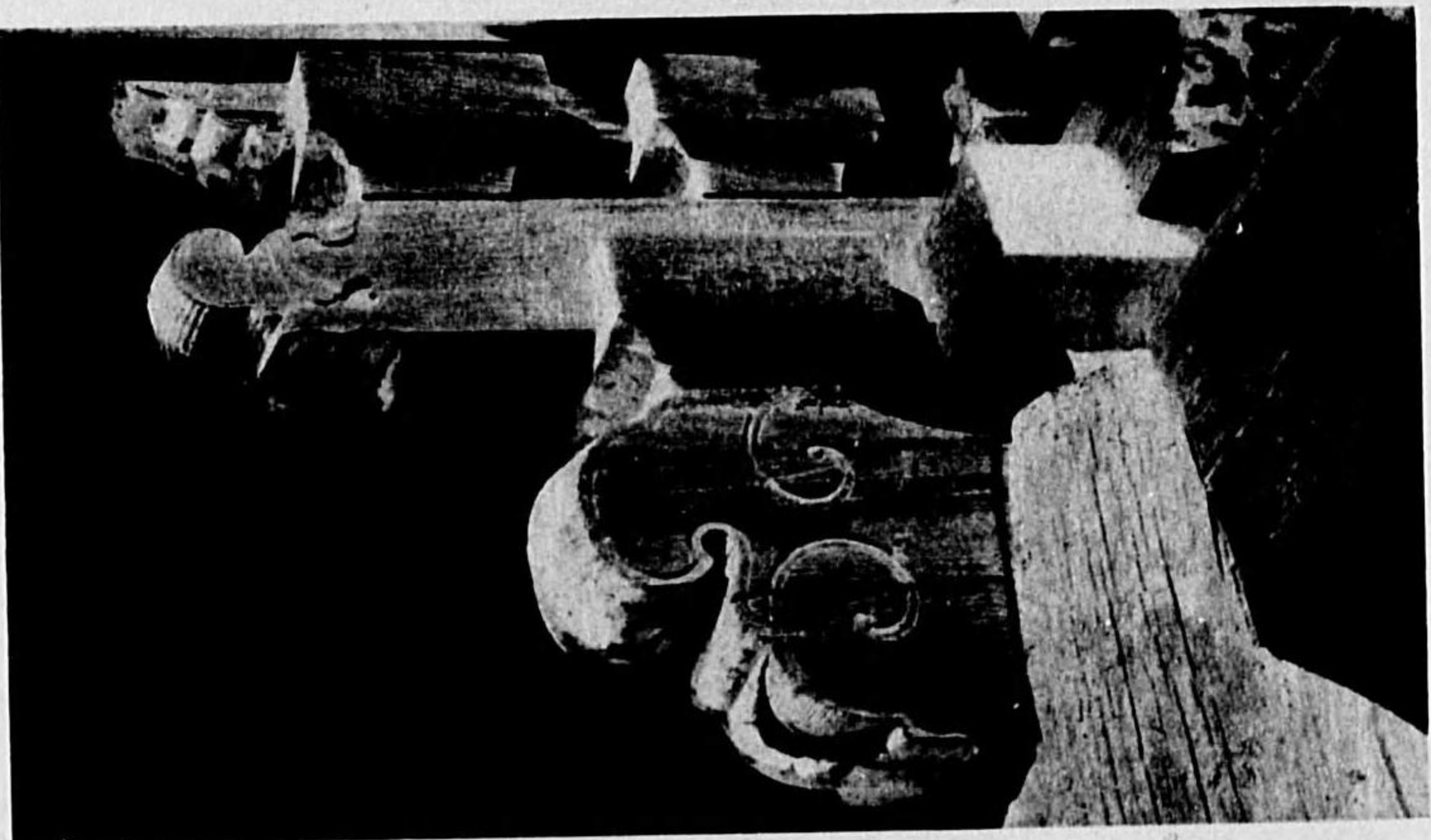
金戒光明寺鐘樓に就いては、束のところで既に記したからここに略しておく(束五一)。ここにも木鼻は數種用ひてあるが、時代の降つてゐる割に面白いのである。四九は兩妻の大瓶束の上から前方に突き出してゐる分で見たと純然たる植物性のものであるが、夫でゐて動物性を帯びてゐるから面白い。先づ鼻が上を向いて渦文をなし、口を少しあいて舌を出し、便化した牙が若葉の様に右方に向いてゐる。鐘樓を建てた建築家はその様なつもりではたしてないかも知れぬが、結果は植物化した動物か、動物化した植物か、といふ事になつて了つた。面白いと書いたのはこの點で、五〇の象を少し變へるとこれになり、これを少しかへるとあれになる。そこで今度はこの象頭をみる事にする。

實際元和頃のものとしては、よくもこの位の純象があつたものだと思ふ。もつと前から實は縮りのない面貌を呈し、少しばかり人を馬鹿にした様などが見え、入念のは最早既に笑ひかけてゐるのに、これは若葉式二重眉の下に割合に大きな眼を開き、出所は少し變だが牙も生へ、口も心臟形をしてゐて、寧ろ室町あたりの眞面目な象に見える。顎の下から鼻にかけて、中央の鎬に向つて兩方から圓盤で突いて溝をつくつてゐるのは、すつと前から(室町後)の手法である(二八参照)。象の上の實肘木の先は平凡でいくらかもある種類。下の頭貫鼻も室町直系(三三・三四参照)。

正傳寺本堂は寛永年間伏見城の御成殿を賜つたものといふ。これは立派な建築であるが、塀の外に建つてゐる鐘樓は袴腰が反對に外に膨れてゐる珍しいやり方がある。寛文年間の建築といふが、其頭貫鼻は五一の如くよく桃山式を傳へてゐる。



四九



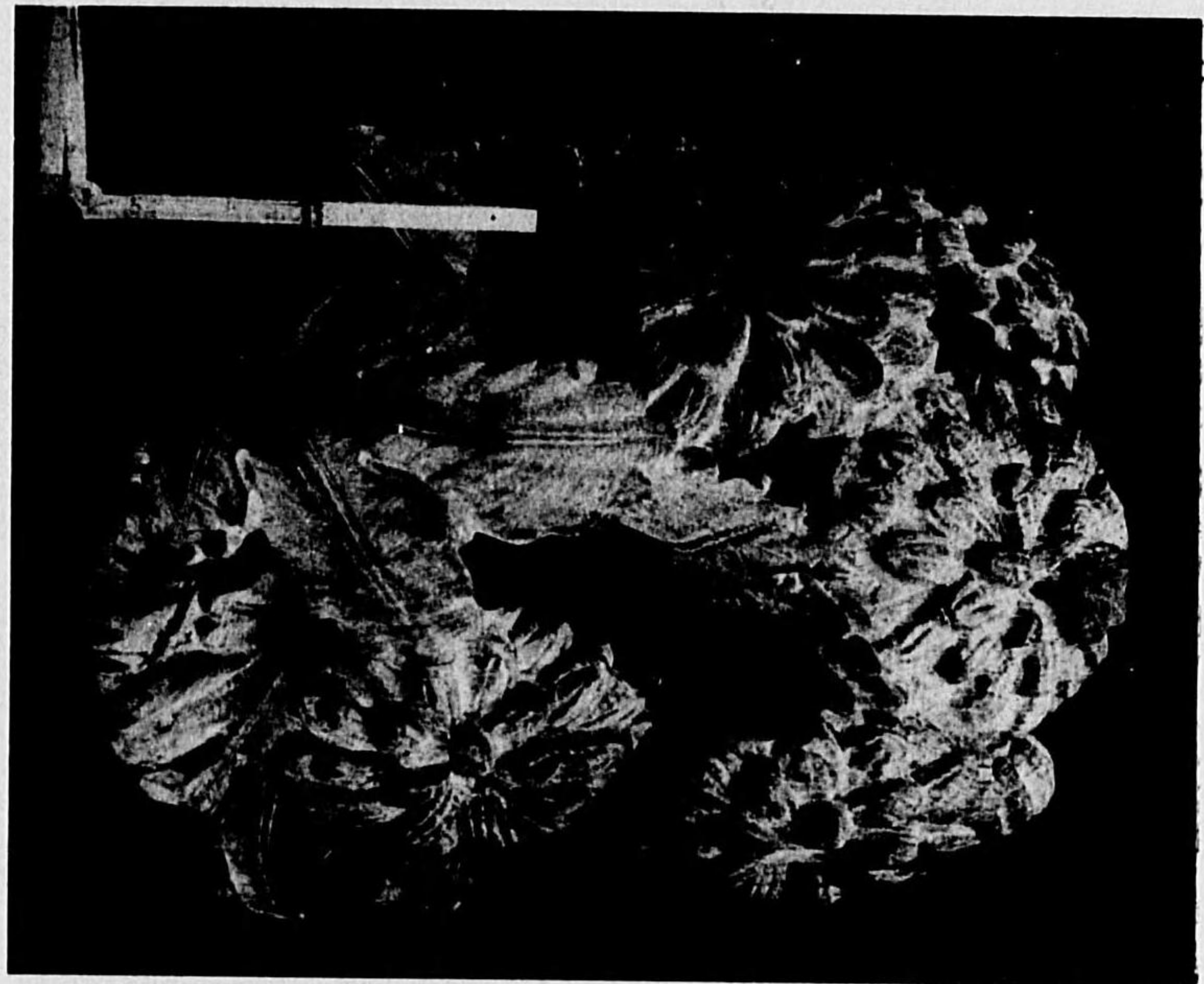
五〇



五一



五三



五三

五二、日光東照宮唐門控柱上木鼻 其一

(大正十五年七月十七日)

五三、同

其二

(物差は曲尺の約五寸六吋)・昭和十一年七月二十八日
 桃山から江戸にかけて木鼻は極端な発達をなし、

透彫・籠彫等といふものができた。元來虹梁とか頭貫とかの鼻が、柱を買いて外に出たものだから、四角であるべきであるが、夫では餘り殺風景だから、そ

こへ何か彫刻をしたのが始りである。だから天竺様とか唐様とかいふ種類の建築の木鼻は、鎌倉時代に於い

ては實に簡單であつたのである。ところが夫等が發達するに連れ、單に裝飾だけの目的のために、別に適當

と思はれるものをほつて柱に取り付ける様になつてきた。これを「掛鼻」(カケハナ)といつた。だからいふ

迄もなく透彫や籠彫は掛鼻であつたのである。

此所に示した二例は何れも「菊の籠彫」で、立派な美

術品である。菊の花と葉とを適當に丸くあつめて輪郭をつくり、内部を刳抜いて伽藍洞とし、枝位を残した

實に大した美術工藝品、無類の適當な飾もの、床の間違ひ棚の置物にはなるが、木鼻としては最も不適な

品、五二は真正面からみたところ、木口に當るところだが、それが正面になつてゐる。幅も廣過ぎて理屈に

合はないこと此上なく、五三の様に側面からみても同様で、臺輪の鼻よりまだ前の方に飛び出しゐる。而も

全部真白に胡粉で塗つてあるから、菊の花に雪が積つた様で感心できない。